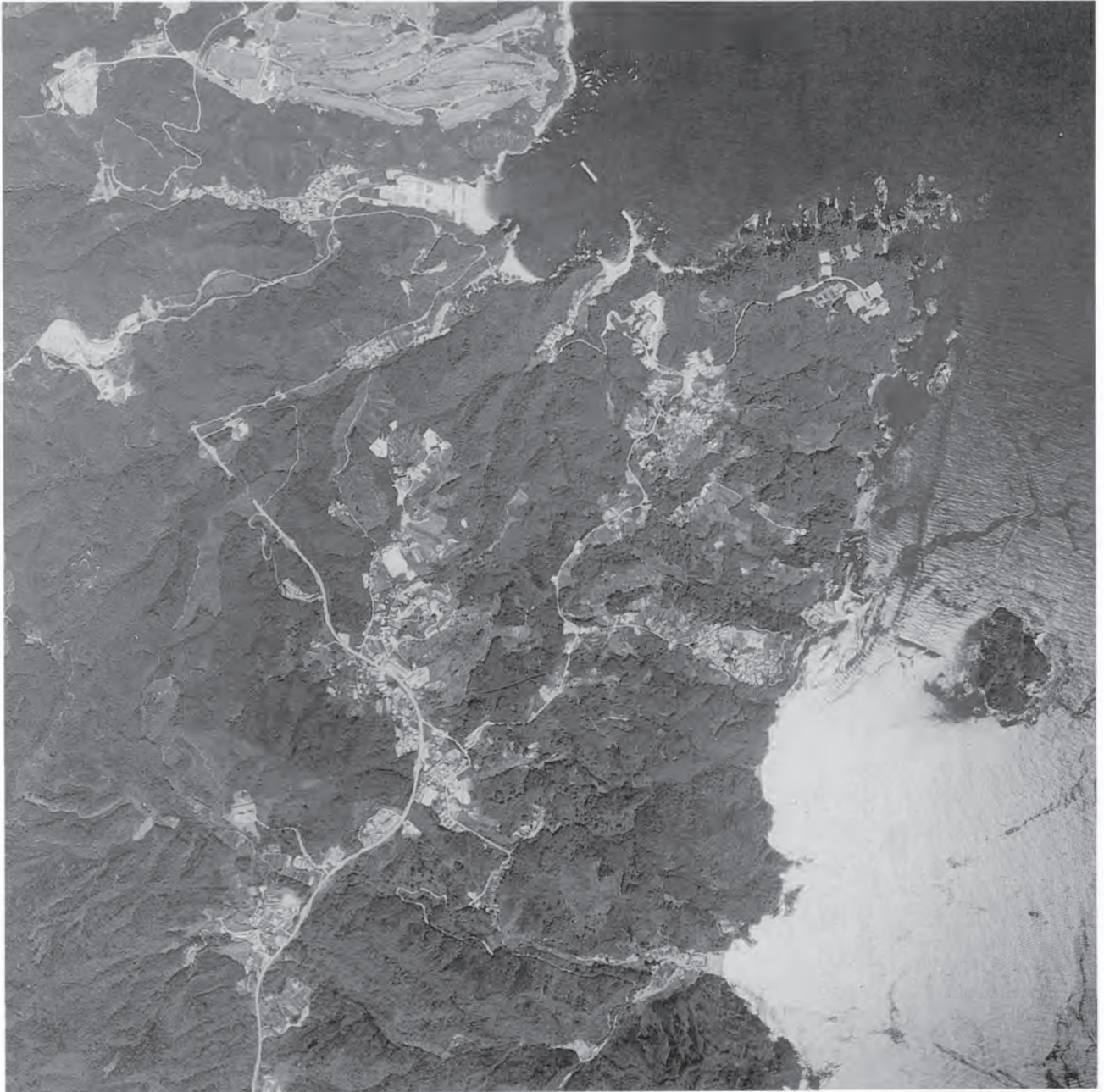


崎山遺跡群 V

—平成2年度発掘調査概報—



1991.3

岩手県宮古市教育委員会
The Board of Education Miyako, Iwate Pre.

カラー1 白石遺跡第5次調査
キノコ形土製品出土状況

カラー2 崎山貝塚第5次調査区



(カラー1)



(カラー2)

序 文

宮古市では昭和61年度から平成2年度までを第Ⅰ期として、国庫補助、県費補助を受けて崎山遺跡群の発掘調査事業を実施してまいりました。

本書は、第Ⅰ期調査の最終年度である平成2年度の調査成果をとりまとめた概報であります。発掘調査の結果、白石遺跡では今回初めて土坑が集中するブロックを確認し、今後、当時の集落構成を考える上でひとつの足掛りとなるデータを得ることができました。また、竪穴住居跡に伴って出土した琥珀玉やキノコ形土製品などは、他地域との交易や文化的な交流を窺うことのできる好資料であると思われ、十分な検討や分析を経たうえで再度御報告いたしたいと考えております。

崎山貝塚では台地中央部に検出していた地山の落ち込みが人為的な遺構であることを確認しました。また、台地北側斜面でも新たに自然遺物包含層を確認しております。

5ヶ年間の調査成果を受けて、平成3年度から平成5年度までの3ヶ年間に第Ⅱ期として調査事業を継続させて行く予定ですが、特に崎山貝塚では遺構の精査等を実施し、資料の蓄積を計りながら保護につなげてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり様々な御指導をいただきました岩手県教育委員会文化課、岩手県立博物館、岩手県埋蔵文化財センターを始めとする関係機関、御理解、御協力下さった地権者各位ならびに関係者の皆様に厚く御礼申し上げて序文といたします。

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸

例 言

1. 本書は平成2年度に国庫補助を受けて実施した崎山遺跡群白石遺跡第5次調査・崎山貝塚第5次調査の概報である。
2. 発掘調査の主体は宮古市教育委員会（教育長 佐藤勇逸）で、発掘調査は高橋が担当した。また、本書の執筆は高橋・鎌田・阿部が担当し、高橋が編集した。
3. 調査座標は平面角座標第X系を座標交換して使用したが、調査用の局地的座標系であることを明示するためにRを冠して表示した。

座標軸方向——第X系に準じる

調査座標原点——X-35800.000、Y+97000.000

4. 高さは標高値をそのまま使用した。
5. 遺構、遺物の表現については下記のとおりとした。



6. 発掘調査および遺物の整理、本書の執筆に際しては次の方々から御教示、御指導をいただいた。記して謝意を申し上げる。（敬称略）

高橋 信雄（岩手県教育委員会文化課）	千葉 啓蔵（久慈市教育委員会）
佐々木 勝（岩手県教育委員会文化課）	熊谷 賢（岩手考古学会員）
小田野哲憲（岩手県埋蔵文化財センター）	竹下 将男（宮古市教育委員会）
熊谷 常正（岩手県立博物館）	中嶋 隆（宮古市在住）
佐藤 正彦（陸前高田市立博物館）	

7. 本文中の引用文献は次のとおり略記した。（いずれも宮古市教育委員会刊行）

1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』 小田野哲憲 → 『大付報文79』
熊谷 常正
1983～86 『宮古市分布調査報告書』 武田将男 → 『分布調査1～4』
1986 『宮古市遺跡分布図 昭和60年度版』 武田将男 → 『分布図86』
1987～90 『崎山遺跡群 I～IV 昭和61年度～平成元年度発掘調査概報』
→ 『崎山遺跡群 I～IV』
1989 『トロノ木 I 遺跡第1次～第7次発掘調査報告書』 → 『トロノ木 I 報文89』

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	1
1. 調査要旨	1
(1) これまでの調査	1
(2) 平成2年度の調査要旨	4
2. 調査体制	4
II 調査内容	5
1. 白石遺跡第5次調査	5
(1) 遺構の検出状況	5
(2) 検出された遺構・遺物	6
2. 崎山貝塚第5次調査	97
(1) 第1次～第4次調査の概要	97
(2) 調査の方法と目的	97
(3) 基本層序	98
(4) 検出された遺構と遺物	98
(5) 北斜面調査区	122
(a) 層序	122
(b) 出土遺物	122
(c) 自然遺物	131
3. 扁平円礫について	132
III 調査のまとめ	136
IV 付 章 (資料紹介)	138

図 版 目 次

- 第1図版 第15号竪穴住居跡、炉
第2図版 第17号竪穴住居跡・第19号竪穴住居跡
第3図版 第19号竪穴住居跡、炉構築状況・斜位土器埋設状況
第4図版 第19号竪穴住居跡、炉直立土器埋設状況・第22号竪穴住居跡
第5図版 第22号竪穴住居跡、埋土堆積状況
第6図版 第22号竪穴住居跡床面、キノコ形土製品出土状況・埋土、石剣出土状況
第7図版 第23号竪穴住居跡・第24号竪穴住居跡
第8図版 第24号竪穴住居跡・炉A使用状況・炉A構築状況
第9図版 第24号竪穴住居跡、炉B構築状況・第25号竪穴住居跡
第10図版 第25号竪穴住居跡、堆積状況・第26号竪穴住居跡
第11図版 第26号竪穴住居跡、埋土堆積状況・第26号竪穴住居跡、遺物出土状況
第12図版 第26号住居跡、炉構築状況・炉使用状況
第13図版 第27号竪穴住居跡・第28号竪穴住居跡
第14図版 第28号竪穴住居跡、炉・第29号竪穴住居跡
第15図版 第22号竪穴住居跡、埋土堆積状況・第22、-6、28号竪穴住居跡、埋土堆積状況
第16図版 第21号土壇跡、底面遺物出土状況・第51号土壇跡
第17図版 崎山貝塚第5次調査、地山の落込み検出状況・地山の落込み堆積状況
第18図版 N3 E15-1号土壇跡、埋土堆積状況・N3 E18-1～3号土壇跡、埋土堆積状況
第19図版 IVc層ドングリブロック検出状況
第20図版 柱穴群埋土堆積状況・北斜面調査区検出状況
第21図版 北斜面N4層掘り上げ状況・遺物出土状況 (Pot. 1)

<カラー口絵>

カラー1 白石遺跡第5次調査キノコ形土製品出土状況

カラー2 崎山貝塚第5次調査区

<内表紙写真>

崎山遺跡群垂直写真

挿 図 目 次

第1図	位置図	2
第2図	崎山遺跡群と周辺の遺跡	3
第3図	白石遺跡周辺地形図	5
第4図	白石遺跡遺構配置図	7・8
第5図	第15号竪穴住居跡(1)	9
第6図	第15号竪穴住居跡(2)	10
第7図	第15号竪穴住居跡・炉B	11
第8図	第15号竪穴住居跡出土遺物	12
第9図	第17号竪穴住居跡(1)	14
第10図	第17号竪穴住居跡(2)	15
第11図	第17号竪穴住居跡出土遺物(1)	16
第12図	第17号竪穴住居跡出土遺物(2)	17
第13図	第19号竪穴住居跡(1)	19
第14図	第19号竪穴住居跡(2)	20
第15図	第19号竪穴住居跡・炉	21
第16図	第19号竪穴住居跡出土遺物(1)	23
第17図	第19号竪穴住居跡出土遺物(2)	24
第18図	第19号竪穴住居跡出土遺物(3)	25
第19図	第19号竪穴住居跡出土遺物(4)	26
第20図	第19号竪穴住居跡出土遺物(5)	27
第21図	第23号竪穴住居跡	29
第22図	白石遺跡第5次調査区土層断面図(1)	30
第23図	白石貝塚第5次調査区土層断面図(2)	31
第24図	第24号竪穴住居跡	33
第25図	第24号竪穴住居跡・炉	34
第26図	第24号竪穴住居跡出土遺物(1)	35
第27図	第24号竪穴住居跡出土遺物(2)	36
第28図	第25号竪穴住居跡	38
第29図	第25号竪穴住居跡・炉	38
第30図	第25号竪穴住居跡出土遺物(1)	39
第31図	第25号竪穴住居跡出土遺物(2)	40
第32図	第22号竪穴住居跡(1)	42
第33図	第22号竪穴住居跡(2)	43
第34図	第22号竪穴住居跡出土遺物(1)	45
第35図	第22号竪穴住居跡出土遺物(2)	46

第36図	第22号竪穴住居跡出土遺物(3)……………	47
第37図	第22号竪穴住居跡出土遺物(4)……………	48
第38図	第22号竪穴住居跡出土遺物(5)……………	49
第39図	第22号竪穴住居跡出土遺物(6)……………	50
第40図	第22号竪穴住居跡出土遺物(7)……………	51
第41図	第22号竪穴住居跡出土遺物(8)……………	52
第42図	第22号竪穴住居跡出土遺物(9)……………	53
第43図	第22号竪穴住居跡出土遺物(10)……………	54
第44図	第27号竪穴住居跡……………	55
第45図	第27号竪穴住居跡・灰……………	56
第46図	第27号竪穴住居跡出土遺物(1)……………	57
第47図	第27号竪穴住居跡出土遺物(2)……………	58
第48図	第26号竪穴住居跡(1)……………	60
第49図	第26号竪穴住居跡(2)……………	61
第50図	第26号竪穴住居跡・灰……………	62
第51図	第26号竪穴住居跡出土遺物(1)……………	63
第52図	第26号竪穴住居跡出土遺物(2)……………	64
第53図	第26号竪穴住居跡出土遺物(3)……………	65
第54図	第26号竪穴住居跡出土遺物(4)……………	66
第55図	第28号竪穴住居跡……………	68
第56図	第28号竪穴住居跡・灰……………	69
第57図	第28号竪穴住居跡出土遺物……………	70
第58図	第29号竪穴住居跡……………	71
第59図	第29号竪穴住居跡・灰……………	72
第60図	第29号竪穴住居跡出土遺物……………	73
第62図	調査区北端部土垣群……………	75・76
第61図	第51号土垣跡……………	74
第63図	土垣跡出土遺物(1)……………	88
第64図	土垣跡出土遺物(2)……………	89
第65図	土垣跡出土遺物(3)……………	90
第66図	土垣跡出土遺物(4)……………	91
第67図	土垣跡出土遺物(5)……………	92
第68図	土垣跡出土遺物(6)……………	93
第69図	白石遺跡遺構外出土遺物(1)……………	95
第70図	白石遺跡遺構外出土遺物(2)……………	96
第71図	崎山貝塚周辺地形図……………	99・100
第72図	崎山貝塚遺構配置図……………	101・102
第73図	N 3 E 12～N 3 E 27グリッド平面図……………	103・104

第74図	N 3 E12～N 3 E27グリッド土層断面図・N 3 E18グリッド・ドングリブロック 堆積状況	105
第75図	N18E 3～N 9 E 3 グリッド平面図	110
第76図	N18E 3～N 9 E 3 グリッド土層断面図	111
第77図	N 3 E12～N 3 E27グリッド出土遺物(1)	115
第78図	N 3 E12～N 3 E27グリッド出土遺物(2)	116
第79図	N 3 E12～N 3 E27グリッド出土遺物(3)	117
第80図	N 3 E12～N 3 E27グリッド出土遺物(4)	118
第81図	N 3 E12～N 3 E27グリッド出土遺物(5)・N 9 E 3～N18E 3 グリッド 出土遺物(1)	119
第82図	N 9 E 3～N18E 3 グリッド出土遺物(2)	120
第83図	N 9 E 3～N18E 3 グリッド出土遺物(3)	121
第84図	北調査区平面図	123
第85図	北調査区土層断面図	124
第86図	北調査区堆積層平面図	125
第87図	北調査区出土遺物(1)	127
第88図	北調査区出土遺物(2)	128
第89図	北調査区出土遺物(3)	129
第90図	北調査区出土遺物(4)	130
第91図	扁平円礫の計測方法	132
第92図	白石遺跡出土扁平円礫	133
第93図	崎山貝塚「地山の落込み」周辺出土扁平円礫	134
第94図	崎山貝塚北斜面調査区出土扁平円礫	135

付 表 目 次

第 1 表	北斜面調査区出土魚骨部位表	131
第 2 表	中嶋コレクション自然遺物部位表(1)	140
第 3 表	中嶋コレクション自然遺物部位表(2)	141

I 調査経過

1. 調査要旨

(1) これまでの調査

宮古市では国庫補助、県費補助を受けて昭和61年度より平成2年度までの5ヶ年間で第1期として崎山遺跡群発掘調査事業を実施してきた。崎山遺跡群には周知のとおり、崎山貝塚、大付遺跡（貝塚）、白石遺跡などの著名な遺跡が多く存在し、しかも良好な状態で保存されていることから市内に存在する遺跡群の中でも重要なもののひとつに上げられている。

ところが、近年の市街地近郊の再開発により、丘陵上やこれに連続する暖斜面上に立地する遺跡の多くが宅地造成などにより破壊されることとなり、これに伴い事前の緊急調査件数が増大している。このうち、特に崎山遺跡群内の発掘調査については昭和63年度分までを『トロノ木Ⅰ報文89』にまとめてあるがこれによると昭和50年代後半から調査件数や規模が増大していることがわかる。

崎山遺跡群発掘調査事業はこうした動きに対応し計画したもので、保護を前提とした遺跡群の内容把握と調査資料集収を目的としている。更に内容的には、遺跡群内での個人住宅建築に先だつ緊急調査に対応するとともに崎山貝塚を中心とした範囲確認調査を実施している。

4ヶ年間の発掘調査の概要は次のとおりである。

<昭和61年度>

白石遺跡第1次調査（個人住宅） 遺跡の東端部にて縄文時代のピット群と遺物包含層を検出した。

第1期5ヶ年
計画

ピット群

崎山貝塚第1次調査（範囲確認） 貝塚の南斜面にて自然遺物包含層を検出した。多量の土器、石器などに伴い獣・魚骨・骨角器・人骨などが出土している。

自然遺物包含
層

<昭和62年度>

白石遺跡第2次調査（個人住宅） 遺跡の中央部にて縄文時代中期末葉の竪穴住居跡5棟、土器埋設炉1基、柱穴群1基、土壇跡6基を検出した。

集落跡

崎山貝塚第2次調査（範囲確認） 貝塚の南斜面中央部にて縄文時代前期～中期の貝層を検出した。獣・魚骨・貝がらなどの自然遺物や骨角器が多量に出土している。

貝層

<昭和63年度>

大付遺跡第3次調査（個人住宅） 遺跡の中央部にて縄文時代晩期の土壇跡3基と小ピット8口を検出した。（註1）

土壇跡

トロノ木Ⅰ遺跡第8次調査（個人住宅） 遺跡の南端部にて調査を実施したものの遺構は検出されなかった。縄文土器片がわずかに出土している。（註2）

崎山貝塚第3次調査（範囲確認） 貝塚の中央部にて、立石を伴う集落跡を検出した。集落跡は内側から土壇集中区、地山の落込み、住居跡集中区などのいくつかのブロックにより形成される。また、埋土中に貝層等を伴う遺構もみられ

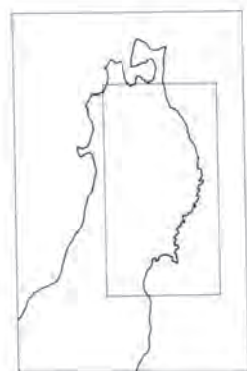
立石を伴う集
落跡



N 40°

N 39°

N 38°



E 141°

E 142°

第1図 位置図



第2図 崎山遺跡群と周辺の遺跡

た。

<平成元年度>

- 集落跡 白石遺跡第3次調査（個人住宅） 遺跡の中央部にて縄文時代中期末葉の竪穴住居跡7棟と土垢跡4基を検出した。
- 集落跡 白石遺跡第4次調査（倉庫建築等） 遺跡の中央部にて縄文時代中期末葉～後期初頭の竪穴住居跡7棟と土垢跡4基を検出している。出土遺物は剥片接合資料等が特筆される。
- 集落跡 崎山貝塚第4次調査（範囲確認） 貝塚の中央部やや東寄りにて縄文時代の竪穴住居跡や土垢跡および平安時代の竪穴住居跡を検出した。

註1・2 両遺跡の調査次数は昭和63年度以前の調査次数に続けた。

(2) 平成2年度の調査要旨

平成2年度の発掘調査は、白石遺跡第5次調査（倉庫建築等―第4次調査で掘り残した部分）および崎山貝塚第5次調査（範囲確認調査）の2件である。総事業費は本体額で300万円である。

- 白石遺跡第5次調査 平成2年6月5日～9月1日 180㎡
遺跡のほぼ中央部に位置し、第4次調査区に隣接する。縄文時代中期末葉～後期初頭の竪穴住居跡6棟と土垢跡53基を検出している。
- 崎山貝塚第5次調査 平成2年9月3日～10月9日 105㎡
台地中央部と貝塚北斜面を調査した。前者は第3次調査時のトレンチの一部を精査したもので、立石を伴う中央広場の外側にある地山の落込みが人為的なものであることを確認した。また、後者は北斜面のほぼ中央部にて縄文時代中期を主体とする自然遺物包含層を検出している。

以上、5ヶ年間で4遺跡12地点の調査を実施した。

2. 調査体制

本年度の発掘調査体制は次のとおりである。

調査総括	大森 翼	宮古市教育委員会教育課長
事務担当	小木 哲	係長
	坂下 昇	宮古市教育委員会社会教育係社会教育主事補
調査員	高橋憲太郎	主事
	鎌田 祐二	”
	鶴田 均	”
	阿部 豊	埋蔵文化財調査員（9月より）

調査の実施にあたり、次の各位から多大の協力をいただいた。（敬称略）

<地権者> 山内正光、前川克夫、大越貞蔵

<発掘調査> 大越貞蔵、古館友三、佐々木茂、佐々木清、佐伯裕則、吉田昭、前川友宏、北村忠治、藤谷晶子、菅原テルミ、斉藤貞子ほかの皆さん

<整理作業> 味噌作宣子、竹原昌江

II 調査内容

1. 白石遺跡第5次調査(第3図)

(1) 遺構の検出状況(第4図)

白石遺跡は、宮古市の遺跡コードLG14-2195、岩手県のコードLG04-2194として登録された周知の遺跡である。第2次～第4次調査区はいずれも遺跡のほぼ中央部に位置し、互いに隣接している。これらの調査区内からは縄文時代中期末葉～後期初頭に伴う遺構が密集しており、重複した状態で検出されている。

第2次～第4次調査で検出された遺構は、竪穴住居跡18棟、柱穴群2基、土壇跡14基である。

第5次調査は倉庫建築(個人)に先だつ緊急調査であり、第4次調査時に調査しきれなかった部分である。

発掘調査は、倉庫の建築により破壊される部分および車輛の出入のために削平される部分のすべてを対象とした。ただし、調査区内の一部には畑の耕作時に網を張るために鉄道の枕木を布掘り状に深く埋設された部分があったためこれを除外してある。

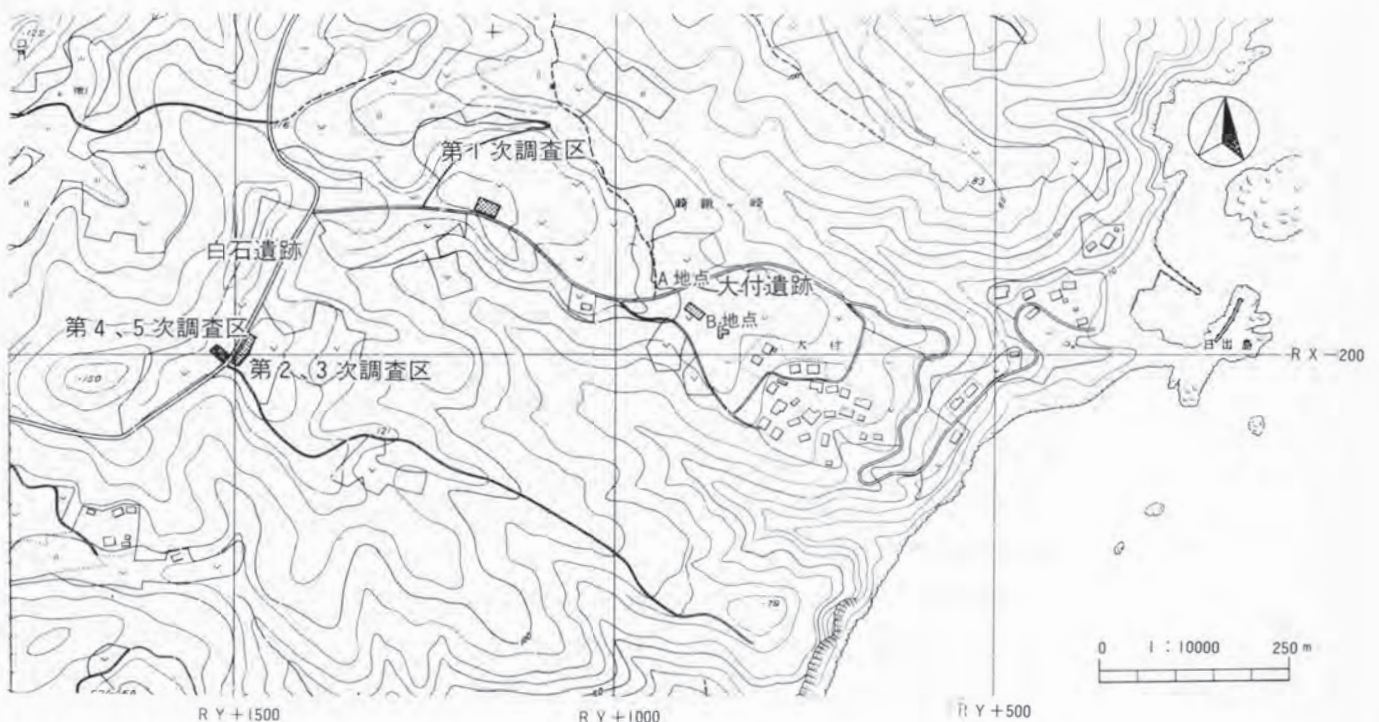
調査区からはやはり遺構が密集した状態で検出されているが、大まかに見ると北半部と南半部では遺構の種類がやや異なるようである。つまり前者は浅い土壇跡であり、後者は竪穴住居跡とフラスコ状やピーカー状の深い土壇跡などである。

基本層序は、I層が盛土層や表土層で、II層が暗褐色土層、III層が地山の粘質土層(原地山層)となっている。遺構のすべてはIII層上面で検出しており、I層とII層に覆われている。

耕作時の攪乱や削平により遺構の保存状態は悪く、特に掘り込みの浅い遺構ほどこの傾向が強い。

第2次～第4
次調査

第5次調査



第3図 白石遺跡周辺地形図

(2) 検出された遺構・遺物

第5次調査区では第15号竪穴住居跡、第17号竪穴住居跡・第19号竪穴住居跡、第23号竪穴住居跡～第29号竪穴住居跡、第15号土壇跡～第67号土壇跡を検出している。

第15号竪穴住居跡（第5図～第7図）

重複関係

第4次調査と合わせてほぼ全体を精査した。第4次調査分はすでに報告済みであるために略記する。また、前回の報告と食違う個所は本書により訂正する。前述したように鉄道の枕木が布掘り状に埋設された部分がありこれを除外している。第4次、第5次調査区内での重複は、第17号竪穴住居跡、第19号竪穴住居跡、第13号土壇跡を切る。

平面形

平面形は不整だ円形を呈し、規模は南北で6.8m、東西で5.4mを計る。壁高は0.15mでややゆるやかに立ち上がる。主軸方向はN12°Wである。

埋土はA層、B層、C層に大別される。A層は暗褐色粘質土層、B層は褐色粘質土層、C層は周溝埋土の暗褐色粘質土層である。第5次調査区内ではA層のみを確認している。

周溝 柱穴

床面はやや凹凸があるものの比較的固い。第13号土壇跡との重複部分には貼床がみられる。

柱穴はP₁・P₃・P₈・P₁₆・P₂₁・P₃₁・P₃₅・P₃₆・P₃₇が支柱穴に相当し、いずれも柱痕跡がみられる。ほぼ左右対称であり、P₁₆とP₂₁が、P₃₁とP₃₅・P₃₆が、P₈とP₃₇が、P₃とP₃がそれぞれ対応している。柱間寸法は各々芯々で、P₃とP₃が2.0m、P₃とP₈が1.5m、P₈とP₃₁が1.6m、P₃₁とP₁₆が1.85m、P₁₆とP₂₁が1.8m、P₂₁とP₃₅が2.25m、P₃₅とP₃₆が0.7m、P₃₆とP₃₇が1.3m、P₃₇とP₃が1.05mを計る。P₃₅とP₃₆は他の柱穴より大きく間隔が狭い。尚、P₃₅の柱痕跡最下部には第8図19が埋設されていた。これら以外に柱痕跡があるものや柱穴の可能性のあるものは、P₁₀～P₁₁・P₁₃・P₂₀・P₂₂・P₂₃・P₂₆・P₂₇・P₂₈である。

炉

炉は2基あり、炉Aは斜位土器埋設複式炉で、南壁寄りに位置する。Ⅰ部は地床炉、Ⅱ部が斜位土器埋設炉、Ⅲ部に立石状の埋設礫が伴う。Ⅰ部～Ⅲ部にかけて焼成をうけている（報告済み）。炉Bは床面ほぼ中央部に位置する地床炉で、東西1.5m、南北0.95mの不整だ円形を呈する。焼土層は2層ありF₁層が炉床でありF₂層が浸透層である。比較的良く焼けしまっている。焼土層下に炉石の抜きとり穴があり、石組炉から地床炉へ作り変えているようである。

出土遺物（第8図）

調査面積が少なかったこともあり遺物の出土点数は多くない。床面上から出土したものは23・24、柱穴・ピットから出土したものは12・19・25で、他のものは埋土中から出土している。

土器

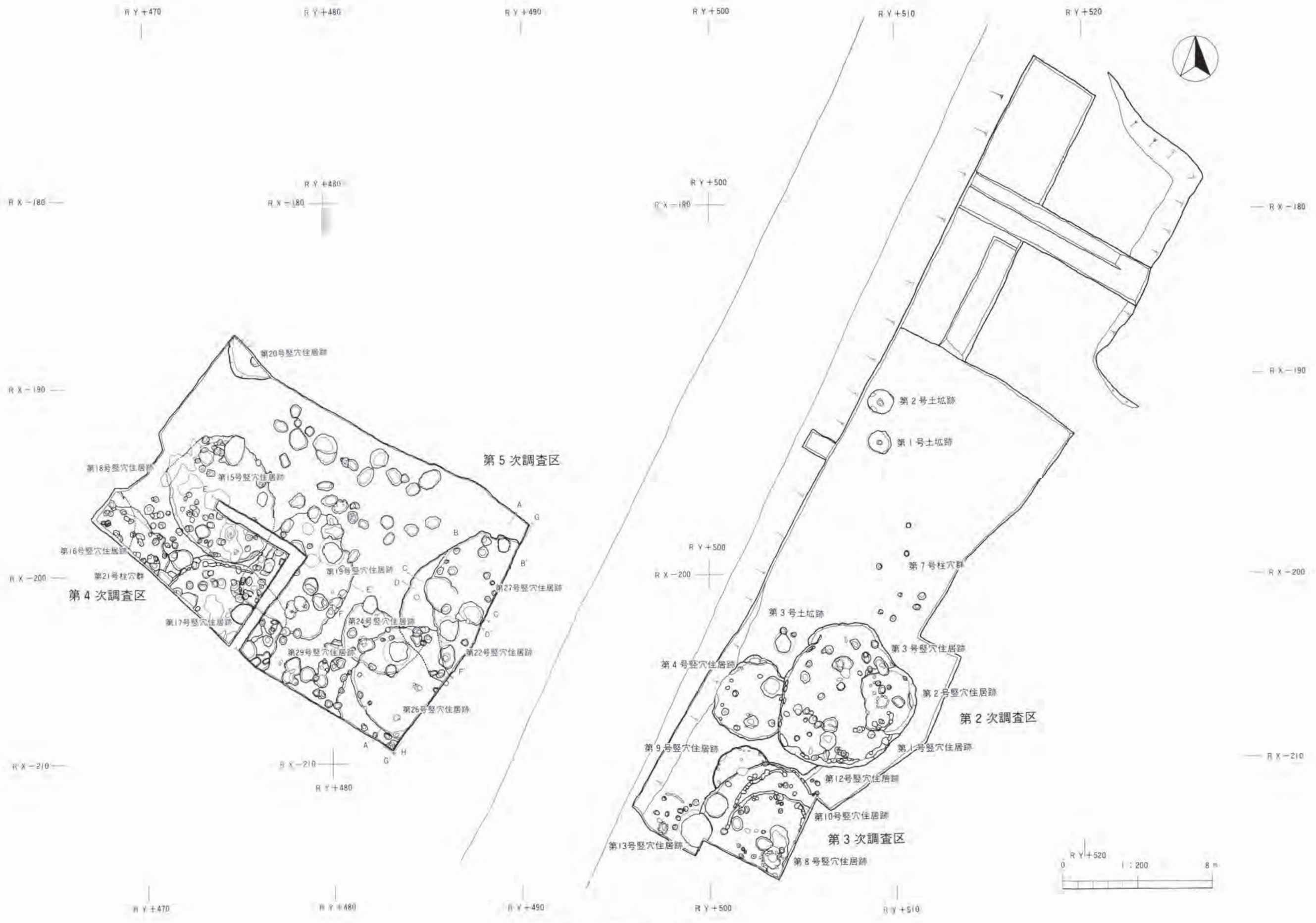
1～3・8～18・21は隆起線上に連続刺突文の施されるもので連鎖状文に類似する。いずれも破片であるが、口縁部～体部上半のものである。連鎖状的な隆起線は口縁部の文様帯下端を区画しているが、1、8は端部が状に口唇部方向へ向かっている。また、3・9・14はほぼ直上に伸びている。

4・20・22は平行沈線により施文される。5・6は無文の口縁部破片で前述したもののいずれかに関係するものであろう。

7は撚系文（ℓ）を地文とするもの。19は単節斜縄文（L-R）を施し、底部に木葉痕を有するもの。23は単節斜縄文（R-L）を施すものである。

石器

25は使用痕のある剥片で、やや凹凸のある1側縁を使用するため両面に微細な剥離がみられ



第4図 白石遺跡遺構配置図

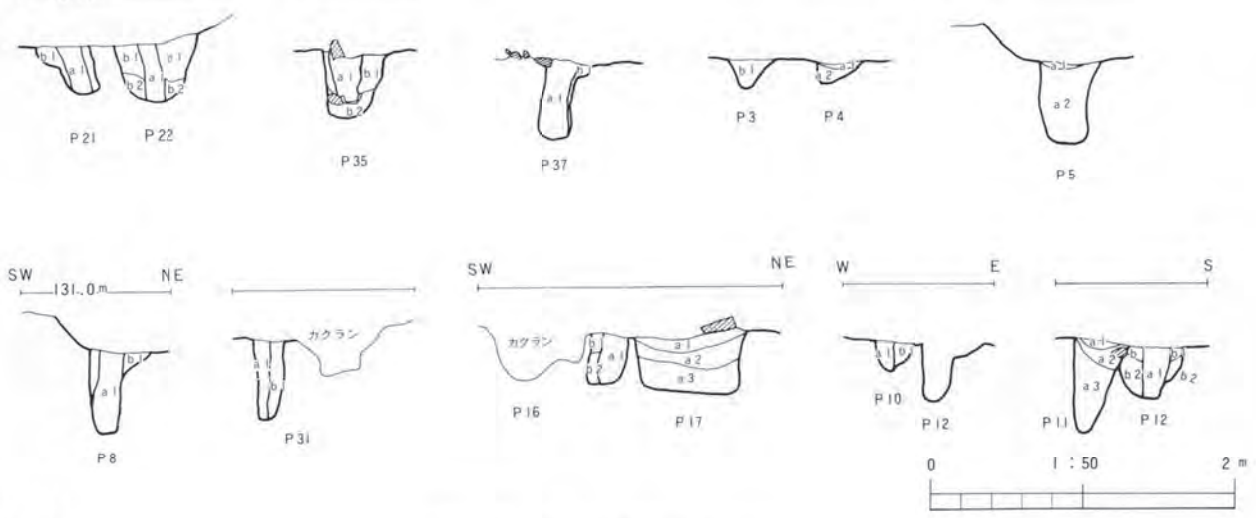
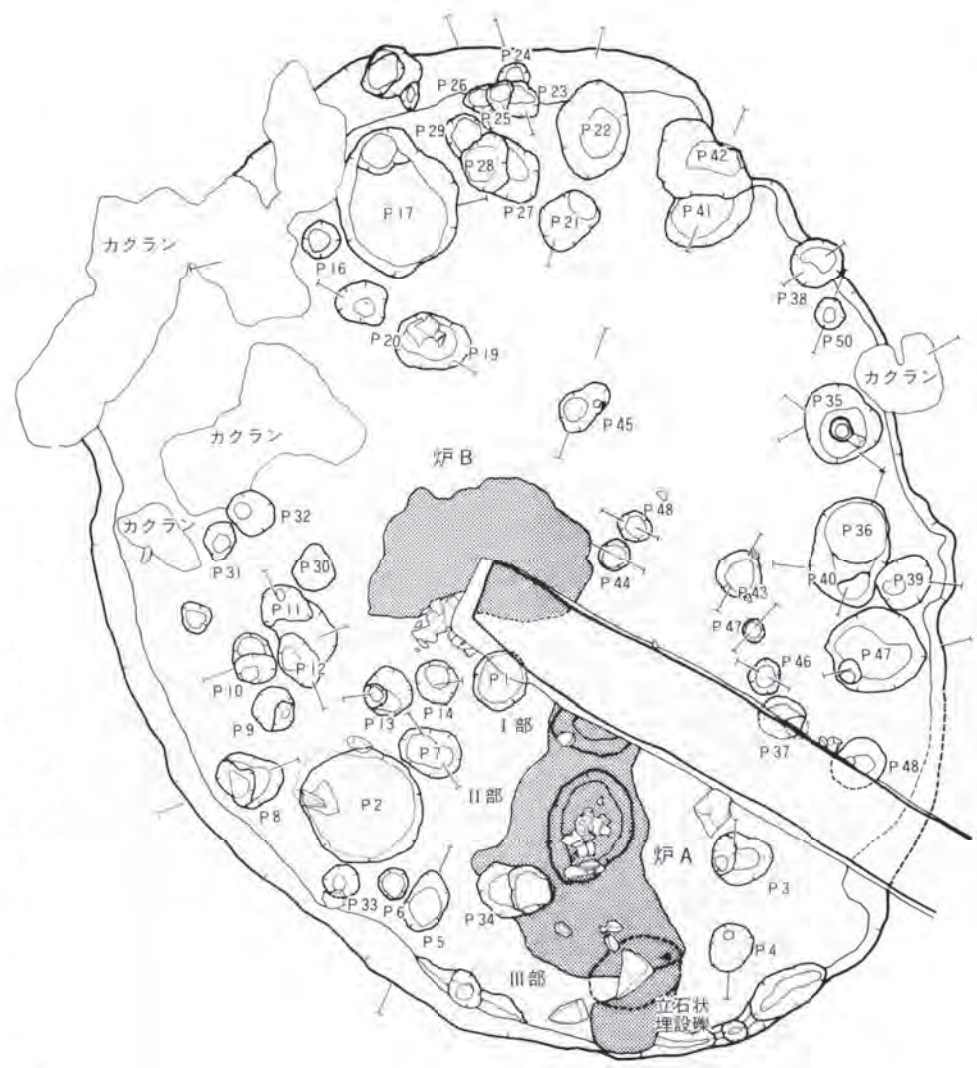
R Y +470

R Y +475

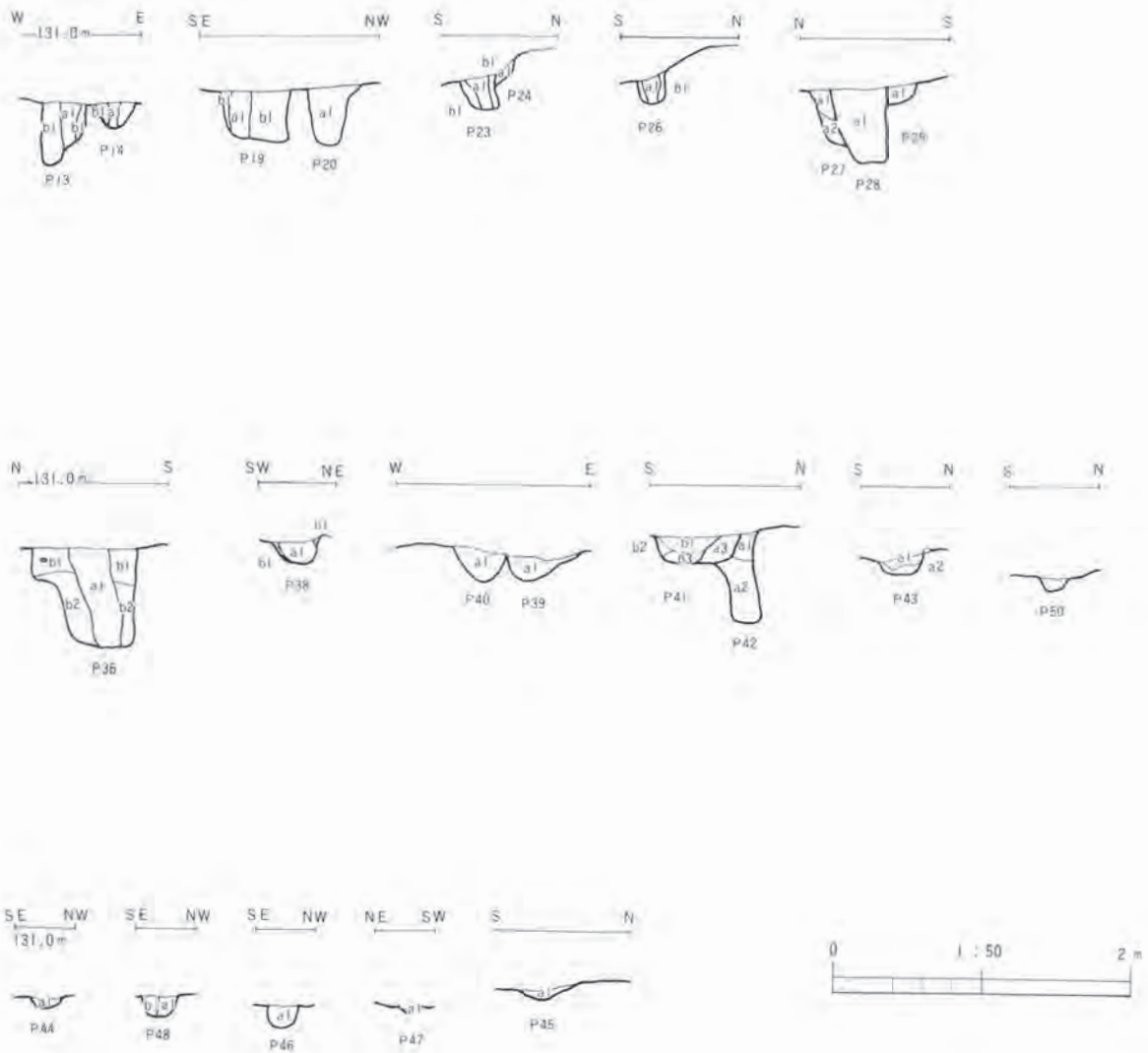


R Y +470

R X -195



第5図 第15号竪穴住居跡(1)

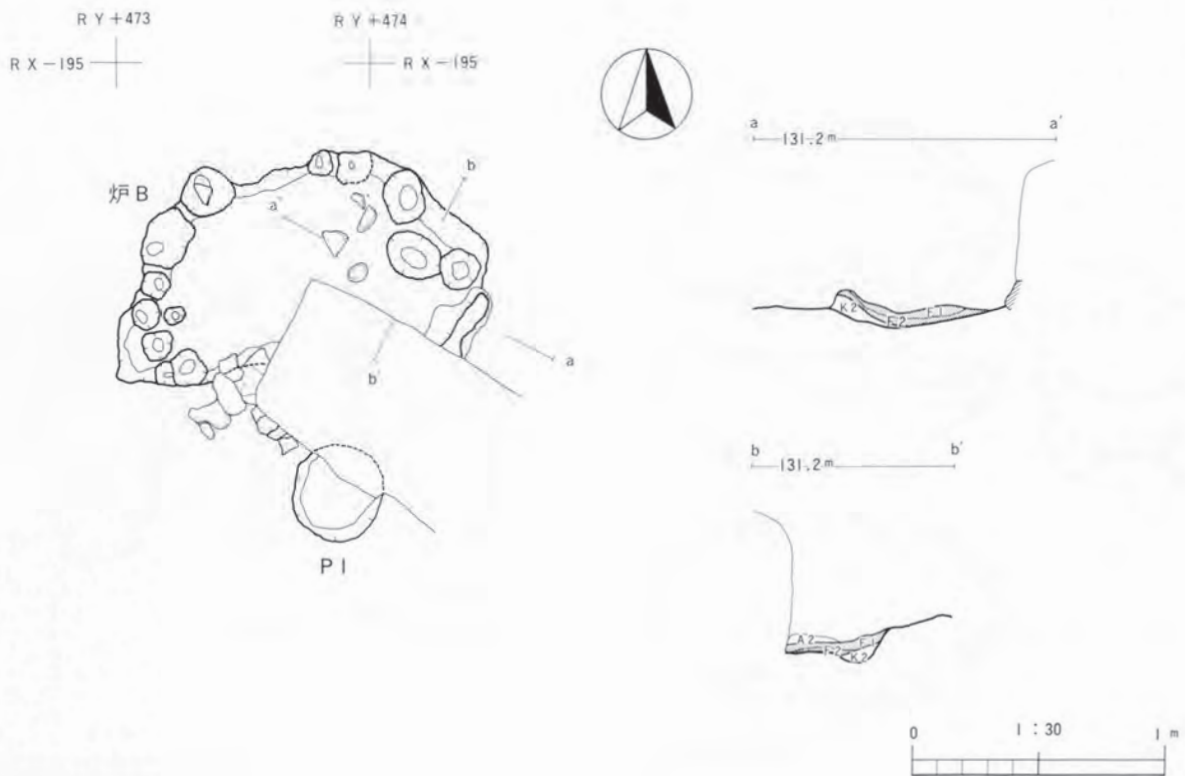


第6图 第15号竖穴住居跡(2)

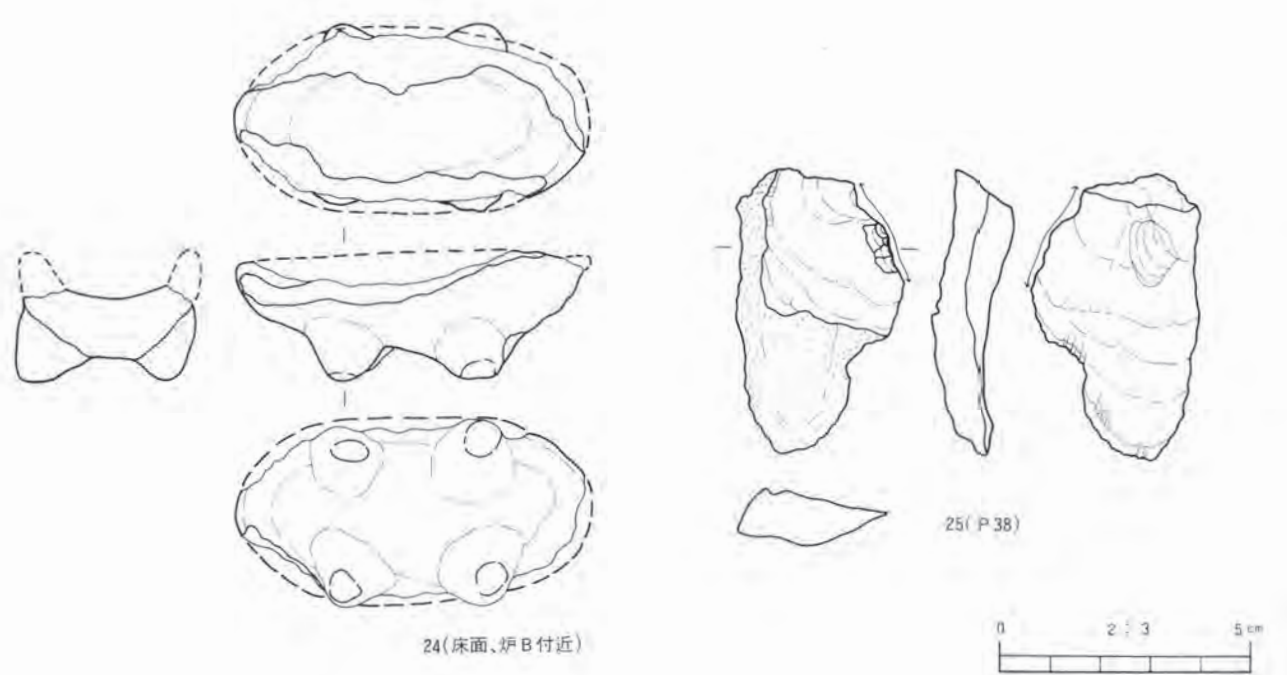
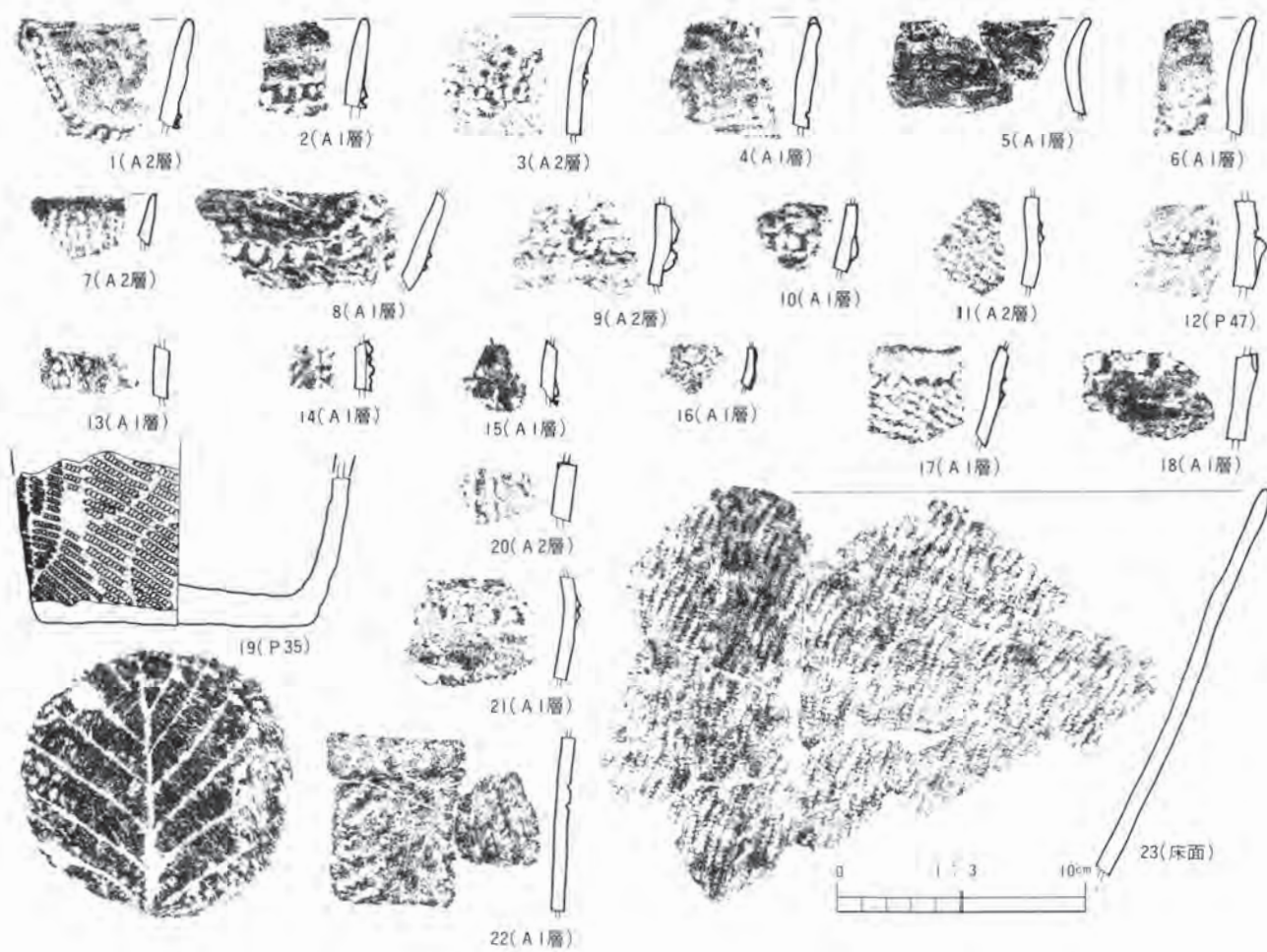
る。

24は四脚を有する皿形のミニチュア土器である。上面観はだ円形（小判形）を呈している。当初、中空の動物形土製品の残欠とも考えたが、長軸方向の両端に口唇部が残存していることと、内面の調整が丁寧であることから否定された。尚、脚部は粘土塊を接合して成形しているようである。

土製品



第7図 第15号竖穴住居跡・炉B



第 8 图 第15号竖穴住居跡出土遺物

第17号竪穴住居跡（第9図、第10図）

第4次調査と合わせて全体のほぼ $\frac{1}{2}$ ほどを精査した。残りの部分（南西半部）については私道敷設時に削平され現存していない。

重複関係は、第15号竪穴住居跡・第16号竪穴住居跡・第10号土壇跡・第12号土壇跡に切られ、第67号土壇跡を切る。また、第11号土壇跡は本住居跡より新しいようである。第19号竪穴住居跡については第4次調査で本住居跡より古いとしたが、今回別なラインで重複関係を再度検討した結果、第19号竪穴住居跡のほうが新しいと判明したのでここに訂正する。

平面形は北壁の一部が張り出すものの円形または多角形を呈する。規模は北西—南南方向で7m、北東—南西方向で3.8m以上を計る。主軸方向は不明であるが、柱穴配置等から、北よりわずかに西に扁するようである。

壁はわずかに外傾するが直壁に近い。壁高は最深部で0.35mを計る。

埋土はA層・B層・C層・D層に大別される。A層は暗褐色～褐色粘質土層、B層はやや明るい褐色粘質土層、C層は褐色粘質土層、D層は周溝埋土の褐色粘質土層である。第5次調査区内ではA₁層とC₁層のみを確認している。

床は平坦で固く、貼床は認められない。

周溝は北壁を中心にめぐり、所々に深く掘り下げたピットを配す。第5次調査区内には周溝は認められない。ただし、性格は不明であるが、不整Y字形を呈する浅い溝が認められる。幅12～25cm、深さ15cmを計り、しまりのない褐色粘質土が堆積している（a1層）。

柱穴はP₁・P₂₅・P₃₆が主柱穴に相当する。柱間寸法は各々芯々でP₁とP₂₅が2.5m、P₂₅とP₃₆が2.65mとなる。また、P₆が中軸線上に位置しているならば、これも主柱穴に担当する可能性がある。これら以外に柱痕跡があるものや柱穴の可能性のあるものは、P₂・P₇・P₁₀・P₁₁・P₁₄・P₁₅・P₂₁である。

炉は2基あり、南側のものを炉A、北側のものを炉Bとした。また、これらに隣接して不整形の焼土の広がりがある。（以上報告済み）

出土遺物（第11図・第12図）

調査面積が狭いこともあり遺物の出土点数は多くない。C₁層の堆積する部分がわずかであり、図示したものは大半がA₁層から出土したものである。

1は口縁部が外反し、体部にわずかな膨らみを有する深鉢である。口縁部には4個の波頂を有し、波頂部には小さな刻目が伴う。文様帯は口縁部～体部上半に形成される。体部下半との境界には連続刺突を伴う隆起線を横位にめぐらし、同様な手法による「C」字文を波頂下に4単位施す。また、口縁部上端には一部連続刺突文を施すところもみられる。3～7も同様な施文技法によるが、特に5は連鎖状文的施文となる。

2は内面に「C」字形の隆起線を伴う波頂部破片である。9・13・15は磨消技法により施文される。

10・17・18は隆沈線により施文され、16は沈線により施文される。

12・13は体部に縄文を施すもので、19～21は細い沈線（条線）により格子目状の施文がみられるものである。

22～26は石鏃である。22・23は有柄の小形石鏃でいずれもメノウの様な石材を用い丁寧

重複関係

平面形

周溝

柱穴

炉

土器

石器



第9図 第17号竖穴住居跡(1)

整されている。24～26はやや大形の無柄鉄で、いずれも主要剥離面を大きく残す。特に基部付近の調整が粗雑である。

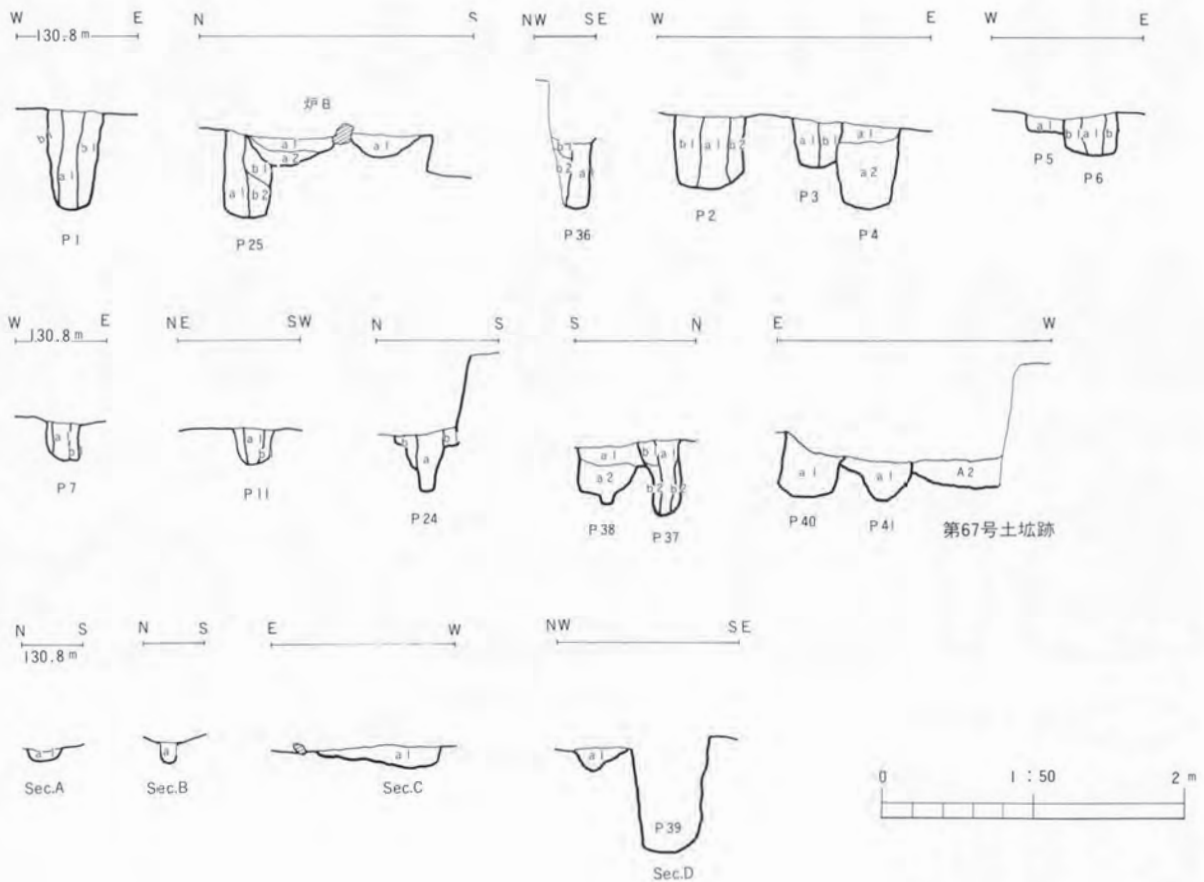
27・30は削器である。27は小さな剥片を用い、両側縁に粗い調整による刃部を有する。一部に使用時の小剥離が認められる。30はやや大き目の剥片を用い、一方の側縁に粗い調整による刃部を有する。やはり、使用時の小剥離が認められる。

28・29はピエス・エスキューイで、いずれも自然面を残しやや肉厚である。上下両端からの加撃により剥離しており、リングの間隔がややつまっている。31・32は使用痕のある剥片で、いずれも明瞭な刃部調整を持たず、側縁部などをそのまま使用している。刃部には使用時の微細な剥離が認められる。

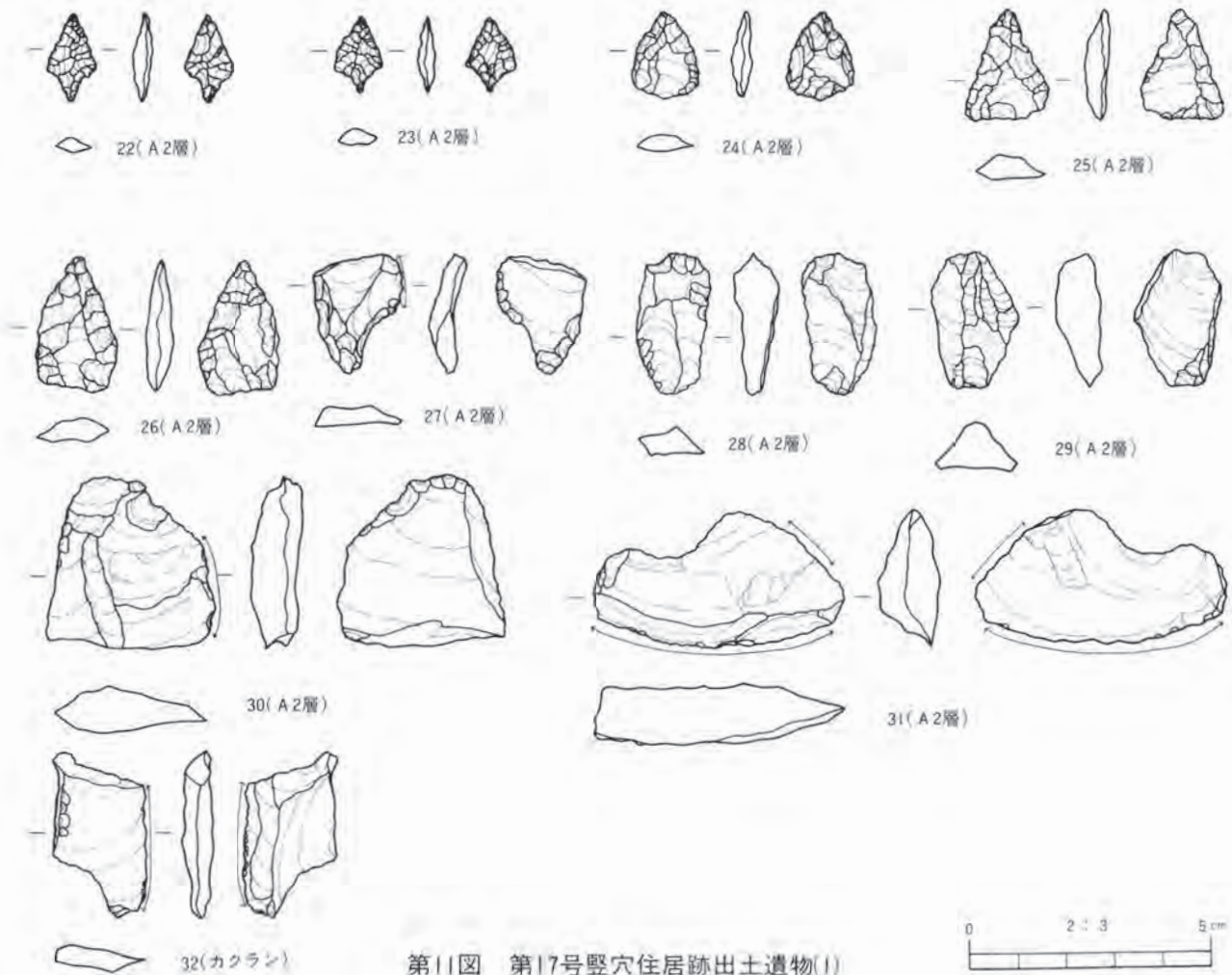
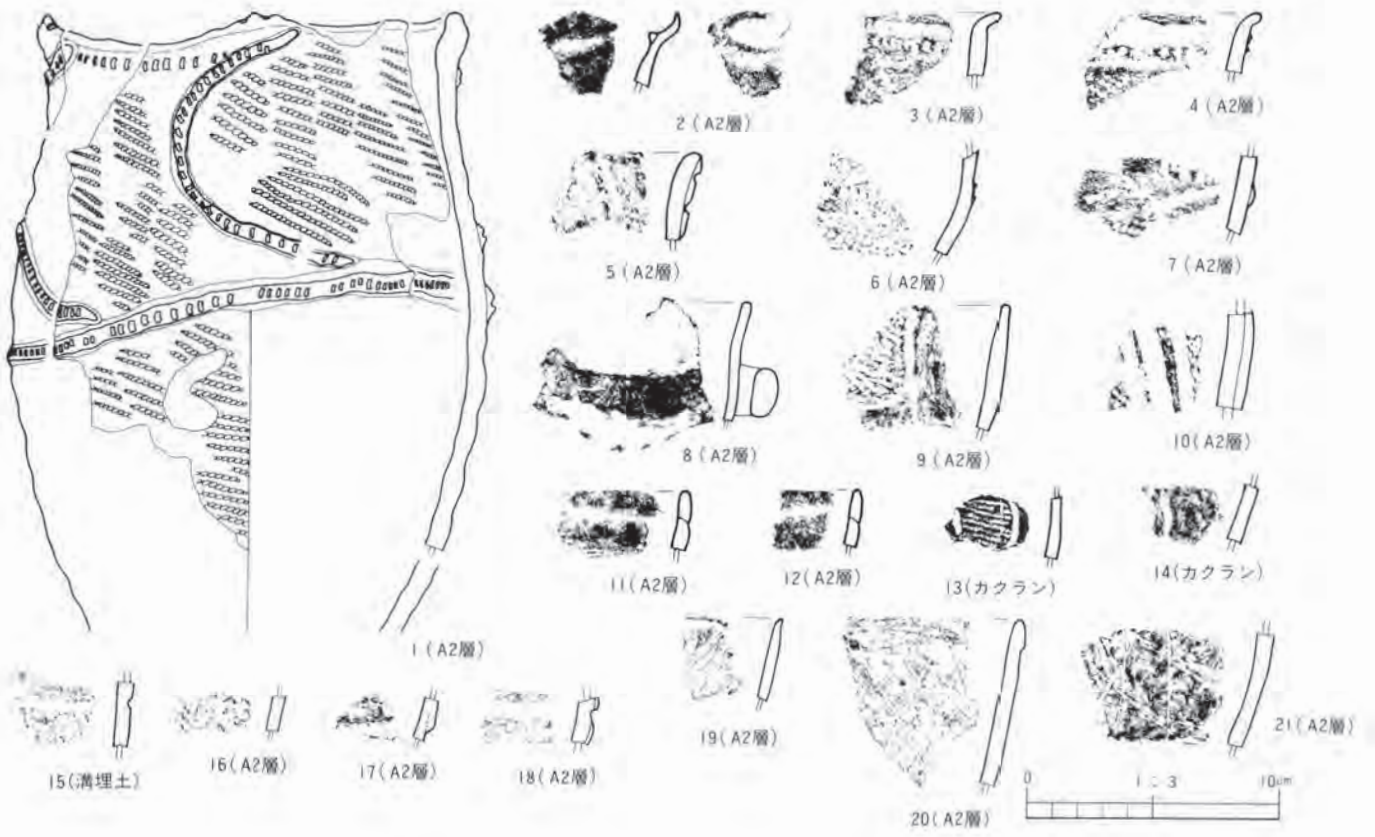
33は敲石かと思われるもので、両側縁に著しい敲打痕が認められるものの、正面と背面の敲打痕はまばらであり自然面を残している。

34は敲打磨石で断面三角形の礫を素材としている。一方の側縁にやや幅の広い機能磨面（最大幅3.0cm）を有し、もう一方の側縁に敲打痕を有する。機能磨面には使用時の小剥離が伴う。また、機能磨面に接する1面に擦痕が認められるものの磨面（調整磨面）を形成するほどの磨擦を受けてはいない。

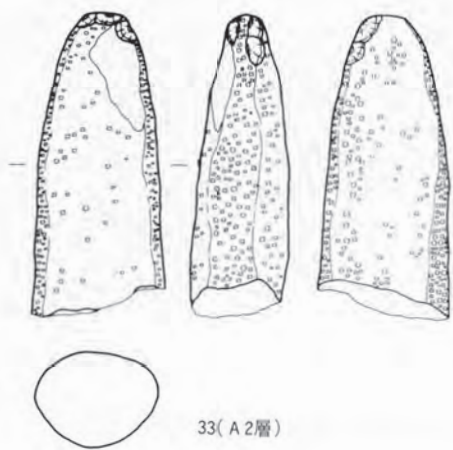
35は敲石で、扁平な円礫を使用し、一方の側縁にのみ敲打痕を有する。



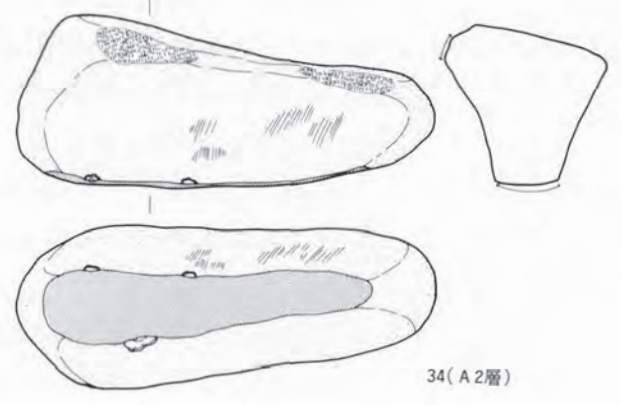
第10図 第17号竪穴住居跡(2)



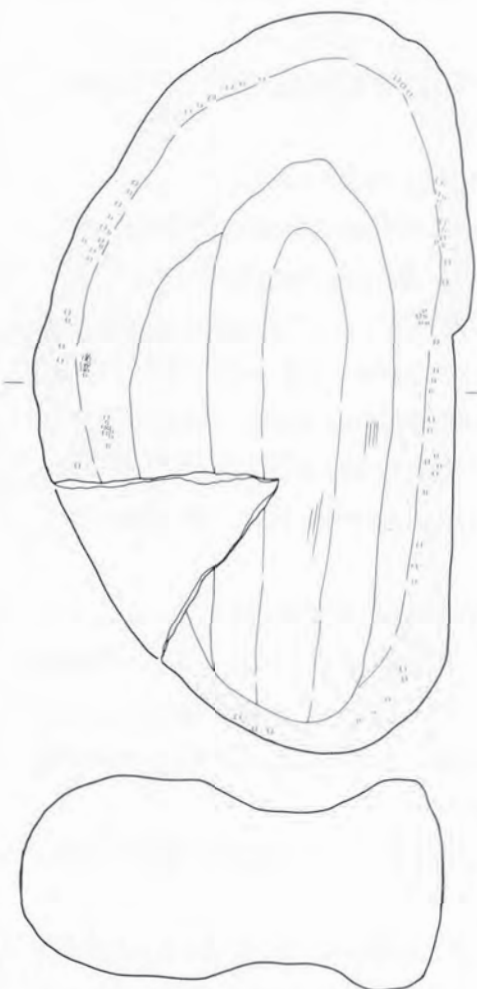
第11図 第17号竖穴住居跡出土遺物(1)



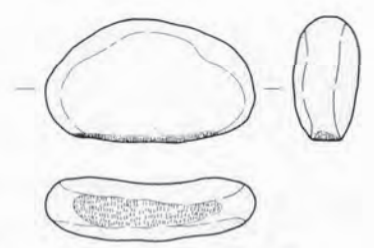
33(A2層)



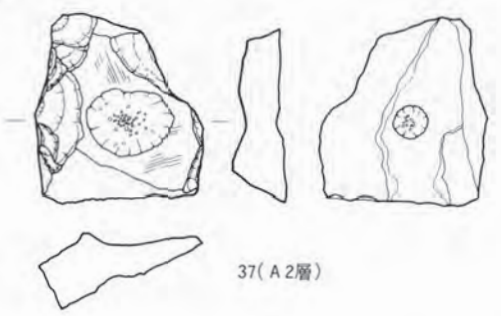
34(A2層)



36(A2層)



35(A2層)



37(A2層)



第12図 第17号竪穴住居跡出土遺物(2)

36は石皿で、両面に溝状の磨面を有する。溝状の磨面は両面とも上端での最大幅7.3~7.0cmほど、下端での最大幅3.0cmほどを計る。磨面の端部は、実測図上端では明瞭な段差を有するものの下端ではほとんど高底差がみられない。また、この溝状の磨面の周囲には平坦な磨面やわずかな敲打痕が認められる。

37は凹石で、周縁を粗く打ち欠いた礫を素材とし、両面に凹部を有する。実測図正面の凹部はより大きく、周辺に磨面を伴う。

第19号竪穴住居跡（第13図～第15図）

第4次調査と合わせてほぼ全体を精査した。

重複関係

重複関係は前述したように第17号竪穴住居跡を切るほかは、62・63号土壇跡を切り、第23号竪穴住居跡・第17・18・50号土壇跡に切られる。第59号土壇跡は炉Aを切るものの床面で検出したため、掘り込み面は不明である。第15号竪穴住居跡ともかすかに重複するが新旧関係は不明である。また、第15・16・60・61号土壇跡については第19号竪穴住居跡の埋土が浅く、新旧関係を把握できなかった。

平面形

平面形は不整形であるが、南壁がわずかに直線状となる。規模は北東-南西方向で6.2m、北西-南東方向で5.2mを計る。主軸方向はN39°Eである。

壁はかなり外傾し、ゆるやかに立ち上がる。壁高は最深部で0.2mを計る。

埋土はA層・B層・C層・D層に大別される。A層はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や黒褐色土塊を含む。旧A層に相当する。B層は焼土層及び褐色粘質土層であり4層に細別される。B₁層とB₂層は焼土層である。後者は固く焼けしまっているためここで焼成を受けたものと思われるが、前者はやや柔らかくあまりしまりが無いので二次的な堆積であると思われる。B₃層とB₄層は褐色粘質土層である。C層は壁際に堆積する層で、黒褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊を含む。D層はにぶい黄褐色～褐色土層で3層に細別される。D₁層は褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊や暗褐色土塊などをやや多く含む。旧A₂層に相当する。

床面はやや凹凸があるもののやや固い。貼床は認められない。周溝は認められない。

柱穴

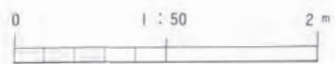
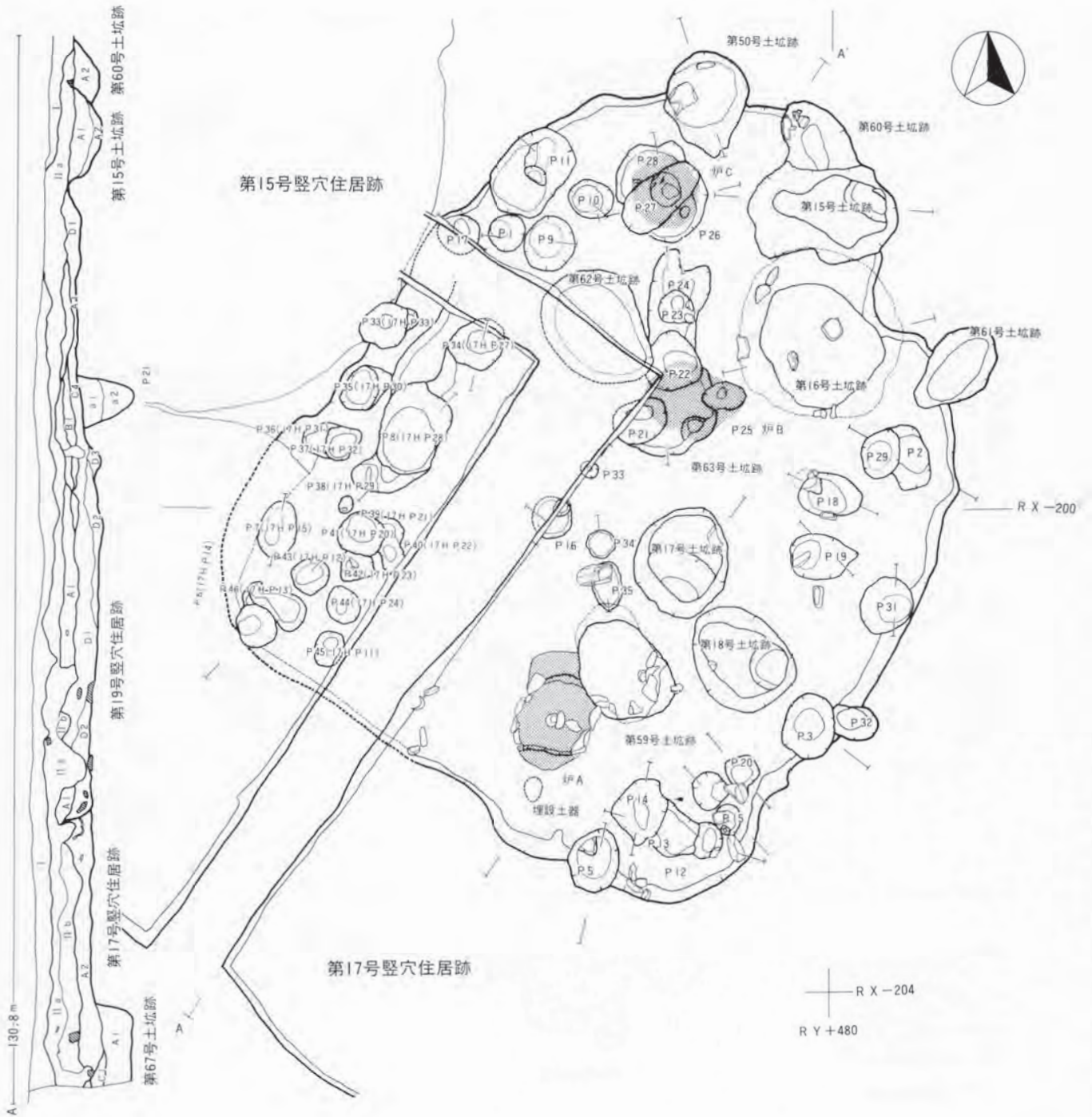
柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄・P₅・P₆が支柱穴に相当する。柱間寸法は各々芯々で、P₁とP₂が3.8m、P₂とP₃が2.4m、P₃とP₄が2.1m、P₄とP₅が3.4m、P₅とP₆が2.0m、P₆とP₇が1.9mを計る。また、P₇とP₈も支柱穴となる可能性がある。これら以外に柱痕跡があるものや柱穴の可能性のあるものは、P₁₁・P₁₂・P₁₃～P₁₈・P₂₂・P₂₃・P₂₅・P₂₇・P₃₁・P₃₆である。

P₂₅・P₂₇などは炉Bや炉Cの焼土に覆われるため、建て替えがあった可能性を指摘できるが詳細は不明である。

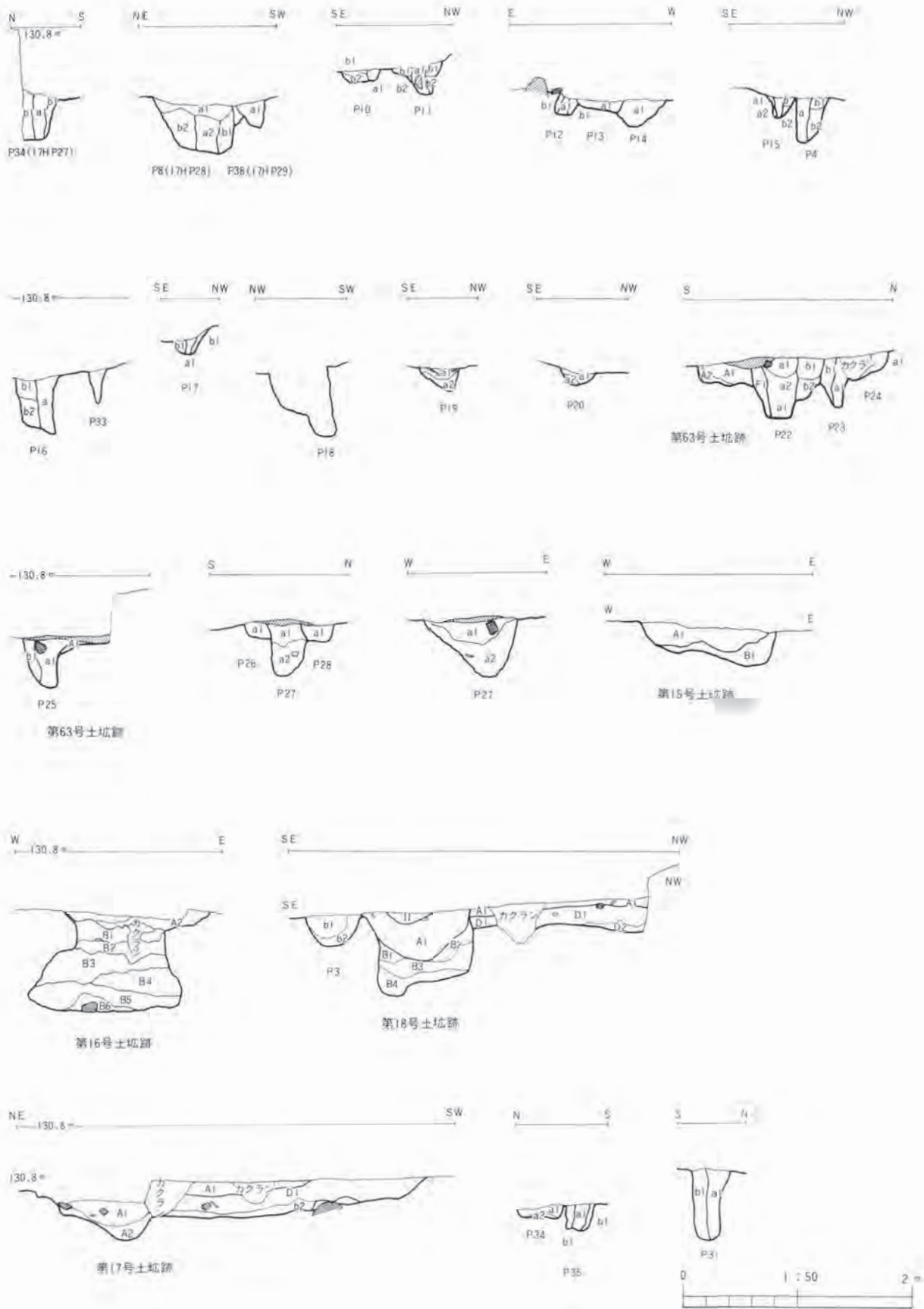
炉

炉は3基あり、南側から炉A・炉B・炉Cとした。炉Aは第59号土壇跡に切られるため全容は不明であるものの2期の変遷がみられる。新期は石組複式炉で東西0.65m、南北0.85mを計り、I部とII部から成る。旧期は斜位土器埋設複式炉で、全体の形状は不明であるが石囲炉と斜位土器埋設炉から構成されるようである。

炉の構築状況は、掘り方を掘り込んだ後に炉石と土器を斜位に埋設しながらK₁～K₃層とF₁層、F₂層を順次つめて行く。F₁層下面とF₂層上面は旧期の炉床となるため、焼成を受けて良く焼け、



第13图 第19号竖穴住居跡(1)



第14図 第19号竪穴住居跡(2)

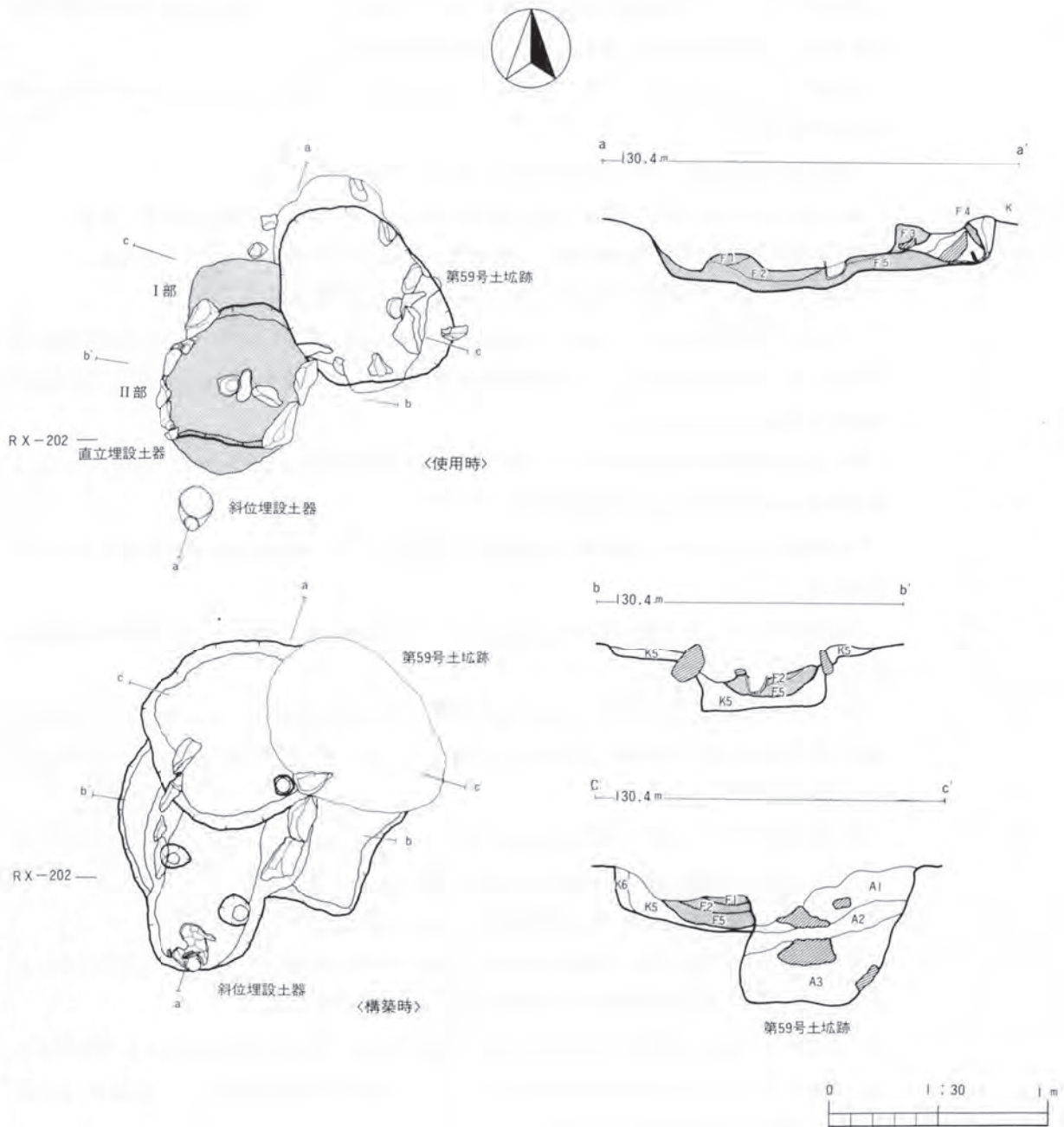
しまっていた。続いてK₁層、K₂層、F₁～F₃層をつめて新期炉を作る。F₁～F₃層上面は固く焼け、しまっていた。

Ⅱ部に埋設された土器底部（第17図58）と炉石は旧期で埋設したものをひき続き新期でも使用したものようである。尚、旧期の斜位埋設土器は焼成を受けてもろくなっており、細かく砕けてしまったために図示できなかった。

炉Aの北側に炉Bと炉Cがあり、いずれも地床炉で良く焼け固くしまっている。特に掘り方などの掘り込みは見られない。新期炉にともなうものであろう。

出土遺物（第16図～第20図）

遺構の掘り込みが浅いこともあり出土遺物はあまり多くはない。前述した埋設土器のほか、



第15図 第19号竪穴住居跡, 炉

土器

炉Aの焼土層中より琥珀玉が出土している。また、P₅より石棒片が出土している。

26は体部が強く屈曲する深鉢で、沈線により波頭状の施文がみられる。他のものに比べて極めて焼成が良い。5・7・8・16・25も沈線により施文されるもののモチーフの全容は不明である。25は沈線間に縄文原体圧痕文を施す。

27は縄文原体圧痕により渦巻文等を施す。

1～3・6・10・12～15は隆起線上に連続刺突文を施すもので、1が縦位・2が渦巻状の施文となるほかは横位の施文となっている。

4・17・19・21は沈線の磨消技法による施文がみられるもののモチーフの全容は不明である。20・28は隆沈線により施されるものである。

30・31は無節の縄文(ℓ)を施すもの。32～35・53・57・58が単節斜縄文を施すものである。

29は体部中央～下半に最大径を有する深鉢で体部に撚糸文(τ)を施す。38～42は網目状撚糸文を施す。36・37は前2者とは異なる原体により施文される。

43～52は櫛目文を施文するものであるが、B層から出土したものは接合しないものの同一個体の可能性がある。

土器底部の圧痕は53・54・58が木葉痕で、55～57が網代痕である。

石器

61は石錐である。先端部への調整は比較的密ではあるが、基部への調整は粗雑である。

62は有柄の石鏃であるが基部を欠く。両側縁はやや膨らみを持ち、調整も密である。

63は搔器であり、下端部を刃部とする。全体の形状は不明である。

64・67～70は削器である。形態、大きさともにばらつきがあるものの、いずれも側縁部に刃部を有する。64は木葉形を呈し、全周を調整する。67は小さな剥片を使用するもの。70は縦長の剥片を使用するものである。

73～76は使用痕のある剥片である。特別に刃部を作り出さずに側縁部などを使用している。使用時のものと思われる微細な剥離が伴っている。

77は磨製石斧であるが、側縁部に敲打痕等や剥離がみられ、再利用又は転用を計ったものと思われる。

59は礫器であり、大き目の剥離により両刃の刃部を作り出す。刃部には敲打痕等の使用痕はほとんど認められない。

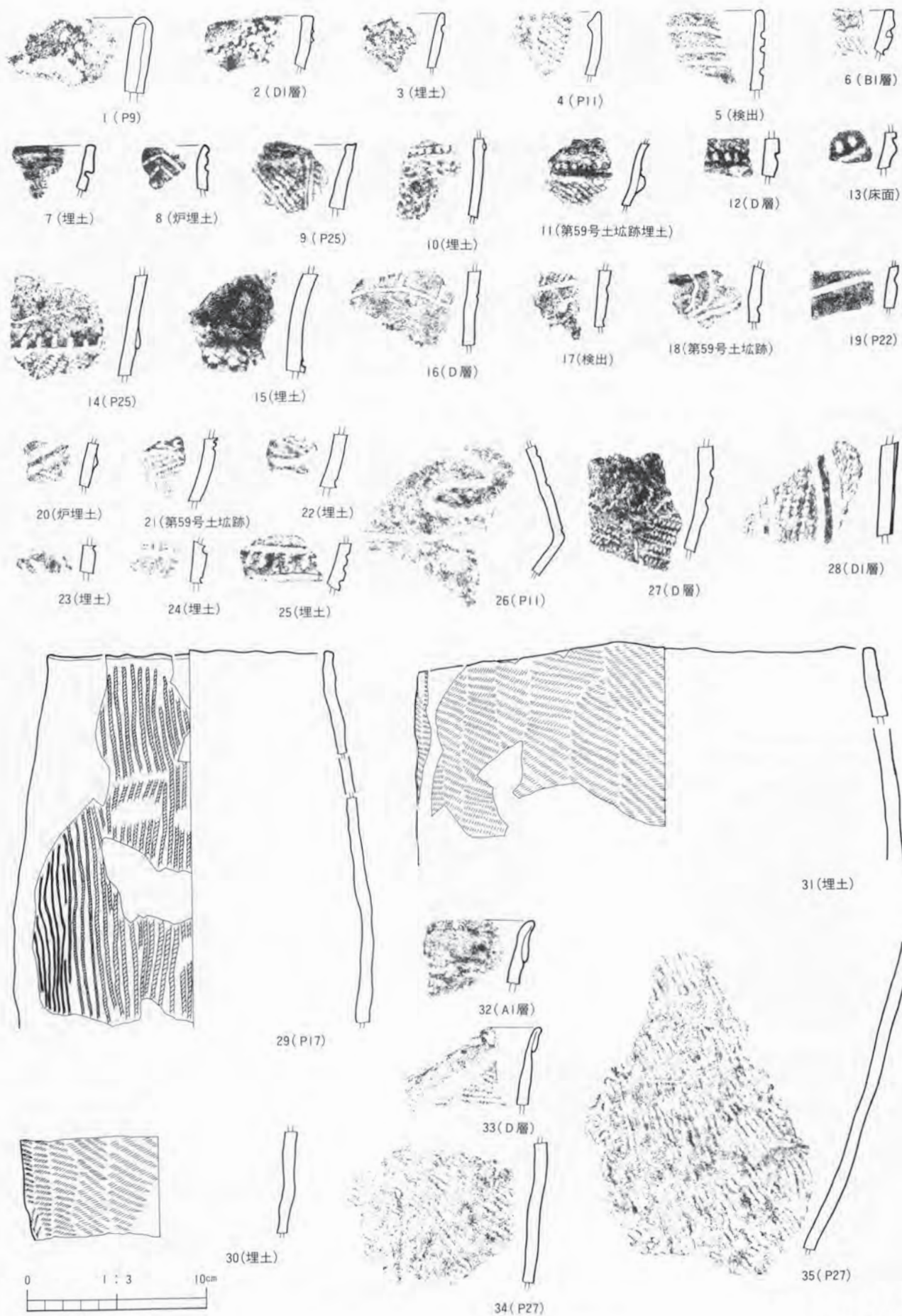
60・81・82は敲打磨石である。いずれも自然礫の1側縁を機能磨面としている。60は不定形の扁平礫に幅1cm程の機能磨面を有するものである。81・82はだ円形の扁平礫に幅4cm未満の機能磨面を有している。

84・85は砥石である。84は溶岩質の石材を用いるために器面が粗い。ほぼ全面を擦るが、裏面に溝状の磨面もみられる。85はち密であり良く使い込まれている。

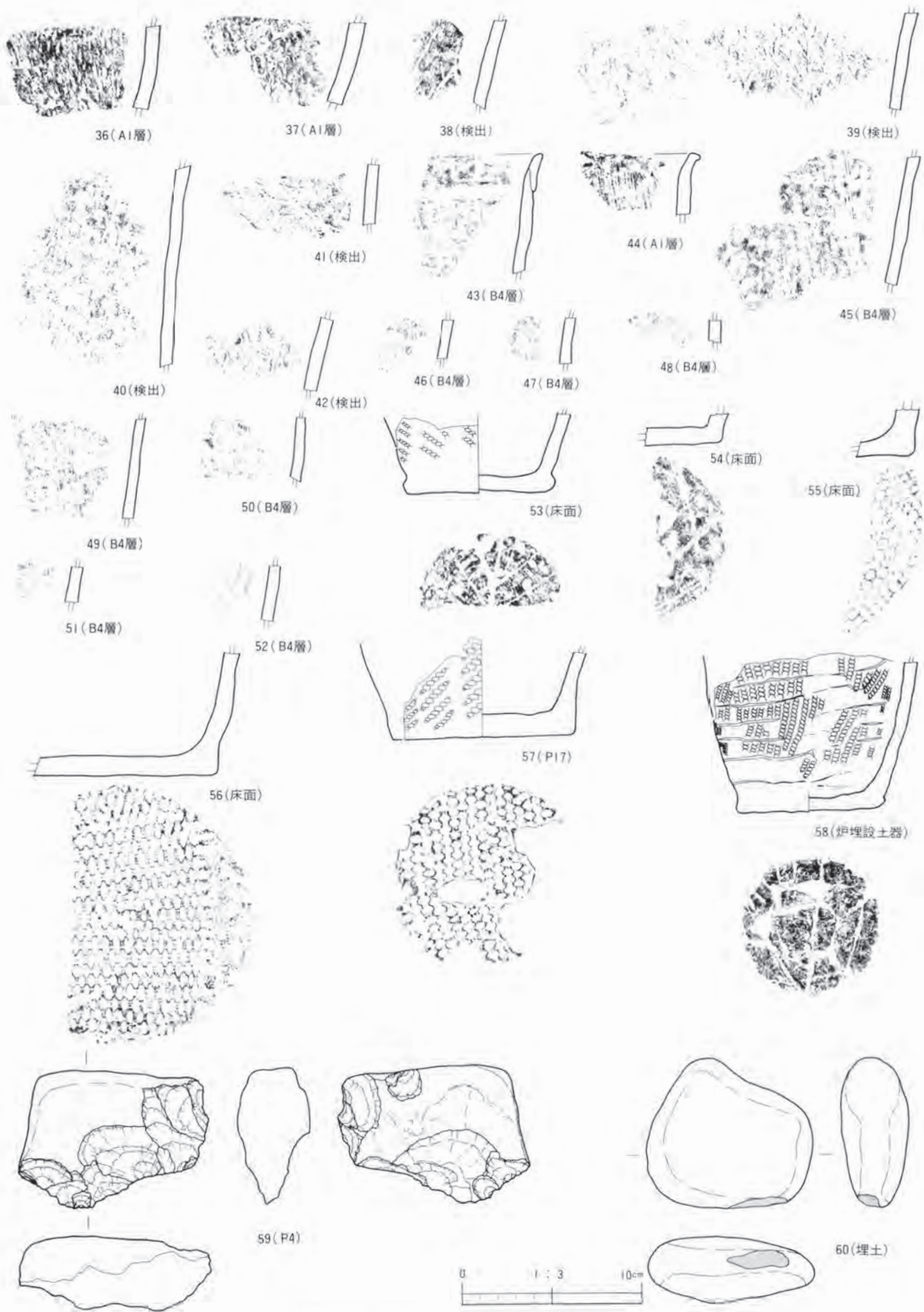
87は石皿かと思われるもので、1面に磨面を有し、敲打痕や擦痕がみられる。

86は石棒で、1条の溝により頭部と体部を区画している。器面は比較的良く整形されているものの一部成形時の敲打痕が残る。断面形は隅丸の方形を呈している。

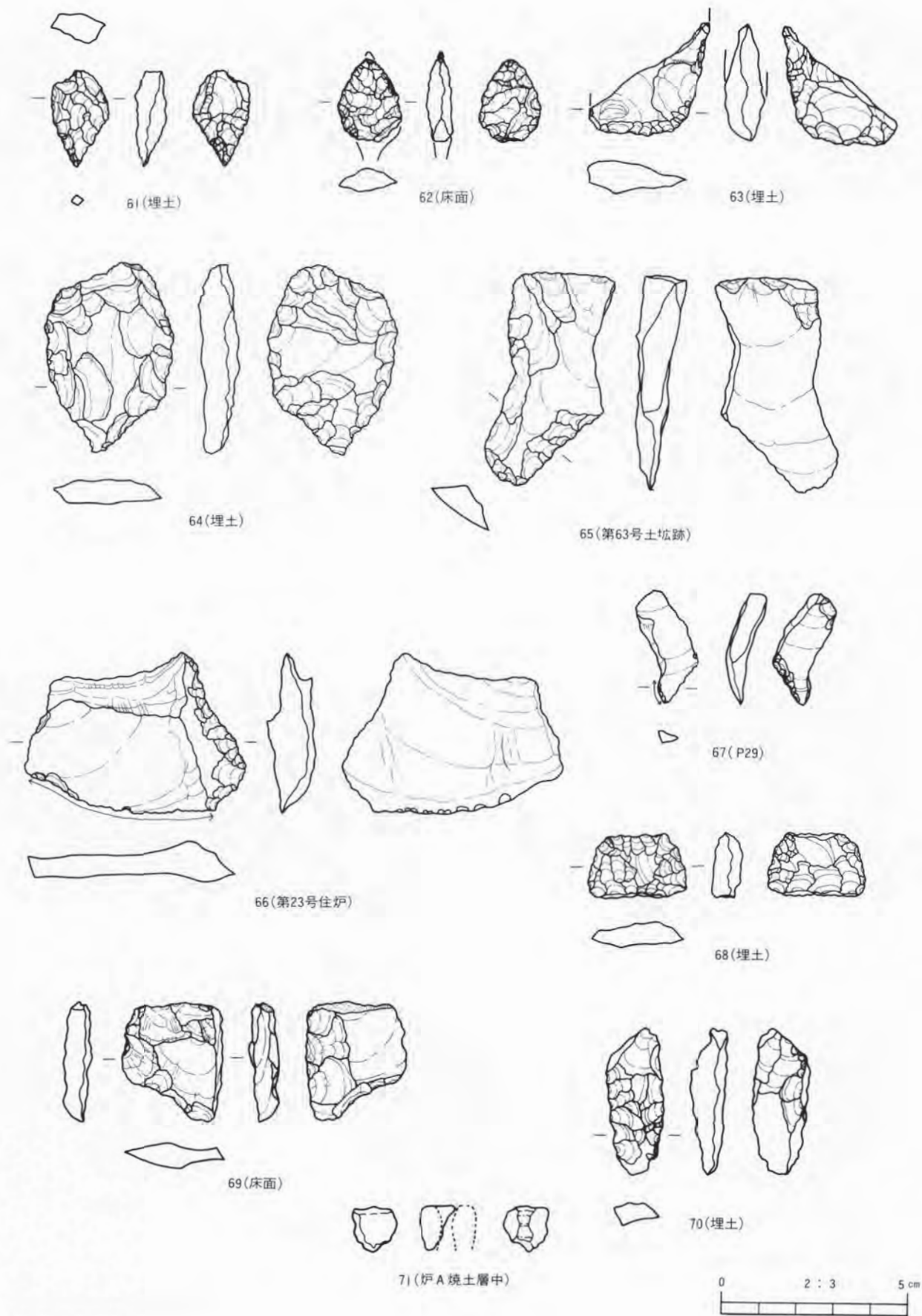
71は琥珀玉である。調査時には気がつかず炉内に堆積した焼土を篩分けしたところ検出された。非常にろくなっており粉々に砕けていたが、全体の $\frac{1}{3}$ 程度が接合した。直径は1.5mm未満で、上下両方から穿孔されている。



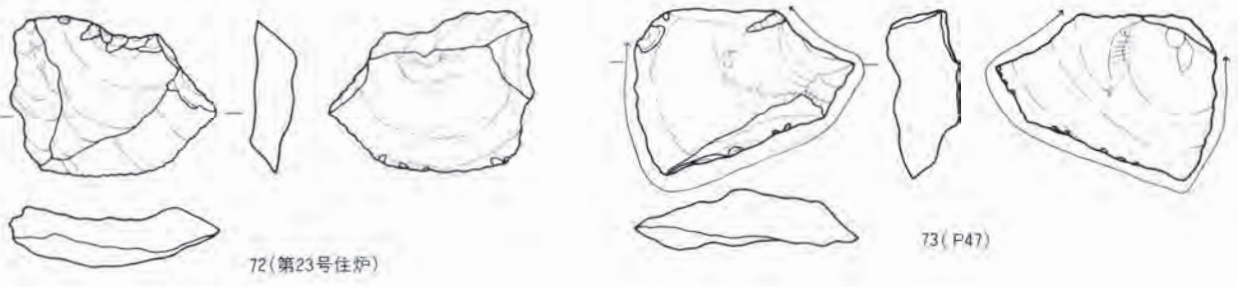
第16図 第19号竖穴住居跡出土遺物(1)



第17図 第19号竖穴住居跡出土遺物(2)

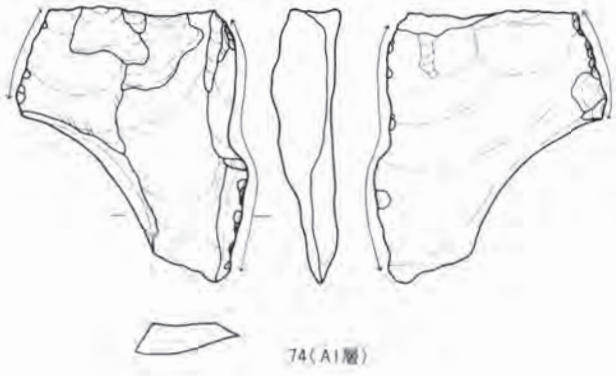


第18图 第19号竖穴住居跡出土遺物(3)



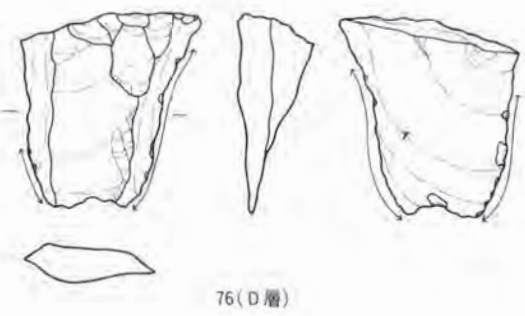
72(第23号住炉)

73(P47)



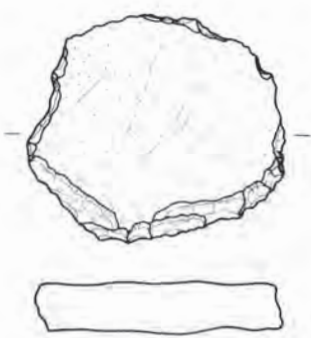
74(A1層)

75(埋土)

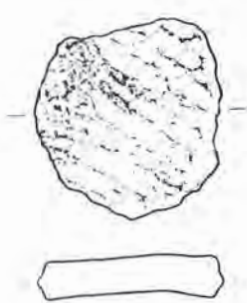


76(D層)

77(検出)



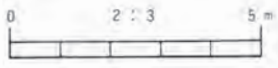
78(P47)



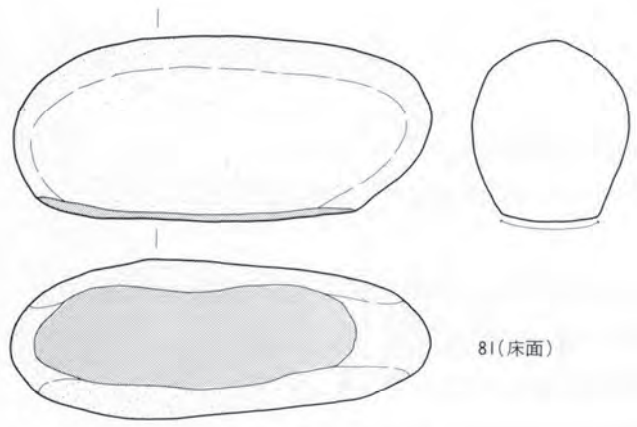
79(D層)



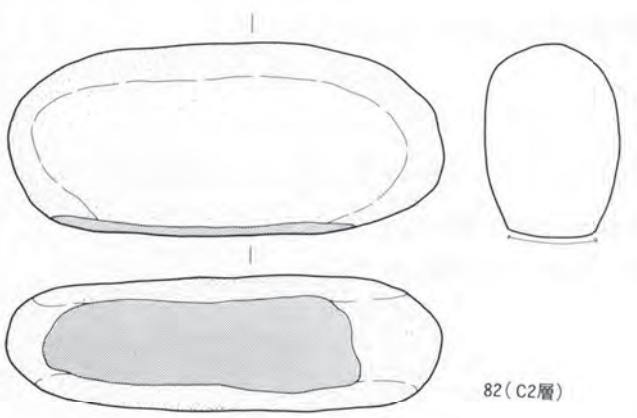
80(A1層)



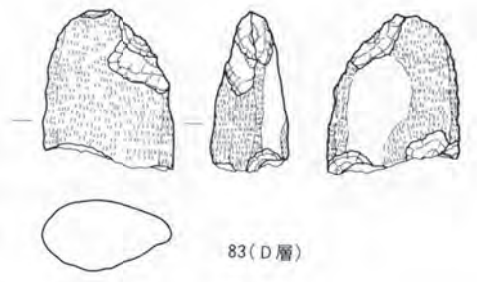
第19図 第19号竖穴住居跡出土遺物(4)



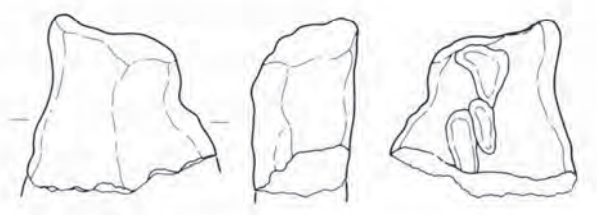
81(床面)



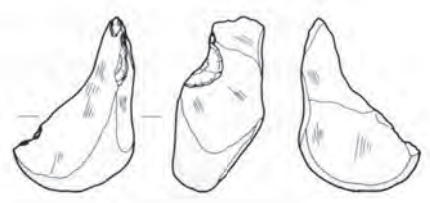
82(C2層)



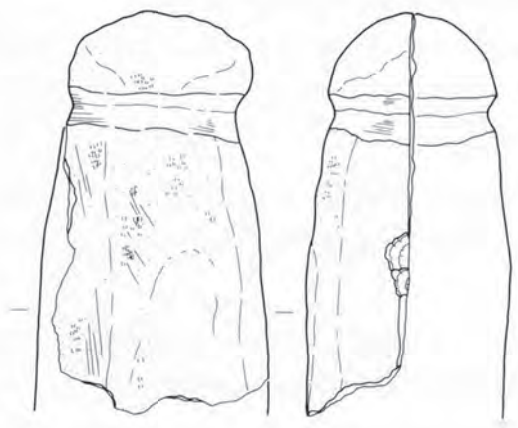
83(D層)



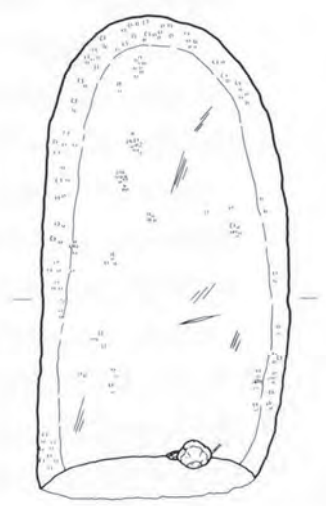
84(炉)



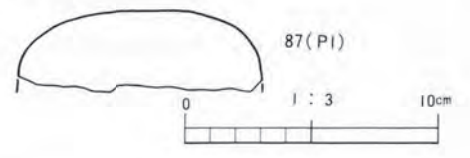
85(床面)



86(P5)



87(P1)



0 1 : 3 10cm

第20図 第19号竖穴住居跡出土遺物(5)

78は石製円盤。79・80は土製円盤である。

第23号竪穴住居跡（第21図）

第19号竪穴住居跡西壁（19HP₃₁とP₃₂の間）に検出した。

重複関係

重複関係は第19号竪穴住居跡より新しい。炉とやや浅いピット2口を検出したのみで、全体の平面形、規模は不明である。

炉

炉は石囲炉で、東辺と南辺の一部に炉石が残存する。炉石の抜きとり穴は確認できなかった。平面形は不整だ円形を呈し、東西0.7m、南北0.4mを計る。

埋土は下層とK層に大別される。F層は焼土層で、F₂層が良く焼け固くしまっている。F₂層上面が炉床に相当する。F₁層も焼成を受けるもののF₂層よりは柔らかくしまりが無い。

K層は構築土層である。炉の掘り方内に推積するのはK₂層で、やや明るい褐色粘質土を基本土とする。K₁層とK₂層は主な炉の外側に推積する層で、黄褐色粘質土を基本土とし、K₂層よりもやや固い。炉の構築と合わせて周辺の床面も構築したものであろうか。

出土遺物（第18図、第19図）

出土した遺物は極めて少ない。

石器

66は焼土層中から出土したもので、削器である。やや横長の剥片を用い、1側縁に片刃の刃部を作り出す。刃部の形態は搔器的でもある。また下辺にも使用時のものと思われる微細な剥離がみられる。72は使用痕のある剥片で、下辺を中心に使用時のものと思われる微細な剥離がみられる。

第24号竪穴住居跡（第24図、第25図）

重複関係

第5次調査区南東部に位置し、第22号竪穴住居跡・第26号竪穴住居跡を切り、第26号土痕跡を切る。

平面形

平面形は不整形を呈し、規模は北西—南東方向で4.2m、北東—南西方向で2.9mを計る。壁はやや外傾し、壁高は0.15mを計る。主軸方向は柱穴配置からN22°Eとなる。

埋土はA層とB層に大別される。A層はやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊をやや多く含む。B層は暗褐色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊などを含み、A層に比して全体に色調が暗い。また、A層より柔らかくしまりが無い。

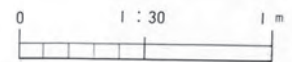
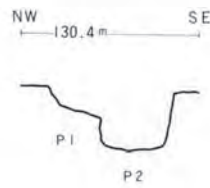
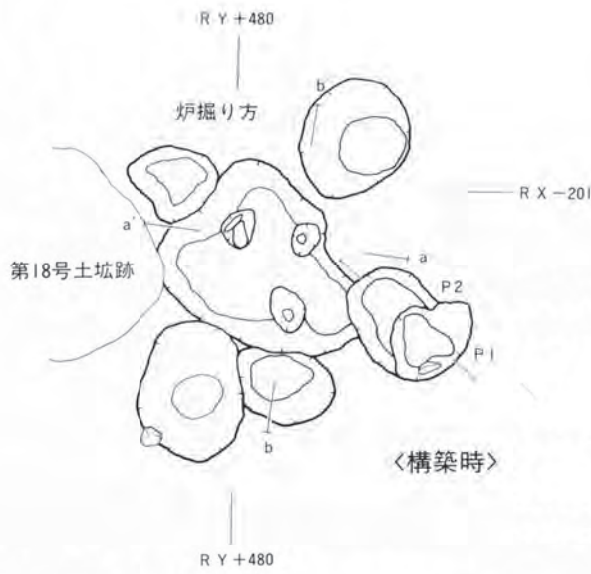
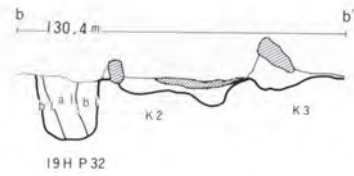
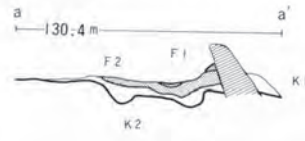
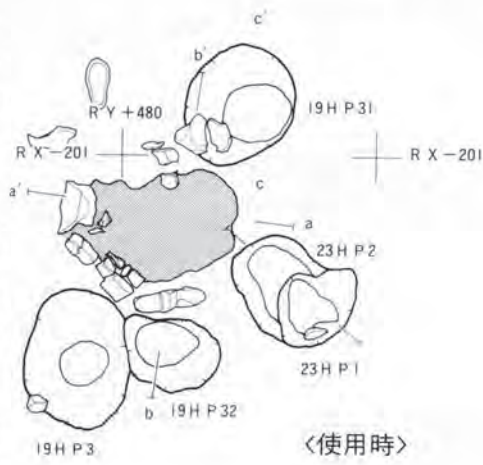
床面はやや凹凸があるものの比較的固い。第22号竪穴住居跡との重複部分には貼床（K層）がみられる。K層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊などを多く含む。やや固く、しまり具合は中程度である。

柱穴

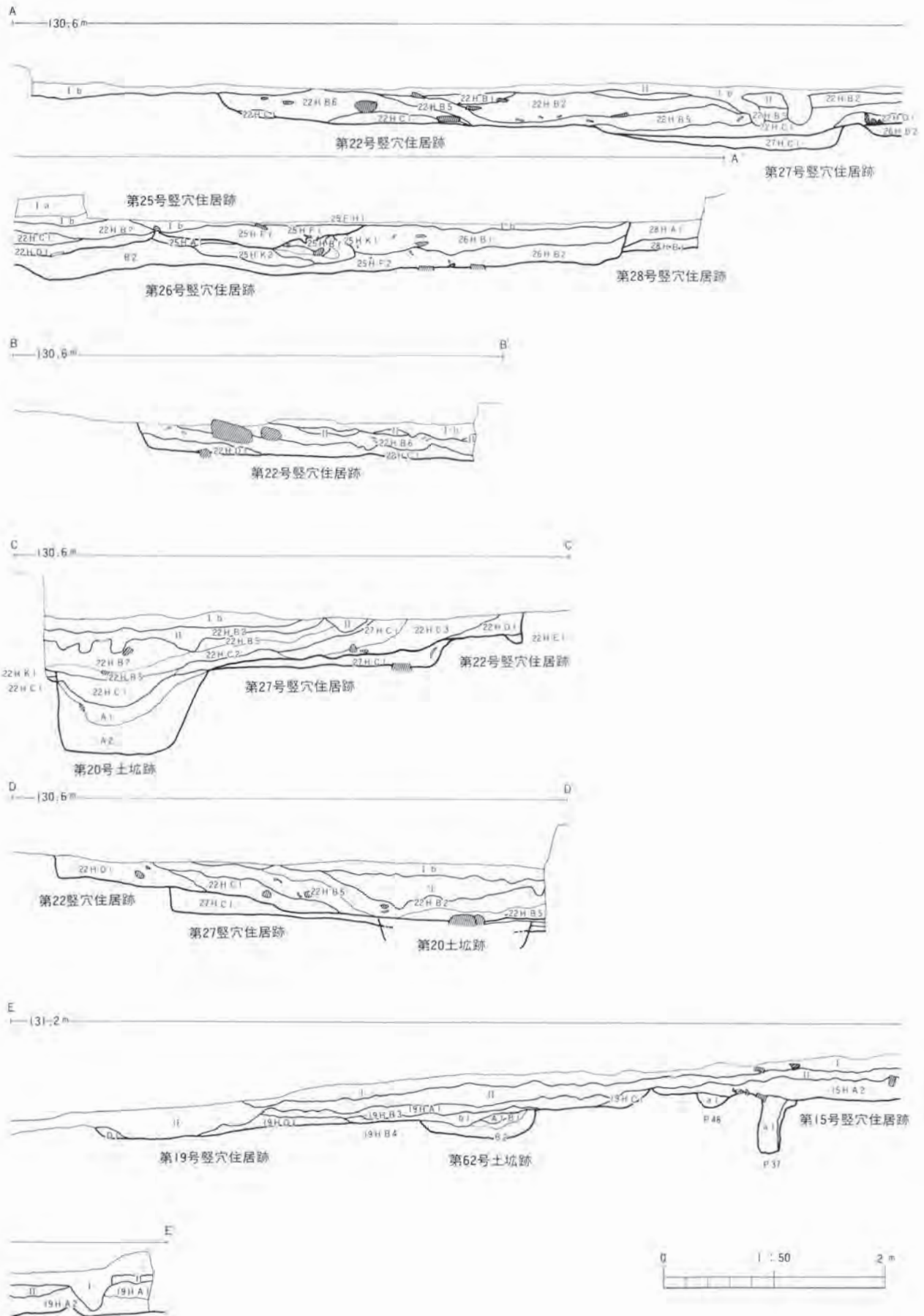
柱穴は、P₁～P₄が主柱穴に相当する。いずれも柱痕跡を確認している。P₅は他の柱痕跡同様にしまりのない暗褐色土が推積するものの掘り方が判断とできなかった。柱間寸法は各々芯々でP₁とP₂が1.25m、P₂とP₃が2.05m、P₃とP₄が1.8m、P₄とP₅が1.6mを計る。これら以外に柱痕跡を確認したものはP₆である。P₆に代わり主柱穴となる可能性もある。他のものな浅い皿状のピットや不整形のピットである。

炉

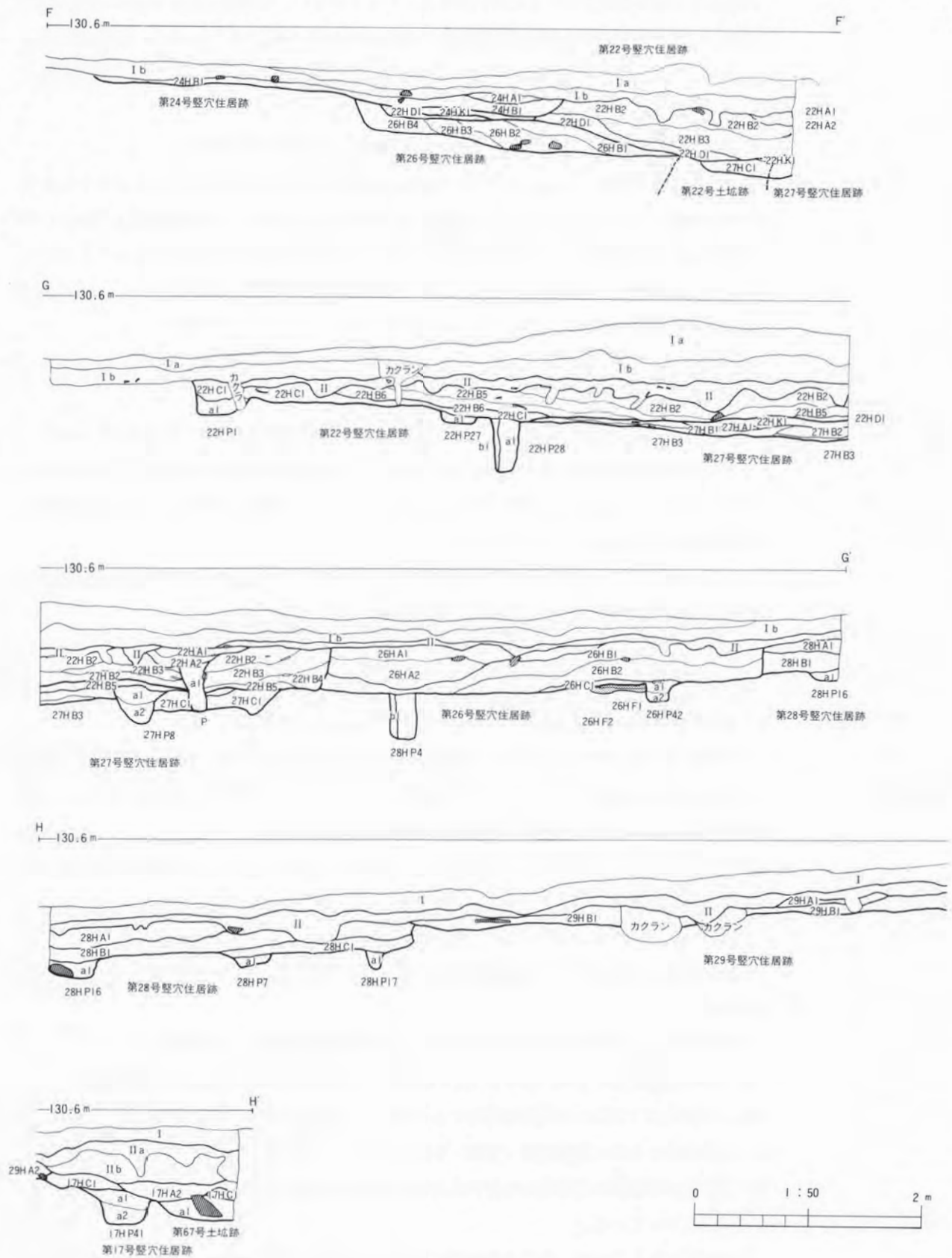
炉は2基あり、南側のものを炉A、北側のものを炉Bとした。炉Aは石囲炉で不整形を呈する。炉石は西辺～南辺にかけてわずかに残存する。規模は北西—南東方向で0.7m、北東—



第21図 第23号竖穴住居跡



第22图 白石遺跡第5次調査区土層断面図(1)



第23図 白石貝塚第5次調査区土層断面図(2)

南西方向で0.5mを計る。

F層は焼土層で焼成を受けるものの柔らかくしまりがいい。K層は構築土であり4層に細別される。K₁層、K₂層は炉の掘り方に推積する層で褐色粘質土を基本土とする。K₃層はK₂層より暗い。また、K₄層は柔らかくしまりがいい。K₅層とK₆層は炉石のすえ方に推積する層である。

炉Bも石囲炉で不整形を呈する。規模は東西、南北とも約0.5mを計る。

F層は焼土層である。炉床に推積するF層は焼成を受けるもののやや柔らかくあまりしまりがいい。F層は炉石の裏側に推積し、焼成を受け固くしまっている。K層は構築土でありいずれも炉の掘り方に推積する。K₁層～K₃層はいずれもやや明るい褐色粘質土を基本土とするもので、混入土の状況により細別される。また、K₄層は黄褐色粘質土を基本土とし、K₅層は明黄褐色粘質土を基本土としている。K層は全体的に固くしまっている層が多い。

出土遺物（第26図、第27図）

埋土が浅いこともあり遺物の出土量は少ない。

土器

1～5は隆起線上に連続刺突文を施す。口縁部破片にはC字又は逆C字などの施文がみられる。

6・7は口縁部に原体圧痕文を施すものである。6は口縁部に横位2条の原体圧痕文をめぐらせる。また、7は頸部にやや細い沈線を1条めぐらせ、口縁部を無文帯とし、無文帯上部に1条の原体圧痕文を施している。

8・9・11・12・14は磨消技法により施文されるもので、9は曲線的な幅の狭い縄文帯がみられる。8は口縁部波片で、波頂部内面に隆起線により渦巻文を施す。

13は沈線間に刻み目状の施文がみられる。

15～17は隆沈線により施文されるもの。20・21は平行沈線により施文されるものである。また、19は磨消技法により直線的なモチーフの施されるものである。

22・23は櫛目文を施文するもの。18は撚りの細かい撚糸文を施文し、底部に木葉痕を有する。

石器

24～26は石錐である。24・25はつまみ部を作り出すもので、比較的細い機能部を有する。調整は密である。26は剥片の先端部付近のみを調整するものである。

27は無柄凹基の三角鏃である。両面ともに主要剥離面を残す。また、背面の1側縁は全く調整されていない。

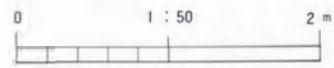
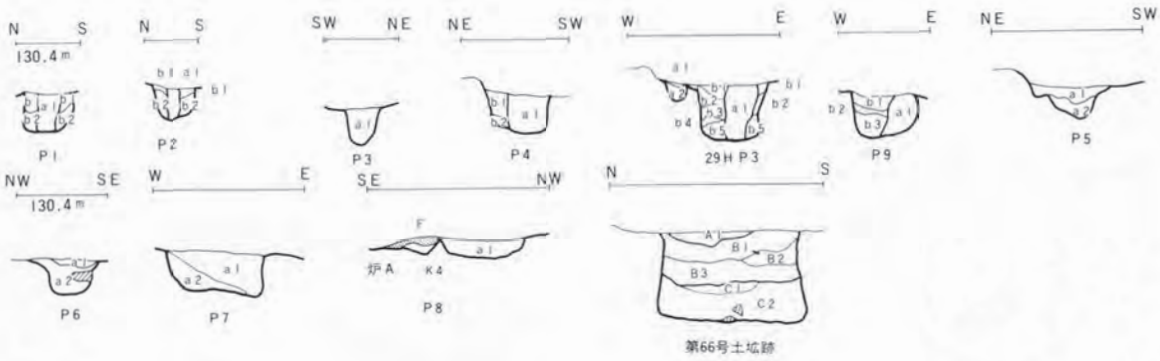
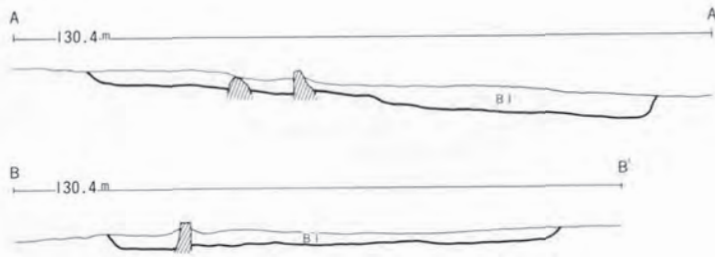
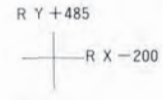
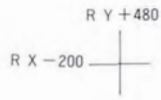
28・29は削器である。いずれも小さな剥片を利用し、側縁部に刃部を有している。

31は使用痕のある剥片で、両側縁にわずかではあるが使用時のものと思われる微細な剥離がみられる。

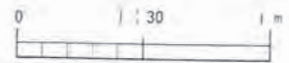
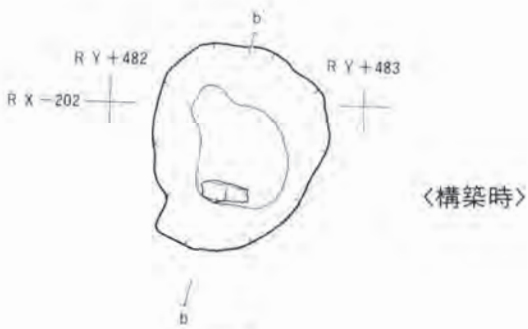
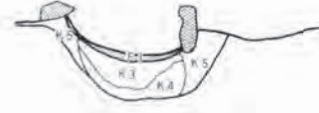
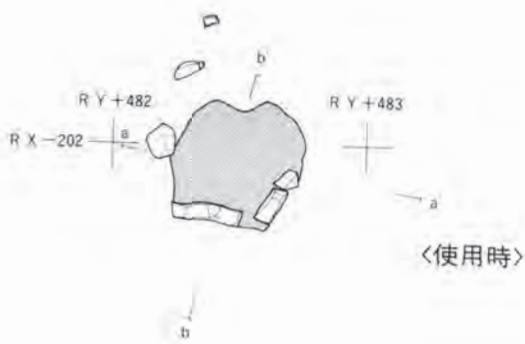
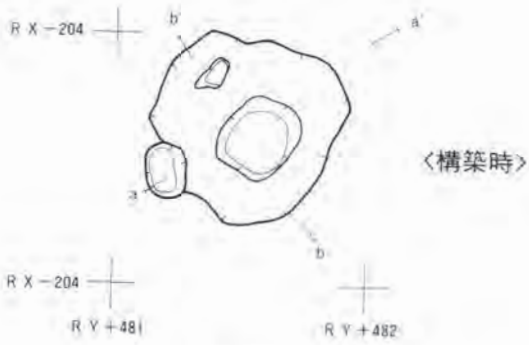
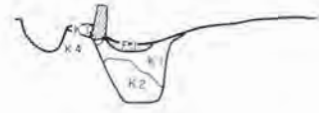
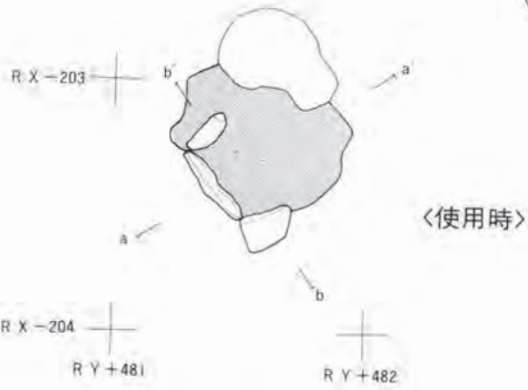
32はほぼ全面に敲打痕のみられるもので、磨製石斧の未成品かと思われる。

33～35は敲打磨石である。33はだ円形の自然礫の1側縁に幅2.5cm以下の機能磨面を有している。34は断面三角形の自然礫を使用するもので、1側縁に幅1.7cm以下の機能磨面A面を有し、これを接する面に調整磨面（B面）を有している。特殊磨石に類している。35はほぼ円形の扁平礫の両端部に機能磨面を有するもので、それぞれの機能磨面はいくつかの面に面取りされた様になっている。

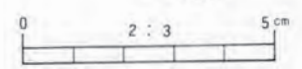
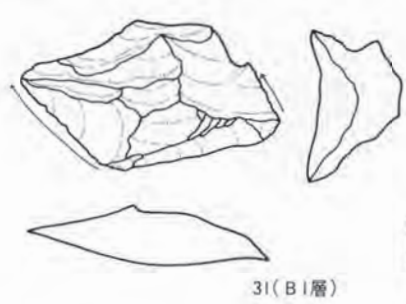
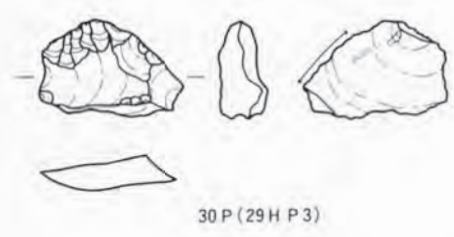
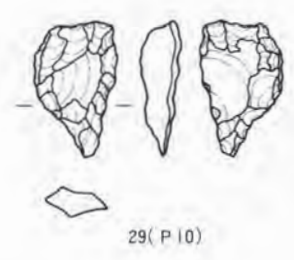
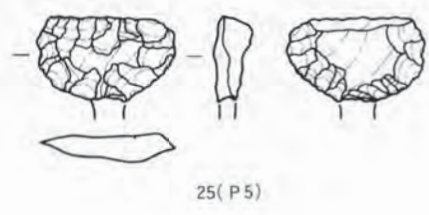
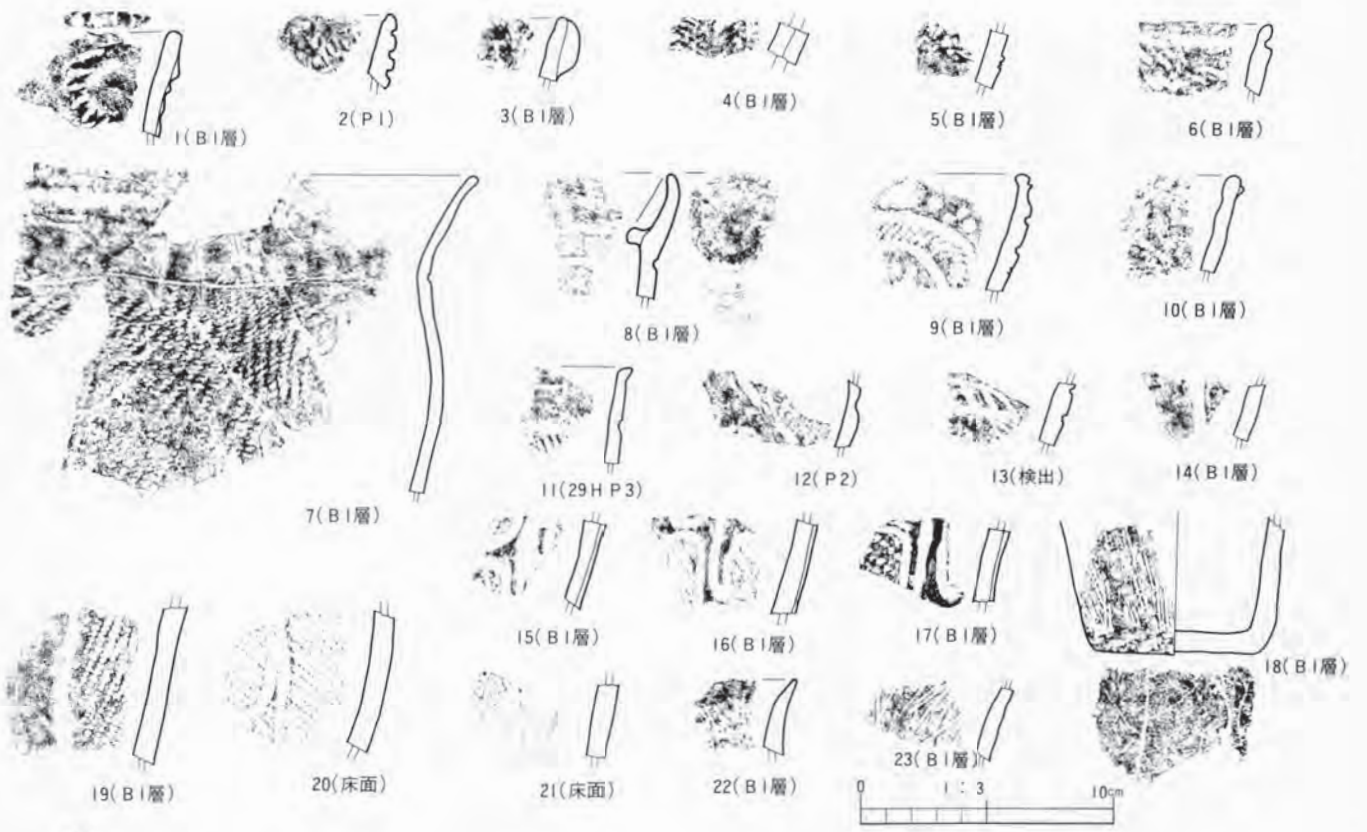
36は石皿片かと思われ、使用された面には擦痕や敲打痕が見られる。37は一方の面に石皿状の使用痕が有り、もう一方の面に凹石状の使用痕が有る。



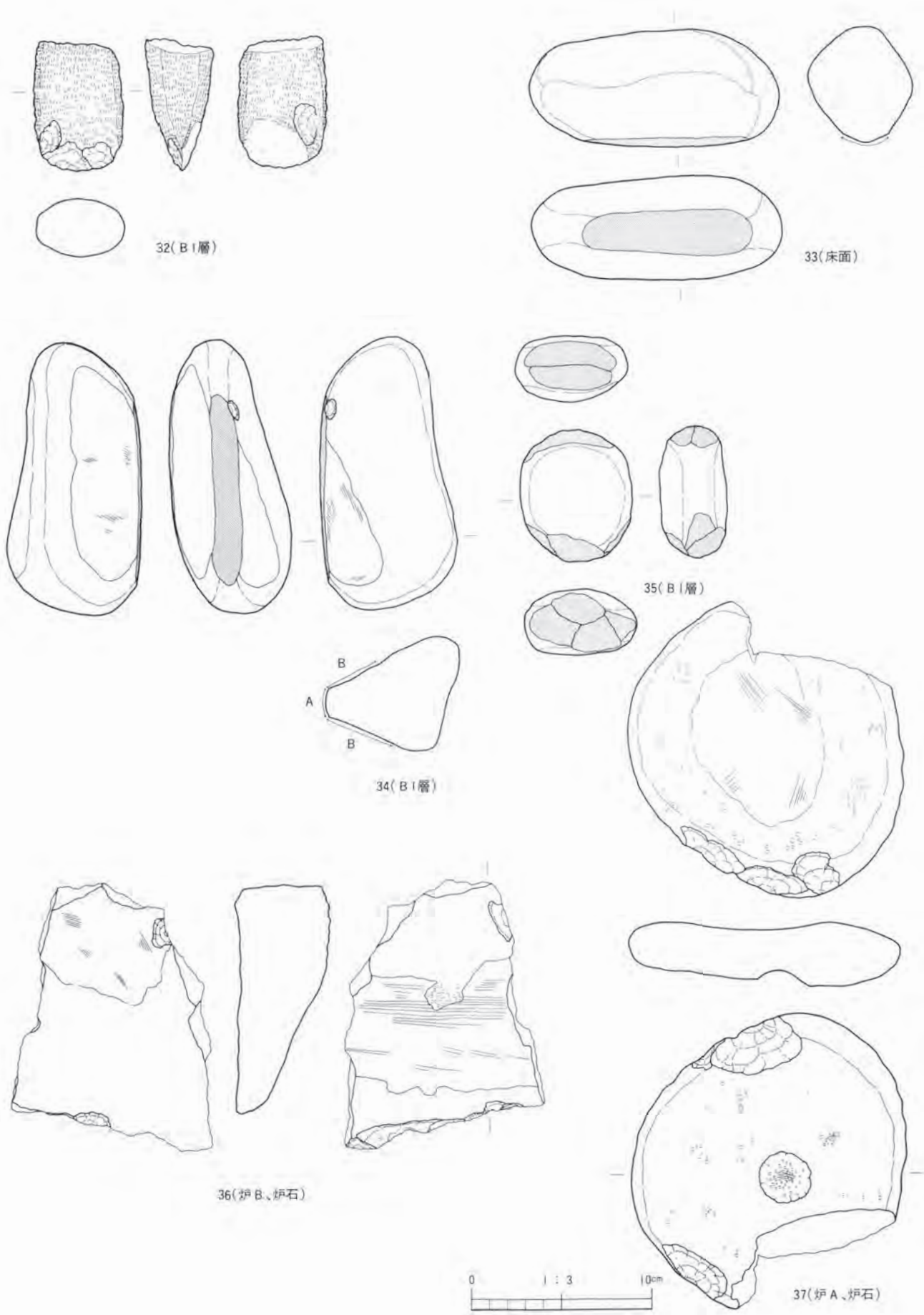
第24图 第24号竖穴住居跡



第25図 第24号竪穴住居跡・炉



第26図 第24号竪穴住居跡出土遺物(1)



第27图 第24号竖穴住居跡出土遺物(2)

第25号竪穴住居跡（第22図・第28図・第29図）

第5次調査区南半部に位置し、第22号竪穴住居跡、第24号竪穴住居跡に切られ、第26号竪穴住居跡を切る。炉と周辺の床面を検出したのみで平面形や規模は不明である。

重複関係

埋土はA層とB層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、やや明るい暗褐色土塊や褐色土塊をやや多く含む。やや固くしまり、中程度である。B層は炉埋設土器の内容土で、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や焼土粒などを含む。柔らかくしまりが無い。

床面は炉を中心としてゆるやかな凹みが見られる。一部に貼床K₁層がみられる。K₁層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。やや固いがしまりは中程度である。

炉は斜位土器埋設複式炉で、だ円形を呈する地床炉の一部に壺器を斜位に埋設する。規模は北東—南西方向で0.7m、北西—南東方向で0.5mを計る。

炉

炉の構築方法は、掘り方にK₂層をつめ、F層をつめながら土器を埋設している。F₁層上面が炉床であり良く焼け固くしまっている。F₂層も良く焼けているが浸透層であろうか。

出土遺物（第30図・第31図）

遺構の保存状態が悪く、出土遺物はあまり多くない。

1は炉に埋設された土器で、口縁部の外反する深鉢である。体部の最大径は体部上端にあり、ここから底部にかけて直線的にすぼむ。口縁部には小さな波頂を4単位施し、波頂部には刻み目が見られる。波頂下には連続刺突による施文がみられる。体部はL—R単節斜縄文を地文とするが、口縁部付近は横方向に、体部は縦方向に回転している、底部には網代痕がみられる。

土器

3～7は同一個体で、口縁部の外反する深鉢である。器面には地文を施さず比較的丁寧に研磨されている。頸部に横位2条の隆帯がめぐり、部分的に上下をブリッジ状に連結している。体部には沈線により曲線的な施文がみられるもののモチーフの全容は不明である。

8は隆起線に沿って連続刺突のみられるもの。9は隆起線上に連続刺突のみられるものである。10は口縁部に無文帯を有するもので補修孔がみられる。

11・12・14は燃糸を地文とするもの。13は櫛目文を地文とするもの。15はL—R単節斜縄文を地文とするものである。底部の圧痕は14が網代痕、15が木葉痕である。

16は使用痕のある剥片で、一方の側縁に使用時のものと思われる微細な剥離がみられる。

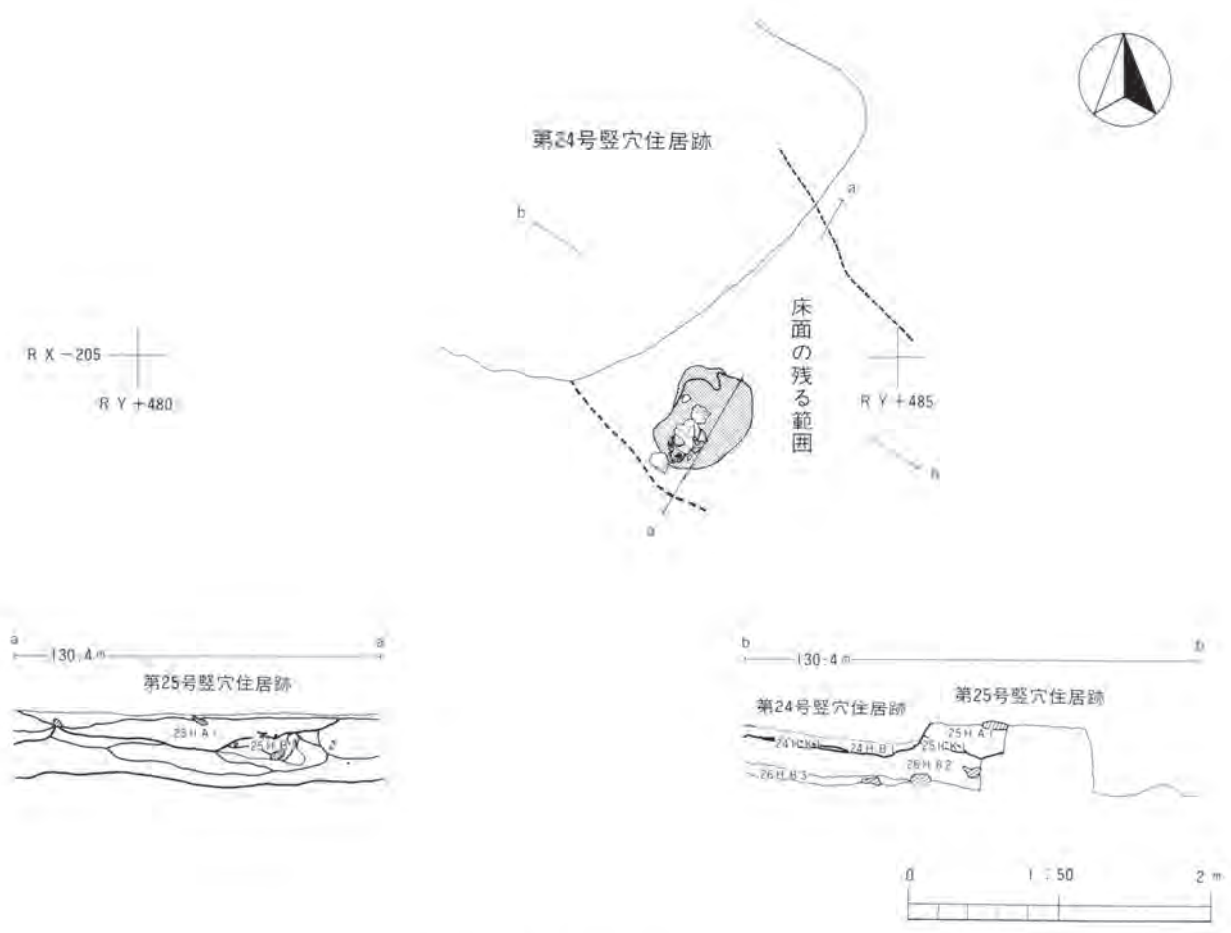
石器

17～19は磨製石斧の未製品と思われるものである。17は全面にわたり敲打痕のみられるもの。18・19は刃部に剥離が有り、器面に敲打痕がみられるが、両者ともに自然面を大きく残す。

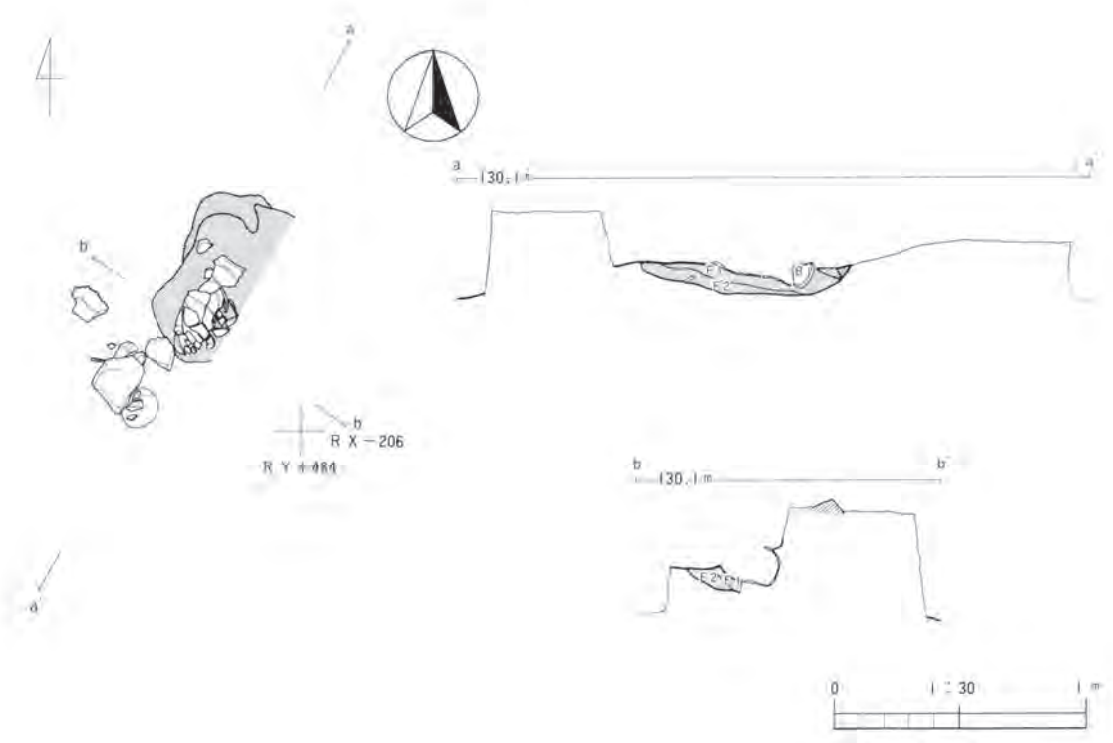
20～22は敲打磨石である。20・22は長軸方向の端部に機能磨面を有する。20はもう一方の端部にも敲打痕がみられる。21は両側縁と長軸方向の端部に機能磨面を有し、もう一方の端部にも敲打痕を有する、側縁の剥離は使用時の可能性が大きい、下端のものは比較的敲打痕が少ないために、使用時か成形時かは不明である。

24は石皿片かと思われるもので、一方の面に使用痕を有する。

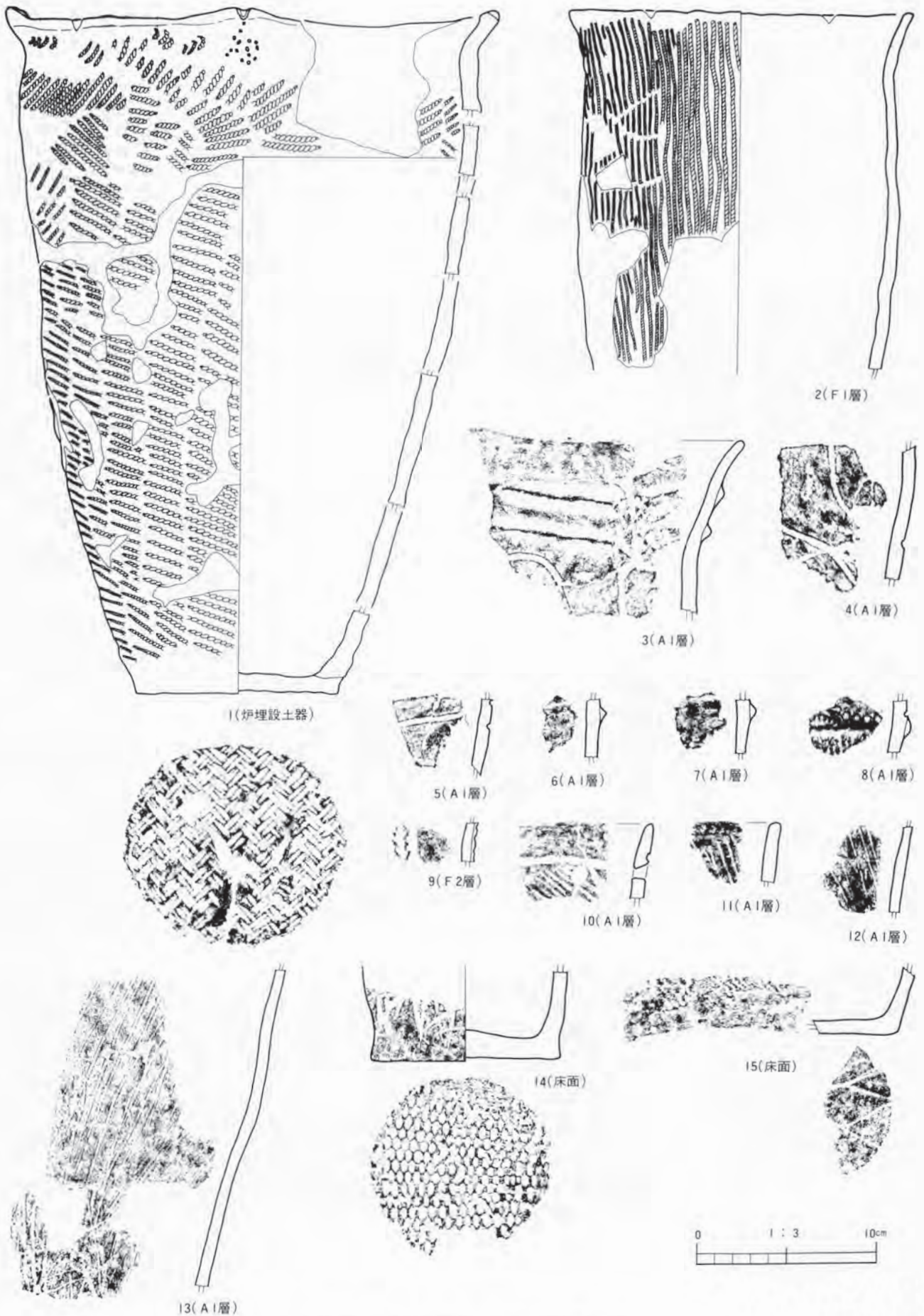
25は凹石で、両面に使用痕がみられる。



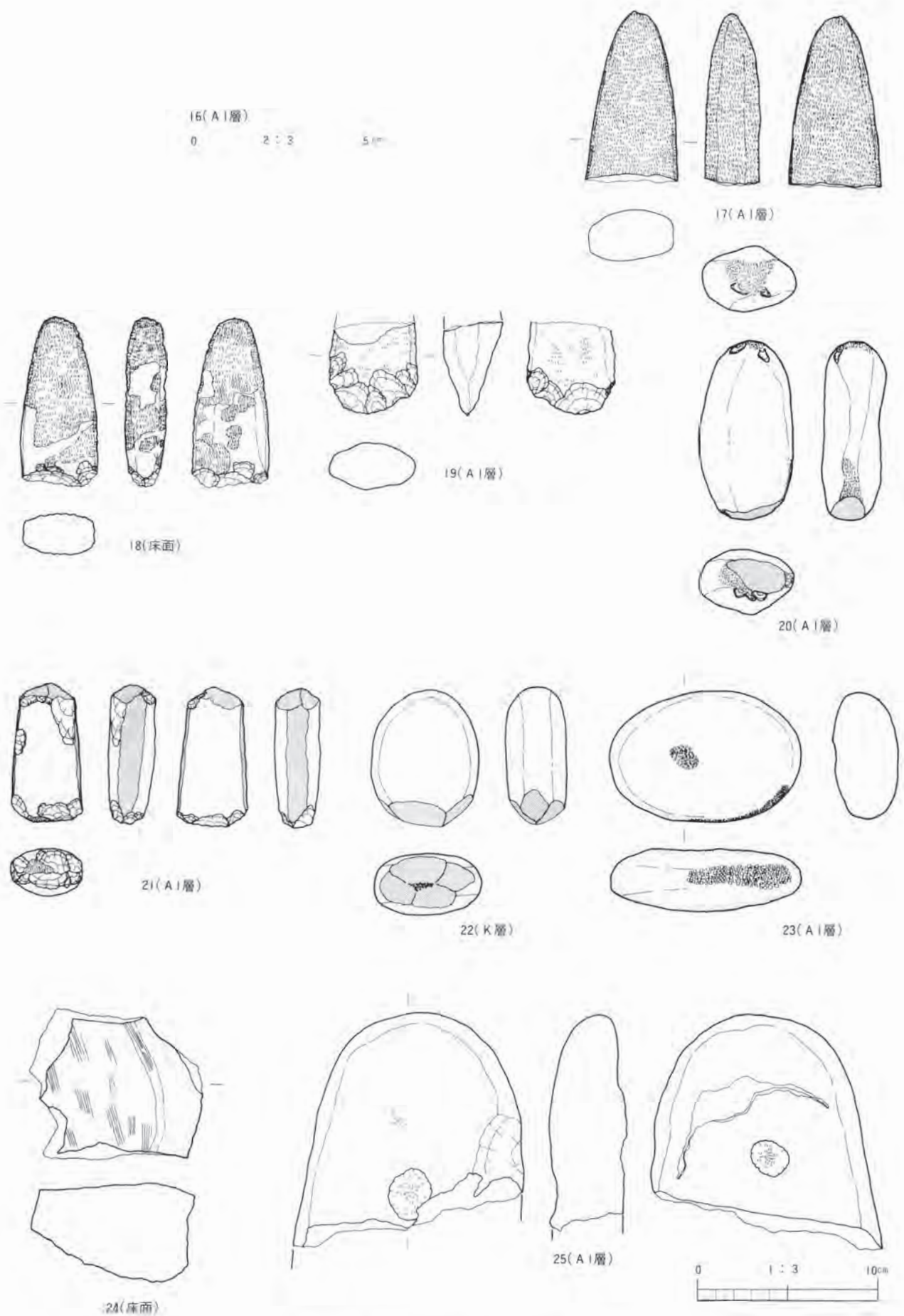
第28図 第25号竖穴住居跡



第29図 第25号竖穴住居跡炉



第30図 第25号竖穴住居跡出土遺物(1)



第31図 第25号竖穴住居跡出土遺物(2)

第22号竪穴住居跡（第22図・第23図・第32図・第33図）

第5次調査区東端部に位置し、全体の $\frac{1}{2}$ 程度を精査した。第24号竪穴住居跡に切られ、第25号竪穴住居跡・第26号竪穴住居跡・第26号竪穴住居跡・第27号竪穴住居跡を切る。第20号土坑跡は本住居跡の床面から掘り込まれており、本住居跡に伴う可能性が大きい。

平面形は、精査した範囲内では多角形を呈するようである。規模は北東～南西方向で8.6mを計る。また、北西～南東方向は4.4mを精査した。壁は直壁で、壁高は南壁で0.4mを計るが、西壁で0.3m～0.2m、北壁で0.15mとなる。主軸方向は北からかなり東へ偏している。

埋土はA層・B層・C層・D層に大別される。A層は褐色粘質土を基本土とする。A₂層はA₁層よりも明るくやや固い。B層はやや明るい黒褐色粘質土～暗褐色粘質土を基本土とする。B₁層はやや明るい黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土を含む。やや柔らかくしまりは中程度である。他の層はB層がやや明るい暗褐色粘質土を基本土とするほかは暗褐色粘質土を基本土としている。いずれも固さ、しまりとも中程度である。C層はやや明るい暗褐色粘質土～褐色粘質土を基本土としB層よりも明るくやや固い。やや暗い層とやや明るい層が互層になっている。C₁層には炭化物粒が多く含まれていた、D層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊を含む。固さ、しまりとも中程度である。

床面はやや凹凸があるものの固い。壁際から中心部にかけてゆるやかに傾斜している第27号竪穴住居跡との重複部分に貼床（K層）がみられる。K層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、にぶい黄褐色土塊・暗褐色土塊・焼土粒などを多く含む。固いがしまりは中程度である。

柱穴はP₇～P₆が支柱穴に相当する。いずれも柱痕跡を確認している（P₁は断面から柱痕跡がはずれた）。住居跡の規模に比してやや小さい目であるものの比較的掘り込みの深いものが多い。柱間寸法は各々芯々でP₂とP₃が2.95m、P₄とP₅が1.95m、P₇とP₈が2.5m、P₉とP₆が1.75mとなる。これら以外に柱痕跡があるものや柱穴の可能性のあるものはP₇・P₁₀～P₁₅・P₂₃・P₂₄・P₂₅がある。

炉は調査区内には無い。

出土遺物（第34図～第43図）

遺物の出土量は比較的多かったものの、土器は破片が多く、復原できるものは少ない。B層は層厚があるために結果的にB層の出土遺物が最も多い。

1は口縁部が外反し、口縁部と体部の境界にわずかな屈曲を有する深鉢である。口縁部に6単位の小波頂を有し、波頂には1条の刻目が施される。口縁部文様帯の下端を断面三角形の横位隆起線で区画し、波頂下には同様な隆起線によりC字形と逆C字形が対になり施文され、これらの間に粘土粘の貼付による小突起が上下2ヶ所につく。こうしたモチーフは橋状把手の退化形態とも考えられる。体部には燃糸文（ ℓ ）を施文する。

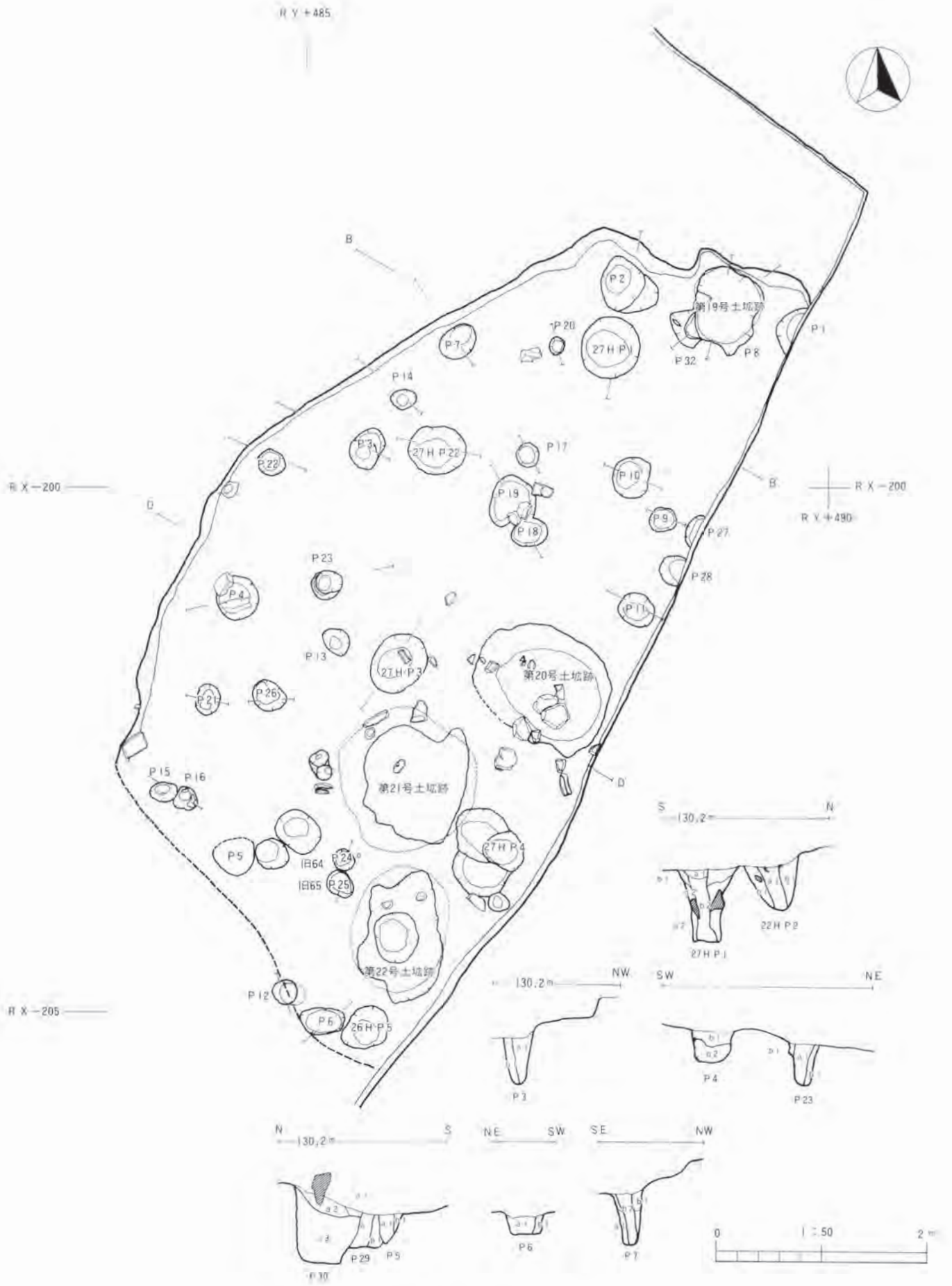
3・4・6は口縁部がやや外反する深鉢で、口縁部に4単位以上の波頂を有する。波頂には2条の刻目が施される。口縁部文様帯の下端を横位の沈線で区画し、内部に2条の平行沈線により波状の施文がみられる。体部には地文のみを施すようである。5・7も平行沈線により施文されるが文様帯下端の境界に連続刺突を伴う隆起線を使用するものである。モチーフは波状ではなく、C字形や横位S字形の類であろう。

重複関係

平面形

柱穴

土器



第32图 第22号竖穴住居跡(1)

2・8～34・37～43は隆起線上に連続刺突文を施すものである。2は口縁部に4単位の波頂を有する小形の深鉢で、波頂下より口縁部文様帯にかけて連続刺突文を伴う隆起線が施される。実測図では真直に復原したが、逆C字形となる可能性もあろう。体部にはR-L単節斜縄文を施す。2に類似するものは8～10などがある。5・18・39などは同様な施文技法により渦巻文や円文?を施すものである。29・42は縦位の隆起線が横位のものとは連絡しないことから、2に比してやや複雑なモチーフとなるようである。22は口縁部上端に連続刺突文を施す隆起線を配し、これより垂下した2条の沈線間に刺突文を充填するものである。他のものは口縁部文様帯下部に横位に施文するものである。

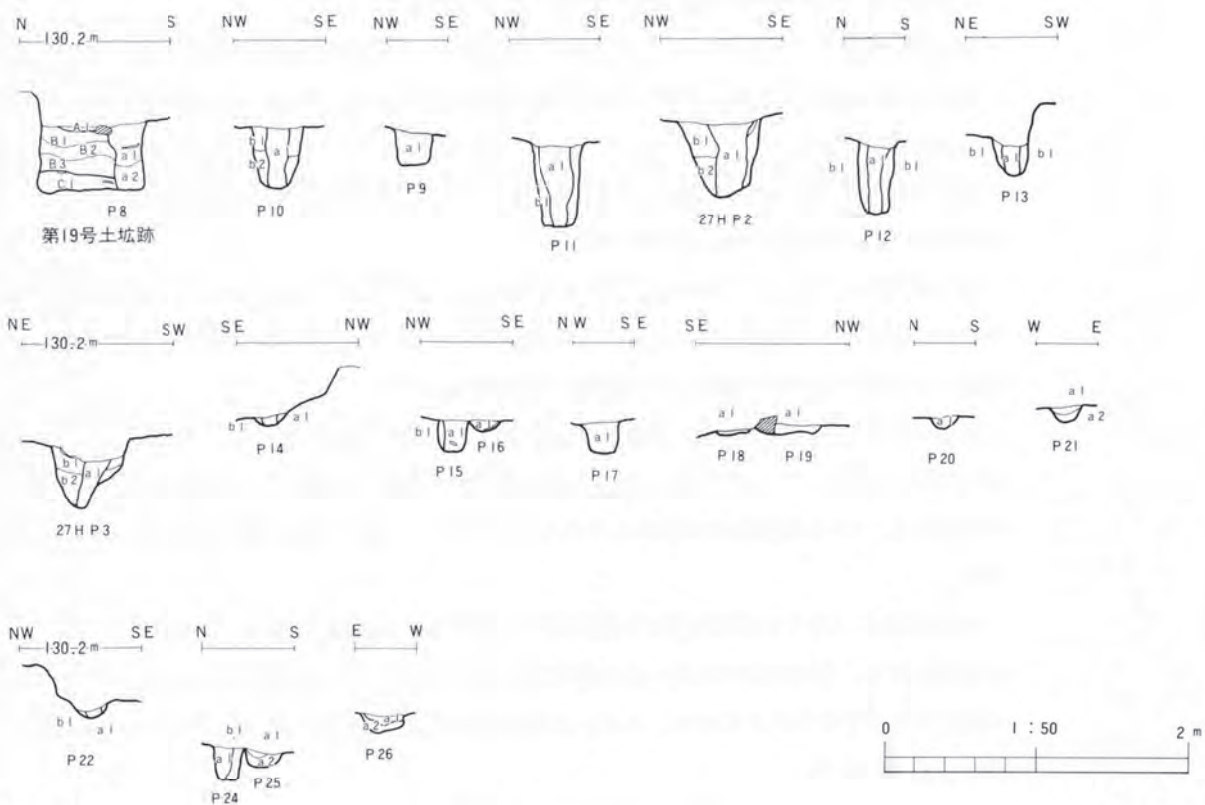
35も隆起線上に連続刺突文を施すものであるが、方形の区画文を施す。36は刺突を伴わない隆起線2条を横位に施すもので、体部と文様帯を区画する。

44～57は磨消技法によるものである。45～47・51はやや幅の狭い磨消帯を有するものである。57は曲線的なモチーフを施文する。48・49は口縁部に平行な無文帯を有するものである。

58・59は原体圧痕により施文されるものである。

60は小形の浅鉢で、口縁部文様帯に2条の沈線間を磨消した弧状文が6単位施される。沈線間には連続刺突文が施されるが、弧状文の連結部のものがより大きい。

62～64は器面を研磨する土器で、器形は63・64よりつぼ形を呈するものと思われる。62はレリーフ的な施文がみられる。



第33図 第22号竪穴住居跡(2)

61も無文の土器であるが器面の整形はやや粗である。65・66は小形の無文土器である。器面の整形がやや粗雑であるために粘土紐の接合部分が器面にあらわれている。

67は体部にやや膨らみを持つと思われる深鉢の体部下半で、比較的良く整形されている。

68・69は無節(ℓ)を地文とするもの。70・75は単節斜縄文を施すものである。70は口縁部がわずかに外反するものと、78のように体部から口縁部にかけてほぼ真直に立ち上がるものがある。72、76～78は通常の撚糸文(ℓ)を施すもの。74は網目状撚糸文を施すもの。71はこれらとやや異なる原体を使用するものである。

79～85は櫛目文を施す深鉢である。器形は79・80のように体部上半に膨らみを持ち、口縁部がわずかに外反気味になるものと、85のように体部から口縁部にかけて直線的に外傾するものがある。また、80は口縁部に刻目を有する波頂を持つ。79・83～85はやや密な櫛目文を縦位に施すもの。80～82はやや粗い櫛目文を格子目状に施す。

底部の圧痕は、65・66が木葉痕、67・68・77・80が網代痕である。

86は石錐で、機能部へはやや密な調整がみられるものの基部へは全く手がつけられていない。

87～92は石鏃で、いずれも無柄である。87は凸基で、側縁部が膨らむ。両面に主要剥離面を残す。90は平基で、二等辺三角形を呈する。背面に主要剥離面を残し、1側縁をほとんど調整していない。他のものは凹基であるが、側縁の膨らむものと直線的なものの2種がある。92も背面の1側縁をほとんど調整していない。

93はピエス・エスキューイでやや幅が狭い。上下両端からの加撃による。

94～96・98～102は削器である。96は側縁を中心に調整されるもので、基的や先端部へはほとんど手をつけられていないために削器とした。100は不整形を呈する剥片の打面を除く3辺を調整するものである。102はやや肉厚で三日月形を呈する。ノッチかと思われる。他のものは不整形剥片の側縁部を調整して刃部としたものである。

97は搔器である。1側縁から下辺にかけて調整され、下辺が搔器様の刃部となる。

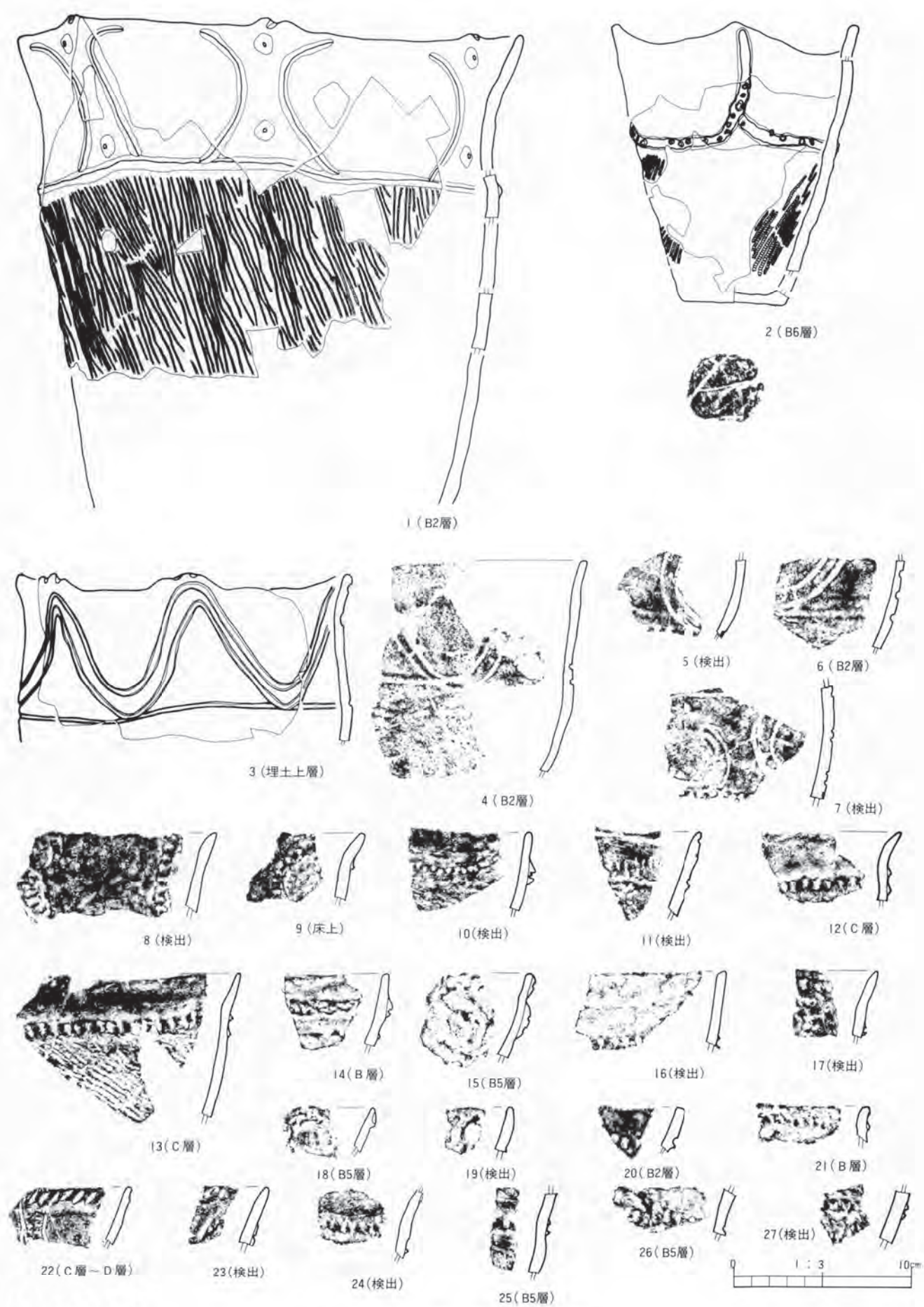
101は石剣か石棒と思われる破片の1側縁に剥離を有するが、利器として使用されたものかどうかは疑わしい。

103～105は使用痕のある剥片で、特に刃部を作り出さずに使用するもので、側縁部には使用時のものと思われる微細な剥離がみられる。

106は黒曜石で、直径3 cm程の円礫を打ち割ったものである。1側縁に小さな剥離がみられるものの利器として使用されたものかどうかは疑わしい。ただし、この程度の大きさの円礫を母岩として剥片を得る技法の存在が推察され興味深い。

113～120は磨製石斧である。113は欠損後に敲石として再利用しており、上下両端に敲打痕と剥離がみられる。114も刃部方向の欠損面と両側縁に磨面があるが、再利用を目的としたものであろう。115も欠損後の剥離がみられるものである。118～120は敲打成形時のものと思われる。

121は裏面に大きく自然面を残す打製石斧で、従来は早期や前期といった時期に伴伴することで知られる。本住居跡の床面～埋土遺物に伴うものかどうかは不明である。裏面の側縁部への調整は刃部を作り出すものか、あるいは着柄のための基部調整の類であるのか、今後、再検討が必要であろう。



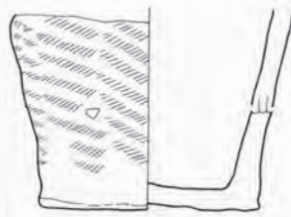
第34図 第22号竪穴住居跡出土遺物(1)



第35図 第22号竖穴住居跡出土遺物(2)



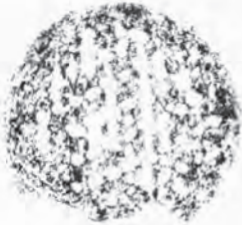
67(B層)



68(B2層)



69(B2層)



70層(B5層)



71(検出)



72(C層)



73(B層)



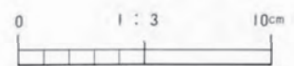
74(B1層)



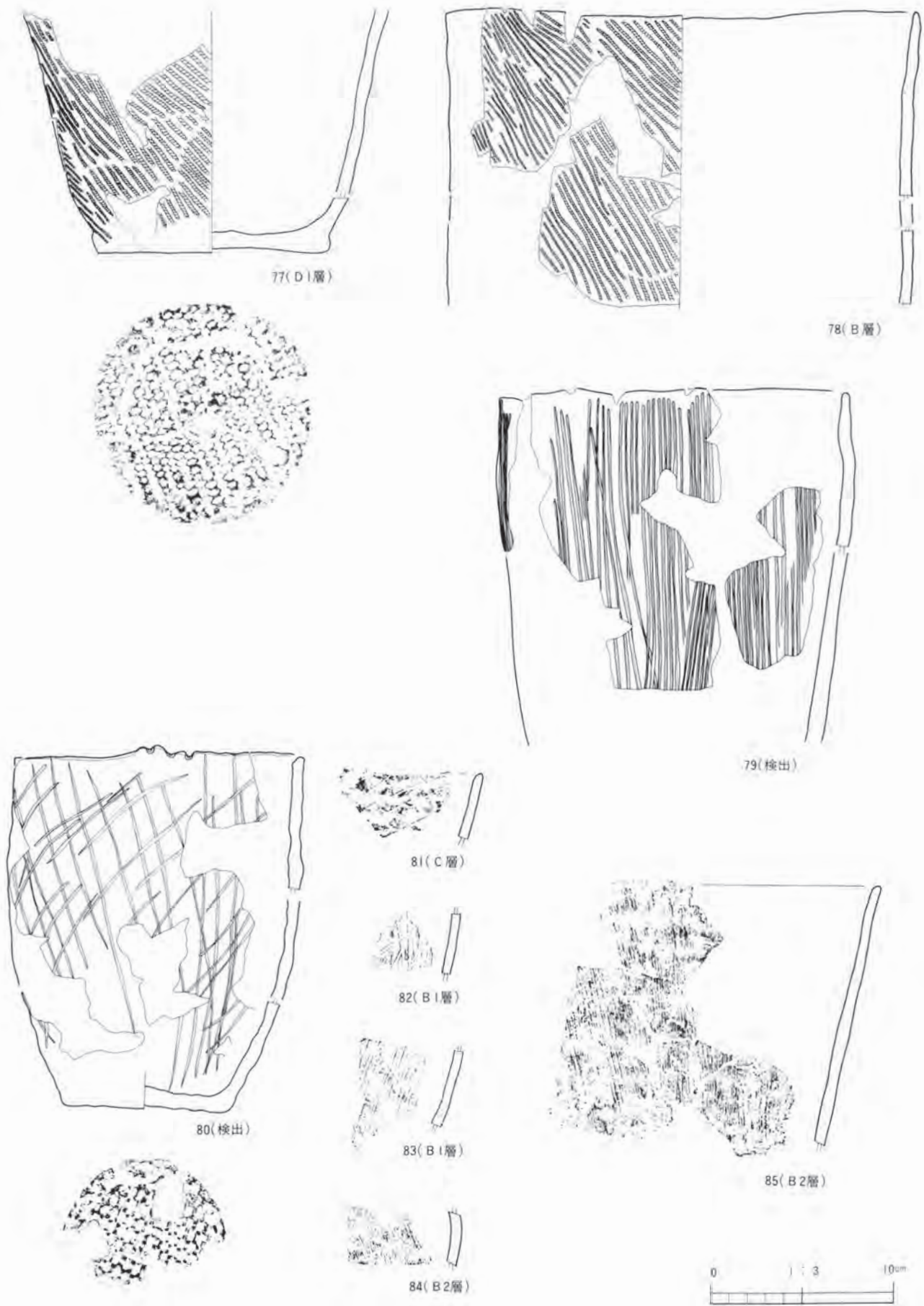
75(B層)



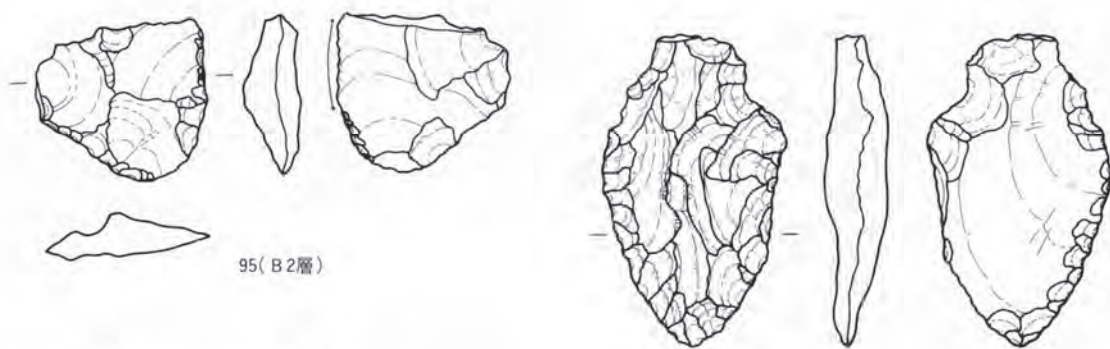
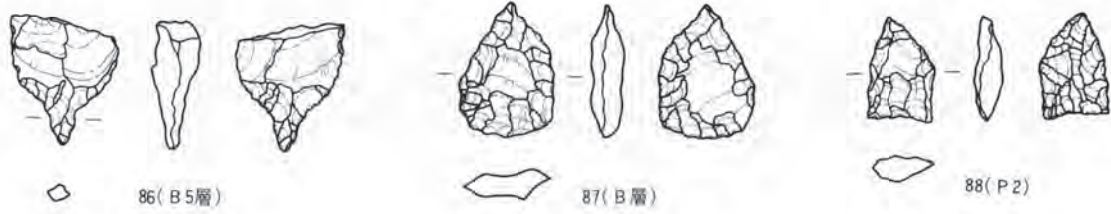
76(B5層)



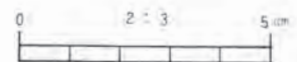
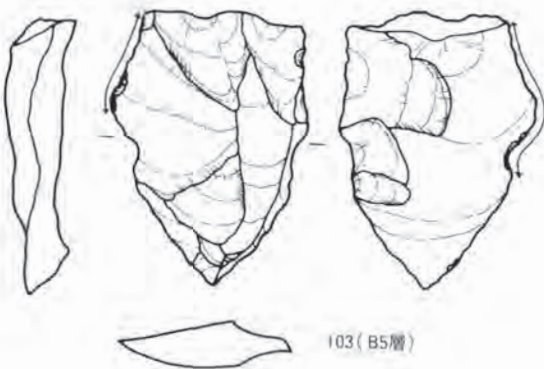
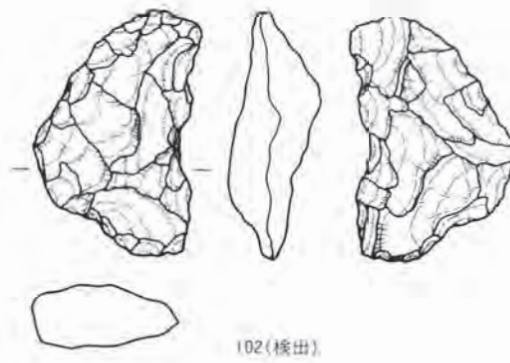
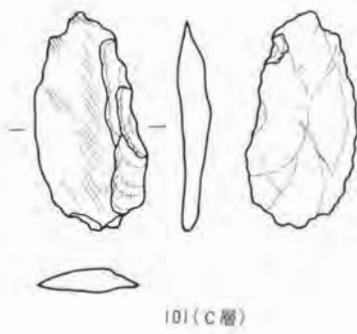
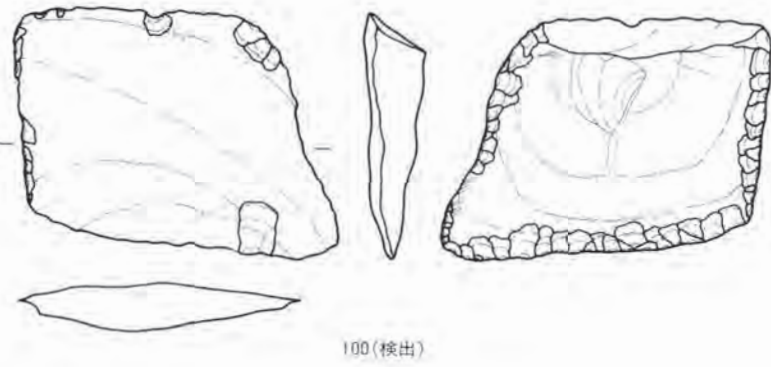
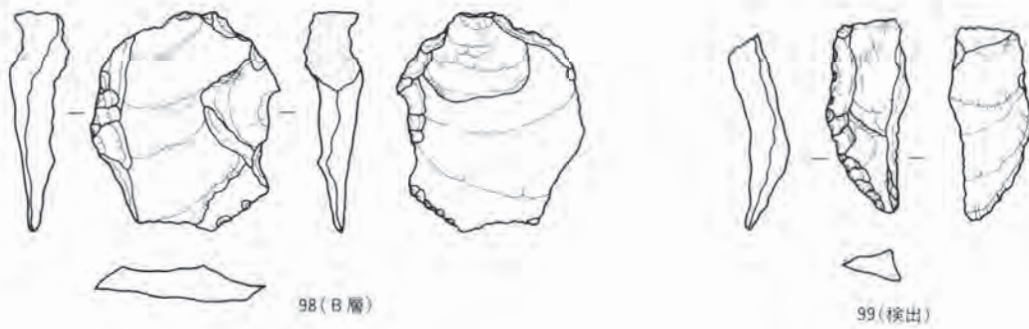
第36図 第22号豎穴住居跡出土遺物(3)



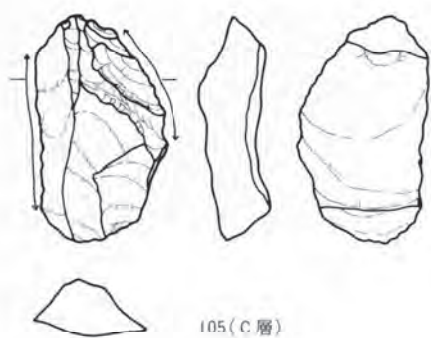
第37図 第22号竖穴住居跡出土遺物(4)



第38図 第22号竪穴住居跡出土遺物(5)



第39図 第22号竪穴住居跡出土遺物(6)



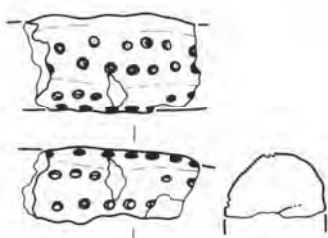
105 (C層)



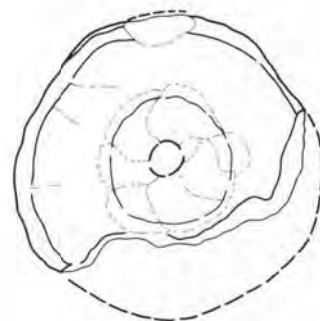
106 (検出)



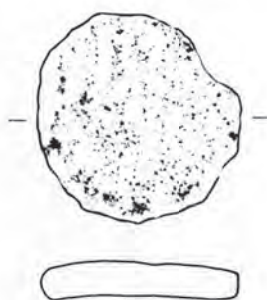
107 (E1層)



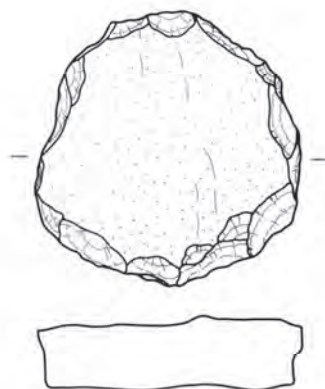
108 (B5層)



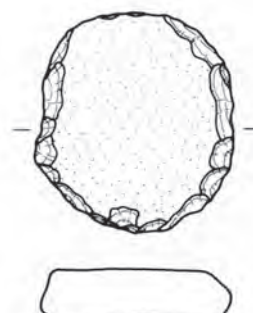
109 (床面)



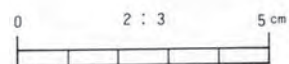
110 (B2層)



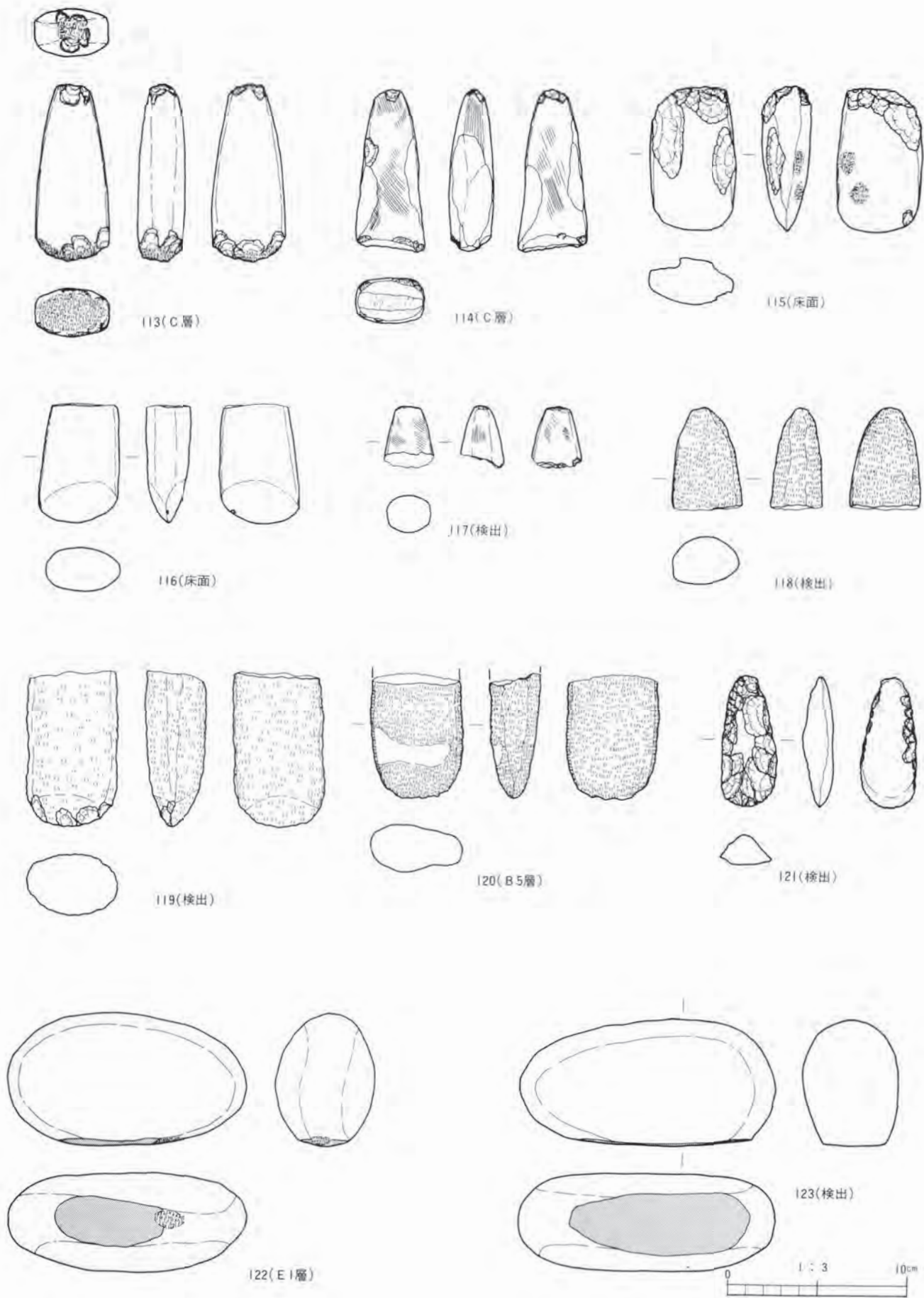
111 (B2層)



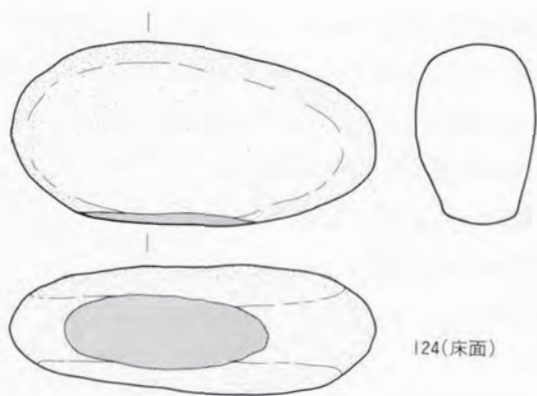
112 (B層)



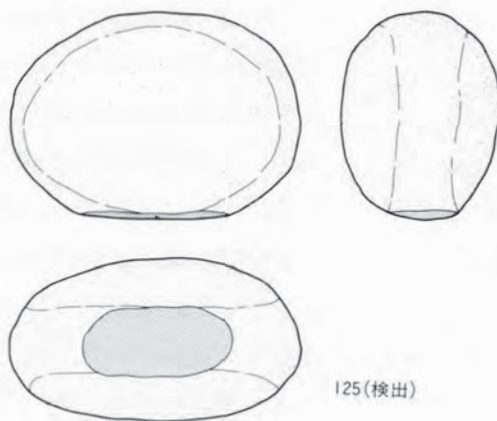
第40図 第22号竪穴住居跡出土遺物(7)



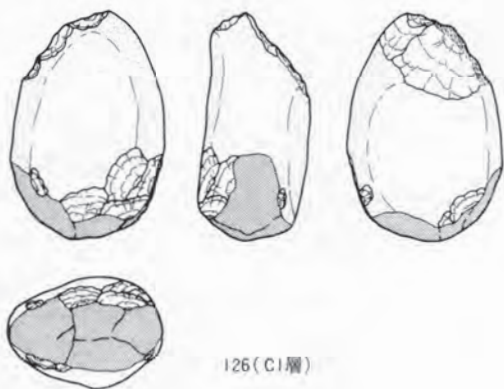
第41図 第22号竖穴住居跡出土遺物(8)



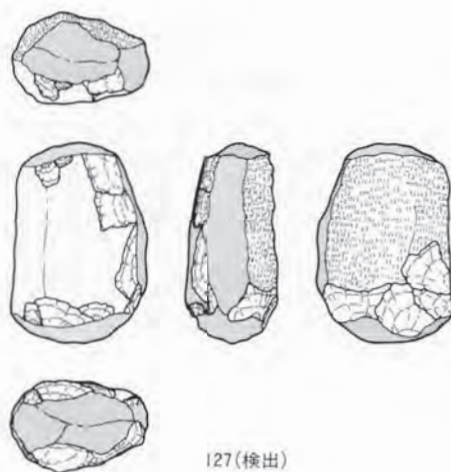
124(床面)



125(検出)



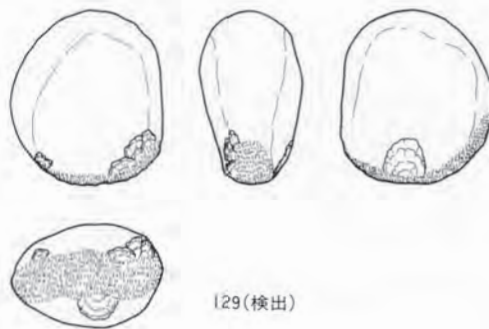
126(C1層)



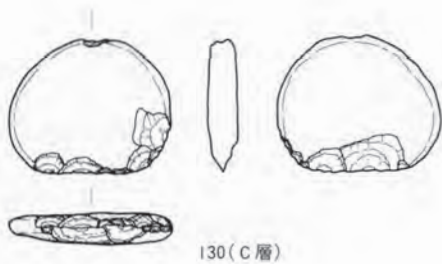
127(検出)



128(B層)



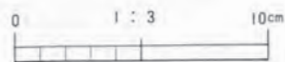
129(検出)



130(C層)



131(検出)



第42図 第22号竪穴住居跡出土遺物(9)

122～127は敲打磨石である。だ円形扁平礫の側縁部を使用するもの(122～125)と長軸方向の端部を使用するもの(126・127)の2種がある。前者は2.5～3.5cmとやや幅の広い機能磨石を有すもので、いずれも調整磨石は伴わない。後者は面取りをされたような機能磨面を有している。127は側縁部にも機能磨面を有するほか、裏面に敲打痕がみとめられる。

128・129は敲石である。扁平円礫を使用するもので、敲打痕とこれに伴う剥離がみられる。

130はやや薄い扁平円礫に剥離を施すもので用途は不明である。

131・132は凹石である。131は両面に使用痕がみられる。132は片面に4個の使用痕を持ち、側縁部に幅5mmほどの溝状の使用痕を有する。

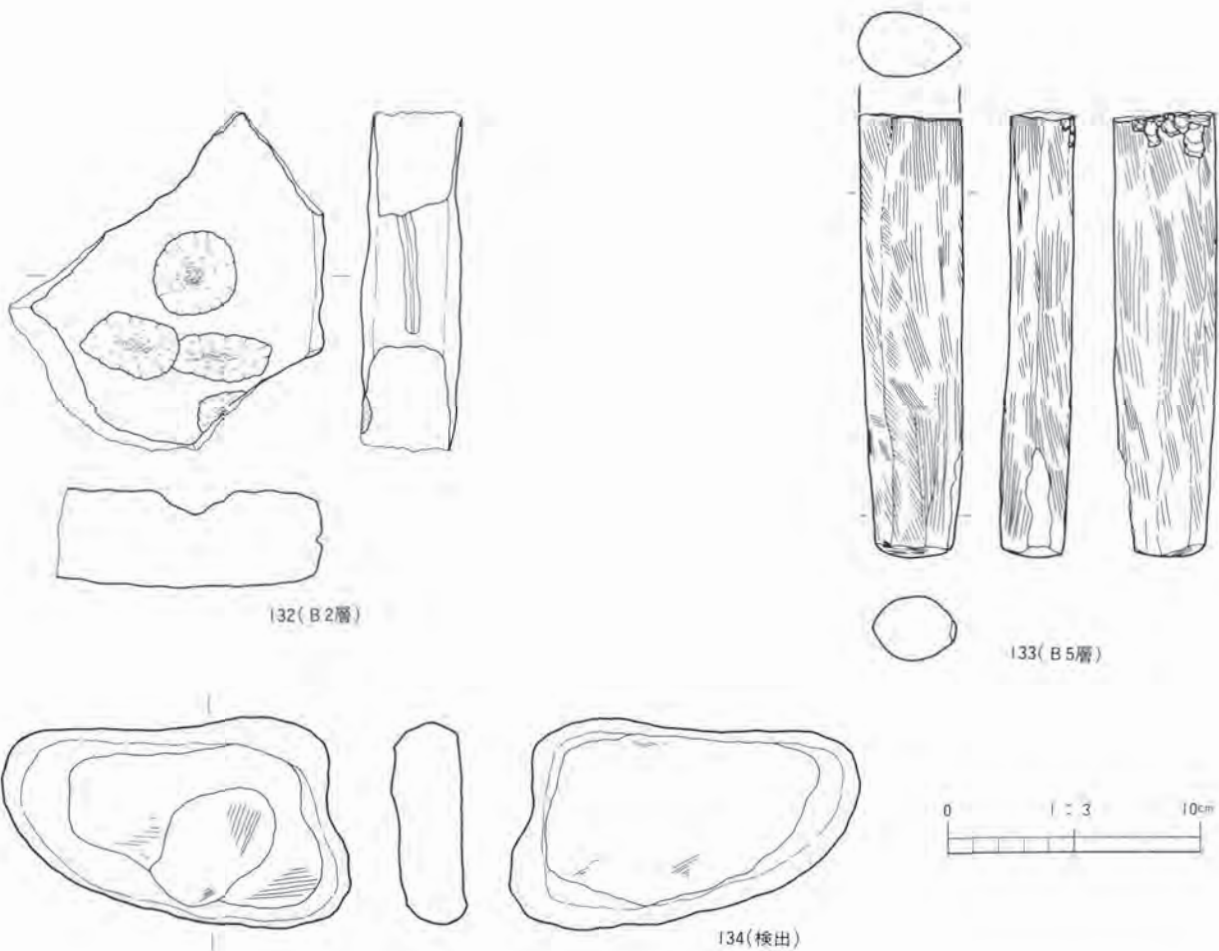
134はやや小形ではあるが石皿である。両面ともに使用され、凹んでいる。

土製品

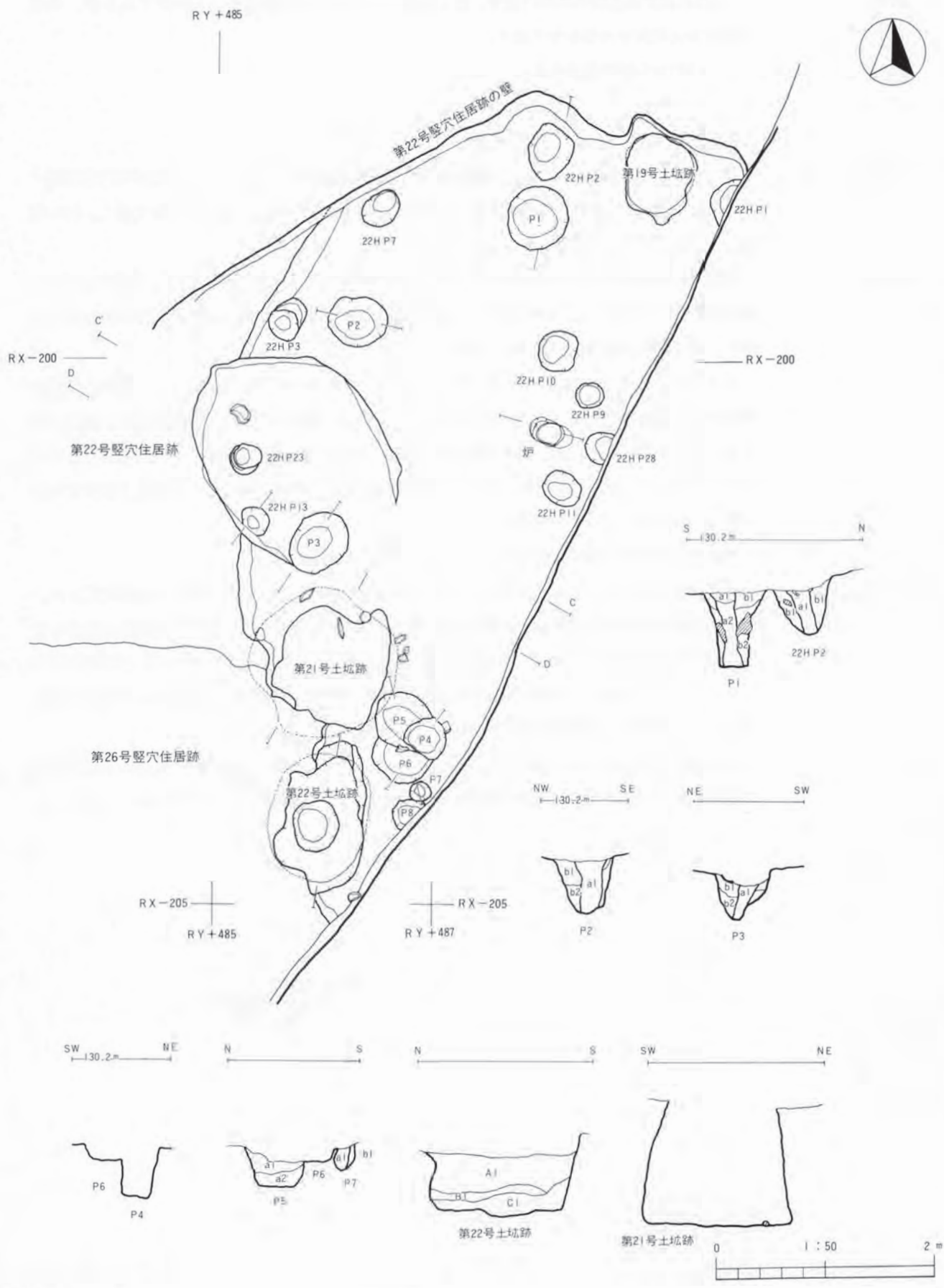
107・108は上偶破片である。107は脚部片であるが、左足であろう。裏面がわずかに凹んでいる。整形はやや粗である。108は肩～腕部片であると思われる。比較的良く整形されている。竹管による小さな刺突列が4条みられる。

109はキノコ形土製品であり、ほぼ全容が判明した。笠部は半球形を呈し、直径は6cm程度である。茎部は笠部の内面より先端部にかけてわずかに細くなり、先端部は丸味を帯びる。比較的良く整形されているが、欠損部付近はやや焼成不良である。

110は土製円盤である。



第43図 第22号竪穴住居跡出土遺物(II)



第44図 第27号竖穴住居跡

石製品

133は石刀又は石剣の基部付近で、良く整形されている。基部付近は不明瞭であるが、欠損部付近では明瞭な刃部を作り出す。

111・112は石製円盤である。

重複関係

第27号竪穴住居跡（第22図・第23図・第44図・第45図）

第5次調査区東端部に位置し、第22号竪穴住居跡の床面下に検出した。第22号竪穴住居跡・第26号竪穴住居跡・第19号土坑跡～第22号土坑跡に切られる。残存状態が極めて悪く、特に北端部は第22号竪穴住居跡構築時に削平されている。

平面形

平面形は不整形円形又はだ円形を呈するものと思われる。規模は不明であり、東西に3.6m、南北に6.6mを検出した。壁は直壁で、最深鉢では0.2mほどである。主軸方向は不明であるものの、北よりやや東に扁するようである。

埋土はA層・B層・C層に大別される。A層はやや明るい暗褐色粘質土とし、暗褐色土塊や褐色土塊を含む。固いがしまりは中程度である。B層は暗褐色粘質土～黒褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。炭化物粒を比較的多く含む。B層は焼土層で、比較的良く焼けている。やや固くしまりは中程度である。C層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含む。やや柔らかくしまりが少ない。

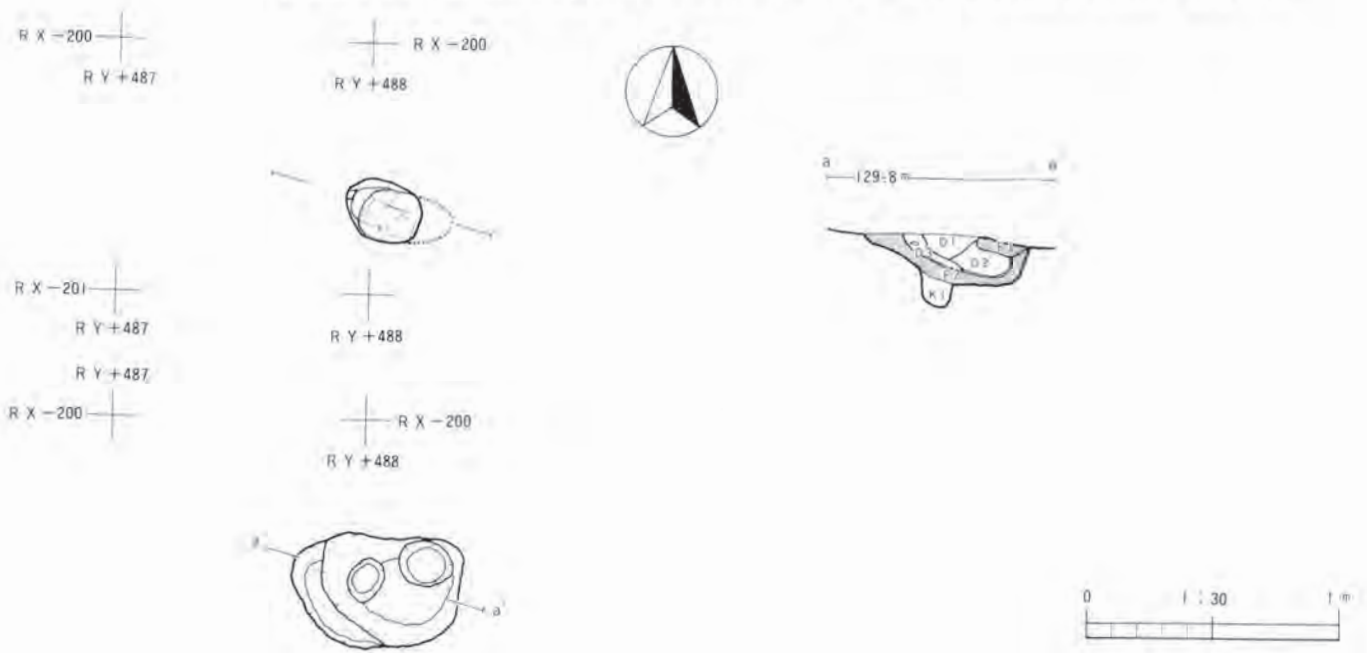
床面はほぼ平坦で固い。貼床はみられない。周溝もみられない。

柱 穴

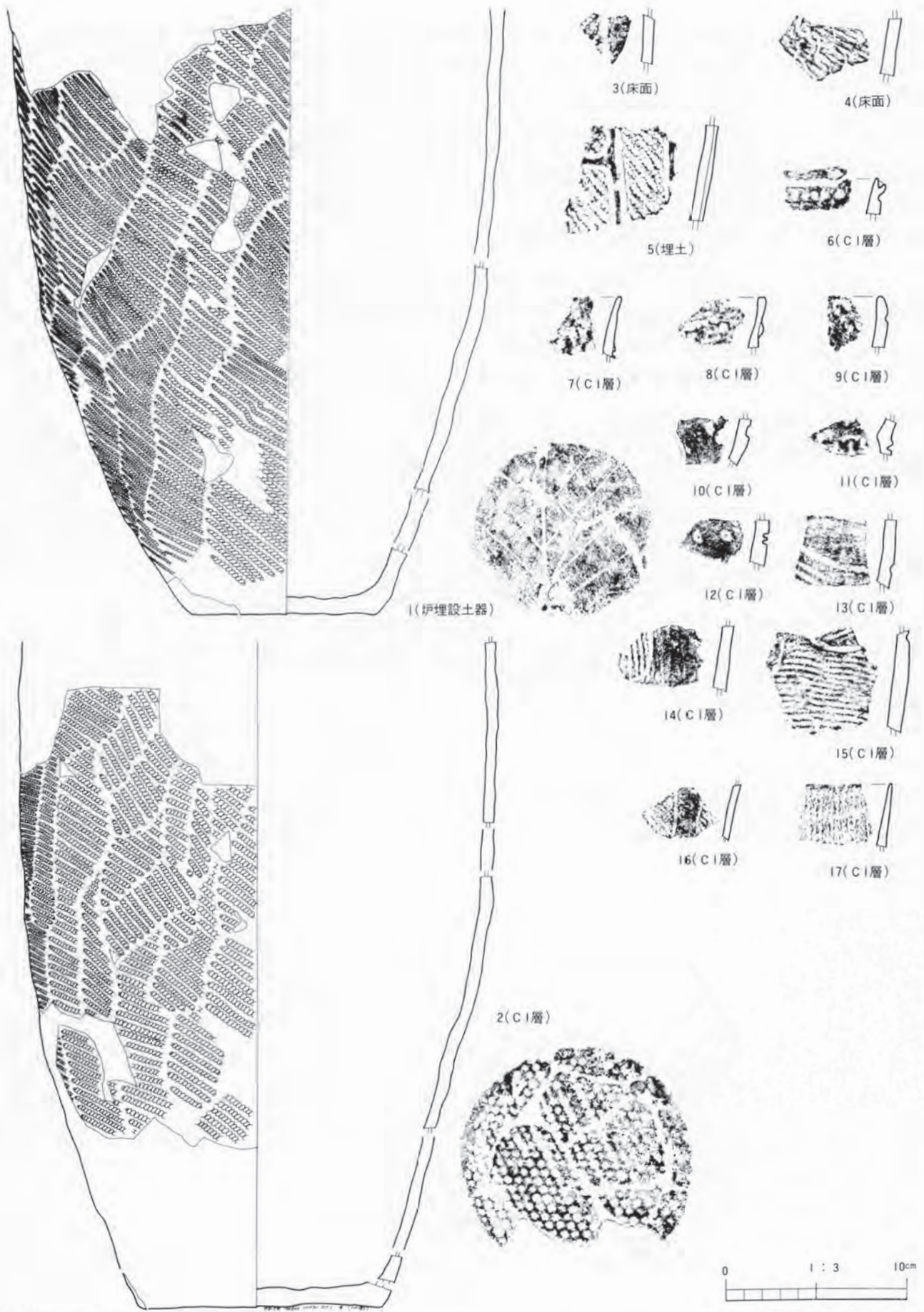
柱穴はP₁～P₄が主柱穴に相当する。いずれも柱痕跡があり、掘り方の規模も比較的大きい。P₃は調査時の手違いで断面図を実測する前に掘り上げてしまったが、やはり柱痕跡を確認している。柱間寸法は各々芯々で、P₁とP₂が2.0m、P₂とP₃が2.05m、P₃とP₄が2.05mとほぼ等間隔になっている。おそらく調査区外にあと4口の主柱穴があり、8角形の配置をとるものと思われる。これら以外に柱痕跡を有するものはP₅があるが、小規模である。

炉

炉は斜位土器埋設炉で、床面中央よりわずかに北側に扁する。ほぼ東西方向に埋設し、西側に開口する。D層は埋設土器内の堆積土で、D層が固くややしまりがあるものの、固さ、し



第45図 第27号竪穴住居跡・炉



第46図 第27号竖穴住居跡出土遺物(1)

まりともに中程度である。いずれも褐色粘質土を基本土とし、明黄褐色土塊や焼土塊を含む。人為的な堆積のようである。炉の構築方法は、東西0.65m、南北0.45m、深さ0.2mを計るだ円形の掘り方にK層、F層をつめながら土器を埋設している。F層は焼土層で、特にF層が良く焼け、固くしまっている。F層は土器を通して熱浸透を受けたためか、やや焼け具合が弱い。K層は構築土層で、褐色粘質土を基本土とし、焼土粒を含む。やや柔らかく、ややしまりが無い。

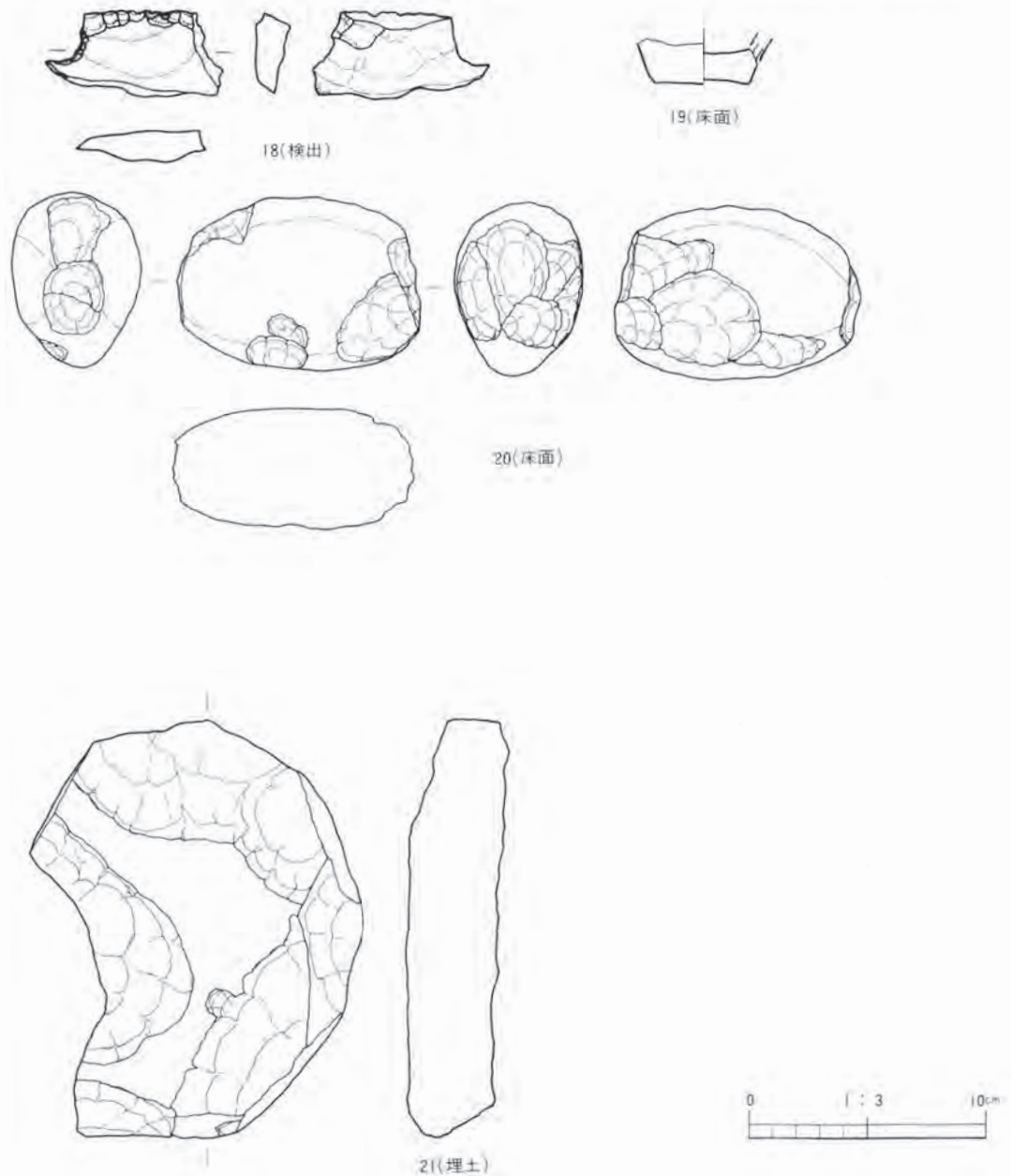
出土遺物（第46図・第47図）

遺構の保存状態が悪いこともあり出土遺物は少ない。

土器

1は炉に埋設された土器で、やや長胴の深鉢の体部下半である。体部にL-R単節縄文を施す。底部の圧痕は木葉痕である。

3は磨消技法により施文されるもの。4は綾絡文のみられるもの。5は隆沈線により施文さ



第47図 第27号竪穴住居跡出土遺物2)

れるものである。

8は側縁と打面の縁辺部に調整されるもので、削器かと思われる。

7はミニチュア上器の底部である。

石器
土製品

第26号竪穴住居跡（第22図・第23図・第48図～第50図）

第5次調査区東端部に位置する。第22号竪穴住居跡・第24号竪穴住居跡・第25号竪穴住居跡に切れ、第27号竪穴住居跡・第28号竪穴住居跡・第23号土坑跡を切る。

重複関係

平面形は不整形を呈し、規模は、東西5.6m以上、南北6.0mを計る。壁は直壁で、壁高は0.3mを計る。主軸方向は北からわずかに東側へ偏するようである。

平面形

埋土はA層、B層、C層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。A₂層はA₁層に比してやや暗い色調を呈し固く、ややしまっている。B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含んでいる。B₁層はB₂層に比してやや明るい色調を呈し、固く、ややしまっている。C層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをわずかに含む。やや柔らかく、しまりが無い。

床面はほぼ平坦で固い。貼床は第23号土坑跡上面を覆う（K₁層）。周溝はみられない。

柱穴は、P₁～P₉が主柱穴に相当する。いずれも柱痕跡がある。P₁は他の柱痕跡同様にしまりのない暗褐色土が堆積するものの、掘り方の埋土が判然としなかった。柱間寸法は各々芯々で、P₁とP₂が1.95m、P₂とP₃が1.95m、P₃とP₄が1.85m、P₅とP₆が2.0mとほぼ等間隔になる。おそらく、調査区外に1口の主柱穴があり、六角形の配置をとるものと思われる。これら以外に柱痕跡を有するものや柱穴の可能性のあるものは、P₆～P₁₀・P₂₂・P₂₆・P₃₄・P₃₇・P₁₁～P₁₇などがある。規模にややばらつきがある。重複する他の住居跡のものを含んでいる可能性は大きい。柱穴以外にはP₂₉の上部に立石状の礫が埋設されており特筆される。

柱穴

炉は地床炉を連続させる複式炉で、浅いくぼみが連続している。I部とII部の境界に集中する礫は埋設ではなく、炉床上に置かれたような状態となる。炉石の抜きとり穴は確認できなかった。

炉

炉の構築状況は、I部・IIa部・IIb部を一括した掘り方を掘り込み、K層、F層をつめる。K層は構築上で褐色粘質土を基本土とする。F層とも構築土層であるが、II部のみに堆積している。熱浸透を受け赤変しており、特に上半部での熱浸透が著しい。やや柔らかく、しまりは中程である。F層は焼土層（炉床）であり、焼成を受けよく固くしまっている。I部～II部に共通する層で、これらが一括して焼成を受けたものと思われる。

出土遺物（第51図～第54図）

遺物の出土量はあまり多くはない。特に土器と剥片石器の出土量が少なかった。

1は小形の深鉢で、沈線と楔形の刺突で施文されるのがモチーフの全容は不明である。

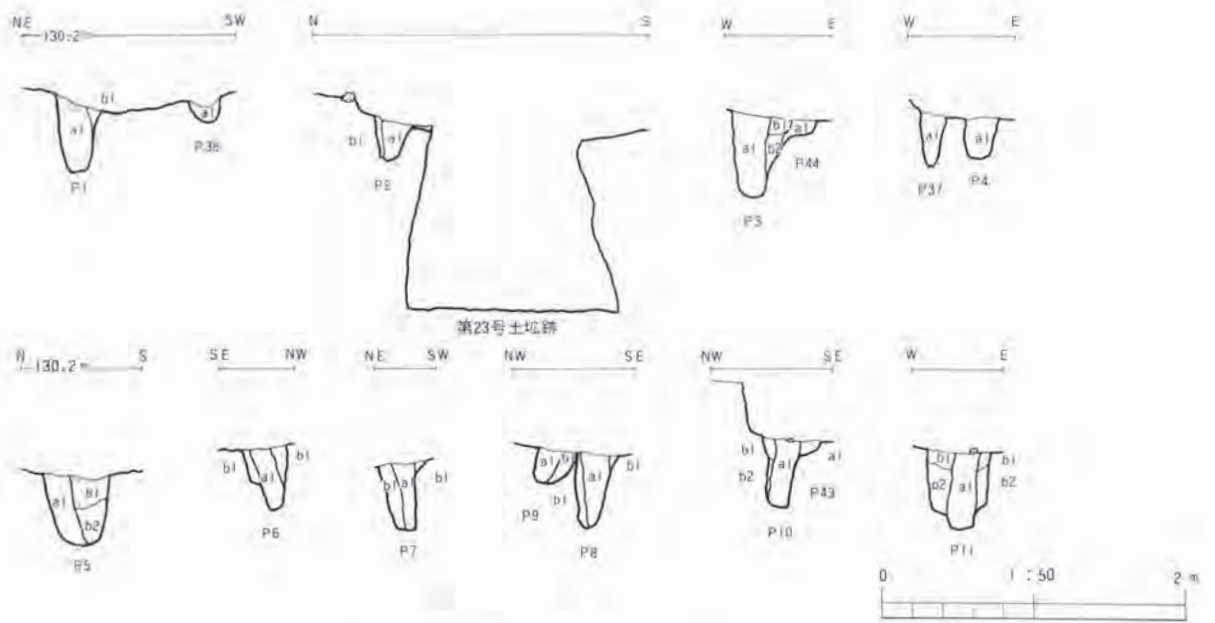
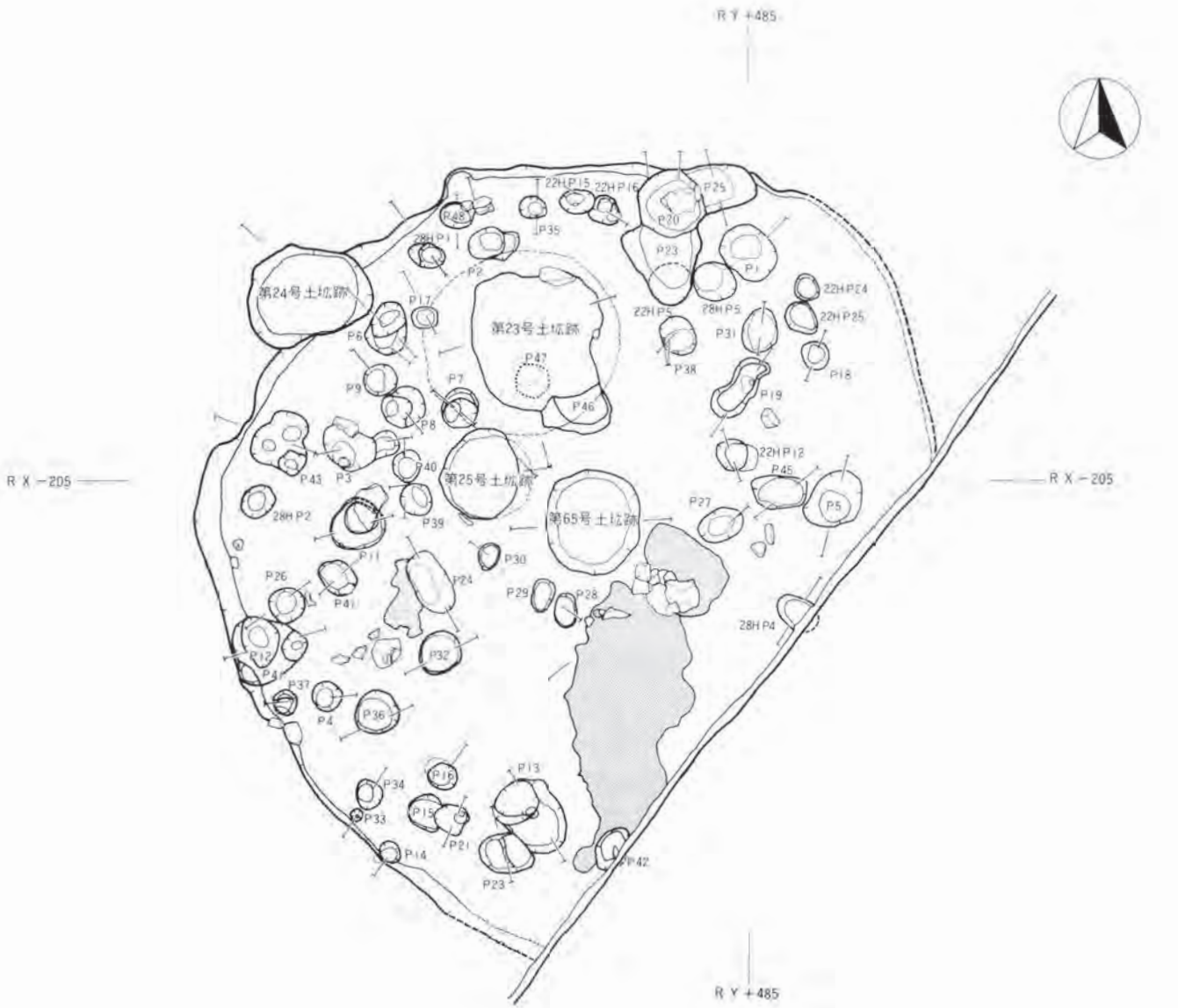
土器

3～16は連続刺突を伴う隆起線により施文されるもので、全体のモチーフは不明である。

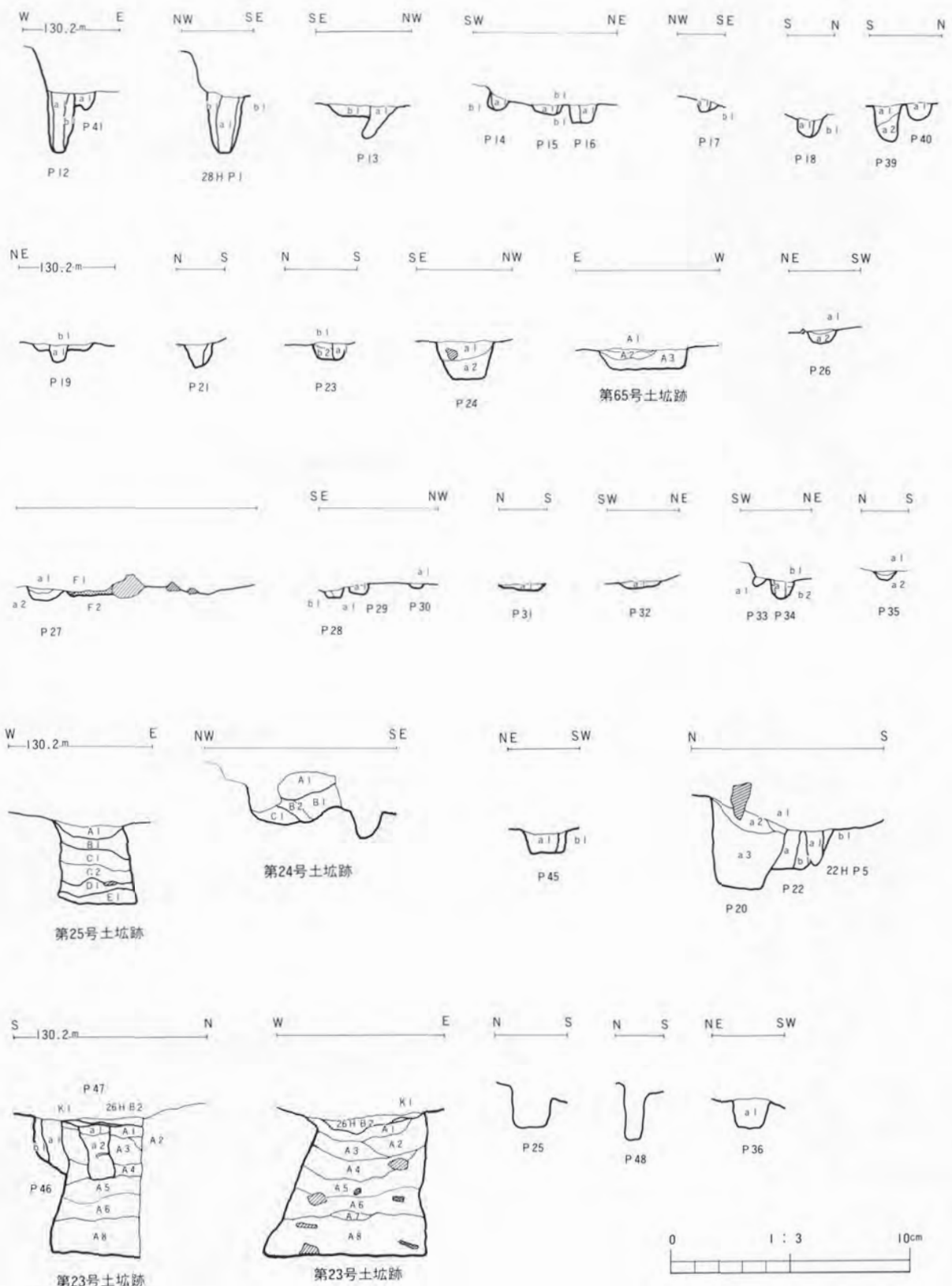
5は縦位に施文されるもの。8は弧状に施文されるものである。

17～20は磨消技法により施文されるものである。21は無文の小形土器である。22は原体圧痕文を施すものである。

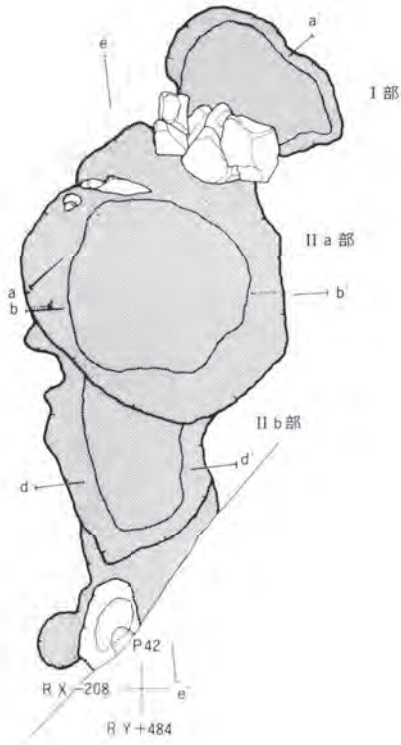
2・23～25は隆起線により施文されるもので、2・23・24は口縁部文様帯上端に施される隆



第48图 第26号竖穴住居跡(1)



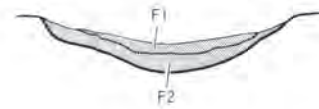
第49图 第26号竖穴住居迹(2)



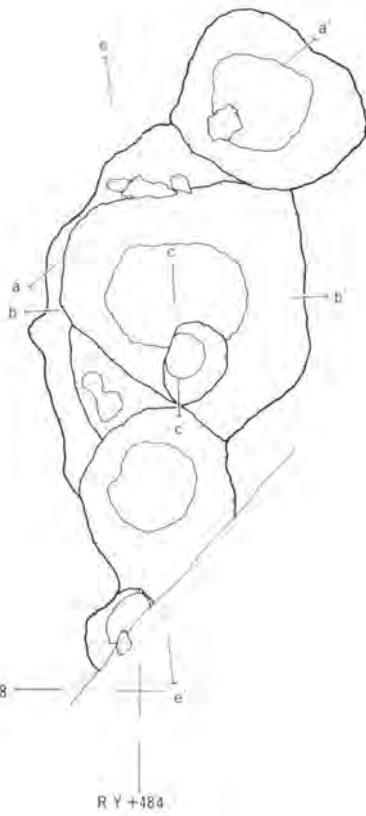
a — 130.2 m — a



b — 130.2 m — b



c — 130.2 m — c d — d



e — 130.2 m — e

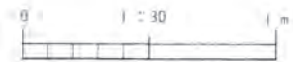
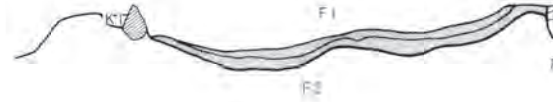


a1

a2

a3

P42



第50図 第26号竪穴住居跡・炉



第51図 第26号竖穴住居跡出土遺物(1)

石器

沈線に連続刺突が伴う。

26・27・29は単節斜縄文を施すもので、いずれも口縁部を折り返す。30は無節(ℓ)を地文とする。28は無文の深鉢。31・32は撚糸を地文とする。

底部の圧痕は、1・30が網代痕、29が木葉痕である。

33・34は石鏃でいずれも無柄である。33は凹基で両面に主要剥離面を残す。裏面の基部調整は粗雑である。34は凸基でやや肉厚である。

35・36は削器である。形状、大きさともに不均一であるが、いずれも側縁部を調整して刃部としている。

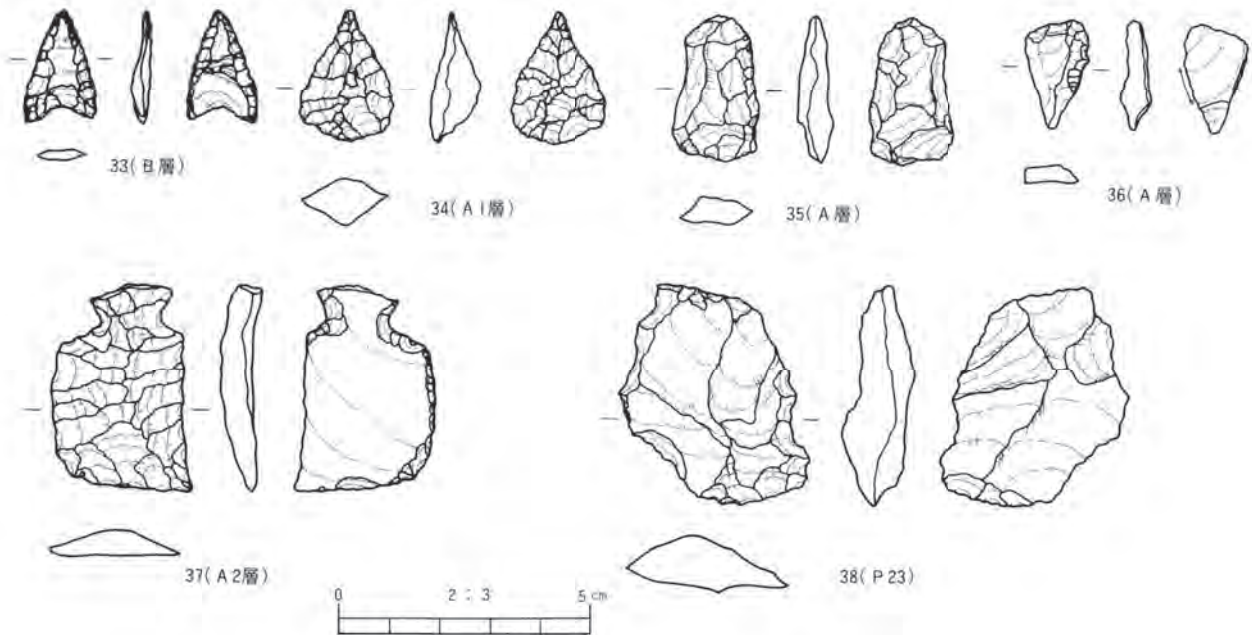
37は縦形石匙であるが側縁部が短かく、方形を呈する。比較的丁寧に調整されている。

38はやや大きな剥離により調整されている。不定形ではあるが搔器であろうか。

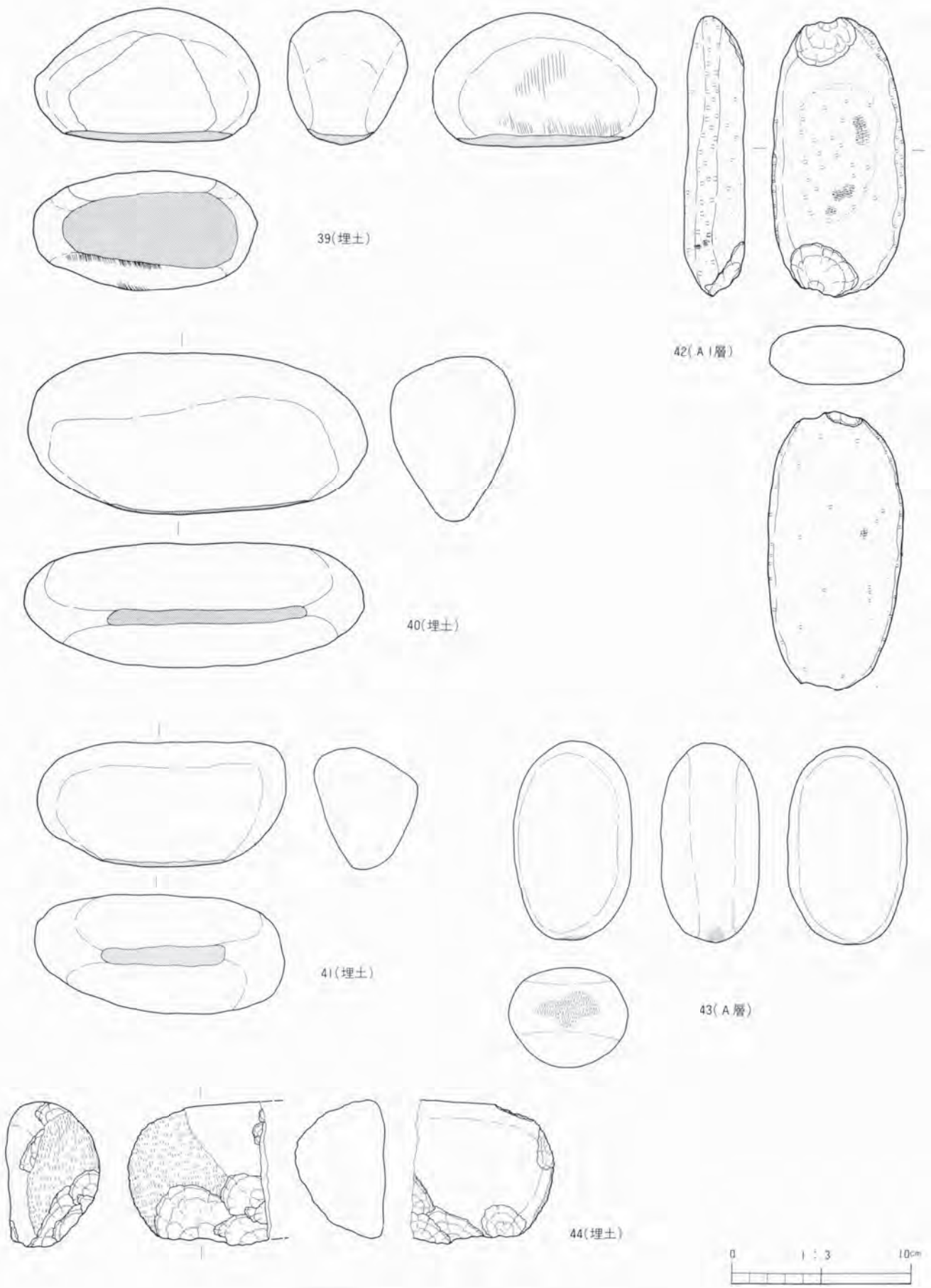
39～41は敲打磨石である。いずれもだ円形のやや肉厚な礫を使用している。39は幅4.2cmとやや広い機能磨面を有する。機能磨面と接する面にも磨面や擦痕が認められるものの調整磨面かどうかは不明である。一方、40・41はいずれも幅1cm未満の狭い機能磨面を有するものである。

42～44は敲石である。42はだ円形の扁平礫を使用する。両端部に剥離がみられるものの、敲打痕が集中するのは側縁と平坦面である。平坦面の敲打痕は集中するところもあり、台石状の機能も想定されるが、いずれもあまり使い込まれてはいない。形状からは礫石錘の可能性も指摘できる。43はやや肉厚のだ円形礫を使用するもので、一方の端部にのみ敲打痕がみられる。44は一方の側縁を、両面からやや大き目の剥離により調整する。しかし、敲打痕の集中するのは端部から平坦面にかけてである。

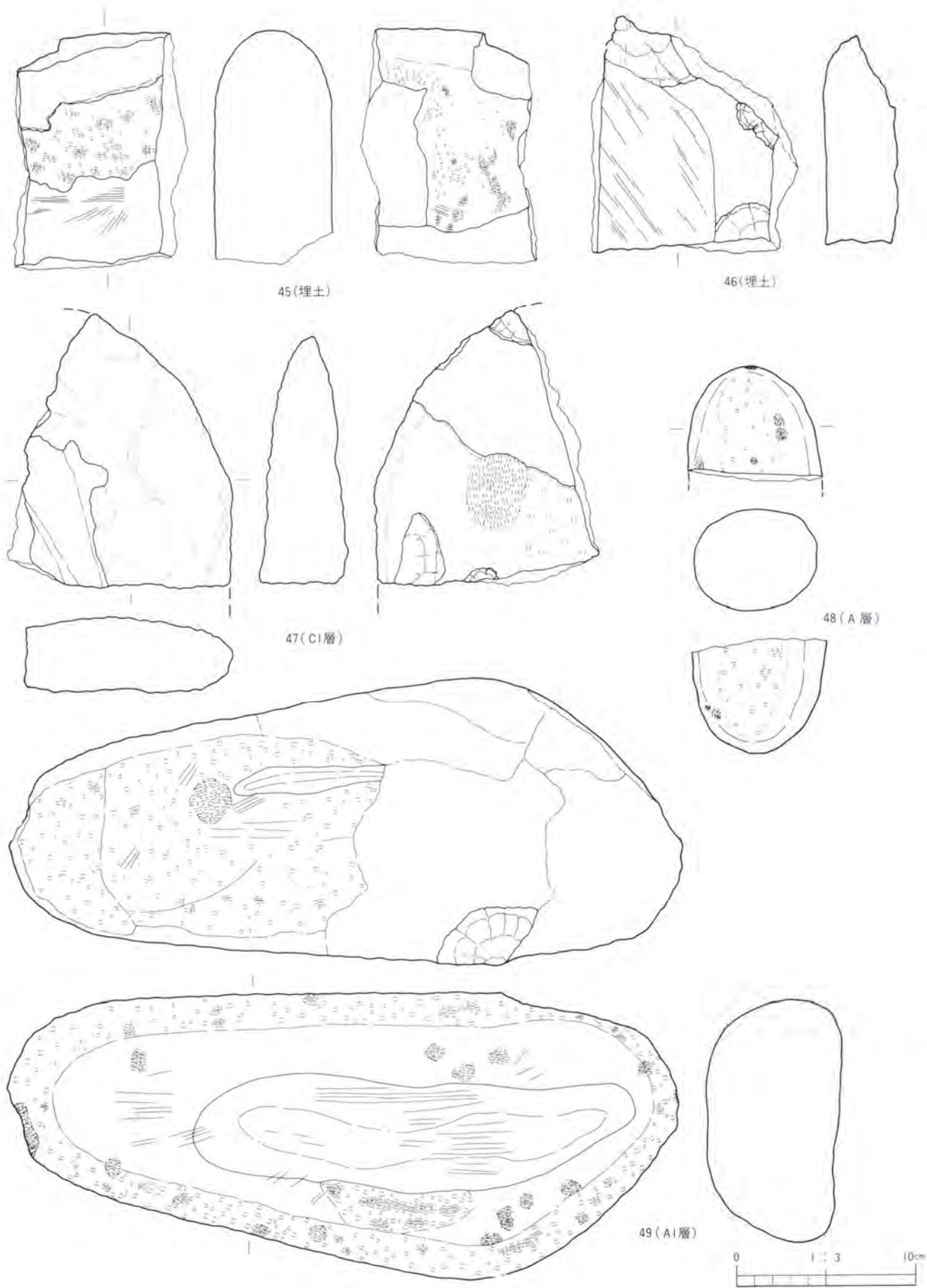
45～47・49は石皿である。49は両面を使用するもので、一方の面に幅6cm程の溝状を呈する使用痕を持つ。また、これの周辺にも磨面があり、擦痕や台石状の敲打痕が伴う。裏面にも溝状の使用痕を持つが幅1.5cmとやや狭い。やはり周辺に台石状の敲打痕などが伴う。45～47は



第52図 第26号竪穴住居跡出土遺物(2)



第53図 第26号竖穴住居跡出土遺物(3)



第54図 第26号竖穴住居跡出土遺物(4)

いずれも破片であるものやはり凹んだ使用痕を有し、敲打痕や擦痕を伴っている。

48はだ円形を呈するやや肉厚の礫を使用するもので、平坦面にややまばらな敲打痕を有する。敲石もしくは台石かと思われる。

第28号竪穴住居跡（第22図・第23図・第55図・第56図）

第5次調査区南端部に位置し、第26号竪穴住居跡・第29号竪穴住居跡に切られるため保存状態が極めて悪い。

平面形は不明である。規模は北西—南東方向で4.8m、北東—南西方向で1.3mが残るが、柱穴配置からは東西5.1m以上、南北5.8m以上になると思われる。壁は直壁で、壁高0.2mを計る。主軸方向は北よりやや東に偏するようである。

埋土はA層・B層・C層に大別される。A層（A層）はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。固さ、しまりとも中程度である。B層（B層）は暗褐色粘質土を基本土とし、やや暗い暗褐色土塊などを含む。固さ、しまりとも中程度である。C層（C層）は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊などを多く含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。

床面はほぼ平坦で、貼床は認められない。周溝も認められない。

柱穴はP₁～P₃が主柱穴に相当すると思われるが、大半が第26号竪穴住居跡の範囲内にあるためやや不確実である。いずれも柱痕跡を有する。P₁も同様であるが、調査中の不手際で断面を実測する前に掘り上げてしまった。柱間寸法は、P₁とP₂が2.25m、P₂とP₃が2.75m、P₁とP₃が2.1m、P₂とP₄が2.6mを計る。これらの他に柱痕跡を有するものや柱穴と思われるものはP₅とP₆がある。いずれもP₃の東にある。P₅は主柱穴となる可能性もある。これら以外はP₇～P₁₁のような浅い皿状のピットやP₁₂～P₁₅のような小ピットがある。

床面はほぼ平坦で固く、貼床は認められない。周溝も認められない。

炉は斜位土器埋設炉である。第26号竪穴住居跡に削平されるため、これ以外の付属施設の有無は不明である。土器内の堆積土はD層である。D₁層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。D₂層は黒褐色粘質土がわずかに焼成を受けて赤変した焼土層であるが、現地性がどうかは疑わしい。D₃層はやや暗い黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。いずれの層も柔らかくしまりが無い。F層は焼土層で、F層は焼成を受けてやや固くしまっている。F₁層は構築土が焼成により熱浸透を受けた層である。K₁層は構築土層で褐色粘質土を基本土とし混入土はほとんど含まない。構築方法は不整だ円形の掘り方を掘り下げた後、K層・F層をつめながら土器を埋設している。

出土遺物（第57図）

遺構の保存状態が悪いため出土遺物は少ない。P₆からはやや出土遺物が多く第56図4～8が出土している。

1は炉に埋設された深鉢で、口縁部を欠く。体部に燃糸文（r）を施し底部に網代痕を有する。

2は隆起線に沿って連続刺突文を施すものである。

3・4は磨消技法により施文されるもので、3は刺突文が伴う。

5～8は同一個体と思われるもので、燃糸文（r）を地文とする。

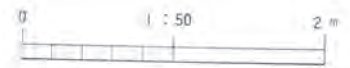
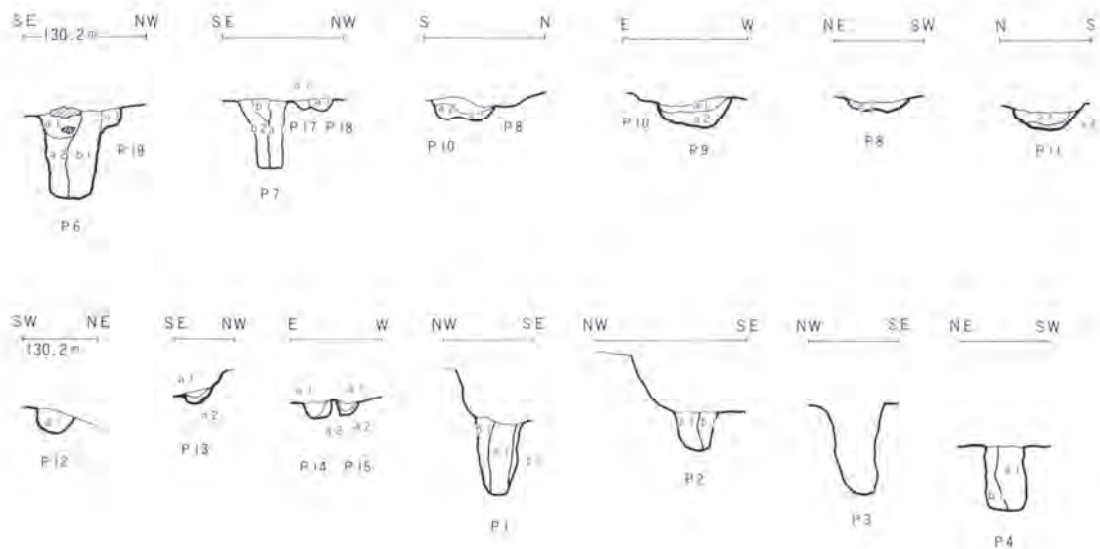
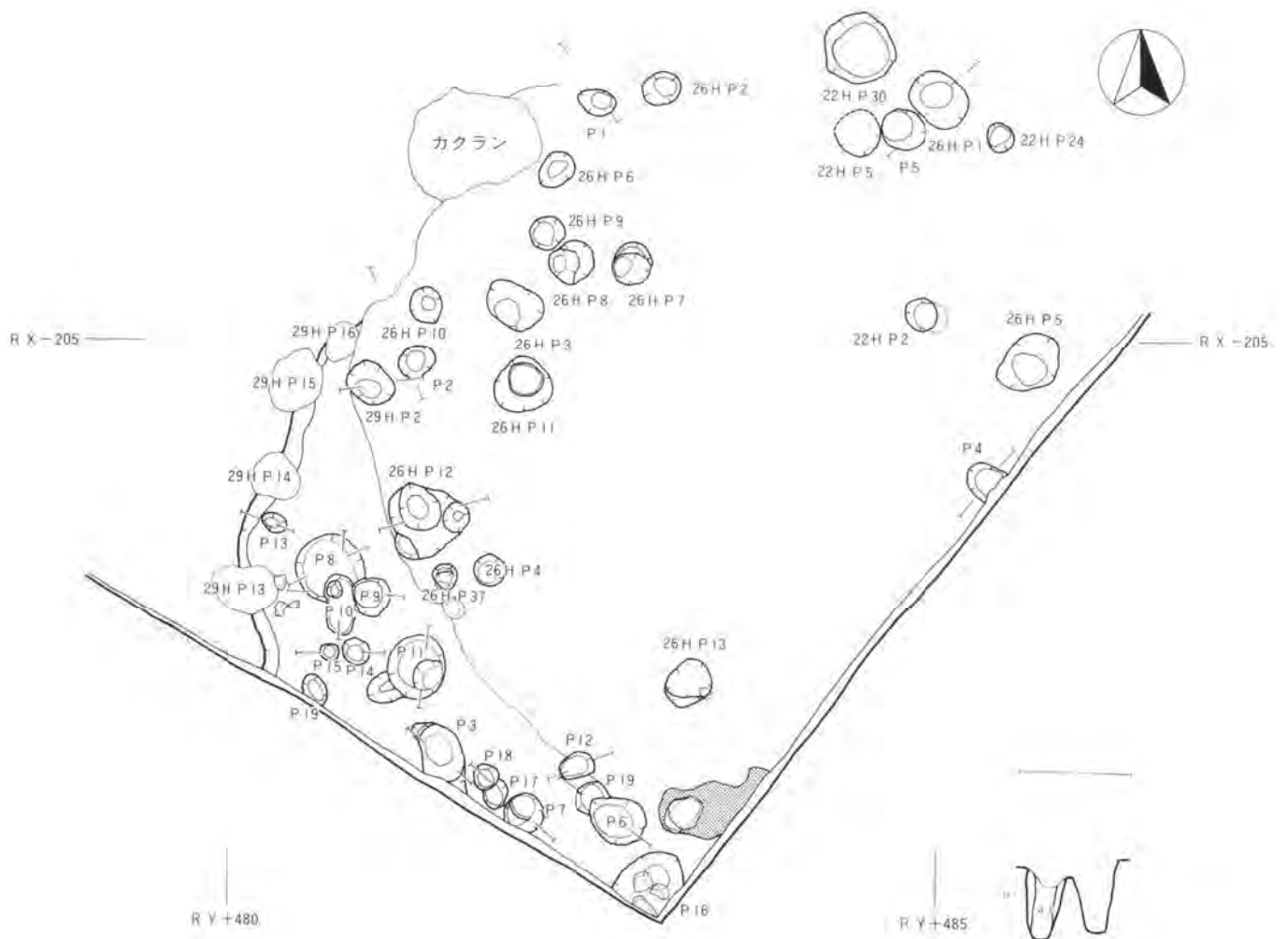
重複関係

平面形

柱穴

炉

土器



第55図 第28号竪穴住居跡

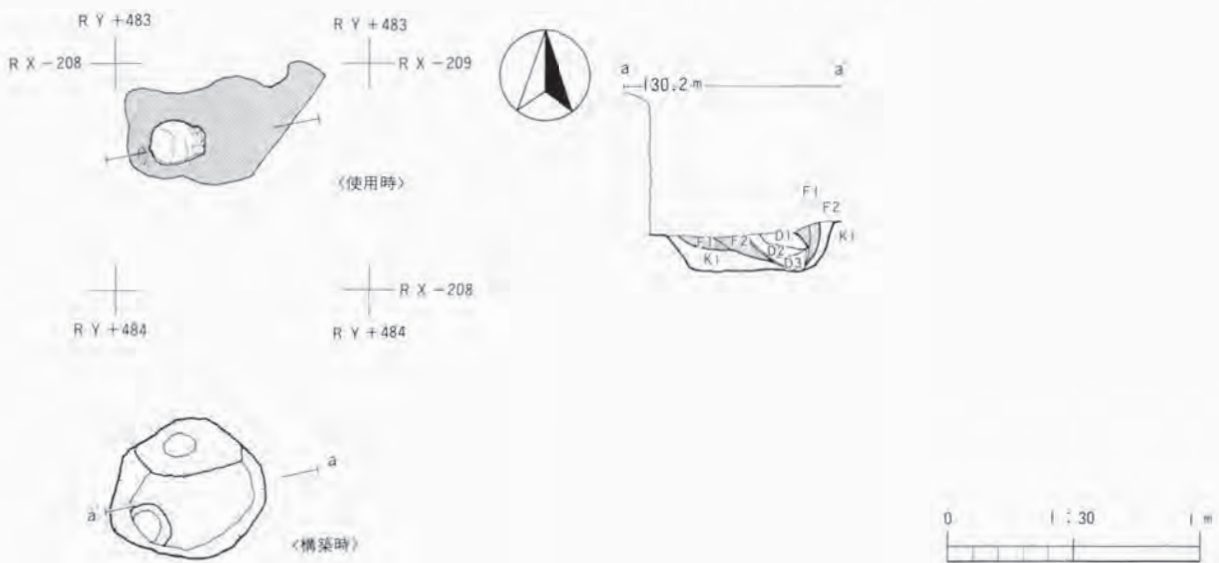
12は無柄凸基の石鏃で側縁部にやや膨らみをもつ。基部の調整はやや粗雑である。裏面に大きく主要剥離面を残す。

13は削器である。断面がほぼ台形を呈する縦長のブレード状剥片の両側縁を調整して刃部としている。

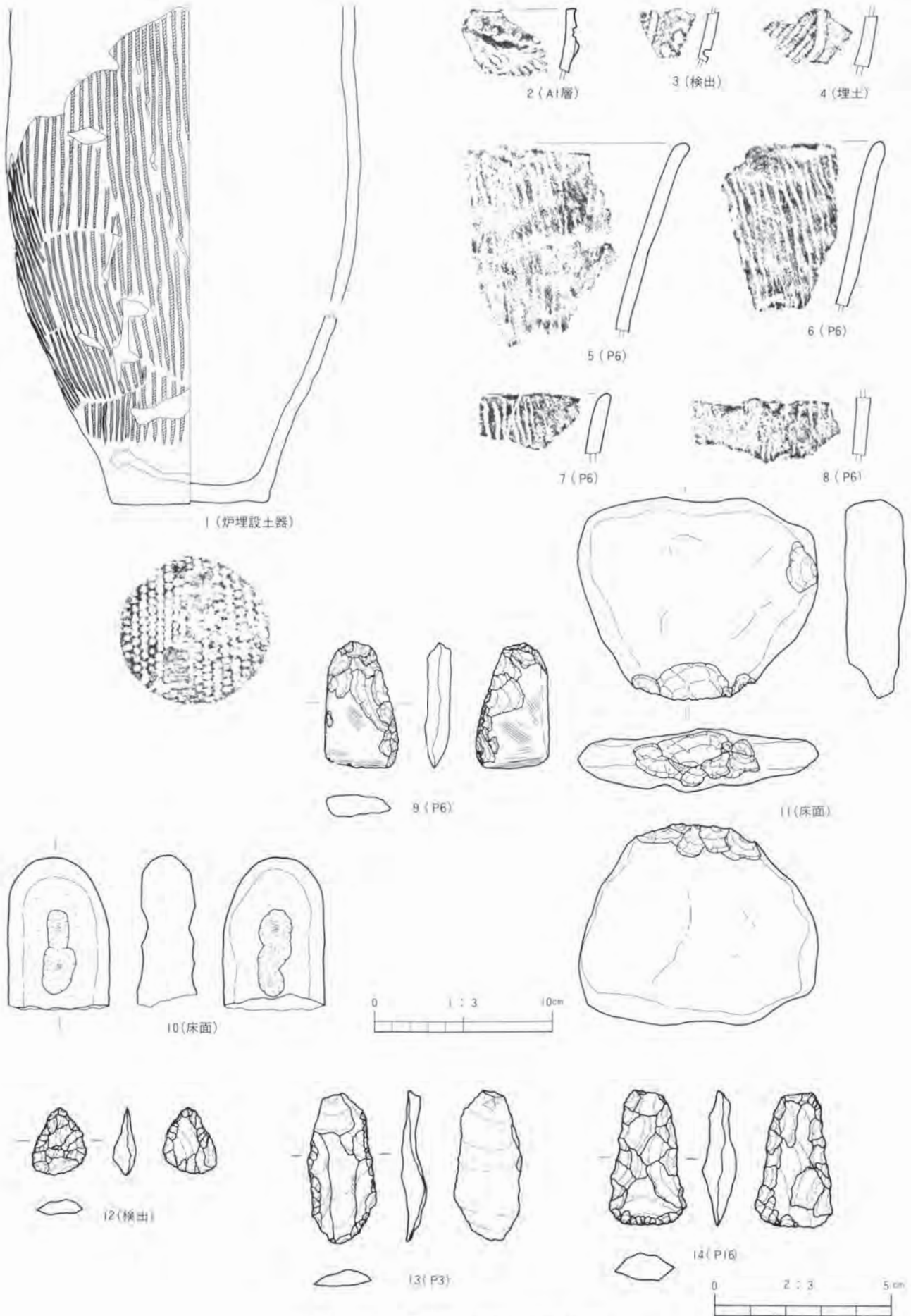
14はやや小形であるが石鏃である。下辺に搔器様の刃部を有する。両側縁にも比較的丁寧な調整が加えられており、ここを使用した可能性も否定できない。9は磨製石斧であるが、基部から側縁にかけて刃部調整されており、削器等として再利用されたものである。

10は凹石で、両面に使用痕がみられる。

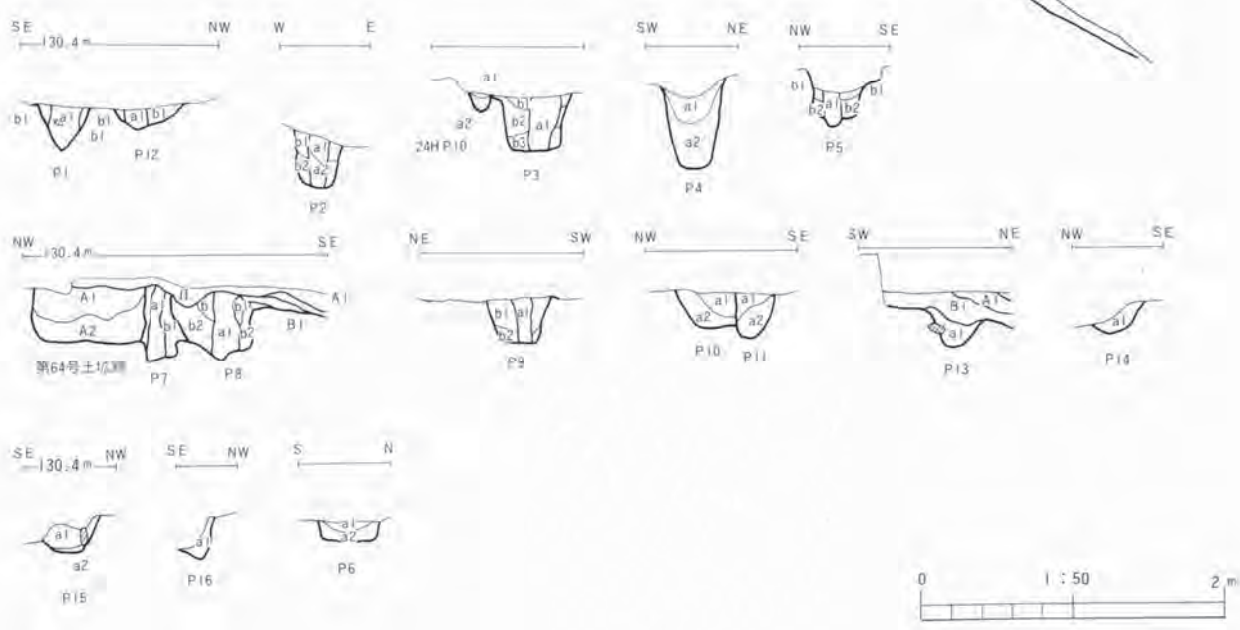
11はやや大きめの扁平礫の一端に刃部調整を有するものである。刃部には敲打痕等の使用痕は認められない。



第56図 第28号竪穴住居跡炉



第57图 第28号竖穴住居跡出土遺物



第58図 第29号竪穴住居跡

第29号竪穴住居跡（第23図・第58図・第59図）

重複関係

第5次調査区南端部に位置する。調査区南壁付近に炉と若干の埋土を確認したが床面は耕作等によりほとんど削平され失われていた。第17号竪穴住居跡と第28号竪穴住居跡を切ると判断したが重複部分がわずかで不確かである。また、第19号竪穴住居跡・第24号竪穴住居跡・第26号竪穴住居跡とも重複するものと思われるが、埋土、床面ともに失われており、新旧関係は不明である。平面形、規模、主軸方向ともに不明である。

埋土はA層とB層に大別される。A層（A層）は暗褐色粘質土を基本土とし、やや明るい暗褐色土塊を含む。やや柔らかくしまりがない。B層（B層）は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊をやや多く含む。固さは中程度でややしまりがない。

床面は南壁付近にわずかに残存し、やや固い。

柱穴

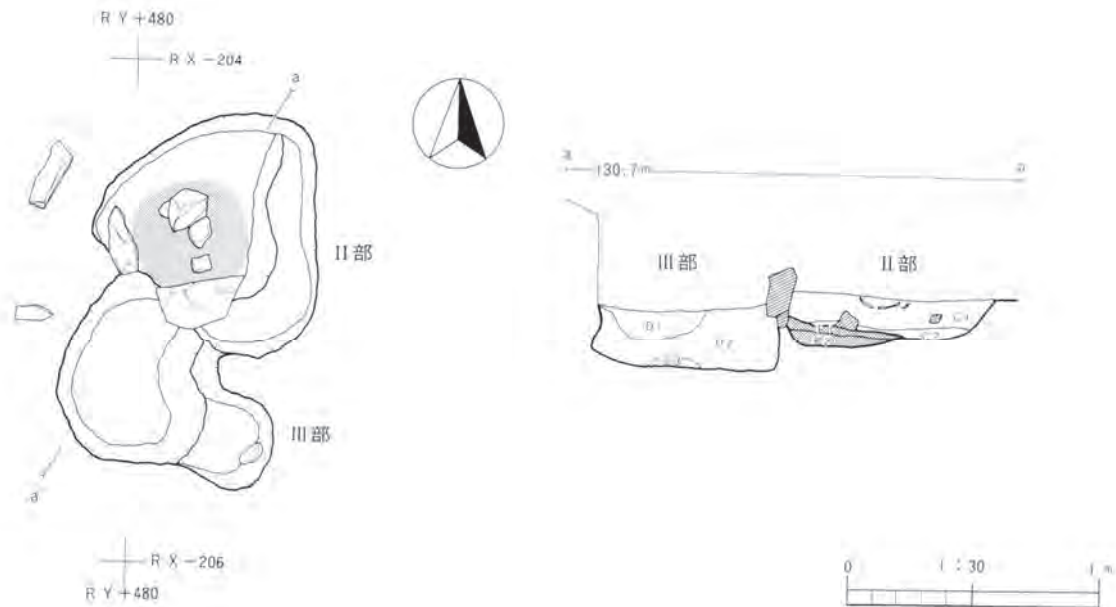
柱穴は、他の住居跡に含まれていないものを中心にひろってみた。P₁～P₄を主柱穴と想定したが不確かである。いずれも柱痕跡を有し、柱間寸法はP₁とP₂が1.95m、P₂とP₃が2.5m、P₃とP₄が3.6mとなる。これら以外に柱痕跡を有するものや柱穴と思われるものは、P₅～P₆・P₇がある。

炉

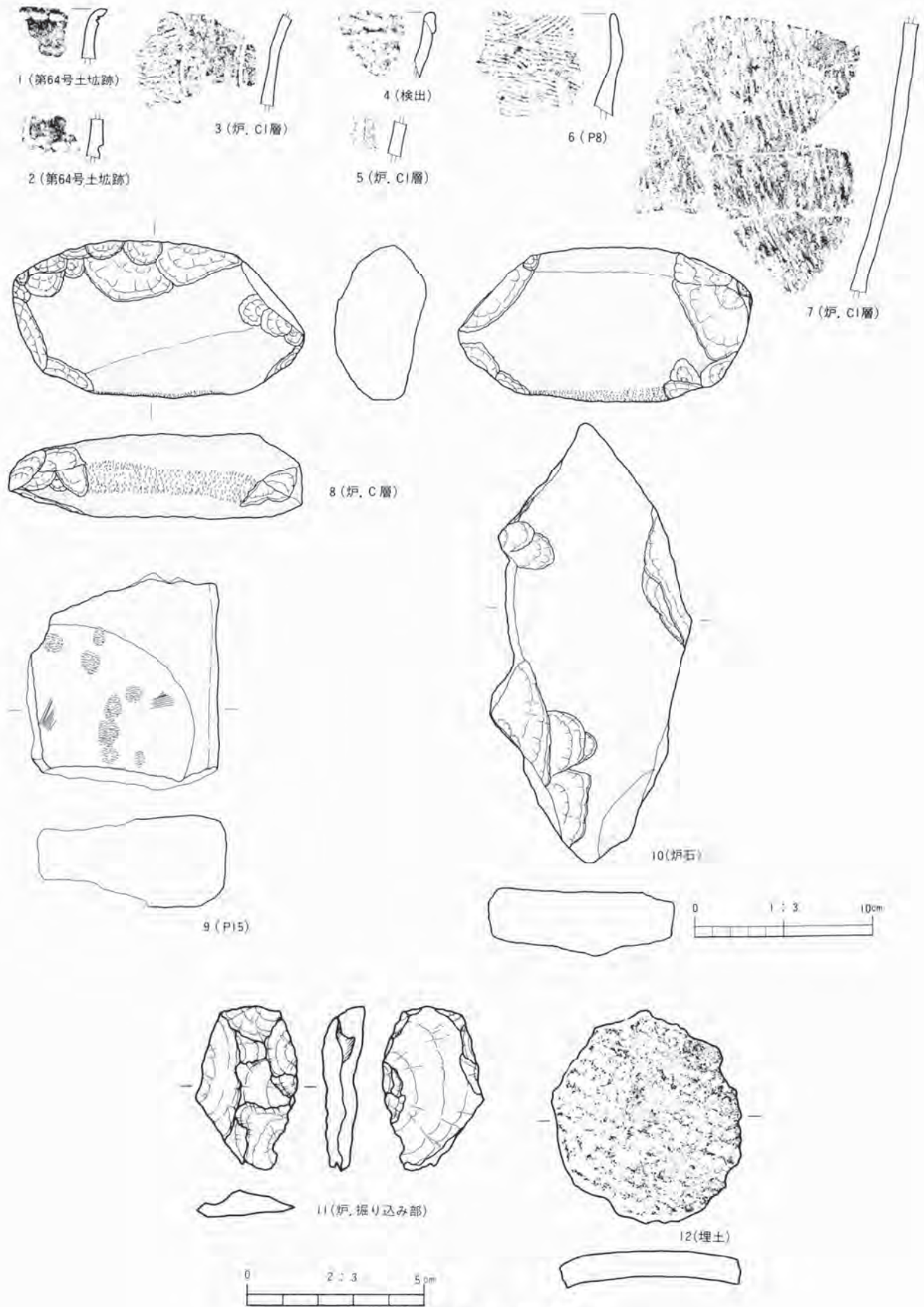
炉は石組複式炉で、石囲炉（Ⅱ部）と掘り込み部（前庭部・Ⅲ部）からなる。石囲炉は東西0.9m、南北0.95mの隅丸三角形に掘り込んだ後に炉石をすえながらF層をつめている。炉石は大半が失われているものの日字形を呈する可能性も考えられる。F層は焼土層で、F層は焼成を受けて固くしまっている。F層は浸透層である。F層の上部には暗褐色土層（C層）が堆積している。C層はやや明るく焼土粒を含む。いずれも柔らかくしまりがない。

掘り込み部は東西0.85m、南北0.75mの不整形を呈する。埋土はD層で褐色粘質土を基本土とし暗褐色土塊などを含む。D層とD₁層がやや明るい。いずれも固さしまりとも中程度である。

出土遺物（第60図）



第59図 第29号竪穴住居跡・炉



第60図 第29号竖穴住居跡出土遺物

土器

出土遺物は少なく、炉の埋土やピットから少量出土したのみである。

3・5は磨消技法により施文されるものである。4は口縁部を折り反すもの。6はR-L単節斜縄文を地文とするもの。7は撚糸文(ℓ)を地文とするものである。

石器

11は磨製石斧片を使用する削器で、一方の側縁に刃部調整がみられる。また、側縁の一部に磨製石斧の磨面が残る。

8は敲石で、だ円形を呈する扁平礫を使用する。1側縁に敲打痕があり、これ以外の全周をやや大き目の剥離で調整する。

9・10は石皿である。いずれも片面にのみやや凹んだ使用痕を持つ。9は磨面上に台石状の敲打痕が認められる。

土製品

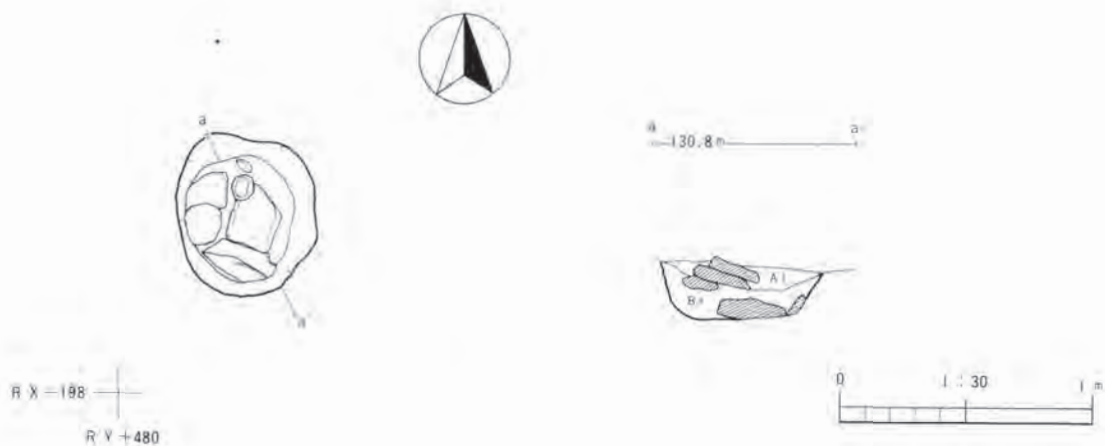
12は土製円盤である。

第67号土坑跡(第9図・第23図)

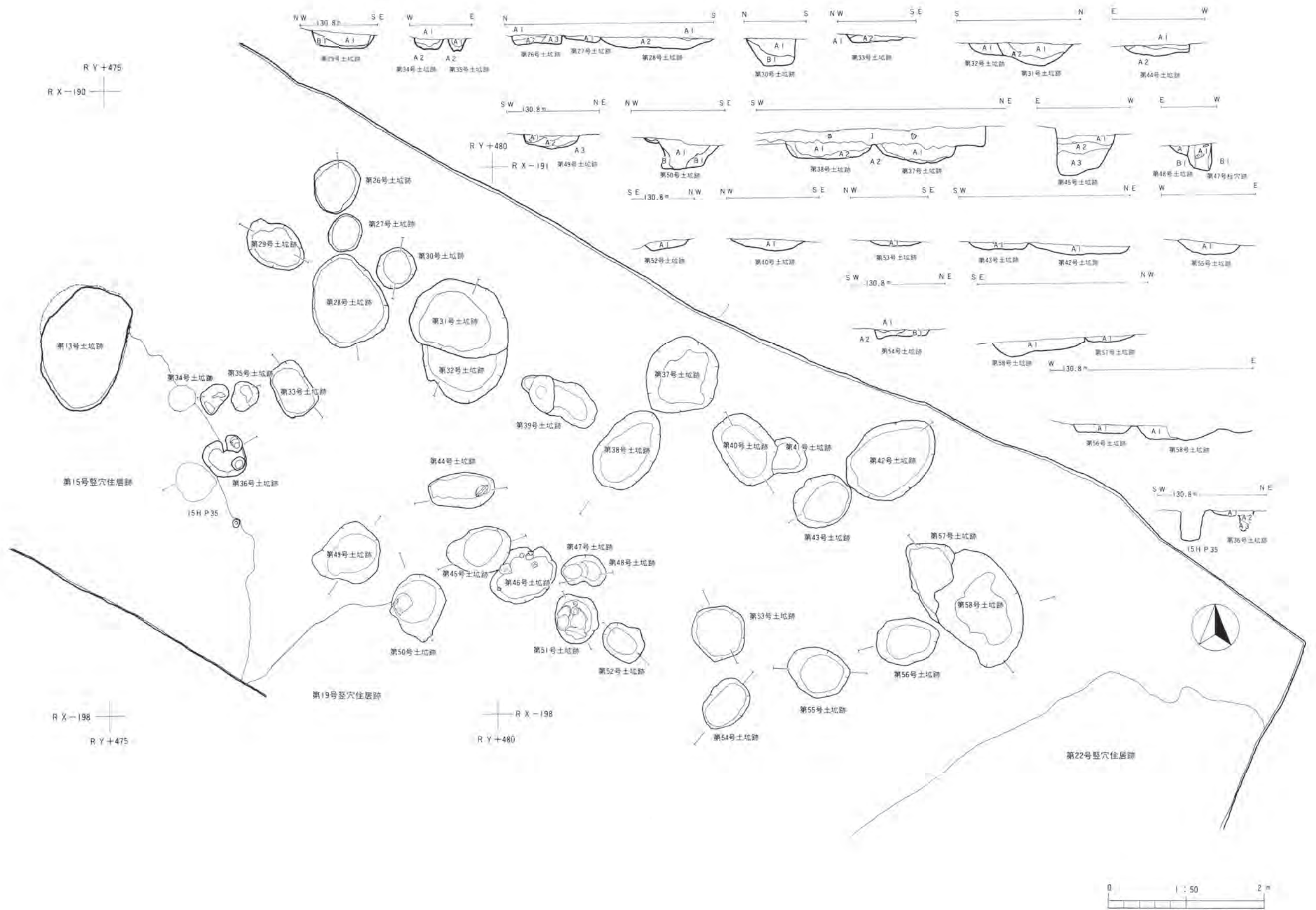
第5次調査区北東隅に位置し、第17号竪穴住居跡に切られる。

平面形はほぼ円形を呈し、開口部径およそ1.1m、底面径およそ0.9m、深さ0.2mを計る。断面形は皿状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。

埋土はA層のみで、褐色粘質土を基本とし暗褐色土塊を少量含む。固さしまりとも中程度である。出土遺物は、縄文土器片がわずかに出土したのみで、図示できるものはなかった。



第61図 第51号土坑跡



第62图 調査区北端部土坑群

第15号土坑跡（第13図）

第19号竪穴住居跡北西隅に検出した。第19号竪穴住居跡と第60号土坑跡を切る。

平面形は不整だ円形を呈し、規模は東西1.25m、南北0.8m、深さ0.3mを計る。壁はやや外傾している。

埋土はA層とB層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や、やや明るい褐色土塊を多く含む。いずれの層も固さしまり具合とも中程度である。

出土遺物は、縄文土器片がわずかに出土している。第63図1は平行沈線により施文されるもの。3は隆沈線により施文されるもの。2はR—L単節斜縄文のみを施す口縁部破片である。25は網目状捺糸文を地文とする体部下半で底部に木葉痕を有する。

第16号土坑跡（第13図）

第19号竪穴住居跡北西部に検出した。第19号竪穴住居跡を切る。

平面形は不整円形を呈し、開口部径1.0m、底部径1.4m、深さ0.75mを計る。断面形はフラスコ形を呈する。

埋土はA層とB層に大別される。A層はやや暗い褐色～暗褐色粘質土を基本土とし、固くややしまっている。B層は褐色粘質土と暗褐色粘質土が交互に唯積している。下層ほど柔らかくしまりが無い。

出土遺物はやや多い。第64図31は隆起線による施文がみられる。27・28・32・33は磨消技法によるもので、27縦位のモチーフが28・32は曲線的なモチーフが施される。30は無文の口縁部破片で、小さな刺突がみられる。36は平行沈線により渦巻文等を施文するもの。37は隆沈線により施文されるものである。26・29・34・35は地文のみを施すものである。

第68図56は不定形な剥片の1側縁を調整して刃部とする削器。22は敲石で、側縁に軽い敲打痕がみられる。57はだ円形を呈し中央部に凹みを有する土製品である。

第17号土坑跡（第13図）

第19号竪穴住居跡のほぼ中央部に検出した。第19号竪穴住居跡を切る。

平面形は不整円形を呈し、開口部径0.8～0.9m、深さ0.35mを計る。断面形は楕円形を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。

埋土はA層で褐色粘質土を基本土とし、固さしまりとも中程度である。

出土遺物は少なく図示できるものはない。

第18号土壇跡（第13図）

第19号竪穴住居跡南東部に検出した。第19号竪穴住居跡を切る。

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向が0.95m、短軸方向0.75m、深さ0.6mを計る。断面形はほぼピーカー形で、底面の東端にけい0.3m、深さ0.1mの掘り込みがある。

埋土はA層とB層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし固さは中程度でややしまりがない。B層は褐色粘質土と暗褐色粘質土が交互に堆積する。いずれも混入土を多く含み、やや柔らかくしまりがない。

出土遺物は極めて少ない。第63図8は隆起線により施文され、隆起線の交点に円文を配すもの。20は磨製石斧で、基部と刃部を欠く。

第19号土壇跡（第32図・第33図）

第22号竪穴住居跡北端部に検出した。第22号竪穴住居跡に切られる。

平面形は不整円形を呈し、開口部形0.7m、深さ0.45mを計る。断面形はピーカー形を呈する。

埋土はA層・B層・C層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。固さしまりとも中程度である。B層は褐色粘質土と明褐色粘質土が交互に堆積する。B2層は固くしまっているもの他はやや柔らかくしまりがない。C層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。柔らかくしまりがない。

出土遺物で図示できるものはない。

第20号土壇跡（第22図・第32図）

第22号竪穴住居跡ほぼ中央に検出し、床面から掘り込まれている。埋土の状況からも第22号竪穴住居跡に伴うか、住居跡の廃棄直後に構築されたものである。

平面形は不整だ円形を呈し、長軸方向で1.35m、短軸方向で1.0m、深さ0.7mを計る。壁はやや外傾している。

埋土はA層で褐色粘質土を基本とし、暗褐色土塊などを多く含む。柔らかくしまりがない。出土遺物は、第64図24が口縁部と体部の境界にわずかな屈曲を持つ深鉢で、連続刺突文を伴う隆起線により口縁部文様下端を区画し、これから口唇部にかけて同様な技法による逆C文字を施す。第63図9～12もこれに類似する破片である。14は磨消技法により施文されるもの。13は地文のみを施すものである。

第68図58は断面三角形を呈するブレード状剥片の側縁部を中心に調整する削器である。

第21号土壇跡（第44図）

第27号竪穴住居跡南半部に検出した。第27号竪穴住居跡の床面にて確認したものの新旧関係は不明である。

平面形は不整形を呈し、開口部径約1.0m、底部径1.3m、深さ1.1mを計る。断面部はフラスコ形を呈する。

調査中の不注意により上層断面を実測しないまま掘り上げてしまったため埋土は不明である。

出土遺物は少ない。第68図59は側縁に刃部を有する削器であるが、刃部角度は搔器的である。60は不定形な剥片を大き目の剥離により調整するもので削器か。第67図54は粘板岩質の素材を用いて大き目の剥離により1側縁に刃部を作り出す。石剣に相当するものか。

第22号土坑跡（第44図）

第27号竪穴住居南端部に検出した。第22号竪穴住居跡に切られる。

第27号竪穴住居跡との新旧関係は不明である。

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向で1.4m、短軸方向で0.8m、底部径は長軸方向で1.2m、短軸方向で0.9m、深さ0.7mを計る。断面形はフラスコ形を呈する。底面の中央に径0.45m、深さ0.05mの浅い掘り込みがみられる。

埋土はA層・B層・C層に大別される。A層は明褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を少量含む。やや柔らかくややしまりが無い。C層はA層より暗い明褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を少量含む。固さしまりとも中程度である。

出土遺物は極めて少ない。第63図17は縄文のみを施す口縁部破片で、18は隆沈線により施文されるものである。19は磨製石斧で基部を欠く。刃部に使用時のものと思われる小剥離が伴う。

第23号土坑跡（第48図・第49図）

第26号竪穴住居跡床面やや北寄りに検出した。第26号竪穴住居跡に切られ、埋土最上層に貼床（26H・K層）がみられる。

平面形は不整円形を呈し、開口部径は1.0m、底部径は1.5m、深さ1.2mを計る。断面形はフラスコ形を呈する。

埋土はA層で、上層から褐色粘質土層と明褐色～橙色粘質土層が交互に堆積する。A₁層は固くしまっているものの他の層はやや柔らかくややしまりが無い。

出土遺物が多い。第65図38・39は同一固体で、口縁部のやや外反する深鉢である。体部文様帯に磨消技法によりL字形の縄文帯と縦位の連続刺突文で構成されるモチーフを施す。40・42・43も磨消技法により施文されるもので、40は体部文様帯上端を断面三角形の隆起線により区画する。42は逆L字形の無文帯を施すもの。43はL字形の無文帯を施すものである。41は平行沈線文により渦巻文等を施すものである。44・45は縄文のみを施すものである。

47～49は敲石である。47は扁平円礫の周縁を敲打痕を有するもので、面取りをされたようになる。48はだ円形の扁平礫の1側縁と1端部に敲打痕を有し、両面の平坦面にも台石状～凹石状の使用痕がみられる。49もだ円形の扁平円礫を使用するもので、全面にわたり軽い敲打痕と台石状の使用様が見られる。46・50～53は石皿である。46は両面に凹んだ使用面を有する。また、一部に台石状の使用痕もみられる。

第68図61は土坑跡の底面から出土した無文のミニチュア土器である。

第24号土坑跡（第48図・第49図）

第26号竪穴住居跡北西隅に検出した。第26号竪穴住居跡を切る。

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向で0.95m、短軸方向で0.8m、深さ0.4mを計る。壁はやや外傾するもののほぼ直壁に近い。

埋土はA層・B層・C層に大別される。A層は明褐色粘質土を基本とし、褐色土塊を少量含む。B層はやや明るい暗褐色～褐色粘質土を基本とし、明褐色土塊などを含む。C層はやや明るい褐色粘質土を基本とし、明褐色土塊などを含む。固さは下層ほど柔らかく、しまりも下層ほど疎である。

出土遺物は無い。

第25号土坑跡（第48図・第49図）

第26号竪穴住居跡中央部よりやや西寄りに検出した。床面で確認したもので、第26号竪穴住居跡との新旧関係は不明である。

平面形は不整円形を呈し、開口部径0.65m、底部径0.65m、深さ0.65mを計る。断面形はややゆがんでおり、フラスコ状～ビーカー状を呈する。

埋土はA層～E層に大別される。A層は暗褐色粘質土層でやや固い。B層は褐色粘質土層で固さしまりとも中程度である。C層は暗褐色粘質土層でやや柔らかくしまりが無い。D層は褐色粘質土層で柔らかくしまりが無い。E層は焼土層でやや赤変した褐色粘質土を基本土とするが柔らかくしまりが無い。現地性の焼土ではない。

出土遺物は極めて少ない。第63図15は口縁部を無文帯とし、ここに竹管による刺突文を横位に連続している。16も同様な破片であり同一個体の可能性が大きい。

第59号土坑跡（第13図・第15図）

第19号竪穴住居跡南半部に検出した。床面より掘り込まれており炉Aを切る。埋土の状況等から第19号竪穴住居跡廃棄直後に構築されたものと思われる。

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向で0.9m、短軸方向で0.7m、底部径は長軸方向で1.0m、短軸方向で0.65m、深さ0.6mを計る。壁は外傾するが、一部フラスコ状を呈するところもある。

埋土はA層で、暗褐色～褐色粘質土を基本土とする。いずれの層も固くしまっている。

出土遺物は少ない。第16図11は口縁部文様帯下端に配した隆起線に沿って連続突文を施すものである。18は沈線を施すがモチーフの全容は不明である。

第60号土坑跡（第13図・第14図）

第19号竪穴住居跡北端部に検出した。第15号土坑跡に切られ、第19号竪穴住居跡を切る。

平面形は不整だ円形を呈するものと思われるが、南半部が失われている。開口部径は長軸方向で0.6m以上、短軸方向で0.55m、深さ0.2mを計る。断面図は皿形を呈する。

埋土はA層で、やや明るい暗褐色～褐色粘質土を基本とし、黄褐色土塊などを含む。

出土遺物は無い。

第61号土坑跡（第13図）

第19号竪穴住居跡東端に検出した。第19号竪穴住居跡を切る。

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向が0.85m、短軸方向が0.55m、深さ0.1mを計る。断面形は皿形を呈する。

埋土は調査中の不注意により土層断面を実測しないまま掘り上げてしまったため不明である。

第62号土坑跡（第13図・第22）

第19号竪穴住居跡中央部よりやや北西寄りに検出した。第19号竪穴住居跡に切られる。

平面形は不整だ円形～不整円形を呈するものと思われ、長軸方向で1.05m、短軸方向で0.45m以上、深さ0.25mを計る。壁はやや外傾～直壁である。

埋土はA層とB層に大別される。A層は褐色粘質土層で柔らかくしまりが無い。B層は褐色～黄褐色粘質土を基本土とし、褐色～明褐色土塊を多く含む。固さ、しまりともに中程度である。

出土遺物は無い。

第63号土坑跡（第13図・第14図）

第19号竪穴住居跡ほぼ中央に検出した。第19号竪穴住居跡に切られる。

平面形は不整だ円形を呈し、長軸方向で0.9m、短軸方向で0.6m以上、深さ0.2mを計る。壁はほぼ直壁である。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。

出土遺物は極めて少ない。第18図65は削器で、縦長の剥片の側縁に片刃の刃部をもつ。

第64号土坑跡（第58図）

第29号竪穴住居跡炉の東側に検出した。第29号竪穴住居跡の柱穴と思われるP₁を切る。

平面形は不整円形を呈し、開口部径0.85m、深さ0.35mを計る。壁はほぼ直壁である。

埋土はA層で、やや明るい暗褐色～褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含む。

出土遺物は少ない。第60図1・2は横位に連続刺突文を施すもので、2は縦位の沈線が伴う。

第68図63・64は石皿で、いずれもやや凹んだ使用痕（磨面）を有する。

第65号土坑跡（第48図・第49図）

第26号竪穴住居跡床面ほぼ中央に検出した。埋土最上層がわずかに焼成を受けており、第26号竪穴住居跡より古い。

平面形はほぼ円形で、開口部径は0.7～0.8m、深さ0.15mを計る。壁はほぼ直壁である。

埋土はA層で、上層より黄褐色粘質土層と褐色土層が交互に堆積する。いずれもやや固くしまりがある。A層は焼成を受けてわずかに赤変している。

出土遺物は無い。

第66号土坑跡（第24図）

第24号竪穴住居跡北端部に検出した。第24号竪穴住居跡を切る。

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向で0.95m、短軸方向で0.75m、底部径は長軸方向で1.0m、短軸方向で0.85m、深さ0.6mを計る。断面形はフラスコ形を呈する。

埋土はA層・B層・C層に大別される。A層は暗褐色粘質土層を基本土とし、にぶい黄褐色土塊などを多く含む。固さしまりとも中程度である。B層は褐色粘質土層とやや明るい褐色粘質土層が交互に堆積する。混入土は黄褐色土塊などを少量含む。やや固くしまりは中程度である。C層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊を多く含む。C層は柔らかいがC層はやや固くしまっている。

出土遺物は少ない。第63図7は磨消技法により曲線的な施文がみられる。6は隆沈線により施文されるもの。4・5は地文のみを施すものである。

第5次調査区北端部には竪穴住居跡が検出されず、代わってやや浅い土坑跡と柱穴が集中する地区がみられた。ここでは第26号土坑跡～第58号土坑跡の33基を検出している。

第26号土坑跡（第62図）

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向で0.7m、短軸方向で0.6m、深さ0.15mを計る。壁はわずかに外傾している。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊などをやや多く含む。下層ほど明るく固い。出土遺物は無い。

第27号土坑跡（第62図）

平面形は不整円形を呈し、開口部径は0.45m、深さ0.1mを計る。壁は外傾している。

埋土はA層で、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。固さしまりともに中程度である。出土遺物は無い。

第28号土坑跡（第62図）

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向で1.15m、短軸方向で0.95m、深さ0.15mを計る。壁は外傾し、断面形は皿状を呈する。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊などをわずかに含む。A層がやや明るい。いずれも固さしまりともに中程度である。出土遺物は無い。

第29号土坑跡（第62図）

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向で0.8m、短軸方向で0.6m、深さ0.2mを計る。壁はやや外傾している。

埋土はA層・B層に大別される。A層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊などをわずかに含む。B層は黄褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをわずかに含む。いずれも固さしまりともに中程度である。出土遺物は無い。

第30号土坑跡（第62図）

平面形はほぼ円形を呈し、開口部径0.5m、深さ0.35mを計る。壁はやや外傾している。

埋土はA層・B層に大別される。A層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊をわずかに含む。B層は黄褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊をわずかに含む。いずれも固さは中程度でややしまりがいい。出土遺物は無い。

第31号土坑跡（第62図）

第32号土坑跡を切る。平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向で1.3m、短軸方向で0.95m、深さ0.3mを計る。断面形は楕円形を呈する。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。やや柔らかくしまりは中程度である。出土遺物は無い。

第32号土坑跡（第62図）

第31号土坑跡に切られる。平面形は不整円形を呈するものか。開口部径は東西で1.1m、南北で0.6m以上、深さ0.15mを計る。壁は外傾している。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。柔らかくしまりがいい。出土遺物は無い。

第33号土坑跡（第62図）

平面形は不整形を呈し、長軸方向で0.7m、短軸方向で0.5m、深さ0.1mを計る。壁は外傾している。

埋土はA層で、やや明るい暗褐色～褐色粘質土を基本土とし、褐色～黄褐色土塊を含む。出土遺物は無い。

第34号土坑跡（第62図）

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向で0.4m、短軸方向で0.25m、深さ0.1mを計る。壁はやや外傾する。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、基本土よりも明るい褐色土塊を含む。やや固くしまっている。縄文土器片がわずかに出土したものの図示できるものはなかった。

第35号土坑跡（第62図）

平面形は不整円形を呈し、開口部径0.35m、深さ0.15mを計る。壁はやや外傾する。

埋土はA層で褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合土である。固さしまりともに中程度である。縄文土器片がわずかに出土したものの図示できるものはなかった。

第36号土坑跡（第62図）

平面形は不整形を呈し、開口部径0.5m、深さ0.25m、を計る。断面形は浅い皿状を呈し、一部小ピット状のものが伴う。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とするやや柔らかくしまりが無い。平面形及び埋土から攪乱穴の可能性もある。出土遺物は無い。

第37号土坑跡（第62図）

平面形は不整形を呈し、開口部径1.0m、深さ0.25mを計る。壁はやや外傾し、底面もくぼんでいる。

埋土はA層で、やや明るい褐色～黄褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。固さしまりともに中程度である。出土遺物は無い。

第38号土坑跡（第62図）

平面形は卵形を呈し、開口部径は長軸方向1.15m、短軸方向0.7m、深さ0.2mを計る。壁はやや外傾している。

埋土はA層で、やや明るい褐色～黄褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などをわずかに含む。固さしまりともに中程度である。出土遺物は無い。

第39号土坑跡（第62図）

平面形は不整形を呈し、開口部径は長軸方向1.05m、短軸方向0.5m、深さ0.1mを計る。壁はやや外傾している。

埋土はA層で、しまりのない褐色粘質土が堆積する。攪乱穴の可能性が大きい。出土遺物は無い。

第40号土坑跡（第62図）

第41号土坑跡を切る。平面形は不整形を呈し、開口部径は長軸方向で0.95m、短軸方向で0.7m、深さ0.15mを計る。断面形は挿鉢状を呈する。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、固さしまりともに中程度である。出土遺物は無い。

第41号土坑跡（第62図）

第40号土坑跡に切られる。平面形は不整形を呈するものと思われ、開口部径は長軸方向で0.45m以上、短軸方向0.45m、深さ0.1mを計る。断面形は挿鉢状を呈する。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、固さしまりともに中程度である。出土遺物は無い。

第42号土坑跡（第62図）

平面形は卵形を呈し、開口部径は長軸方向で1.3m、短軸方向で0.9m、深さ0.1mを計る。壁は外傾する。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊を含む。やや柔らかくしまりが無い。攪乱穴の可能性も有る。出土遺物は無い。

第43号土坑跡（第62図）

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向0.8m、短軸方向0.65m、深さ0.1mを計る。壁は外傾する。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。固さしまりとも中程度である。出土遺物は無い。

第44号土坑跡（第62図）

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向0.85m、短軸方向0.45m、深さ0.15mを計る。壁はやや外傾する。

埋土はA層で、やや明るい褐色～黄褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。固さしまりとも中程度である。底面付近に径20cmほどの自然礫が1個伴う。出土遺物は無い。

第45号土坑跡（第62図）

第46号土坑跡とかすかに重複するが新旧関係は不明である。平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸0.85m、短軸0.6m、深さ0.55mを計る。壁はやや外傾する。

埋土はA層で、にぶい黄褐色～褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や黄褐色土塊などをやや多く含む。A₁層は少量の炭水化物粒と縄文土器片を含む。A₂層は微量の炭化物粒を含む。A₃層は少量の土器片と石皿片を含む。

出土遺物は縄文土器片と石皿片がある。前者はいずれも細片で図示できるものはなかった。第63図23は石皿で、片面にわずかな凹みを持つ磨面がみられる。磨面には擦痕や敲打痕が伴う。

第46号土坑跡（第62図）

第45号土坑跡とかすかに重複するが新旧関係は不明である。平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向0.9m、短軸方向0.7m、深さmを計る。壁はやや外傾している。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、自然礫や剥片を含む。

第68図62は黒耀石を素材とする剥片で、上下両端からの敲打により得られたものである。明確な使用痕は認められない。

第47号柱穴跡（第62図）

第48号土坑跡を切る。平面形はほぼ円形を呈し、開口部径0.35m、深さ0.35mを計る。

埋土はA層が柱痕跡で、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。少量の炭化物粒と自然礫を含む。固さしまりとも中程度である。B層は掘り方埋土で、にぶい黄褐色粘質土をつめる。固さしまりとも中程度である。出土遺物は無い。

第48号土坑跡（第62図）

第47号柱穴跡に切られる。平面形は不整円形を呈し、開口部径0.4m、深さ0.15mを計る。壁はやや外傾している。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊を含む。やや固くしまっている。出土

遺物は無い。

第49号土坑跡（第62図）

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向0.85m、短軸方向0.7m、深さ0.2mを計る。壁はやや外傾し、底面はわずかに凹む。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊などをやや多く含む。いずれの層も少量の炭化物粒を含む。やや固くしまっている。A層から少量の縄文土器片が出土したものの小片であり図示できなかった。

第50号土坑跡（第62図）

第19号竪穴住居跡を切る。平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向0.85m、短軸方向0.7m、深さ0.4mを外る。壁は底部付近ではほぼ直壁で開口部付近で外傾する。

埋土はA層・B層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色粘土塊を含むほか、土器片や炭化物粒を少量含む。B層は褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊を含むほか、土器片、炭化物粒、自然礫を少量含む。いずれの層もやや固くしまりは中程度である。出土した遺物は細片であり図示できなかった。

第51号土坑跡（第61図・第62図）

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向0.65m、短軸方向0.55m、深さ0.25mを計る。壁はやや外傾する。

埋土はA層とB層に大別される。A層はにぶい黄褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊を少量含む。固さしまりとも中程度である。B層は黄褐色粘質土を基本土とし、粉～粒状の褐色土を含む。やや固くしまりは中程度である。底面から検出面にかけてやや大きめの礫が重なるようにつめられていた。出土遺物は第67図55がある。55は他の礫とともに検出された石皿で、両面に磨面を有している。一方の面のほぼ中央部に敲打痕が集中し、もう一方の面には凹石状～台石状の使用痕が散在している。

第52号土坑跡（第62図）

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向0.55m、短軸方向0.45m、深さ0.1mを計る。壁は外傾している。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、にぶい黄褐色土塊をやや多く含む。やや固いがしまりは中程度である。出土遺物は無い。

第53号土坑跡（第62図）

平面形はほぼ円形を呈し、開口部径0.7m、深さ0.1mを計る。断面形は浅い皿状を呈する。

埋土はA層で、褐色粘質土を基本土とし、にぶい黄褐色土塊をやや多く含む。やや固いがしまりは中程度である。出土遺物は無い。

第54号土壇跡（第62図）

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向で0.7m、短軸方向で0.5m、深さ0.1mを計る。壁はわずかに外傾する。

埋土はA層とB層に大別される。A層はやや明るい暗褐色～褐色土粘質土を基本土とし、褐色～黄褐色土塊をやや多く含む。A₁層はやや柔らかい。A₂層はやや固く炭化物粒を少量含んでいる。出土遺物は無い。

第55号土壇跡（第62図）

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向で0.75m、短軸方向で0.6m、深さ0.15mを計る。断面形は楕円形を呈する。

埋土はA層で、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。やや柔らかくしまりが無い。出土遺物は無い。

第56号土壇跡（第62図）

平面形は不整だ円形を呈し、開口部径は長軸方向で0.8m、短軸方向で0.6m、深さ0.1mを計る。壁はやや外傾している。

埋土はA層でやや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。固さは中程度でややしまりが無い。炭化物粒や焼土粒を微量含んでいる。小さな剥片が1点出土したが図示しなかった。

第57号土壇跡（第62図）

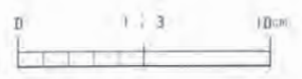
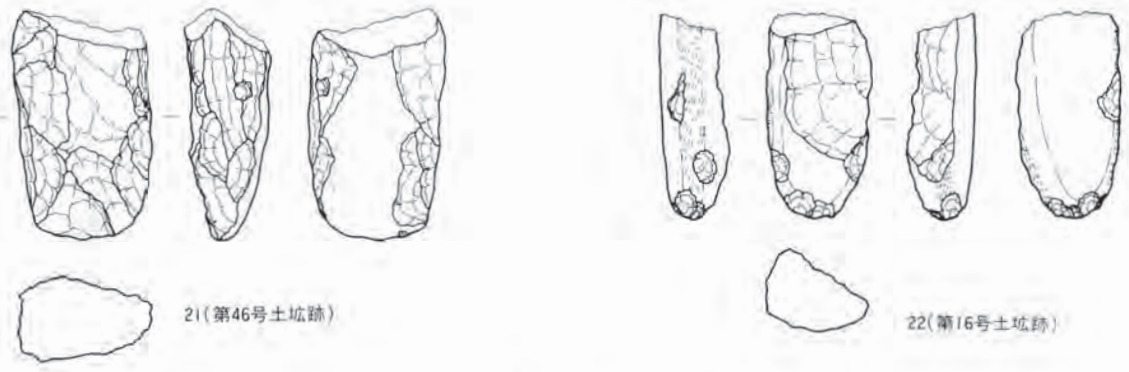
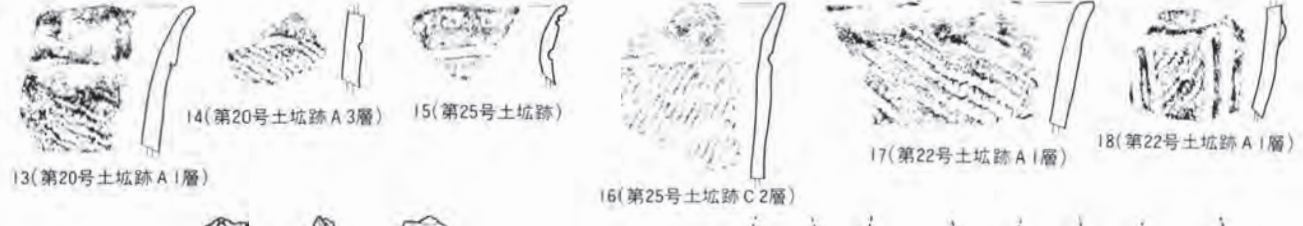
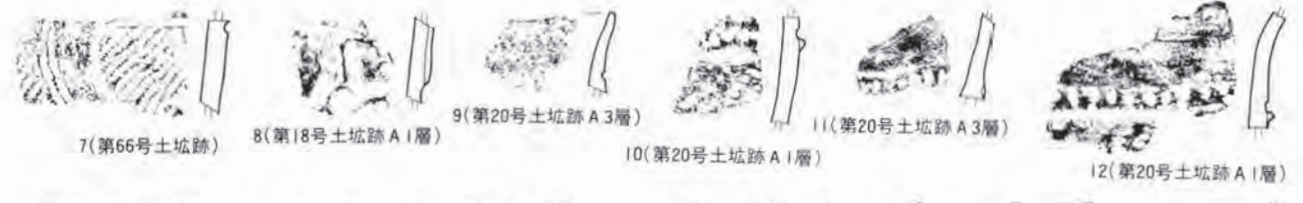
第58号土壇跡に切られる。平面形は不整形を呈し、開口部径は長軸方向で1m以上、短軸方向で0.7m、深さ0.07mを計る。断面形は浅い皿状を呈する。

埋土はA層で、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。固さは中程度でややしまりが無い。攪乱穴の可能性が大きい。出土遺物は無い。

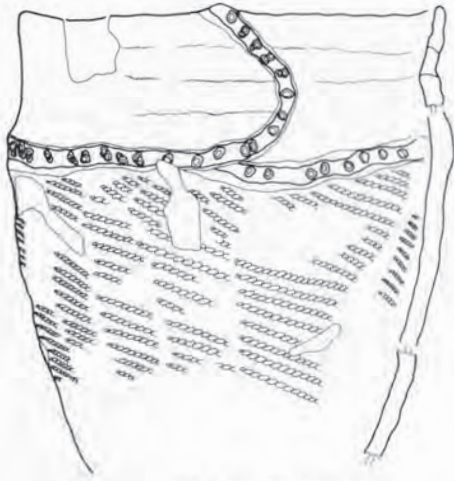
第58号土壇跡（第62図）

第57号土壇跡を切る。平面形は不整形を呈し、開口部径は長軸方向で1.55m、短軸方向で1.1m、深さ0.2mを計る。壁は外傾し、底部も凹凸がある。

埋土はA層で、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。固さは中程度でややしまりが無い。攪乱穴の可能性が大きい。出土遺物は無い。



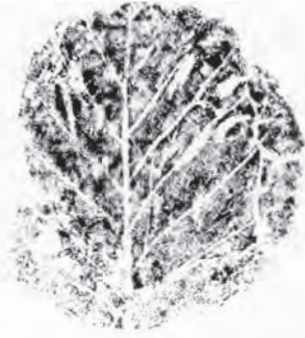
第63号 土坑跡出土遺物(1)



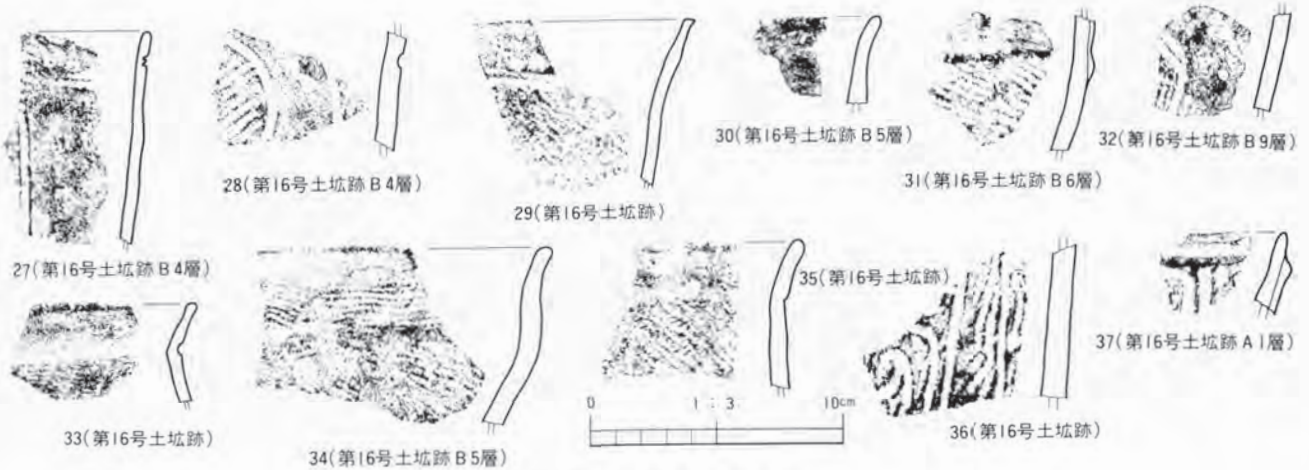
24(第20号土坛跡A1層)



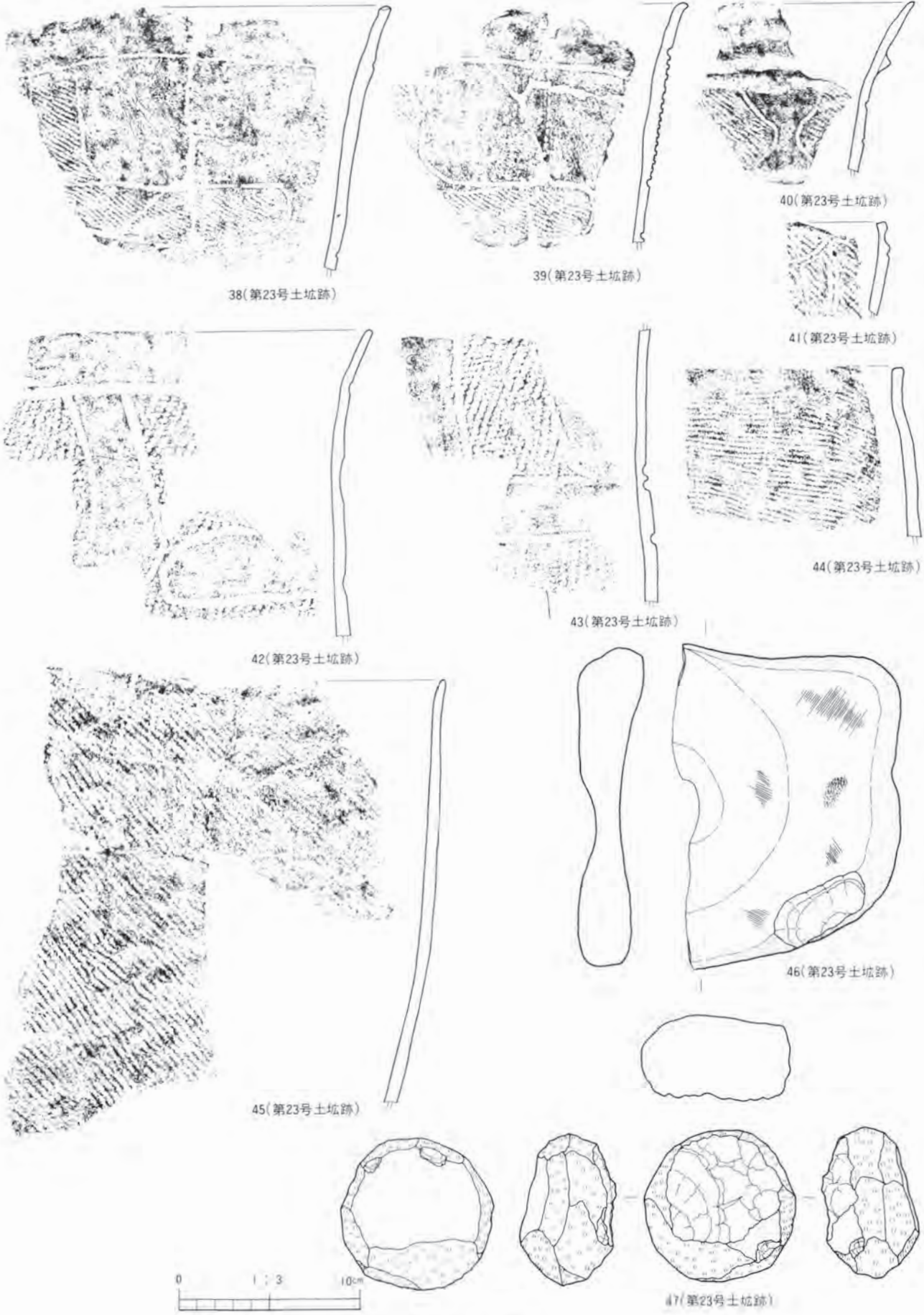
25(第15号土坛跡)



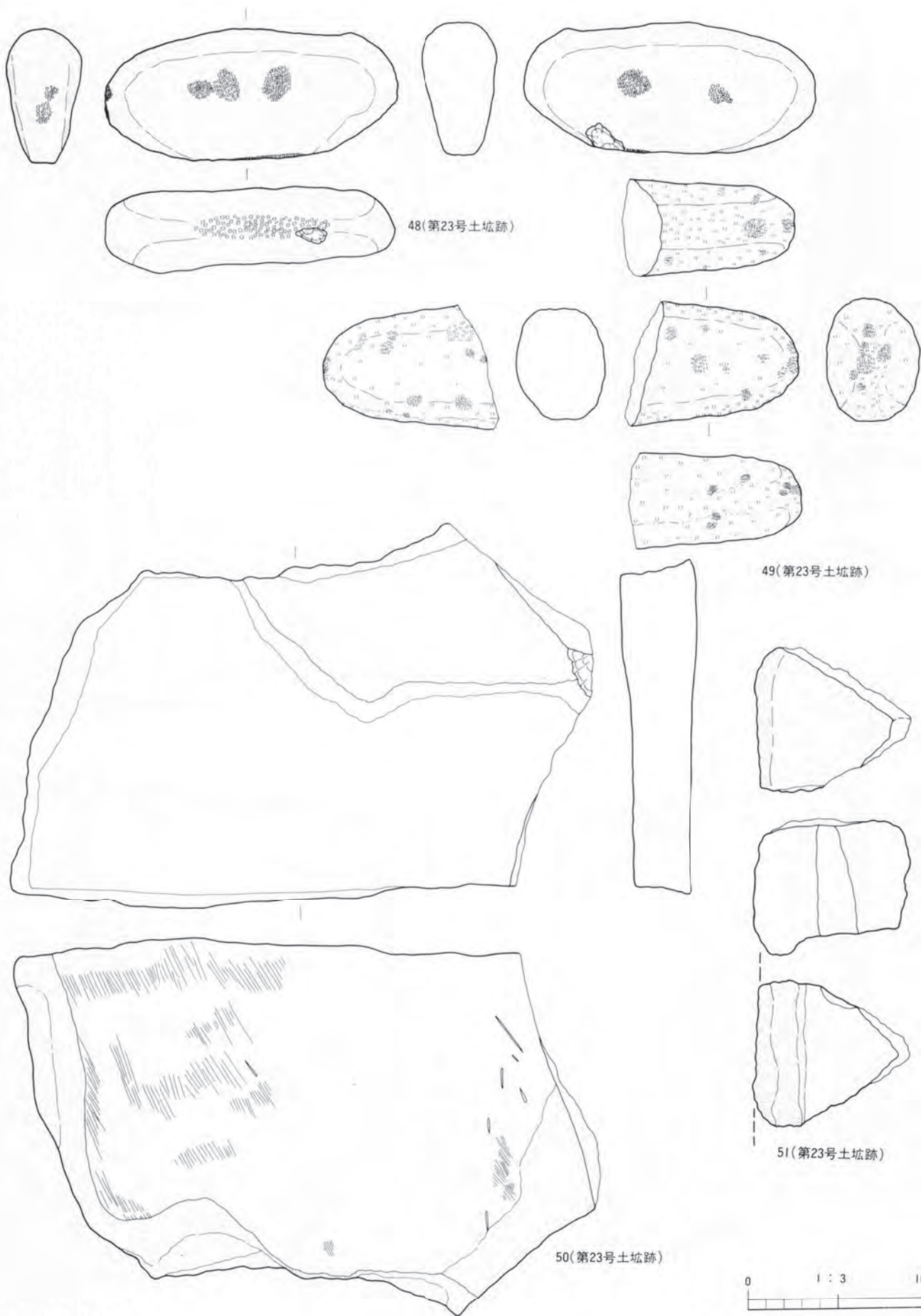
26(第16号土坛跡)



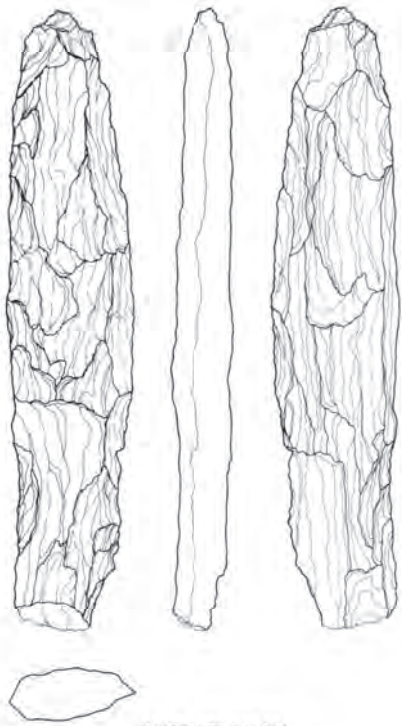
第64図 土坛跡出土遺物(2)



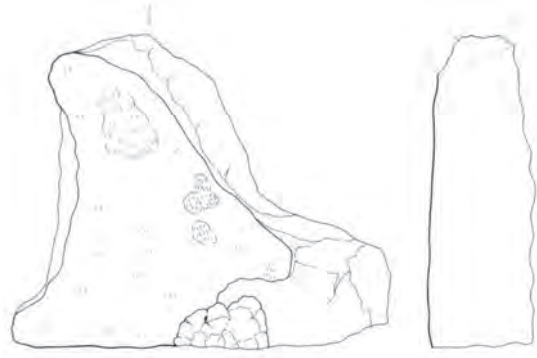
第65図 土坑跡出土遺物(3)



第66図 土坛跡出土遺物(4)



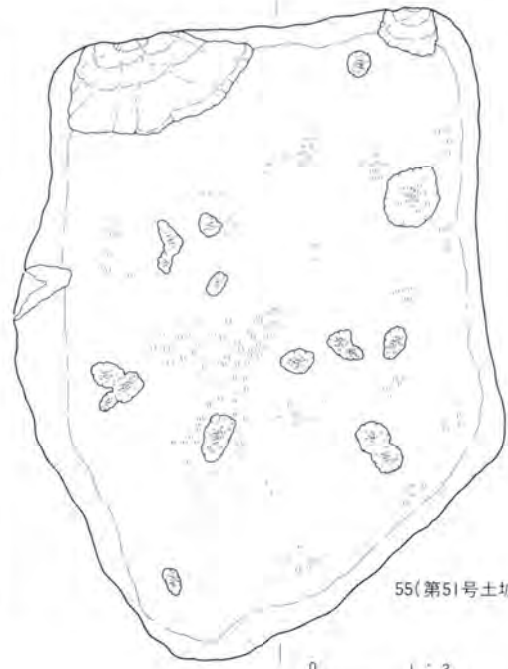
54(第21号土坑跡)



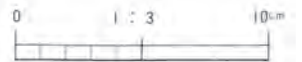
52(第23号土坑跡)



53(第23号土坑跡)



55(第51号土坑跡)



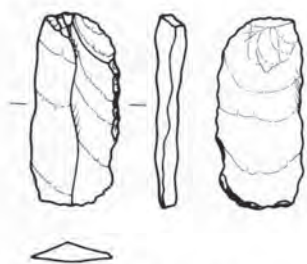
第67図 土坑出土遺物(5)



56(第16号土坛跡)



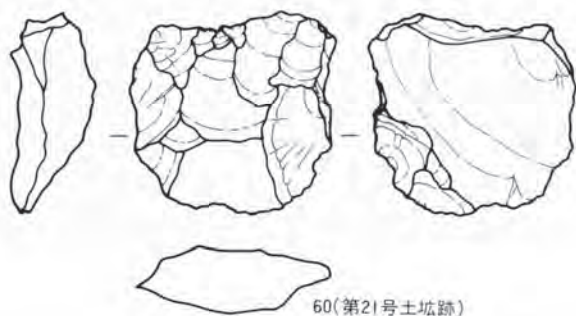
57(第16号土坛跡)



58(第20号土坛跡)



59(第21号土坛跡)



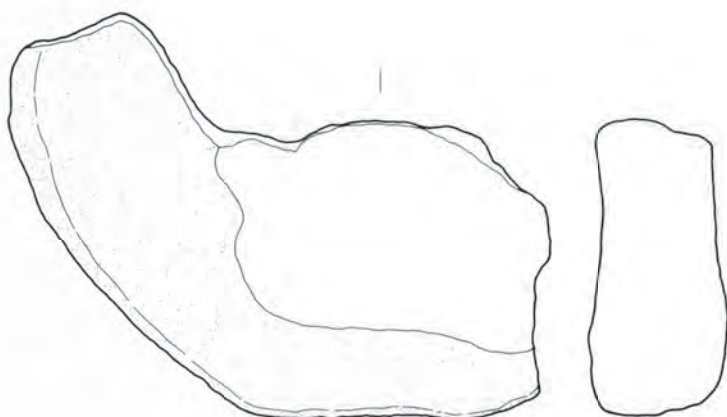
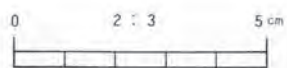
60(第21号土坛跡)



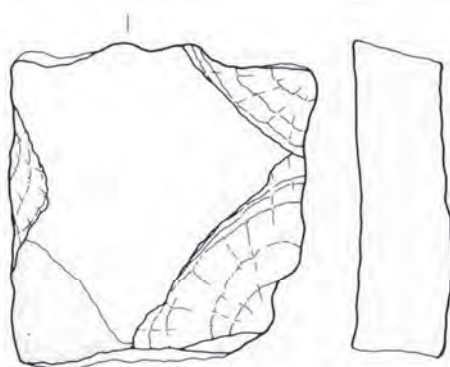
61(第23号土坛跡)



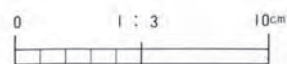
62(第46号土坛跡)



63(第64号土坛跡)



64(第64号土坛跡)



第68図 土坛出土遺物(6)

遺構外出土遺物（第69図・第70）

表土層などの遺構外から出土したものを一括した。尚、検出時としたものはⅠ～Ⅱ層が遺構の埋上であるのか判然としなかったものと複数の遺構が重複する地区での検出作業中にどの遺構に伴うものかわからなくなったものがある。

土器

第69図2は磨消技法によりやや幅の狭い無文帯を有するもので、縄文帯部分にはやや撚りの細かいL-R単節斜縄文を施す。3・4は半蔵竹管などによる平行沈線で施文されるものである。

5～10は隆起線上に連続刺突を施すものである。6はC字状を施すもの。8は波頂部から縦に垂下するものである。

11・14・15は磨消技法によるものである。11は口縁部に円形の凹部や連続刺突が伴う。12は隆起線による磨消技法にて施文するものである。

18・19は隆沈線にて施文するものである。18は口縁部下の隆起線間に連続刺突を施す。20は沈線による施文がみられるものである。

1は体部に膨らみを持ち、口縁部がわずかに外反する深鉢で、体に無節（*ℓ*）を地文としている。16はR-L単節斜縄文を地文とするもの。17は櫛目文を施すものである。

石器

21・22は石槍でいずれも先端部を欠く。

23～26は石鏃で、23が有柄のもの。24・25が無柄凹基のもの。26が無柄平基のものである。27は縦形石匙の上半部を欠くものと思われる。

28～31は削器である。28は全周を丁寧に調整するものである。30は径3.5cm以下の円礫を上下方向からの加撃により得られた剥片の側縁を調整するものである。

第70図32は磨製石斧の基部片である。欠損後に両面から調整が加えられている。

33～36は敲打磨石である。33はだ円形扁平礫の周縁に機能磨面を有するもので、小さく面取りされた様な状態となっている。

37はだ円形扁平礫の平坦面を使用する凹石で、両面に使用痕を有する。また、長軸方向の1端部に敲打痕を有する。

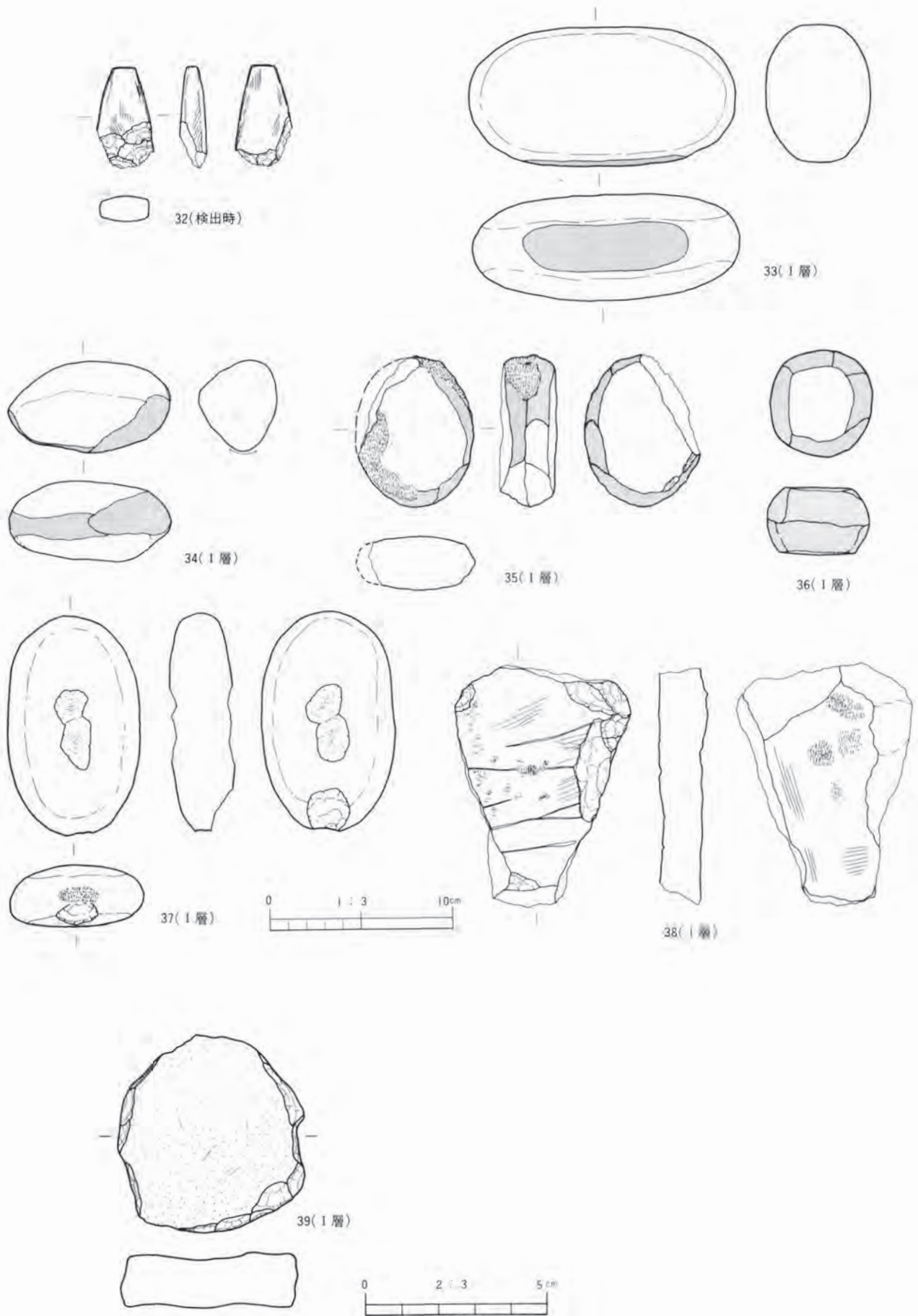
38は石皿で、両面に磨面を有する。磨面には擦痕や敲打痕が伴っている。

石製品

39は円盤状石製品である。



第69図 白石遺跡遺構外出土遺物(1)



第70図 白石遺跡遺構外出土遺物2)

2. 崎山貝塚第5次調査

(1) 第1次～第4次調査の概要(第71図・第72図)

崎山貝塚は、宮古市のコードLG14-2079、岩手県のコードLG04-2180として登録された周知の遺跡である。

各年度毎の概要は冒頭に略記したので、ここでは地点毎の調査内容について述べる。貝塚は標高248mの館ヶ森から北東に延びる舌状台地上に立地している。台地は、南西で標高125m以上、北東で標高106mほどとなり、周辺の水田面(底湿地)との比較差は10～15mほどである。

集落は台地上の平坦面に検出している。中央部に立石を伴う地山面があり多数の土坑跡を検出している。このうち2基の土坑跡を精査したところいずれも大木10式期のフラスコ形土坑跡であり、1基からムラサキインコガイを主体とする貝層を検出している。

集落跡

この外側には地山の落ち込む部分有り、検出した遺構数は極端に少なくなる。IV層上面に検出したN21E3-1号土坑跡からはマグロ類の椎骨11点などが出土している。また、この地山の落ち込みを覆うⅢ層からは縄文時代晩期～弥生時代の遺物が出土している。

地山の落ち込みの外側は東西両側ともに再び地山面が現れ、小ピット群や竪穴住居跡などの遺構が検出される。竪穴住居跡はやや時間幅が広く、大木7a式～大木9式及び平安時代の土器を出土するものが確認されるが、大木8b式に伴うものが最も多い。また、大木7a式に伴うと思われる竪穴住居跡の埋土には自然遺物が包含されている。

南両斜面はほぼ全面が遺物包含層となり、この中に現在までに最底3地点の貝層を確認している。

南貝塚

第2次調査地点は本貝塚の主体を成す貝層のひとつで、精査したのは混貝土層と貝ブロックなどの小規模な廃棄ブロックが中心となる。しかし、ボーリング調査により、中層にイガイやウニの密集する貝層を確認している。伴出する土器が少量であり、明確ではないものの本貝層はほぼ前期初頭～大木7b式に伴う堆積層かと思われる。自然遺物とともに比較的多くの骨角器が出土している。

第1次調査地点は前述したものにより若干小さな貝層で、主体となるのは混貝土層と貝ブロックである。堆積した時期は前期初頭～大木8b式であるが、自然遺物を伴うものは前期の層が主体となる。また、石器による切傷痕を有する人骨(尺骨R)などが出土しており特筆される。

北斜面にはやや東寄りに自然遺物の表面散布する地点がみられる。表土を節分けした資料ではムラサキインコが圧倒的に多く、わずかではあるがアサリやコタマガイなどの砂泥底性の二枚貝類を含んでいる。また、魚類でもマダイの出現率がやや多いなど南貝塚とは魚種の比率がやや異なるようである。表面採集される土器も大木8b式～大木9式が多いこともあり、南貝塚とは時期や構成を異にする貝層の可能性が考えられた。

北貝塚

(2) 調査の方法と目的

本年度は第3次調査で検出した地山の落ち込みと北斜面(北貝塚)の遺物包含層の精査を目的とした。

時間的、経済的事情から調査面積を最小限とする必要があり、第3次調査のN3E9～N3

E27グリッドとN18E3～N9E3グリッドおよび北斜面（6m×3m）に調査区を設定した。尚、地山の落込みについては幅1mのサブトレンチで精査することとした。

(3) 基本層序

I層（Ia層）～III層は第3次調査に共通する。IV層～VI層は地山の落込みを覆う堆積層であり後述する。

(4) 検出された遺構と遺物

台地平坦面上での調査で検出した遺構は、「地山の落込み」、土壇跡9基、小ピット・柱穴26口を検出したほか、「地山の落込み」、のV層中に炭化したドングリ類が集中するブロックを検出している。なお、小ピット・柱穴はセクション面にかかったもの以外は省略する。

地山の落込み（第73図・第76図）

N3E12～N3E27グリッドの北側に幅1mのサブトレンチを設定したところ、東西両端に壁が認められ、更に埋土の堆積状態も遺構のそれに類似するため、自然の落込みではなく人為的な遺構であると判断した。また、N18E3～N9E3グリッドでも同様な状態を呈している。

重複関係はN3E15-1号土壇跡を切るほか、トレンチ内に検出した遺構のほとんどに切られる。

平面形は中央部の地山面を溝状にとり囲む形になるものと思われるが、全体を検出していないので、詳細は不明である。規模は、N3E12～N3E27グリッドでは幅13.2m、深さ1.2mを計る。

壁は、やや外傾するものの、N18E3～N9E3グリッドではほぼ直壁に近い。壁高はほぼ0.3m程度である。

底面は、重複する遺構に切られ、不明瞭であるが、やや凹凸があるもののほぼ平坦で、外側から中央にかけてわずかに傾斜している。

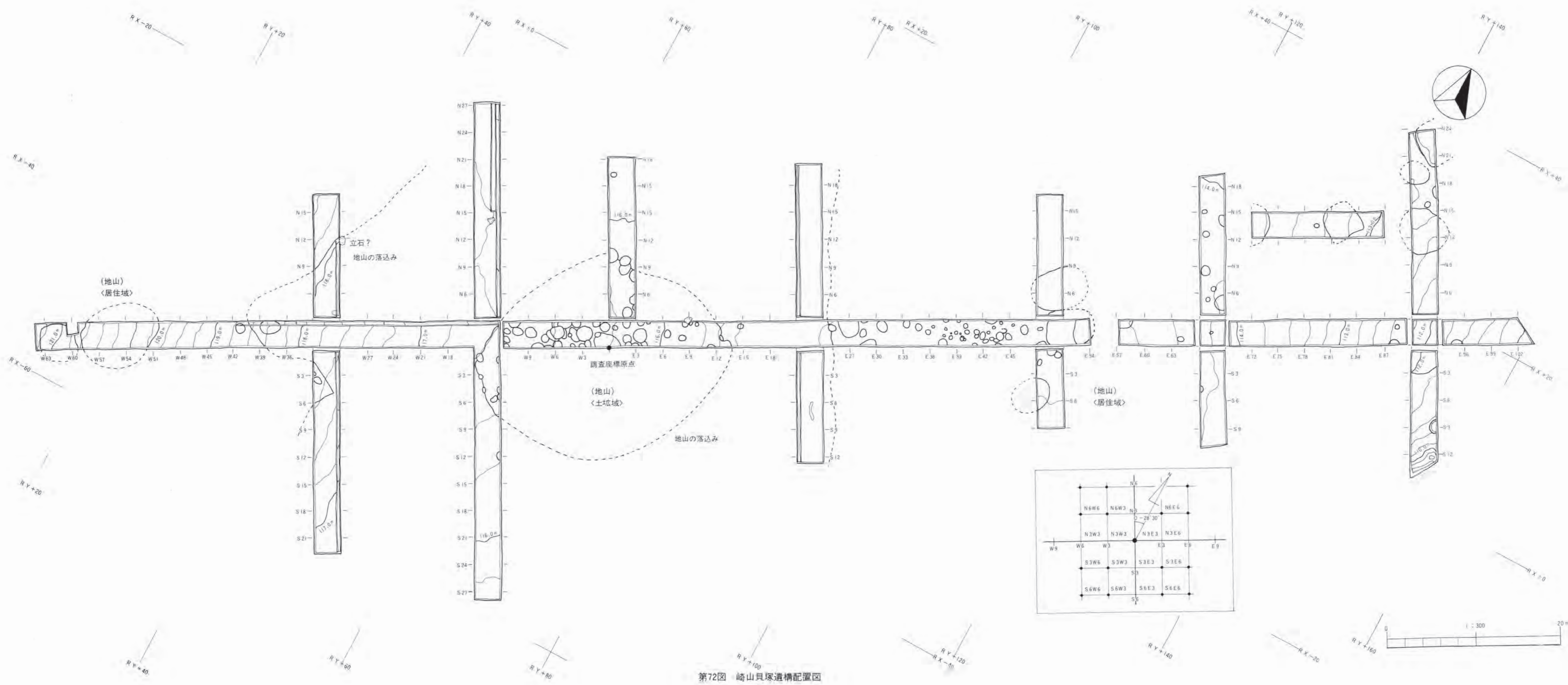
埋土はIV層～VI層が多く混入土や炭化物粒などを含み、人為的堆積の様相を呈するのに対し、III層は遺構の外側まで広く堆積する層で、自然堆積の可能性が高い。また、III層の伴出遺物が縄文時代晩期～弥生時代とIV層以下に比して大きなヒアタスを有している。更に、地山面は固く、埋土最下層と地山面の境界も明瞭であり、自然堆積時のような漸移的な堆積を示していない。IV層～VI層はいずれも固さしまりとも中程度で、特に固い層やしまりのない層はみられない。

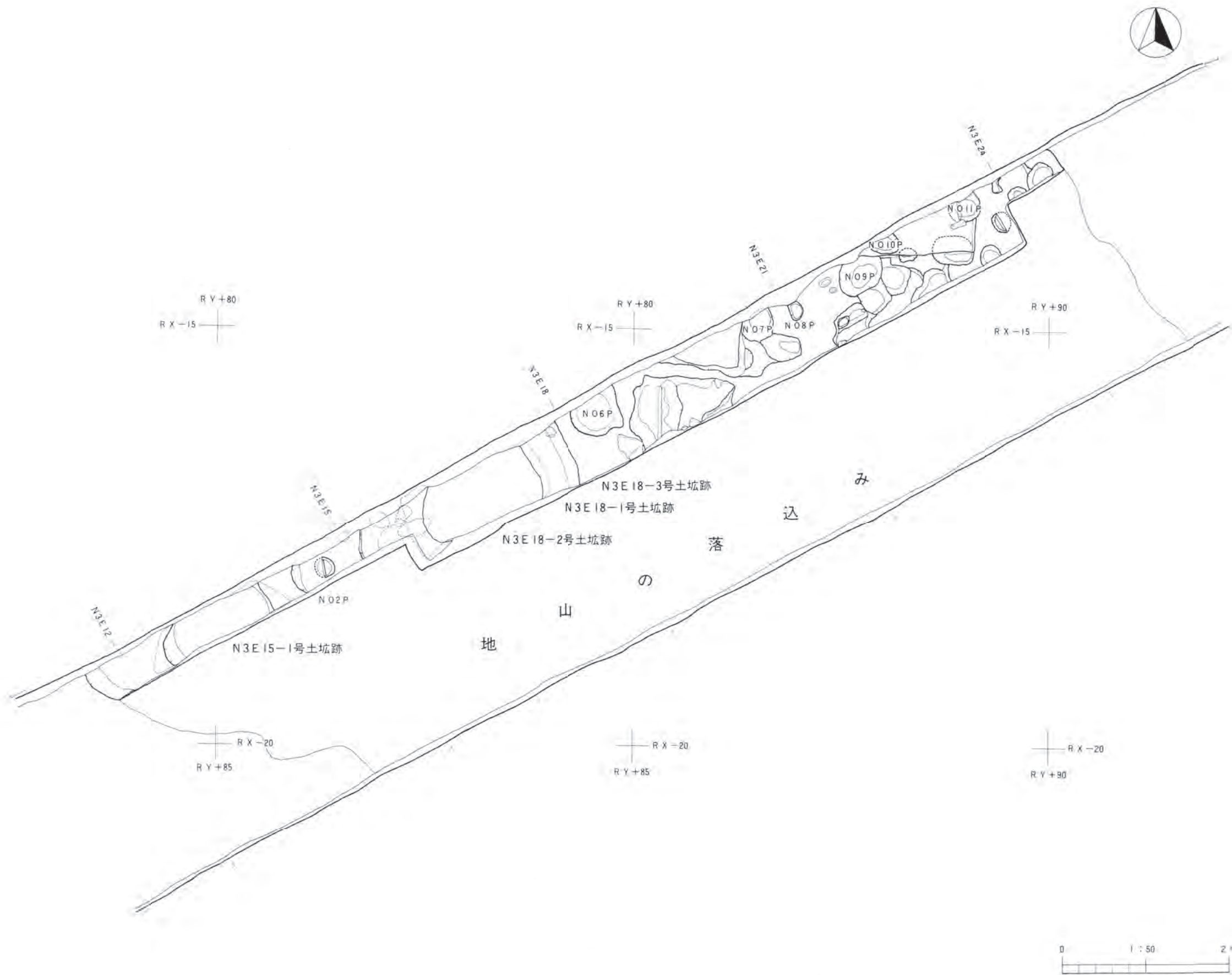
III層は黒褐色粘質土層で、暗褐色土塊をやや多く含む。固さしまりとも中程度である。IV層は暗褐色粘質土層群で、上層部はやや明るい色調を呈するのに対し、下層部はやや暗い。IVa層～IVc層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊をやや多く含むほか褐色土塊を少量含む。IVc層は炭化物粒や焼土粒を含み、IVb層は少量の炭化物粒を含む。IVb層とIVc層から大木10式に伴う土器片が出土している。

IVd層は地山ブロック層で、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊をやや多く含む。

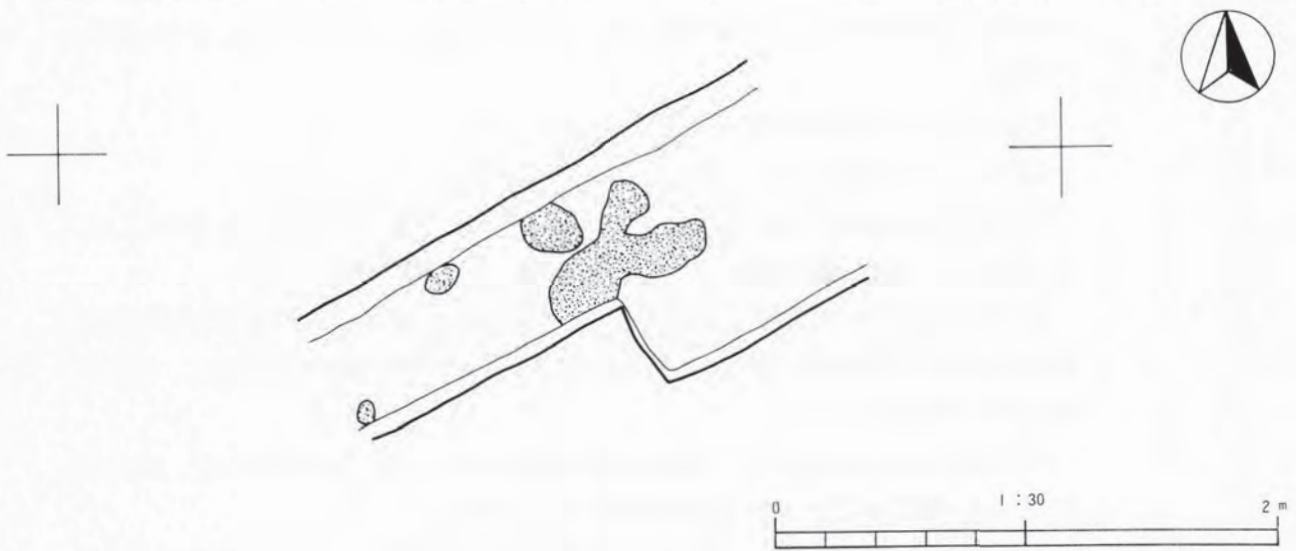
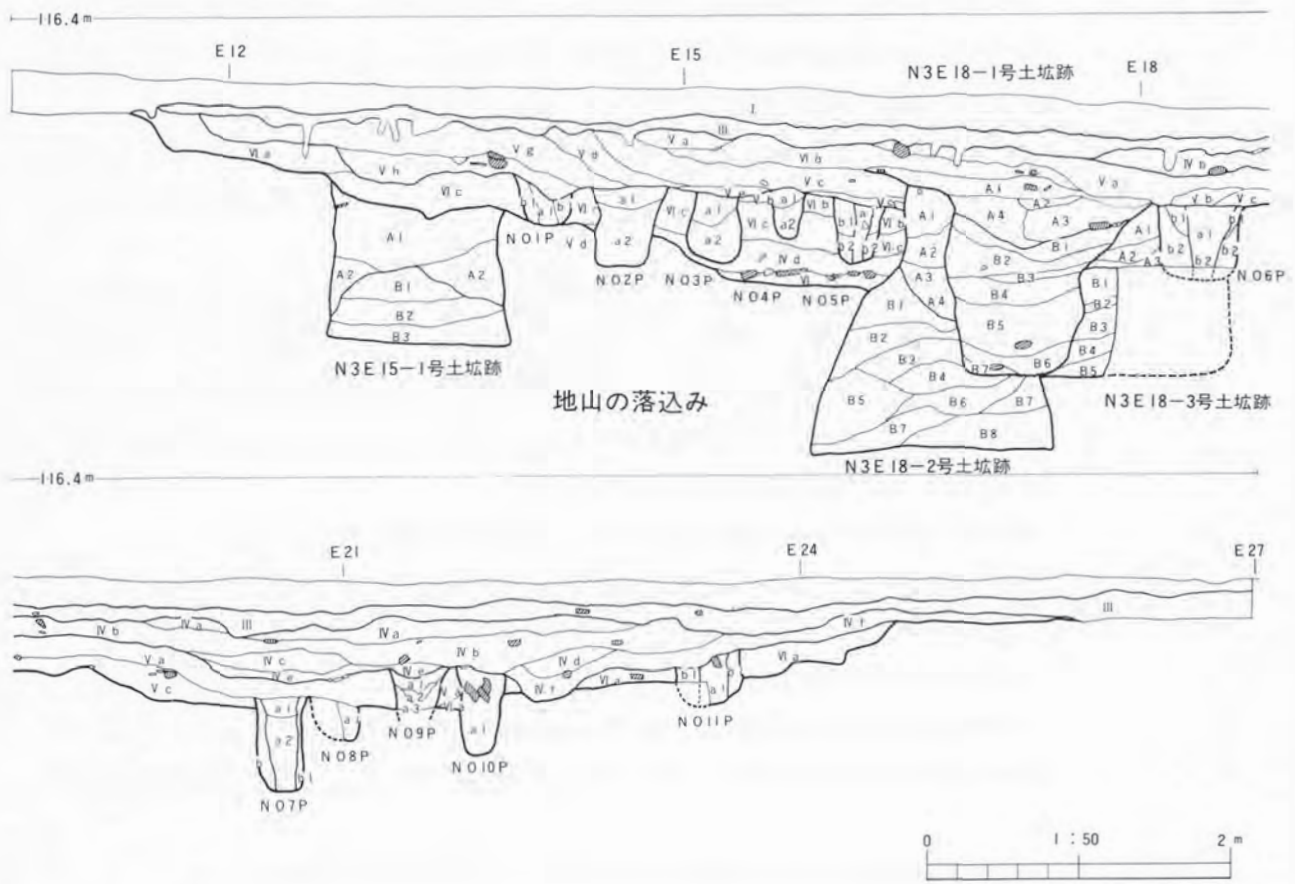


第71図 崎山貝塚周辺地形図





第73図 N3E12-N3E27グリッド平面図



第74図 N3E15～N3E30グリッド土層断面図
N3E18グリッド・ドングリブロック堆積状況

IV e層、IV fは、暗褐色粘質土を基本土とし、炭化物粒を含む。前者は全体にやや赤味を帯び、やや明るい暗褐色土塊と黒褐色土塊を多く含むのに対し、後者はやや明るい暗褐色土塊を多く含み、褐色土塊を少量含んでいる。

V層はやや明るい暗褐色～褐色粘質土層群である。

V a層～V a層は上層より褐色土と暗褐色土が交互に堆積する。いずれも褐色土塊や暗褐色土塊を多く含むが、時にIV c層に多く混入土が含まれる。

V e層・V f層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊を含む。特に炭化物粒の含有が著しい層で、V e層中には炭化したドングリ類の集積がみられた(第74図)。土壌ごと持ち帰り節分けは終了したものの、種名の同定や固体数の算定は行っていない。形態や大きさではミズナラの種子に類似するものの確定できない。また、サンプリング資料中には焼骨片が伴うものの同定できるものはなかった。

V g層～V h層は、褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含む。

V a層上面からは、Na 9 PとNa 10 Pが掘り込まれV c層上面からN 3 E 18-1・2号土痕跡・No. 7 P・No. 8 Pが掘り込まれている。

VI層はやや明るい褐色粘質土層群である。

いずれもやや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊をやや多く含む。VI d層のみは混入土の割合が少ない。また、VI b層・VI d層・VI e層は少量の炭化物粒を含んでいる。

VI層上面からは、Na 1 P～Na 11 P・N 3 E 18-3号土痕跡が掘り込まれている。

出土遺物(第77図～第81図)

遺物層の出土量は比較的多かったものの、破片が多かった。また、土痕跡等の重複が著しく、出土層位の不明瞭なものもあったが、これは図示するのをひかえた。

第77図1・3はIV層から出土したもので、いずれも縄文のみを施す。1は器形・地文に特徴があり、中期末葉に伴うものかと思われる。

2・9・11はV層から出土したものである。9・11はVの層より出土したもので、隆沈線により渦巻文等を施文する。大木8 b式に伴う。11はV h層から出土したもので、体部に縄文のみを施す。

VI層から出土した土器片で図示できるものはなかった。

石器については各層から出土したものを一括して説明する。

第78図23は縦長の剥片を素材とする削器で、側縁部に比較的丁寧な調整を施し刃部としている。22も削器と思われ、側縁部を中心に刃部の調整がみられる。

26は下辺に両面からの調整を施し刃部としたもので、搔器かと思われる。側縁部にも使用時のものと思われる微細な剥離がみられる。27はやや小形の剥片を素材とする搔器で、下辺に角度の大きい刃部を有している。

30は削器かと思われるもので、両側縁に調整が施される。石鏃とも考えられたが、基部に打面を残すなど調整が粗雑で、着柄には向かないと思われる。

第79図33・34は磨製石斧で、いずれも刃部欠損後に施された剥離が伴う。再利用を目的とし

土器

石器

たものか。器面はいずれも丁寧に整形されている。35は全面に敲打痕のみられるもので、磨製石斧の敲打成形時のものと思われる。

36は打製石斧で、だ円形礫に大き目の剥離による調整を施している。両面ともに自然面を残している。側縁部に弱い敲打痕が認められるもののここを刃部としたかは疑わしい。

37・39～41は敲打磨石で、37・39はだ円形扁平礫の側縁部に機能磨面を有している。39はやや小形であり機能磨面の幅も狭い。また、端部に敲打痕が伴っている。

40・41は扁平礫を使用し周縁を機能磨面とするもので、面取りされた様な状態となる。断面形は算盤玉状を呈する。

第80図46は敲打石で、だ円形自然礫の側縁部と端部に敲打痕を有する。素材の形態や機能部の位置は敲打磨石のそれと酷似している。

49は石皿で、両面に凹んだ磨石を有する。擦痕は認められるものの敲打痕は伴わない。

第81図51も石皿片で、1面に磨面を有する。やはり擦痕は認められるものの敲打痕は伴わない。

50は横長の自然礫を用いるもので、両端部を欠く、平坦面に台石状の敲打痕と擦痕石どが伴う。幅が狭く十分な磨石をとれないものであり、石皿というよりは台石に相当するものと思われる。

52は両面に磨面を有し、この間にやや密な敲打痕が認められる。側縁部には溝状の擦痕が多く認められる。大きさや使用痕から、磨石や敲打石といった手に持って使用する用途が想定される。

第78図31は小形の磨製石斧であり、基部には使用時のものと思われる小剥離が伴う。器面は丁寧に整形されている。

32は環状の土製品で、推定される直径は6 cmほどとなる。正面と側面にそれぞれ1条ずつの沈線が施され、結果的には隆沈線状となる。背面は平坦で施文されていない。

N18E 3～N9 E 3 グリッドもほぼ同様であるが、南側の壁を確認したものの北側については未検出である。IV層以下の堆積土を4層確認し、それぞれ前途のIV a層・IV b層・VI a層・VI b層に対応させている。IV a層下面からN18E 3-1号土垢跡が掘り込まれ、IV B層下面からはN12E 3-1・2号土垢跡が掘り込まれている。

出土遺物（第81図～第83図）

第81図60～67・69・70・78・80・87・88・110がIV a層から出土した土器片である。

60～67・69・70は磨消技法により施文されるものである。60は刺突文が伴うもの。66は隆起線上に連続刺突文を施すもの。70は曲線的なモチーフを施文するものなどである。ほぼ中期末葉の大木10式～後期初頭に伴うものであろう。

78・87・88は隆沈線により渦巻文等を施文するもので大体8 b式に伴う。

80は口縁部破片、109は縄文のみを施すもので、前途したもののどちらかに伴うものであろう。

72・108はIV b層から出土したもので、72は口縁部に無文帯を有するもの。108は無文の土器で把手を有するものである。いずれも大木10式に伴うものであろうか。

土器

68・76・83・86はⅢ層から出土したもので、68は磨消技法により施文され、大木9式～大木10式に伴うものであろう。76も同様であるが縦位の縄文区画文を施すと思われ、大木9式に伴うものであろう。他のものは隆沈線により施文されるもので大木8b式に伴う。

第83図114は一方の側縁に刃部を有し削器かとおもわれる。もう一方の側縁にも使用時のものと思われる微細な剥離が認められる。

115・116は敲打磨石である。115は断面三角形の自然礫の1側縁に機能磨面を有する。116はだ円形扁平礫を使用するもので、両側縁と1平坦面に機能磨面を有している。またもう一方の平坦面にはやや密な敲打痕が伴う。

118は敲石と思われ、両側面に敲打痕跡が伴う。やや大き目の剥離は機能部の幅を調整したものであろうと思われる。

N3E15-1号土坑跡(第73図・第74図)

「地山の落込み」に切られる。開口部径1.4m、底部径1.7m、深さ1.0mを計る。断面形はフラスコ形を呈する。

埋土はA層・B層に大別される。A層はやや明るい褐色粘質土を基本とし、褐色土塊を含む。A層は混入土が少ない地山ブロック層で、やや柔らかくしまりがない。

B層は褐色粘質土を基本とし、褐色土塊などを多く含む。いずれの層も炭化物粒を含む。B層は柔らかくしまりがない。

出土遺物は第79図38である。38は敲打磨石で、だ円形扁平礫の側縁に機能面を有する。

N3E18-1号土坑跡(第73図・第74図)

Vc層上面より掘り込まれ、N3E18-2・3号土坑跡を切る。開口部径1.35m、底部径0.6m、深さ1.15mを計る。壁は不整で、やや外傾するが、Vc層の堆積状況に関係するものと思われる。

埋土はA層・B層に大別される。A層は褐色粘質土を基本とし、黄褐色～やや明るい褐色土塊などを多く含む。A層は固いが他の層は固さしまりとも中程度である。A層は最も混入土の量が多い。

B層は暗褐色粘質土を基本とし、褐色土塊などを含む。B層～B₃層に炭化物粒を含むが下層ほど多い、他の層には炭化物粒は含まれない。B₁層～B₃層・B₄層は固さしまりともに中程度であり、B₂層・B₃層はやや柔らかくしまりがない。また、B₁層は柔らかくしまりがない。

出土遺物(4・8・13・14・17・18・25・28・38・44・47)

4・5は磨消技法により縦位の縄文区画文を施すが、モチーフの全容は不明である。大木9式に伴うものであろうか。6は隆起線による磨消技法で渦巻文等を施すもので、大木9式に伴う。

8・13・14・17・18は隆沈線や平行沈線などにより施文されるもので、大木8a式～8a式に伴う。

25・28は削器で、側縁部を中心に刃部の調整が認められる。25は下辺にも調整がみられる。

38は敲打磨石で、だ円形扁平礫の1側縁に機能磨面を有する。

44は敲石で、全面に敲打痕が認められるが、特に下端部に著しい。

47は石皿で、1面に凹んだ磨面を有する。周辺には擦痕や敲打痕がみとめられる。

N 3 E 18—2号土坑跡（第73図・第74図）

V c層上面より掘り込まれ、N 3 E 18—1号土坑跡に切られ、NE 18—3号土坑跡を切る。開口部径は不明で、底部径1.6m、深さ1.7mを計る。断面形はフラスコ形を呈する。

埋土はA層とB層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。A₁層にのみ少量の炭化物粒が含まれる。A₁層・A₂層は固さしまりとも中程度でA₃層・A₄層はやや柔らかくややしまりが無い。B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含む。B₁層のみはやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を多く含んでいる。B₁層は固さしまりとも中程度で、B₂層～B₃層はやや柔らかくややしまりが無い。B₄～B₅層は柔らかくしまりが無い。

出土遺物は縄文土器片などがあるもののいずれも細片で図示できなかった。

N 3 E 18—3号土坑跡（第73図・第74図）

V c層下面より掘り込まれ、N 3 E 18—1・2号土坑跡・No. 6 Pに切られる。

開口部径、底部径ともに不明で、深さ1.15mを計る。断面形は不明である。

埋土はA層・B層に大別される。A層はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色～暗褐色土塊を多く含む。A₂層が最も明るい色調を呈している。いずれの層もやや柔らかくしまりは中程度である。B層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい暗褐色塊などを多く含む。B₂層のみはやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊を多く含む。B₁層～B₃層はやや柔らかくややしまりが無い。B₄層～B₅層は柔らかくしまりが無い。

出土遺物（10・12・21・24・29）

10・12は降沈線により渦巻文を施すもので、大木8 b式に伴う。

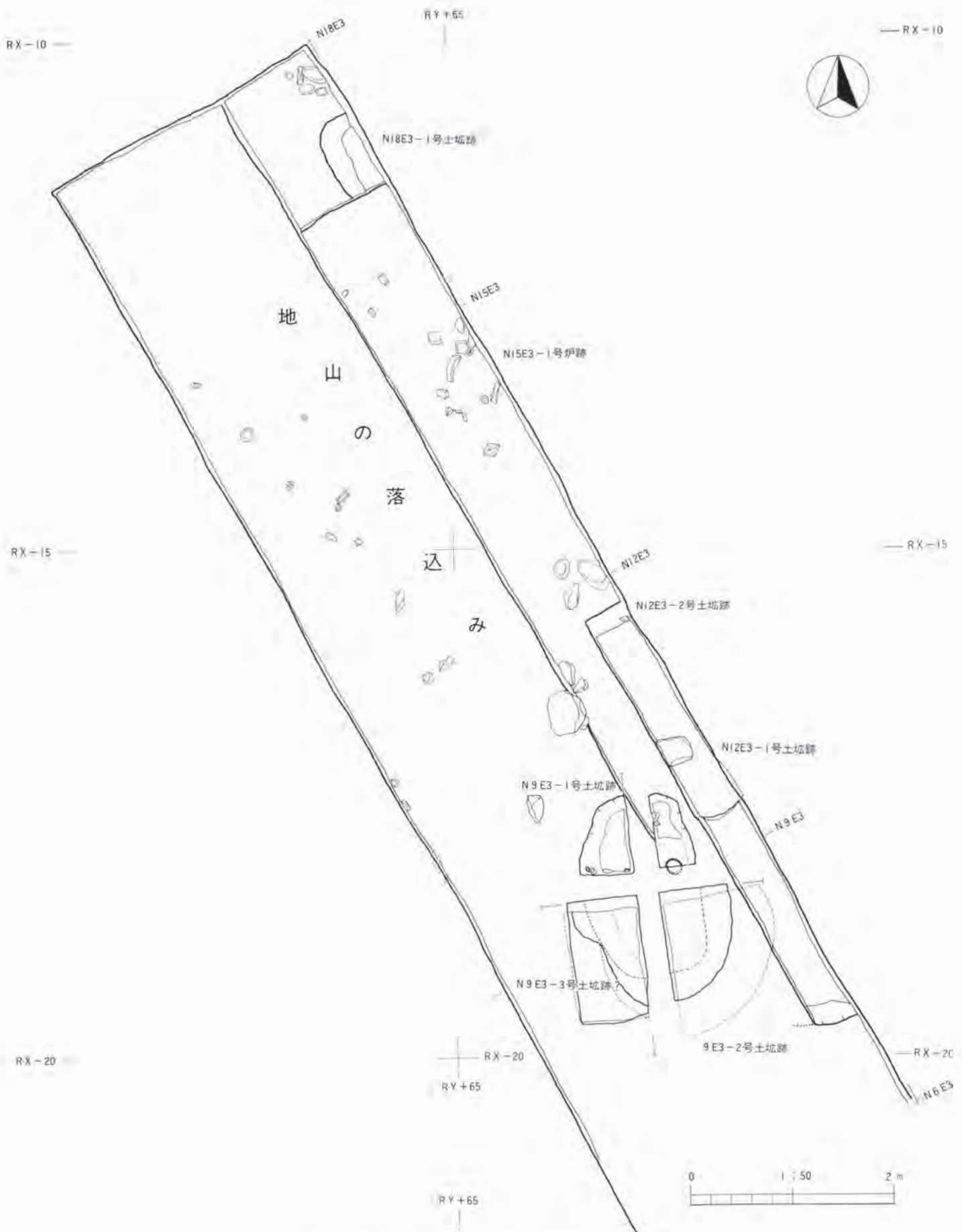
21は無柄凹基の石鏃で、基部が大きくえぐれている。また、側縁部も若干えぐれている。全面にわたり丁寧な調整がみられる。

24は削器で、側縁部にやや湾入する刃部を有している。29も小形ではあるが削器かと思われ、全面にわたり調整される。

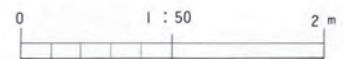
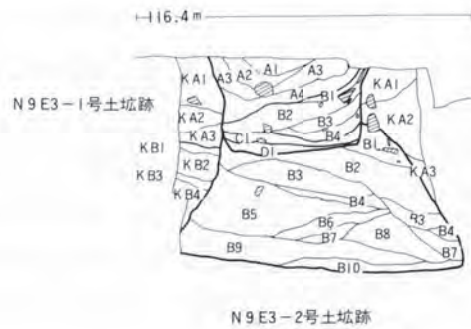
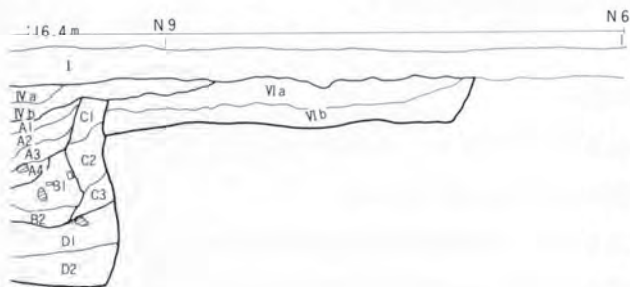
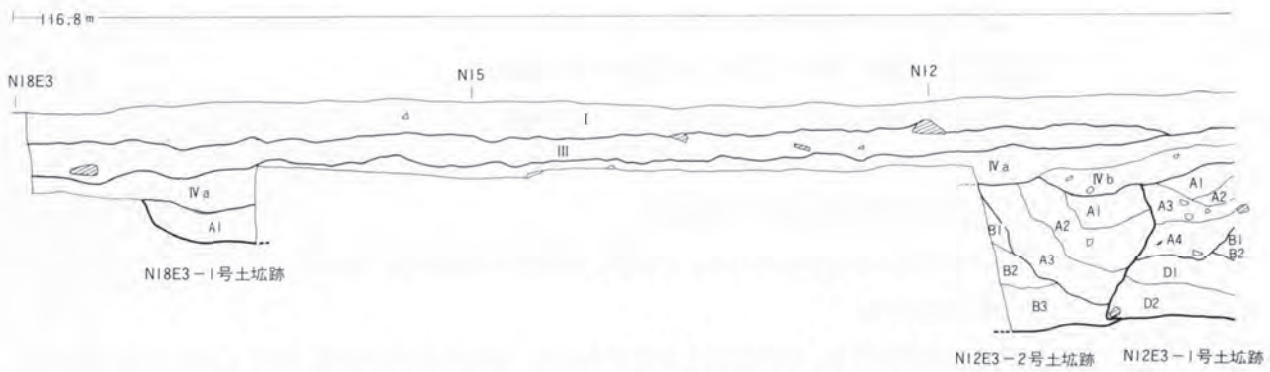
柱穴群（第73・74図）

N 3 E 12～N 3 E 27グリッド中に検出した柱穴やピットを一括する。セクション面に検出した柱穴類は11口あり、西側から番号を付した。掘り込まれた面によりいくつかのグループに分けられる。

つまり第1のグループはV c層上面から掘り込まれたもので、No. 9 P・No. 10 Pが担当する。第2のグループはV層上面から掘り込まれたもので、No. 7 P・No. 8 Pが担当する。第3のグループはV c層下面から掘り込まれたもので、No. 6 Pが担当する。第4のグループはVI層上面から掘り込まれたもので、No. 1 P～No. 5 P・No. 11 Pが担当する。尚、第3と第4グループは同一のものである可能性もある。また、VI層上面に堆積するV e層（炭化ドングリ類の集積）が直接



第75図 N18E3 - N9E3 グリッド平面図



第76図 N18E3～N9E3グリッド土層断面図

第4グループのピットを覆っている。

柱痕跡を確認したものはNo.1 P・No.5 P・No.6 P・No.7 P・No.11 Pがある。いずれも掘り方より暗いややしまりのない土が堆積している。

出土遺物は16・19がある。16はNo.3 Pより出土したもので、2条の平行隆起線により渦巻文等を施す。大木8 a式～大木8 b式に伴うものである。

19はNo.2 Pより出土した無柄凹基の石鏃である。両面にわずかではあるが主要剥離面を残す。

N18E 3-1号 (第75図・第76図)

IV a層下面より掘り込まれる。平面形、規模は不明である。壁はややゆるやかに立ち上がり壁高0.2mを計る。

埋土はA層のみで、褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。固さしまりともに中程度である。

出土遺物は79・84がある。79は隆沈線による施文がみられる。また、体部文様帯の上端には連続刺突文がみられる。大木8 b式に伴う。84も同様であろう。

N12E 3-1号土坑跡 (第75図・第76図)

IV b層下面 (VI a層上面) より掘り込まれ、N12E 3-2号土坑跡を切る。開口部径1.2m、底部径1.45m、深さ1.25mを計る。断面形はフラスコ形を呈する。

埋土はA層・B層・C層・D層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。A₁層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊などを多く含む。A₂層は黒褐色土塊や炭化物粒を多く含む、やや柔らかくしまりがない。A₁層～A₂層は固さしまりとも中程度である。いずれの層も南から北へ流れ込むように堆積する。B層も暗褐色粘質土を基本土とするが、A層とは堆積状況が異なる。B層はA₁層に類似し、黒褐色土塊や炭化物粒を多く含む。やはりやや柔らかくしまりがない。C層は壁の崩壊土でやや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色～暗褐色土塊を含む。D層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。柔らかくしまりがない。

出土遺物 (58・59・71・73・75・82・85・105・112・113・117)

59は磨消技法によりやや幅の狭い縄文帯を施すもので、後期初頭に伴うものか。

58・71・73・75は磨消技法による曲線的な施文などがみられるもので、大木10式に伴う。

77は平行沈線を施すもので、口唇部に隆沈線状の施文がみられる。大木8 b式に伴う。

82・85・105は隆沈線により渦巻文等を施すもので、大木8 b式に伴う。104はやや古手である。

112は無柄平基の石鏃で、両面に自然面を残す。

113は削器かと思われ、側線に刃部を有する。

117は敲石で、側縁の全周に敲打痕がみられる。また、使用時のものと思われる剥離も伴う。

N12E 3-2号土坑跡 (第75図・第76図)

IV b層下面 (VI a層上面) より掘り込まれ、N12E 3-1号土坑跡に切られる。開口部径、

底部径は不明である。深さ1.0mを計る。

埋土はA層・B層に大別される。A層はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊を含む。A₁層・A₂層は炭化物粒を少量含む。いずれも固さしまりとも中程度である。B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や明るい褐色土塊を多く含む。固さしまりとも中程度である。

出土遺物 (91・96・99・102・104)

92～94・101・104はキャリパー形深鉢で、口縁部に2条の平行隆起線による施文がみられる。隆起線間の調整は弱い。大木8 b式に伴うがやや古手である。95もキャリパー形深鉢であり92～94等に類似するものか。102は口縁部の外傾する深鉢で、同様な技法により施文される。96は口縁部文様帯に波状の隆起線を施す。99は口縁部文様带上端に円文等を施しこれから2条の隆起線が垂下する。大木8 b式に伴うがやや新しい部類である。

N9E3-1号土坑跡 (第75図・第76図)

IV層上面に検出しN9E3-2号土坑跡等を切る。平面形はほぼ隅丸方形を呈し、開口部径は長軸方向1.7m、短軸方向1.05m、深さ0.7mを計る。壁は直である。床はほぼ平坦であるが、北から南へ傾斜している。

埋土はA層・B層・C層・D層に大別される。A層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊などをやや多く含む。いずれも固くしまりは中程度である。炭化物粒を含むが、A₁層はA₂層より少ない。B層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。B₁層のみは褐色粘質土を基本土とし、炭化物粒を少量含む。やや固くしまりは中程度である。他の層は炭化物粒を多く含みやや柔らかくしまりは中程度である。C層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色～暗褐色粘質土を基本土とし、やや明るい暗褐色～褐色土塊を含むほか炭化物粒をやや多く含む。固さしまりとも中程度である。

出土異物 (53～57・74・81・89・91・97・98・103・106・107・109・111)

53は磨消技法によるもので、口縁部の内面と外面に刺突文がみられる。54～57は隆起線を施すがやはり磨消技法に伴う。これらはいずれも大木10式に伴う。

74は口縁部のやや外反する深鉢で、体部に磨消技法による縦位だ円形の縄文区画文が施される。大木9式に伴う。

81は口縁部のやや外反する深鉢で、体部に隆沈線による懸垂文や文渦巻を施す。89は沈線により施文されるもので、平行沈線や波状文を施す。90も沈線により渦巻文等を施す。いずれも大木8 b式に伴う。

91・97は同一固体片と思われる深鉢で、口縁部に隆起線によるだ円形区画文を施し、体部に沈線による波状文等の施文がみられる。103はキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯を有するが、文様帯内部は施文されない。大木8 a式に伴う。

98もキャリパー形深鉢で、2条の平行隆起線による施文がみられる。大木8 b式の古手であろうか。105は口縁部がわずかに内湾する深鉢で、やはり2条の平行隆起線により渦巻文を施す。大木8 b式の古手に伴うものかと思われる。107は隆起線と平行沈線により施文されるもので、大木8 a式～大木8 b式に伴う。

109は燃糸文（r）を地文とする深鉢で、110はR—L単節斜縄文を地文とする深鉢である。

N9E3—2号土坑跡（第75図・第76図）

IV層上面に検出し、N9E3—1号土坑跡に切られる。平面形は円形を呈するものと思われ、開口部径は不明で、底部径約2.0m、深さ1.4mを計る。断面形はフラスコ形を呈する。

埋土はA層・B層に大別される。A層は壁際に堆積し、やや明るい暗褐色粘質土を基本とし、褐色土塊などを含む。やや固くしまりは中程度である。A層のみは褐色粘質土を基本とし、暗褐色土塊などを含む。B層は暗褐色～褐色粘質土を基本とし、暗褐色土塊やや明るい褐色土塊を多く含む。やや柔らかくしまりがないもののB層とB₂層はやや固くしまりは中程度である。出土遺物は少量の縄文土器片などがあるものの図示できるものはなかった。

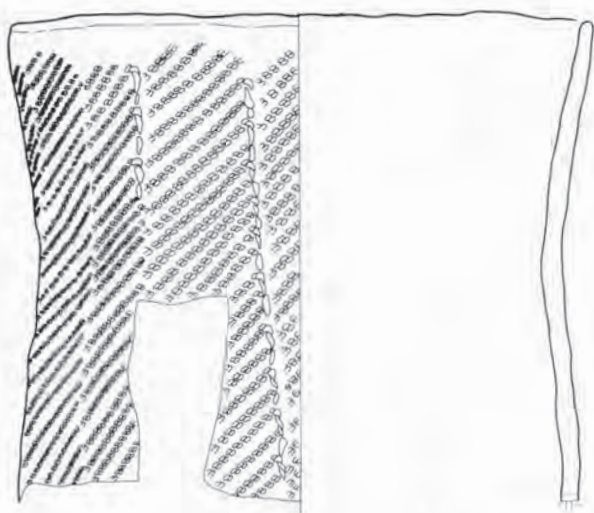
N9E3—3号土坑跡（？）（第75図・第76図）

IV層上面から掘り込まれた土坑跡と思われるものの明瞭なプランを検出できず、土層断面に一部分が検出されたのみで、平面形・規模は不明である。N9E3—1・2号土坑跡に切られる。

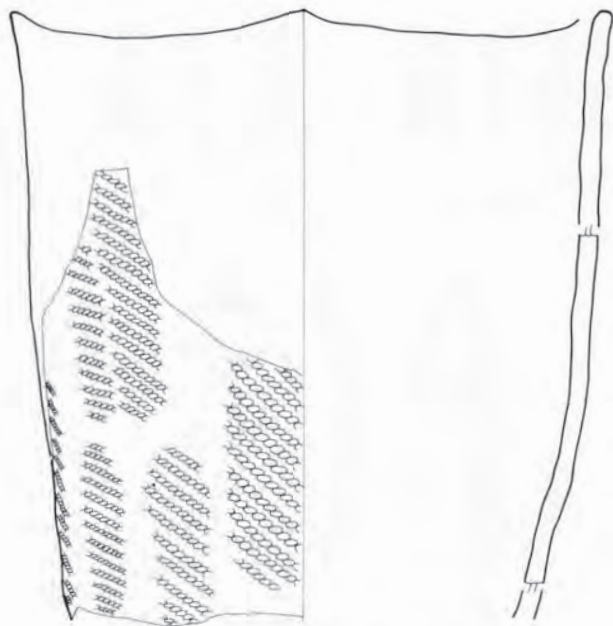
埋土はA層とB層に大別される。A層は褐色粘質土を基本とし、暗褐色土塊などを含む。固いがしまりは中程度である。A層は他の層よりやや暗い。B層はやや明るい暗褐色～褐色粘質土を基本とし、炭化物粒などを多く含む。土層よりやや暗い層と明るい層が交互に体積する。いずれもやや固くしまりは中程度である。出土遺物は少量の土器片などがあるものの図示できるものはなかった。

N15E3—1号炉跡（？）（第75図・第76図）

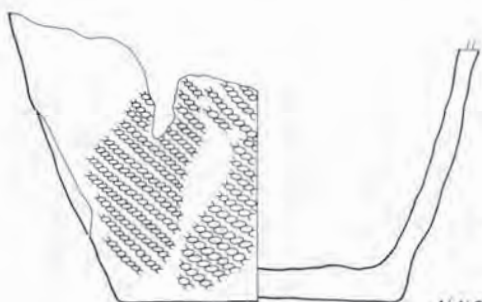
IV層上面に検出した石囲炉とおもわれる遺構である。炉石の一部を検出したのみで、掘り下げていないために炉床の状態や構築方法は不明である。規模は東西で0.55m、南北で0.55m以上を計る。伴出する遺物はない。



1(N3E 18, IV層)



2(N3E 15, V h層)



3(N3E 18, VI層)



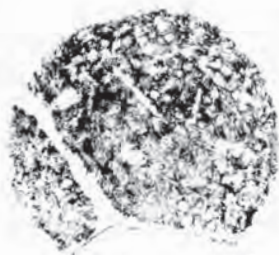
4(N3E 18-1号土壇跡, B2層)



5(N3E 18-1号土壇跡, A3層)



6(N3E 18-1号土壇跡, A3層)



7(N3E 18-1号土壇跡, A3層)



8(N3E 18-1号土壇跡)



9(N3E 21, V a層)



10(N3E 18-3号土壇跡, A3層)



11(N3E 21, V a層)



12(N3E 18-3号土壇跡, A1層)



13(N3E 18-1号土壇跡, A層)



14(N3E 18-1号土壇跡, B3層)



15(N3E 18)



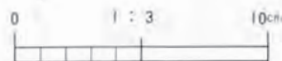
16(N3E 18)



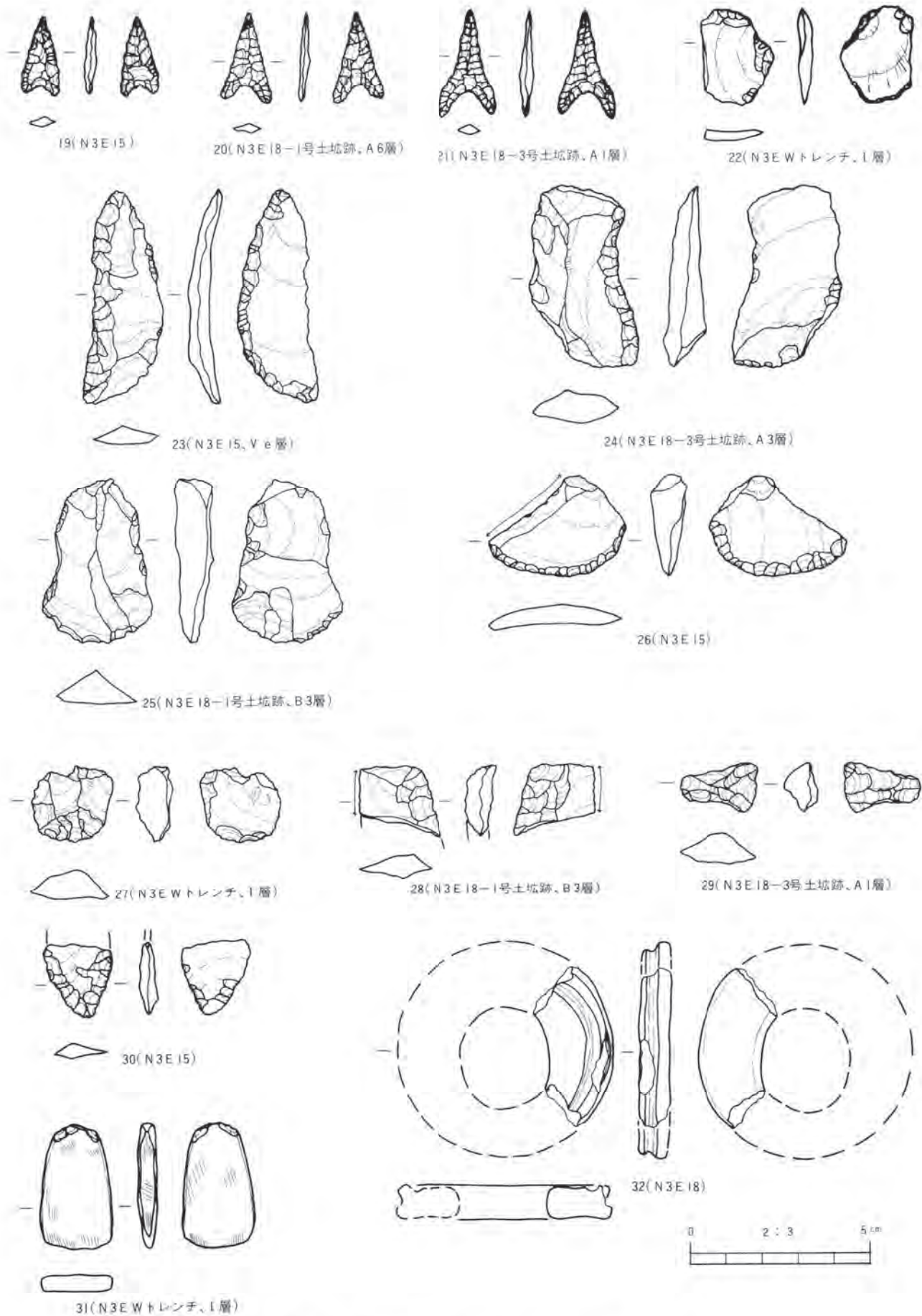
17(N3E 18-1号土壇跡, B2層)



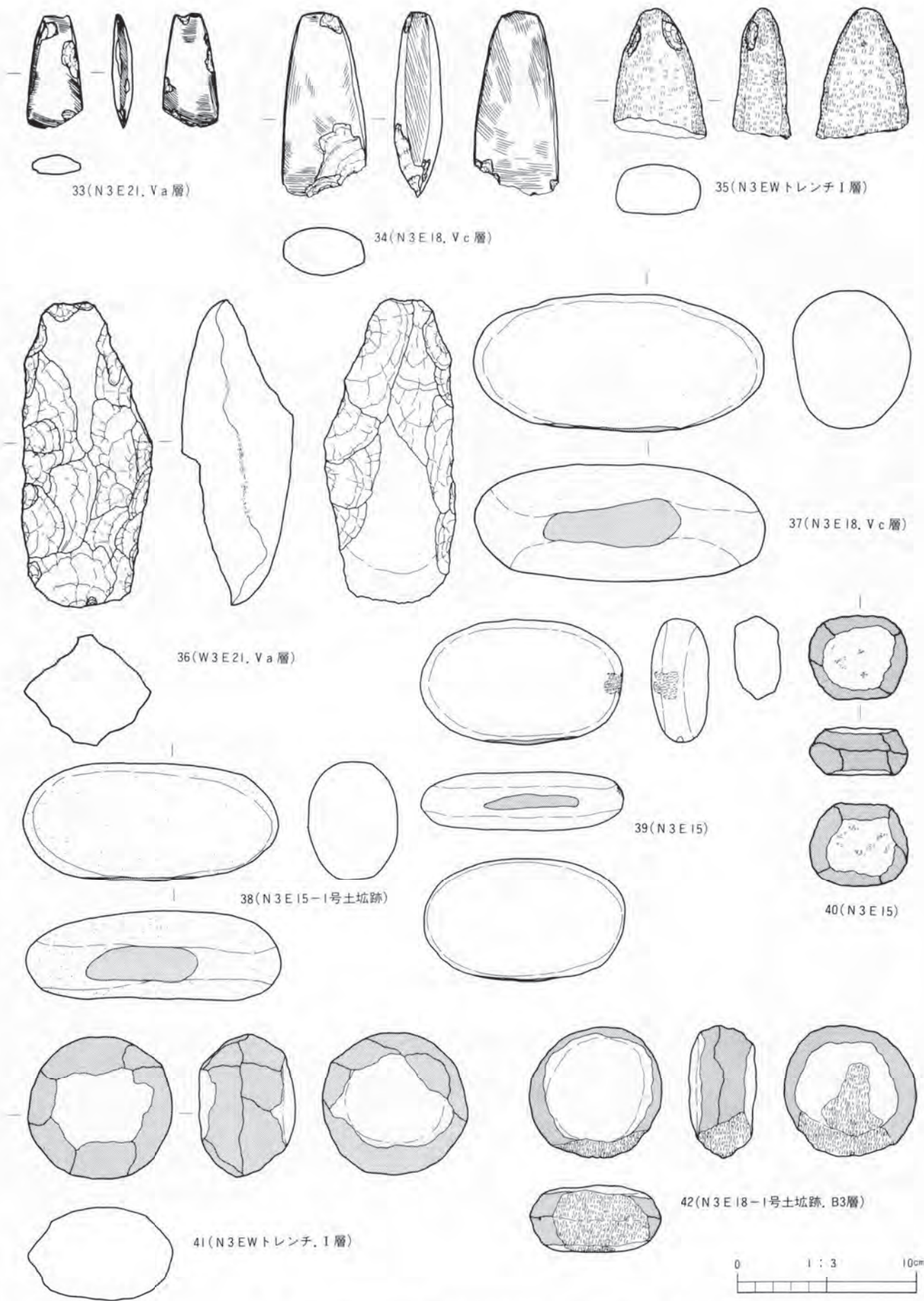
18(N3E 18-1号土壇跡, A層)



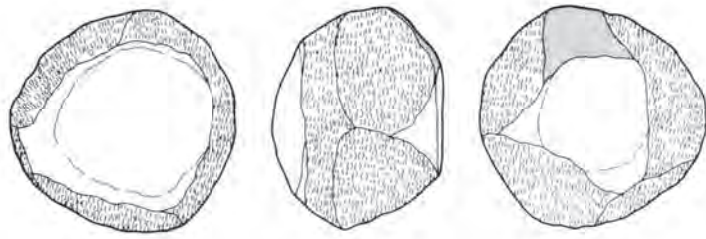
第77図 N3E 12~N3E 27グリッド出土遺物(1)



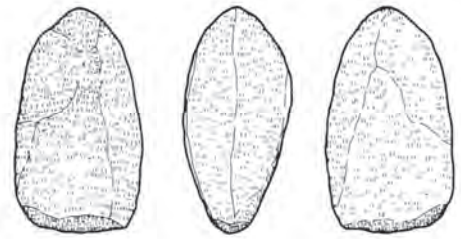
第78図 N3E12~N3E27グリッド出土遺物(2)



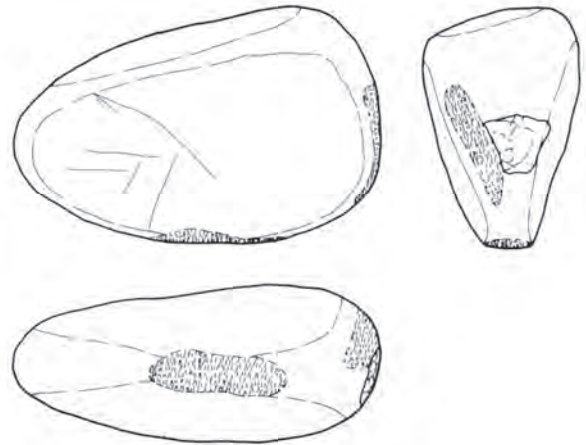
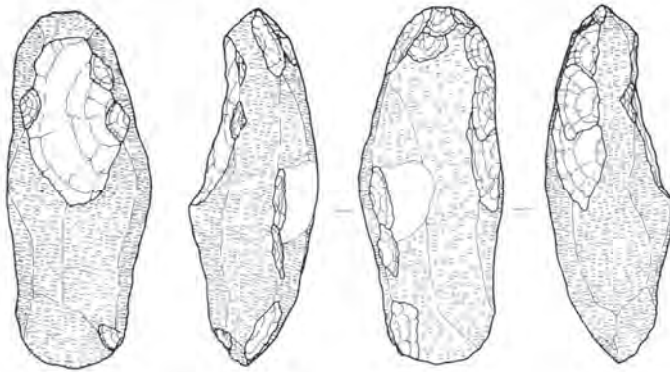
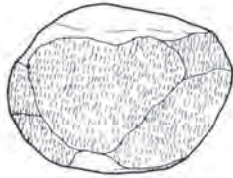
第79図 N3E12~N3E27グリッド出土遺物(3)



43(N3E18-3号土壇跡、A2層)



44(N3E18-1号土壇跡、A3層)

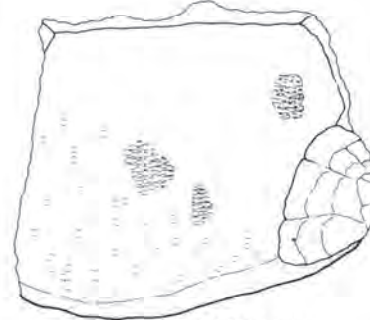
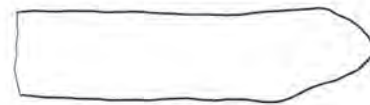
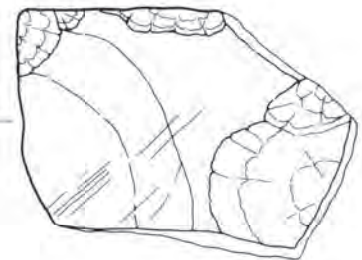


45(N3EWトレンチ土壇跡)

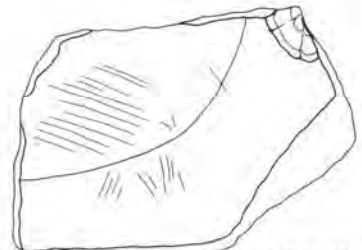
46(N3EWトレンチ、1層)



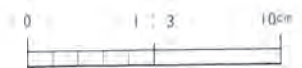
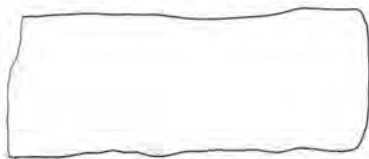
47(N3E18-1号土壇跡、A4層)



48(N3E15)



49(N3E18)



第80図 N3E12~N3E27グリッド出土遺物(4)



策81図 N3E12~N3E27グリッド出土遺物(5)
N9E3~N18E3グリッド出土遺物(1)



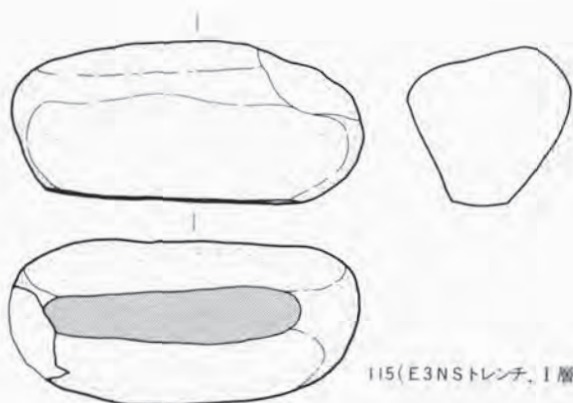
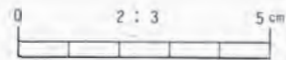
第82図 N9E3~N18E3グリッド出土遺物(2)



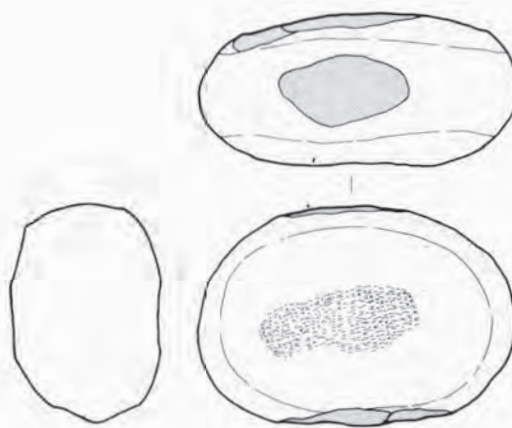
112(NI2E3-1号土坑, A層)

113(NI2E3-1号土坑, B層)

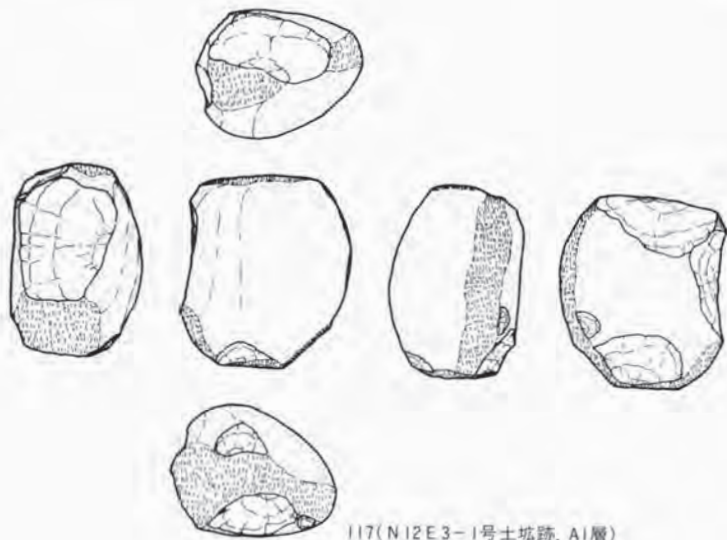
114(NI5E3, III層)



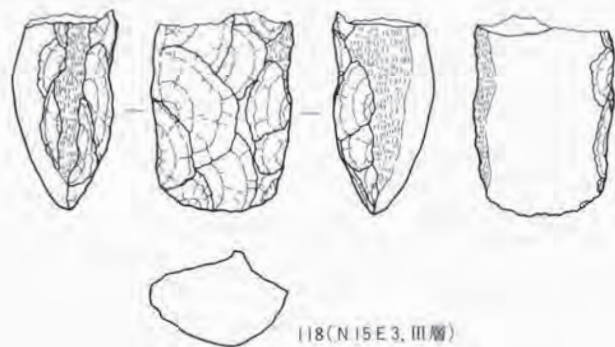
115(E3NSトレンチ, I層)



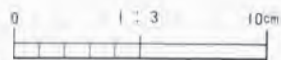
116(NI5E3, III層)



117(NI2E3-1号土坑跡, AI層)



118(NI5E3, III層)



第83図 N9E3-NI8E3グリッド出土遺物(3)

(5) 北斜面調査区 (第82図～84図)

北斜面における遺物包含層や貝層の有り方を探るために斜面ほぼ中央に3 m×6 mの調査区を設定した。

表土(1層)直下が遺物包含層となるが、検出面での肉眼による観察では自然遺物の集積はみられなかった。経済的や時間的な制約から調査区北西隅に検出した最上層(N₁層)から4層を掘り上げたのみで調査を中止した。来年度以降機会をみてボーリング調査を併用しながら再度精査を実施することとしたい。尚、掘り上げた土壌はすべて持ち帰り1 mmメッシュでの水洗選別を実施している。

(a) 層序 (第83図)

N₁層 やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、シルト質の褐色土塊を多く含むほか、暗褐色土塊を含む。また、少量の炭化物粒や骨片などを含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。掘り上げた土の総重量は70,120 g、総体積は81,300ccである。

N₂層 暗褐色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊を多く含むほか、褐色土塊を少量含む。また多量の炭化物粒と少量の骨片などを含む。やや柔らかくややしまりが無い。掘り上げた土の総重量は57,900 g、総体積は72,650ccである。

N₃層 上層より明るい暗褐色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊、暗褐色土塊、褐色土塊などを多く含む。また、少量の炭化物粒や骨片などを含む。やや柔らかくややしまりが無い。掘り上げた土の総重量は68,590 g、総体積は88,340ccである。

N₄層 褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を含む。また、少量の骨片を含むものの炭化物粒は含まない。固さしまりともに中程度である。掘り上げた土の総重量は29,590 g、総体積は35,700ccである。

また、N₅層は検出のみに留めたが、暗褐色粘質土を基本土とし、やや広範囲に堆積する層のようである。

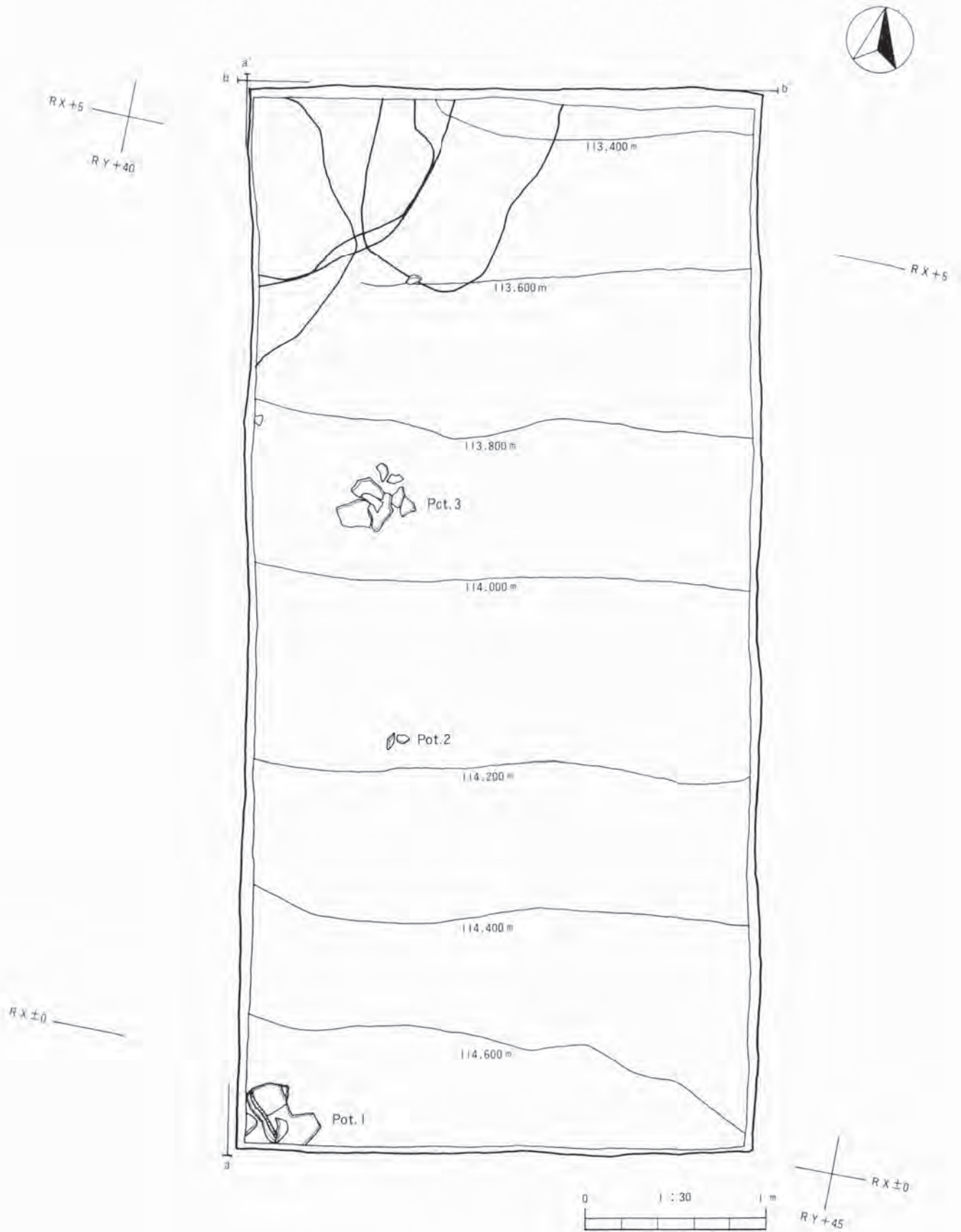
(b) 出土遺物 (第85図～第88図)

土 器

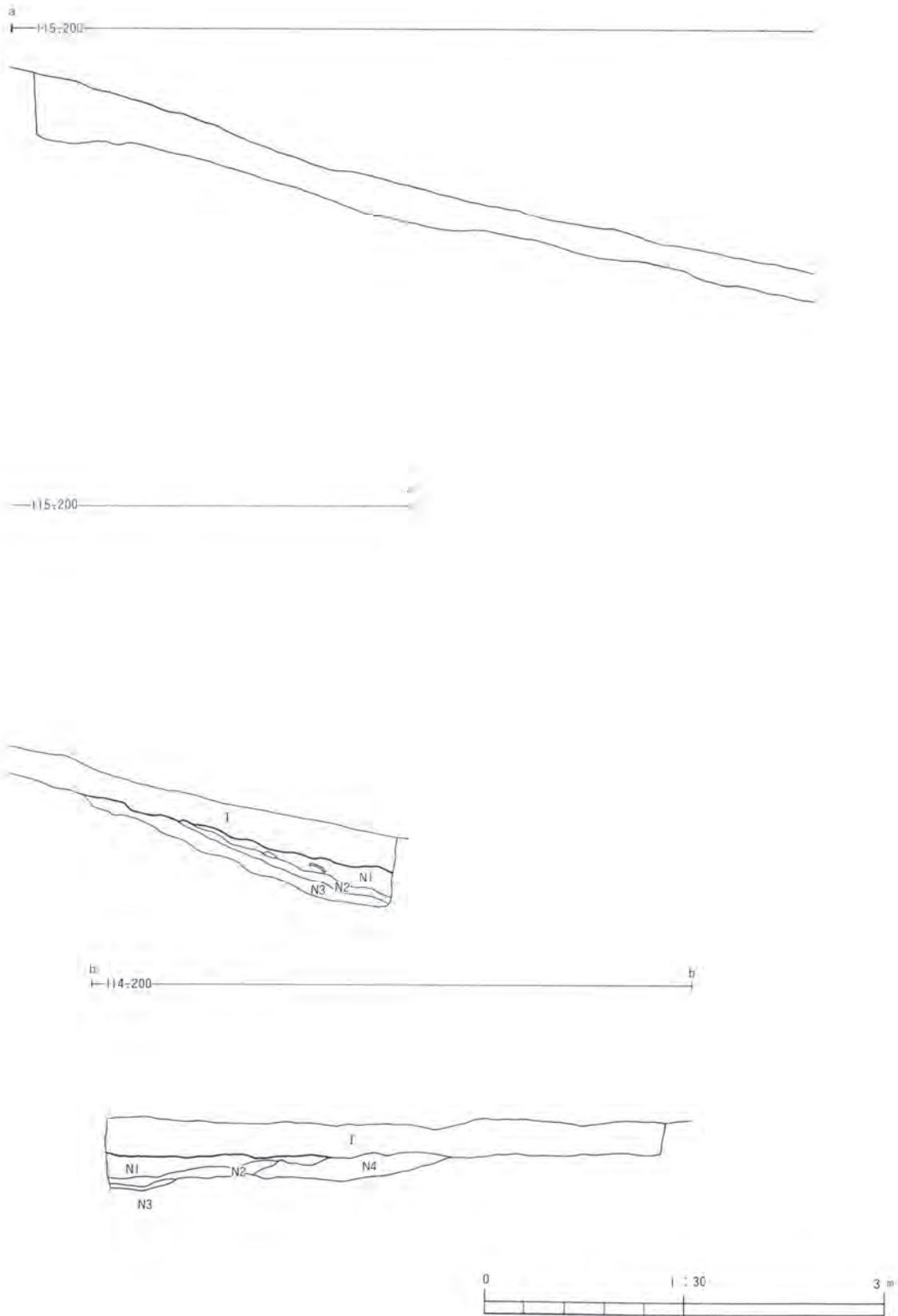
N₁層から出土した土器は2である。体部に膨らみを有する深鉢で、口縁部はやや外反する。頸部に横位3条の縄文原体圧痕文を施す。体部にはL-R単節斜縄文を横方向に回転するが、最上位のものは斜方向に回転させ、上記の原体圧痕文とともに装飾的效果をねらっている。大木7b式に伴う。

N₂層から出土したものは4・5で、いずれも体部破片である。4は結節された原体を施し、5は木目状然糸文を施す。

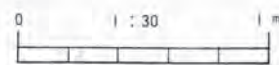
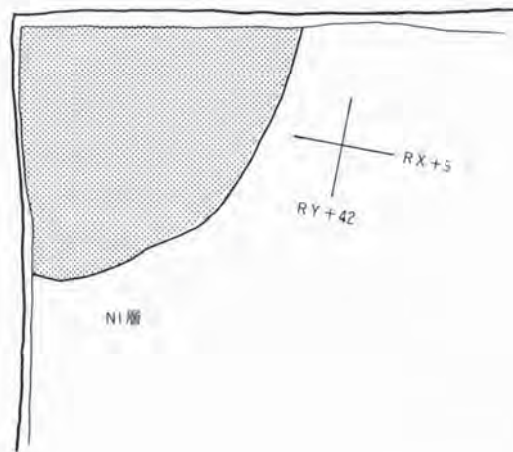
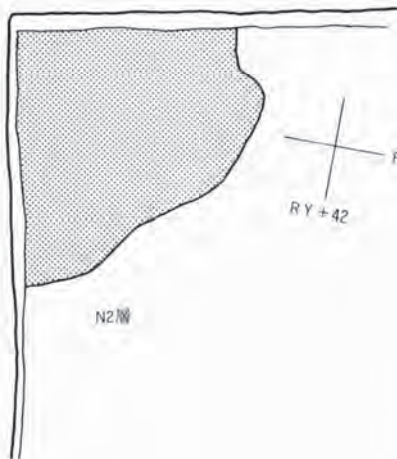
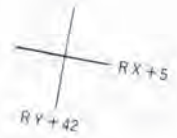
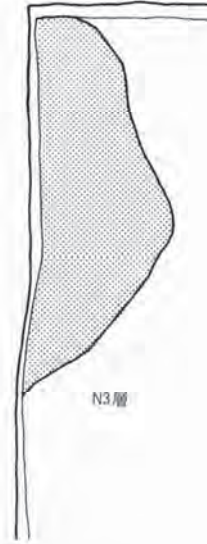
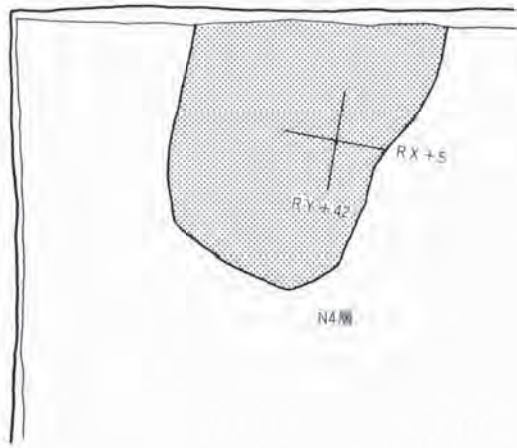
N₃層から出土したものは6～11である。6は凡形を呈する把手の破片で中央部に円孔(すかし)を穿つ。頂部には横位3条の縄文原体圧痕文を施す。また、円孔の下部には同様技法に



第84図 北斜面調査区平面図



第85図 北調査区土層断面図



第86図 北調査区堆積層平面図

よる連続した円文あるいは弧状文が施される。7も縄文原体圧痕による連続した弧状文を施す。これらは大木7b式に伴う。9は沈線による鋸歯状文や渦巻文等を施し、一部に竹管による連続刺突文が伴う。大木7a式に伴う。

8は隆帯上に縄文原体圧痕を施すもので、円筒土層B式に伴う。

10は撚糸文を施すものである。11は胎土に植物繊維を含むもので、口唇部にだ円形の圧痕を連続させる。体部には地文のみを施す。大木1式もしくはその前型式に相当する。

N層から出土したものは12~17である。12は口縁部文様帯に横位4条の縄文原体圧痕と同様技法による連続した弧状文を施すが、途中で隆起線による渦巻文等を配し、文様帯を区画している。14は隆起線によりだ円形に分割された文様帯内に横位2条の縄文原体圧痕を施す。これらも大木7b式に伴うが下層のものよりやや新しい可能性がある。

15~17は、やや幅の広い沈線により施文されるものもある。18は几形の把手で、下端に2条の縄文原体圧痕文を施す。13は口縁部に蛇行する隆帯を配し、この上に縄文原体圧痕文を刻目状に施すものである。これらはいずれも大木7b式の新しい部分に伴うものと思われる。

検出面から出土したものは1・3・19~30である。1・3・19・23はそれぞれpot. 1~3としたもので、本来は遺物包含層に包まれるものである。他のものは一部表土層(1層)のものを含んでいる可能性がある。

1は調査区南西隅に検出したものである(pot. 1)。口縁部の外反するやや大形の深鉢で、頸部に横位の隆帯をめぐらせ、この上に円形~だ円形の連続刺突が伴う。口縁部から体部にかけて地文として網目状撚糸文を施す。23は1に伴い出土したもので、口縁部を複合口縁とする。口縁部上端には隆帯を施す。23は大木7aの式に伴う。1は前期に伴うものかと思われる。

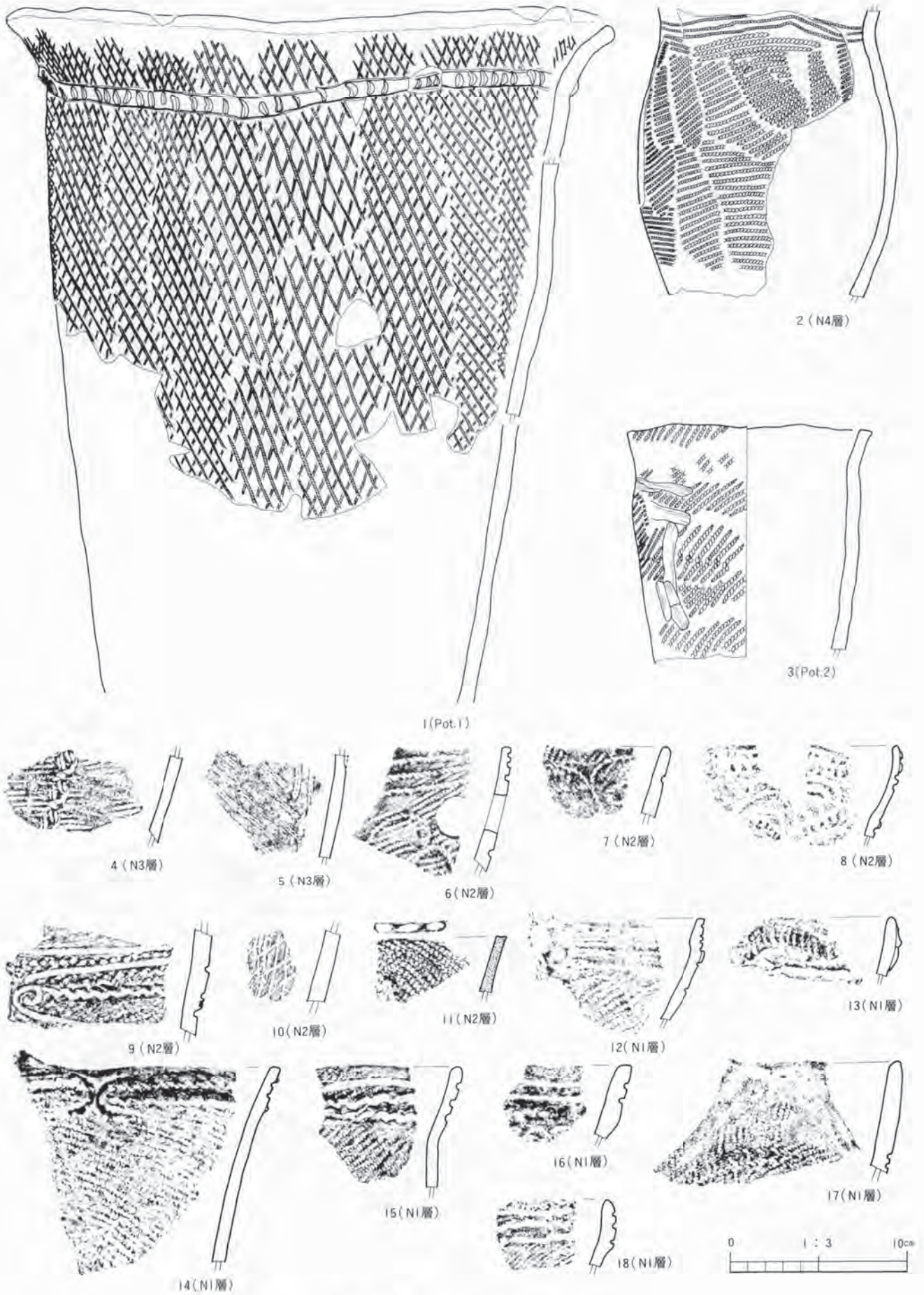
3は調査区中央よりやや北寄りに検出した(pot. 2)。口縁部からやや外反する深鉢で、体部にL-R単節斜縄文を横方向に回転する。一部にケズリ状の痕跡が見られるものの器面調整ではないと思われる。

19は調査区中央よりやや北側に検出した(pot. 3)。体部下半に膨らみを持つ深鉢で、地文としてL-R単節斜縄文を縦方向に回転する。

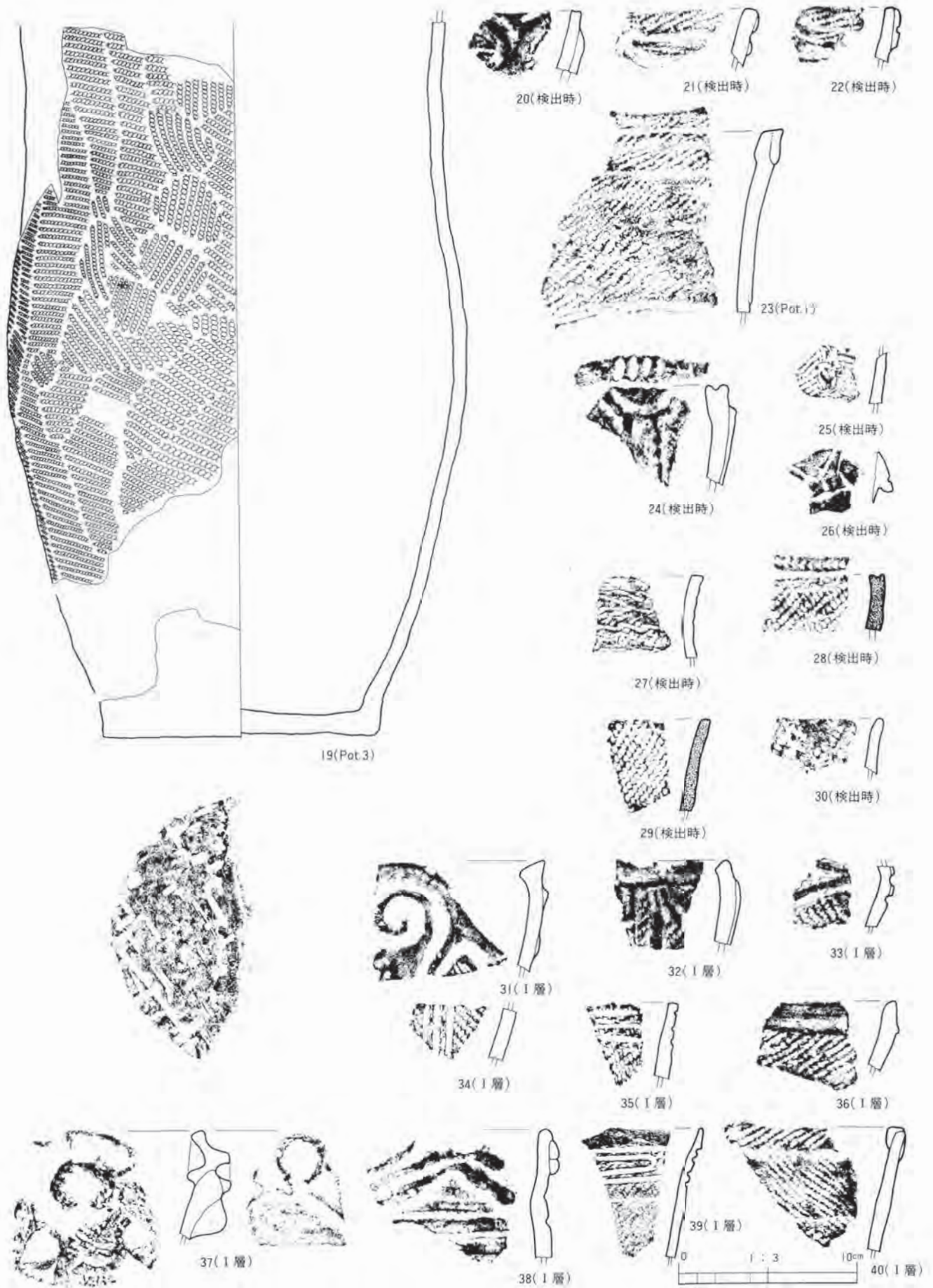
20は隆沈線により施文されるもので、大木8b式に伴う。21・22は23に類似するもので大木7a式に伴う。24は把手部の破片で、口唇部にだ円形の圧痕を施し、口縁部に隆起線による施文がみられる。大木7a式~大木7b式に伴うものかと思われる。26は隆帯上(?)に沈線を施文するもので、前期後半に伴うものであろう。27はS字状連鎖沈文を施すもので大木2式に伴うものと思われる。28・29は胎土に植物繊維を含む。28は口唇部に円形の連続刺突文が施される。いずれも大木1式もしくは前型式に伴う。

表土層(1層)から出土したものは31~40である。31は隆沈線により渦巻文等を施すが、沈線部の幅が広く磨消的となる。大木9式に伴うものであろう。32~35は隆沈線や沈線により施文されるもので大木8b式に伴う。37は把手部破片でやや複雑な構成となる。38は波頂部破片で隆帯や沈線で施文される。39は口縁部を肥厚させ、この下位に沈線によるだ円形文などを施す。37~39は大木7b式~大木8a式に伴うものであろう。40は23などに類似し、大木7a式に伴う。

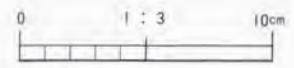
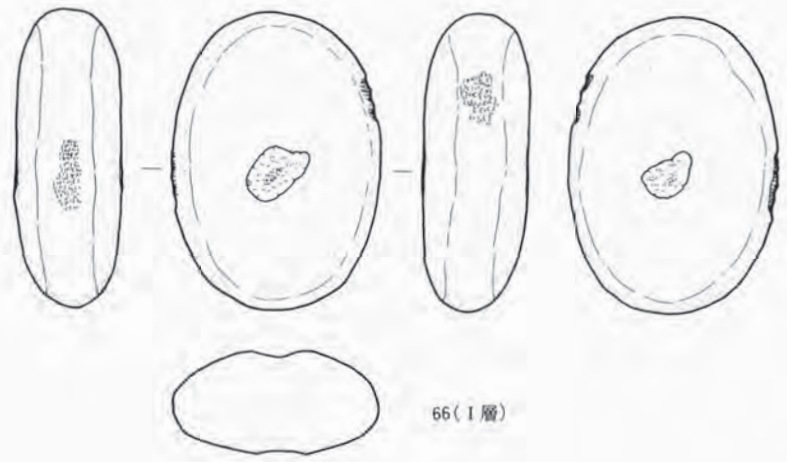
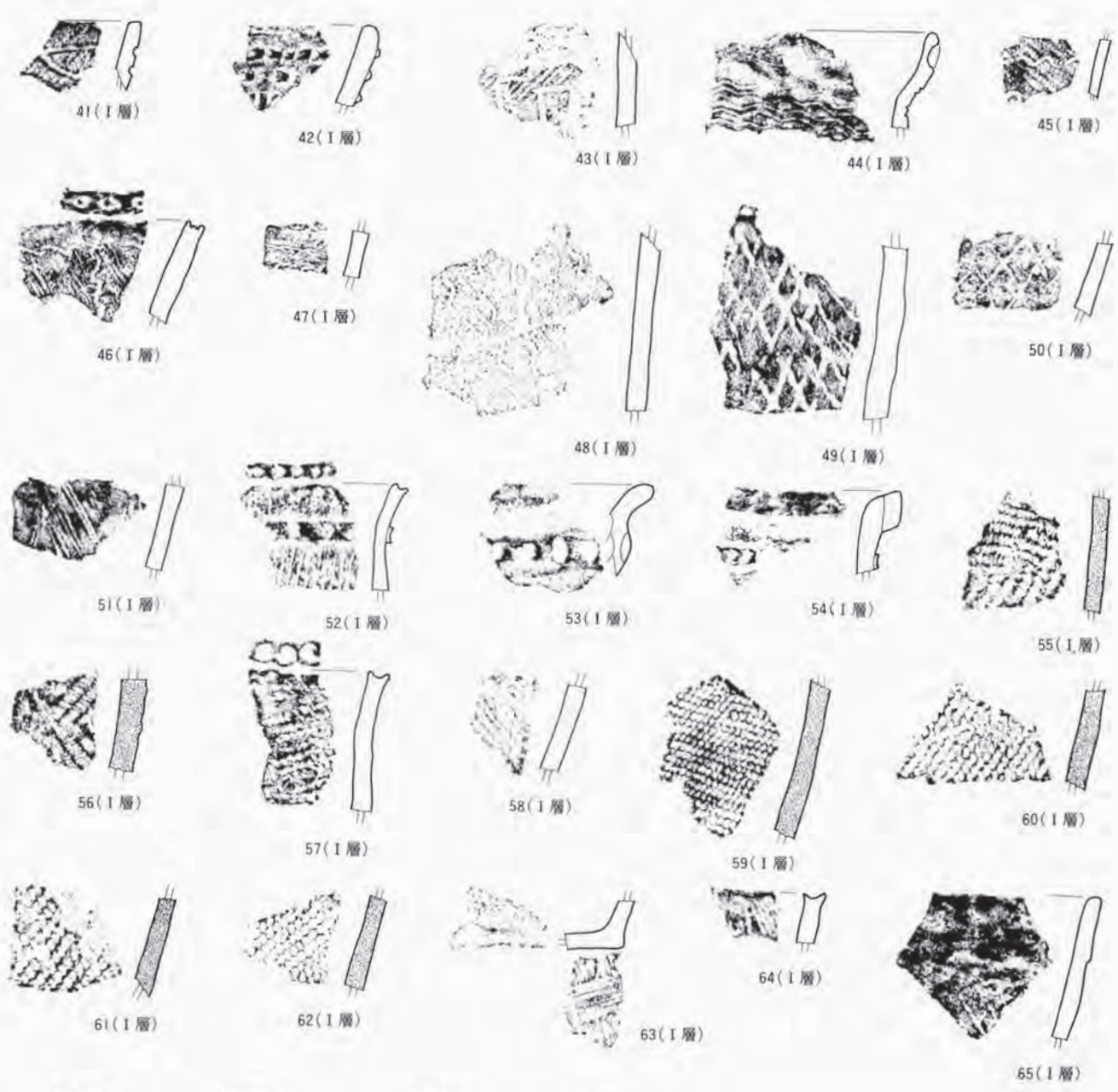
41~62は前期に伴うと思われるものである。41~54は大木2式以降に伴うものであろう。一



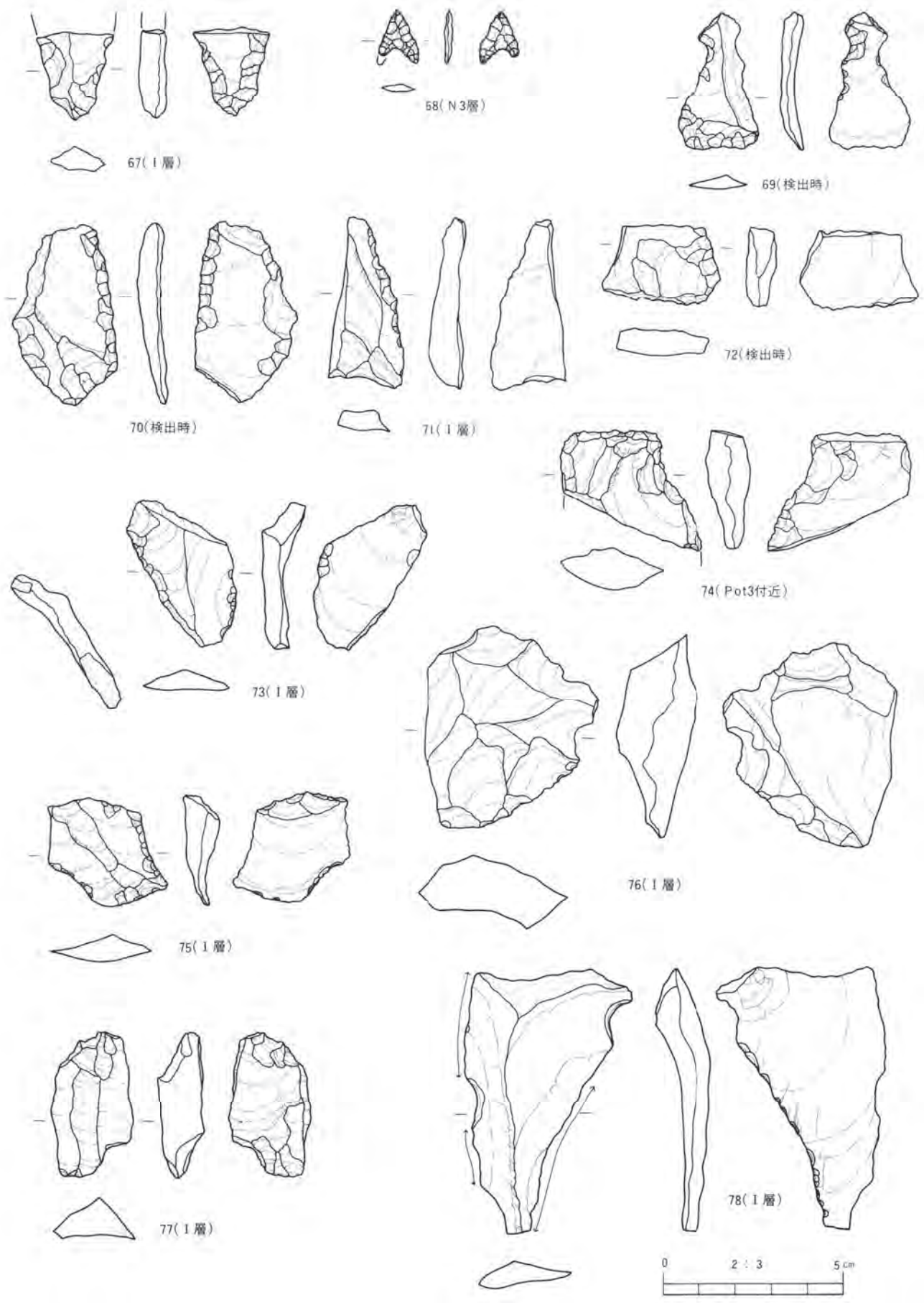
第87図 北斜面調査区出土遺物(1)



第88図 北斜面調査区出土遺物(2)



第89図 北斜面調査区出土遺物(3)



第90図 北斜面調査区出土遺物(4)

方、55～62は大木1式以前に伴うと思われるものである。63～65は所属時期が不明である。

68は無柄凹基の石鏃である。

69は石匙と思われる。つまみ部の作り出しは粗雑である。下辺の刃部は片面からのみ調整され、搔器様となる。

67・70・71・73～75は削器で、側縁部に刃部を有している。70は両面から調整されるが、一部に自然面を残す。71は片面のみ調整するために刃部角度は搔器的となる。67は石槍の基部破片の可能性も考えられるが、やや調整が粗雑であり削器とした。

72は側縁部を片面からのみ調整するもので、鈍い角度の刃部を有するために搔器と思われる。但し、通常調整される面とは逆の面を調整している。

76は両面をやや大き目の剥離にて調整するもので、側縁部に鈍い角度の刃部を有している。

77はやや大形ではあるが、上下両方向からの過撃による剥離がみられ、ピエス・エスキューイと思われる。リングの間隔はややつまっている。

78は使用痕のある剥片で、両側縁に使用時のものと思われる微細な剥離がみられる。

66は凹石で、だ円形偏平礫を素材とする。両方の平坦面に凹石としての使用痕がみられ、両側縁には敲打痕がみられる。

(c) 自然遺物

前述したようにN層～N層中には少量の骨片が含まれ、焼成を受けたものが比較的多く目についた。同定された種はわずかで、いずれも魚類である。但し、これらに伴って獣骨片も若干出土している。尚、同定に際しては、岩手県埋蔵文化財センター小田野哲憲氏、久慈市教育委員会千葉啓蔵氏、岩手考古学会員熊谷賢氏の御協力を得た。

以下同定できたものの種名と、部位を記す。

1. 板鰓亜綱の一種 FLASMOBRANCHII order indet. (サメ目?)
2. マイワシ *Sardinops melanosticta* (TEMMINCK et SCHLEGEL)
3. サケ科の一種 Salmonidae gen. et sp. indet.
4. カツオ *Katsuwonus pelamis* (LINNE)
5. サバ属 *Scomber* sp.
6. タイ類 *Pagrus* sp.
7. アイナメ *Hexagrammos ofakii* JORDAN et STARKS
8. カレイ科の一種 Pleuronectidae gen. et sp. indet.

	総重量 (g)	総体積 (cc)	サメ目? 遊離歯	マイワシ 尾椎骨	サケ科の一種 椎骨	カツオ 尾椎骨	サバ属 尾椎骨	タイ類 遊離歯	アイナメ 尾椎骨	カレイ科の一種 尾椎骨
N1層	70,120	81,300	5	0	1	0	1	33	0	0
N2層	57,900	72,650	12	0	0	1	0	25	1	1
N3層	68,590	88,340	15	1	0	0	0	30	0	0
N4層	29,590	35,700	0	0	0	0	0	4	0	0

第1表 北斜面調査区出土魚骨部位表

3. 扁平円礫について (第89図～第92図)

今年度も昨年同様に白石遺跡および崎山貝塚から多量の扁平円礫が出土している。これらはいずれも使用痕や加工痕を持たない自然礫であり、石器として使用されたもの(敲打磨石、敲石、凹石等)は除外してある。

白石遺跡第5次調査区から970点、崎山貝塚第5次調査区のうち「地山の落込み」周辺から230点、北斜面調査区から38点を検出した。前者はほぼ大木10式～後期初頭、中者はほぼ大木8 a式～大木10式、後者はほぼ大木7 b式以前に伴うものと考えられる。

前回同様に縦軸に重量を、横軸に長径をとって図化したものが第92図～第94図である。

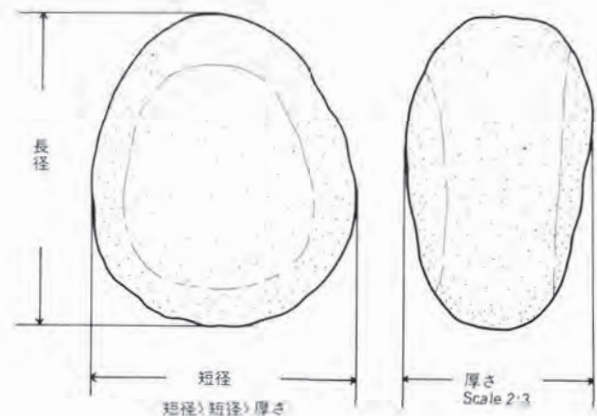
白石遺跡出土資料は前回同様に下位からAグループ・Bグループ・Cグループ・Dグループの4群に分類される。最も集中するのは小形のAグループで、Bグループ～Dグループと大形になるに従い数が少なく散満な分布となる。

崎山貝塚出土資料のうち台地平坦部に設定したトレンチからは「地山の落込み」や土坑跡に伴って扁平円礫が出土している。やはりAグループに集中する傾向がみられ、BグループとCグループは点数が少なく散満な分布を示す。また、Dグループを欠く。

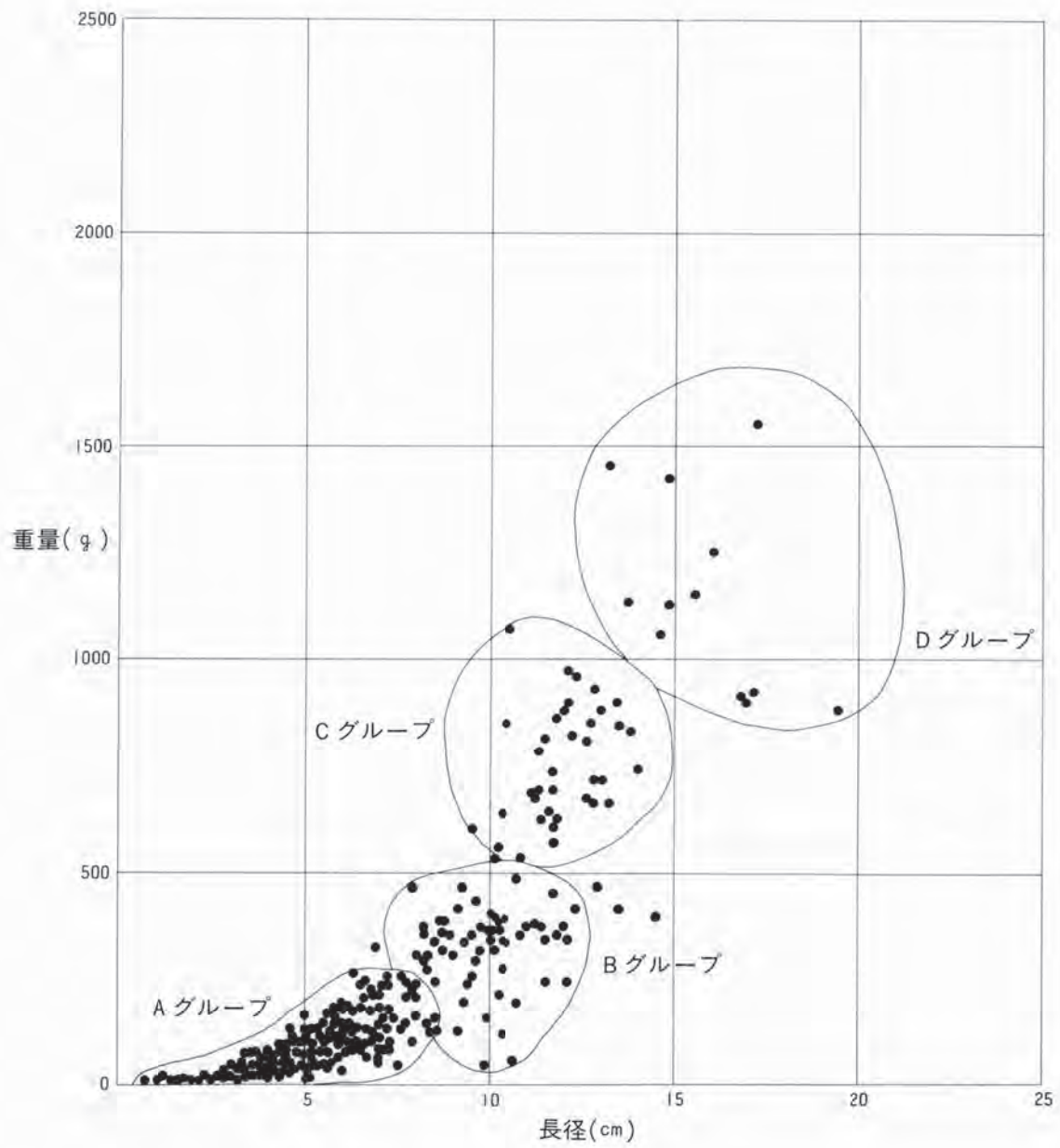
北斜面調査区からは出土点数は少ないもののほとんどAグループに集中する傾向がみられる。これらの用途については「崎山遺跡群IV」の中で、少なくともAグループについては、重量や形態的な類似性から、切目石錘や小形の礫石錘同様に漁網錘として使用された可能性を想定した。また、B～Dグループについては漁撈に関係する錘としての用途と、礫石器の素材やが石等の遺構を構築する材料として持ち込まれた可能性を想定した。

ところで、最近、秋田県八木遺跡から興味深い石錘が出土していることを知った(註1)。これはアスファルト付石錘として紹介されたもので、切目石錘・礫石錘・扁平円礫を石錘として使用する際にアスファルトを使用して紐を固定したために、紐の痕跡が石錘の表面に残ったものである。紐の結び方は、短軸方向に数回まいた後に結びつけているようで、「崎山遺跡群IV」の第78図2に示した使用方と共通する。八木遺跡から出土する扁平円礫はここで言うAグループに類似する小形の礫のようであり、前論を裏づける資料となりそうである。

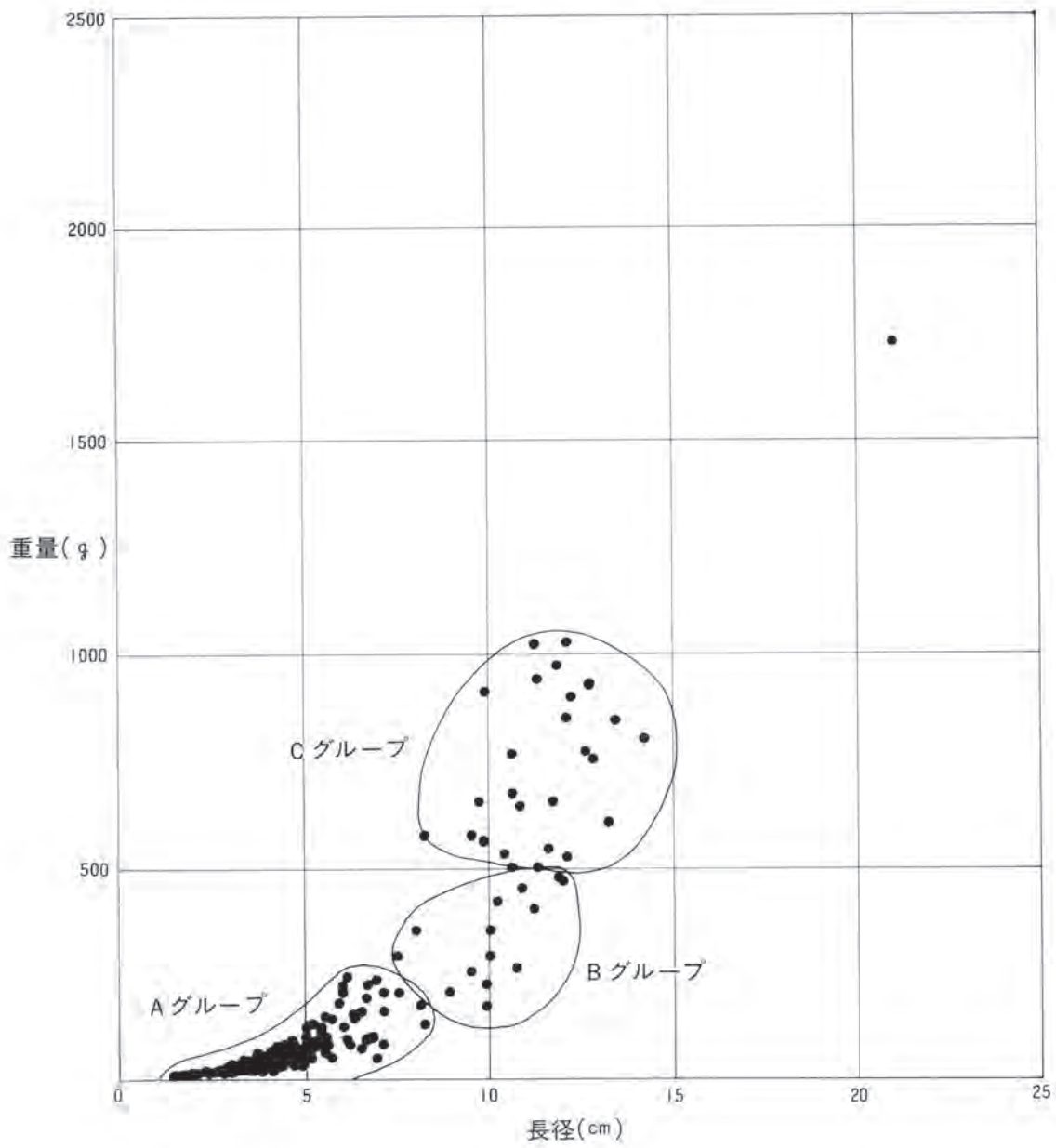
(註1)『特別展「縄文人の世界」—縄文後期の生活と文化—』八戸市立博物館1990ほか



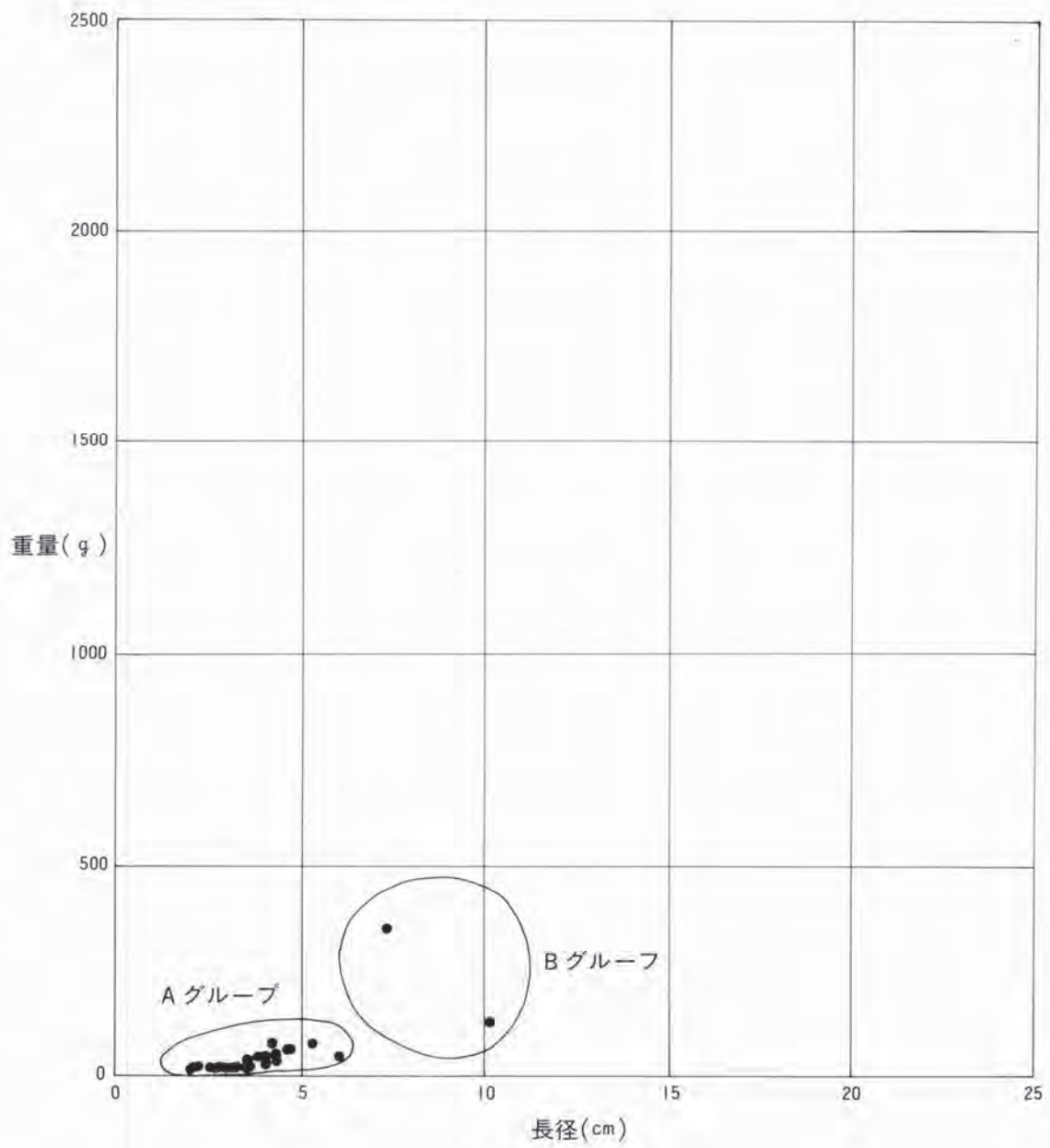
第91図 扁平円礫の計測方法



第92図 白石遺跡出土扁平円礫



第93図 崎山貝塚「地山の落込み」周辺出土扁平円礫

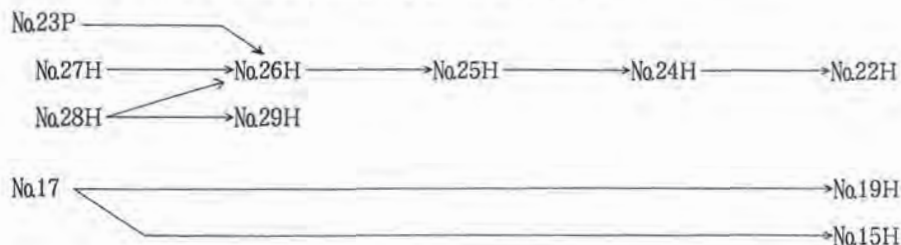


第94図 崎山貝塚北斜面調査区出土扁平円礫

Ⅲ 調査のまとめ

白石遺跡第5次調査

第5次調査区は、第4次調査区に隣接し、これまでの調査同様に多くの遺構が密し、重複していた。これらの新旧関係を模式化すると次のようになる。



これらの遺構群には、やや時間幅が有り、最古型式が第17号竪穴住居跡床面資料で、丹羽の大木10式第1段階に相当するもので、第15号竪穴住居跡埋設土器が門前式、同床面資料が後期前葉となる。

同様に第23号土坑跡が大木10式第Ⅱ～Ⅲ段階、第28号竪穴住居跡が大木10式第Ⅲ段階、第27・26・25・24・22号竪穴住居跡が後期初頭となり、第22号竪穴住居跡埋土が後期前葉となるようである。

次にこれらの遺構群の配置について考えてみたい。第2次～第5次調査区内に検出した竪穴住居跡は、第15号竪穴住居跡・第19号竪穴住居跡・第22号竪穴住居跡・第3号竪穴住居跡を結ぶ線より南側に集中している。これに第20号竪穴住居跡を加えると、ほぼ弧状の配置となる。

ところで、第4・5次調査区北側にはかなり広い畑があり、多くの遺物が表採される。地主の話によると、耕作中に石囲炉のような遺構を確認しているとのことであった。一方、第4・第5次調査区の西と南には数件の住宅がある。住宅建築に伴う過去の調査では、この地点から貝層を伴う土坑跡や炉跡などが検出されているという(註1)。更にこの東側にはやや広い緩斜面があり遺物が採集できる。

第2・3次調査区周辺は山林であり遺物は採集できない。地形的には、東側と北側へ緩斜面が続くものの、南側は20～30mほどで急斜面となる。

これらを総合すると、縄文時代中期末葉～後期前葉の遺構や遺物は径200～300mの範囲に分布し、第2次～第5次調査は、この中でもやや南側に偏している。おそらくは、第2次～第5次調査区付近から北側にかけて環状～馬蹄形の集落が展開されているものと思われ、第2次調査区での第3号竪穴住居跡以北の住居跡空白部分や、第4次・第5次調査区での北側の土坑跡集中部分は、広場のような竪穴住居跡を構築しない空間の可能性が大きいと言える。

最後にこの竪穴住居跡空白部分に検出された土坑跡に触れる。

第5次調査区北西部には中～小規模な土坑跡が集中していた。このうち、第32・36・39・42・55・57・58号土坑跡は攪乱穴の可能性が大きいので除外しなければならないが、明らかに縄文期のものを含んでいる。

(註1) 昭和51年度に発掘調査が実施されている。(未報告)

例えば第51号土垢跡のように石皿や礫などを埋設するものや、第34・35・45・46・49・50のように土器片・炭化物粒・礫等を含むものである。他のものは壁の立ち上がりや埋土の状況からやはり縄文期に伴うものと思われる。これら以外にも、第15号竪穴住居跡や第19号竪穴住居跡と重複するものの中にも同様な形態を示すものがある。

これらの土垢群は比較的規模の小さなものが多く、掘り込みも浅い。フラスコ形やピーカー形を呈し、貯蔵穴と称されるものとは大きな差異が見られる。しかし、残念ながら伴出遺物が少なく、性格論にまで迫れる資料を欠く。

出土遺物については特にキノコ形土製品や琥珀玉の出土が等筆される。前者は、岩手県北部から八戸地方を含む三陸沿岸北部の縄文時代後へ晩期に伴い報告されている例が多い。従って、今後はこの地方との文化的交流を念頭に置いた調査が必要となろう。同時に琥珀ももし久慈地方を原産地としているならば、やはり同様のことがいえる。

崎山貝塚第5次調査

本年度は台地上に検出していた「地山の落込み」と北斜面の遺物包含層を精査した。「地山の落込み」については壁や埋土の状態から人為的な遺構であると判断した。プランのすべてを検出したわけではないので明確ではないものの、中央部の土垢域をとり囲むようにめぐらされている。

堆積土の時期は前述してあるが、Ⅲ層が縄文晩期～弥生時代、Ⅳ層がほぼ大木10式で一部後期初頭のものを含む。Ⅳ層上面から掘り込まれる土垢跡がほぼ大木10式の土器片を出土しているのに対し、N12E 3-2号土垢跡のみは大木8 a式～大木8 b式の遺物を出土した。これはおそらく本来この土垢跡に伴うものではなく、N12E 3-2号土垢跡に切られる遺構か「地山の落込み」堆積土の下層部分に伴う可能性が大きい。

V層はV c層を切るN 3 E18-1号土垢跡がほぼ大木9式に伴うことから、V c層以下は大木9式もしくは以前である。V a層～V b層は大木9式～大木10式と考えられる。

Ⅵ層に関しては、Ⅵ層上面より掘り込まれたNo.3 Pより大木8 a式(末)～大木8 b式(初)の遺物が出土しているため、これより古くなる可能性が考えられる。

こうしたことから、「地山の落込み」はほぼ大木8 aの式期に構築され、大木10式期までにはほぼ埋められ、わずかに残った凹みにⅢ層が堆積したものと思われる。

北斜面については調査面積が少なく、掘り上げた堆積層も4層のみであり詳細は不明である。特に、遺物包含層の層厚と堆積時期、更に、この中に貝層や獣骨等自然遺物の集積の有無など今後課題を残した。

しかし、各層からわずかずつではあるものの骨片等を検出したことは、周辺に未周知の貝層が検出される可能性を有するものと思われる。

IV 付 章 (資料紹介)

ここではかつて中嶋隆氏により崎山貝塚から採集された資料のうち、自然遺物(動物遺存体)について紹介する。尚、骨角器についてはすでに「崎山遺跡群Ⅲ」にて紹介済みであり参照されたい。これらの自然遺物の大半は南貝塚から表面採集されたものであり、北貝塚のものを若干含むとのことであった。北貝塚から出土した資料については特にその旨を示したが、何も表示の無いものは南貝塚からの出土資料である。

資料数の割には同定された種名が少なく今までの調査資料に比較すると、特に魚類ではイワシ・アジ・サバなどの若小個体やアイナメが欠落している。また、カツオ、カサゴ科の点数が極端に少ない。しかし、今回サワラとフグ科を新たに追加することができた。

鳥類は極端に少なく同定できたものは2点だけである。新たにキジ・ヤマドリ科を追加することができた。

哺乳類は最も点数が多かったものの骨幹部などの同定できない部分が圧倒的に多かった。同定されたものはシカとイノシシに集中し、他のものは極端に少ない。シカとイノシシは比較的部位が出そろっており、やはり貝塚を構成する主要な種となっているようである。

この2種類以外ではイルカ科がやや多く、同定部位もやや多い。

オットセイは、成獣と幼〜若獣の2個体がみられる。また、海獣骨としたものもオットセイである可能性は大きい。更に、同様な骨質の遺存体骨幹部がやや目についたが、これらについては現在標本を所有していないために同定できなかった。

イルカやオットセイなどの海棲哺乳類は今までの調査ではあまり出土点数が多くはなかったが、今後注目が必要となる種である。

オオカミ?としたものはやや大型の肩甲骨であるが、オオカミの現生標本を所有していないので同定できなかった。今後、しかるべき機関や研究者に同定を依頼する必要があるだろう。

カモシカは今回新たに追加されたものである。

貝類等は極端に少ないがヒレガイとイソシジミ類が新たに追加された。

以上であるが、表面採集資料という制約上どうしても大き目め遺物が集まりやすいということや、採集者の指向性に左右されるという点を考慮すれば、基本的には今までの調査資料とは矛盾しないものなのであろう。しかし、新たにいくつかの種名が追加されたことや、オットセイなどの海獣類やイルカ類など、海棲哺乳類への再考が必要となった点は有意義であろう。

最後に、同定された種名を記すが、同定に際し岩手県埋蔵文化財センター小野田哲憲氏、久慈市教育委員会千葉啓蔵氏、岩手考古学会員熊谷賢氏の御協力を得たことを明記する。

<中嶋コレクション動物遺存体種名一覧>

I 軟体動物門 MOLLUSCA

i) 腹足綱 GASTRODODA

- | | |
|---------|--|
| 1 クラアワビ | Nordotis discus (REEVE) |
| 2 ヒレガイ | Ceratostoma burnetti (A. ADAMS at REEVE) |
| 3 レイシガイ | Reishia bronni (DUNKER) |

- 4 チボミボラ *Nucella heyseana* (DUNKER)
- 5 エゾチヂミボラ *N. frey cineti* (DESHAYES)
- ii) 二枚貝綱 BIVALVIA
- 1 マガキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG)
- 2 イソシジミ類 *Nuttalia* sp.
- II 節足動物門 ARTHROPODA
- i) 蔓脚亜綱 CIRRIPEDIA
- 1 チシマフジツボ *Balanidae cariosus* (PALLAS)
- III 脊椎動物門 VERIEBRATA
- i) 軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES
- 1 ツノザメ科の一種 *Squalidae* gen. et sp. indet.
- 2 マグロ *Thunnus* sp.
- 3 カツオ *Katsuwonus pelamis* (LINNÉ)
- 4 サワラ *Scomberomorus niphonius* (CUVIER et VALENCIENNES)
- 5 ブリ *Seriola quinqueradfa* (TEMMINCK et SCHLEGEL)
- 6 スズキ *Lateolabrax japonicus* (CUVIER et VALENCIENNES)
- 7 マダイ *Pagrus major* (TEMMINCK et SCHLEGEL)
- 8 フグ科の一種 *Tetraodonidae* sp. indet.
- 9 カサゴ科の一種 *Scorpaenidae* gen. et sp. indet.
- (ii) 鳥綱 AVES
- 1 キジ・ヤマドリ科 *Phasianidae* gen. et sp. indet.
- 2 ガン・カモ科 *Anatidae* gen. et sp. indet.
- iii) 哺乳類 MAMMALIA
- 1 ノウサギ *Lepus brachyrus* TEMMICK et SCHLEGEL
- 2 ツキノワグマ *Selenarctos thibetanus* (G. CUVIER)
- 3 タヌキ *Nycterentes procyonoides* GRAY
- 4 イヌ? *Canis* sp.
- 5 オットセイ *Callorhinus ursinus* (LINNÉ)
- 6 イノシシ *Sus scrofa* LINNÉ
- 7 シカ *Cervus nippon* TEMMINCK
- 8 カモシカ *Capricornis crispus crispus* TEMMINCK
- 9 イルカ科の一種 *Delphinidae* gen. et sp. indet.
- 10 ヒト *Homo sapiens* Linnaeus.

種名	部位	主上顎骨	歯骨	角骨	口蓋骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	間鰓蓋骨	前頭骨	上後頭骨	基後頭骨	後側頭骨	擬鎖骨	第一脊椎骨	腹椎骨	尾椎骨	尾部棒状骨	備考 (その他)	最小個体数
ツノザメ科																	背鰭棘 4		2
マダガイ	L R	2	1			1		1			1		2	1	35	95	1		2
マグロ類(小)														1					1
カツオ																1			1
サワラ	L R		1																1
ブリ														1					1
スズキ	L R		1(♀) 1(♂)				1 1												2
マダガイ	L R	1 1	2 1	1 1	1				6	5									6
タチウオ類	L R											1							1
ワグキ科																		下顎歯板 R1	1
カサゴ科	L R												1						1

第2表 中島コレクション自然遺物部位表(1)

シカ

部位	頭	下顎骨		環	軸	椎	仙	肩 甲 骨		上 腕 骨		桡 骨		尺 骨		尺側手根骨		第4手根骨			
	骨	L	R	椎	椎	骨	骨	近	遠	近	遠	近	遠	近	遠	近	遠	L	R		
地点																					
南貝塚	5	6	8	3	2	8	1	1	2	4	4	5	1	1	2	2	2	1	5	1	1

部位	中 手 骨		寛 骨		大 腿 骨		脛 骨		中心+ 第4足根骨	中 足 骨		膝蓋骨	踵 骨	距 骨	基節骨								
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R							
地点	近	遠	近	遠	L	R	近	遠	近	遠	近	遠	L	R	L	R	L	R					
南貝塚	2	4	1	1	1	1	4	2	3	4	1	4	1	3	2	1	1	2	2	6	4	9	1

部位	中節骨		末節骨		鹿 角			
地点	L	R	L	R	L	R		
南貝塚	1	4	1	2	6	2	1	1

イノシシ

部位	頭	下顎骨		軸	肩 甲 骨		上 腕 骨		桡 骨		第4手根骨	第4中手骨		脛 骨		第3中足骨			
	骨	L	R	椎	近	遠	近	遠	近	遠	L	R	近	遠	近	遠	L	R	
地点																			
南貝塚	2	5	2	2			1	1			1	1			1	1			1

部位	踵 骨		中節骨		末節骨	
地点	L	R	L	R	L	R
南貝塚		1		1		1

ウサギ

部位	下顎骨	
地点	L	R
南貝塚		
北貝塚	1	

ツキノワグマ

部位	上顎大歯	
地点	L	R
南貝塚		1
北貝塚		

タヌキ

部位	上顎大歯	
地点	L	R
南貝塚		1
北貝塚		

イヌ?

部位	下顎骨		脛 骨	
	L	R	近	遠
地点				
南貝塚				1
北貝塚	1			

オオカミ?(大型犬?)

部位	肩 甲 骨	
	L	R
地点	近	遠
南貝塚		1

オットセイ

部位	下顎骨		上腕骨		大腿骨	
	地点	L	R	L	R	L
南貝塚		1	1	1	1	1

オットセイ?

海獣類?

部位	寛 骨	
地点	L	R
南貝塚	5	1

カモシカ

部位	中 足 骨	
	L	R
地点	近	遠
南貝塚		1

イルカ

部位	環	椎	肩甲骨		手	肋
	椎	骨	L	R	骨	骨
地点						
南貝塚	2	33		1	1	1

ヒト

部位	下顎臼歯		脛 骨
地点			
南貝塚	1	1	1

キジ・ヤマドリ科

部位	上腕骨	
地点	L	R
南貝塚		1

ガン・カモ科

部位	尺 骨	
	L	R
地点	近	遠
南貝塚	1	

貝類

種名	ア	ヒ	レイ	チ	エ	マ	イ	チ
	ワ	レ	イ	チ	ゾ	ガ	ソ	シ
	ビ	ガ	シ	ミ	チ	カ	シ	ジ
		イ	ガ	ミ	チ	キ	ミ	ミ
			イ	ボ	ウ		類	ツ
				ウ				ッ
地点								ポ
南貝塚	1	1	2	1	3	1	R	1

第3表 中嶋コレクション自然遺物部位表(2)

写 真 图 版



第15号竖穴住居跡



第15号竖穴住居跡・炉

第2図版



第17号竖穴住居跡



第19号竖穴住居跡



第19号竖穴住居跡・炉構築状況



斜位土器埋設状況

第4図版



第19号竖穴住居跡・炉直立土器埋設状況



第22号竖穴住居跡



第22号竖穴住居跡



第22号竖穴住居跡埋土堆積状況

第6図版



第22号竪穴住居跡床面、キノコ形土製品出土状況



埋土、石剣出土状況



第23号竖穴住居跡



第24号竖穴住居跡

第8図版



第24号竖穴住居跡・炉A使用状況



炉A構築状況

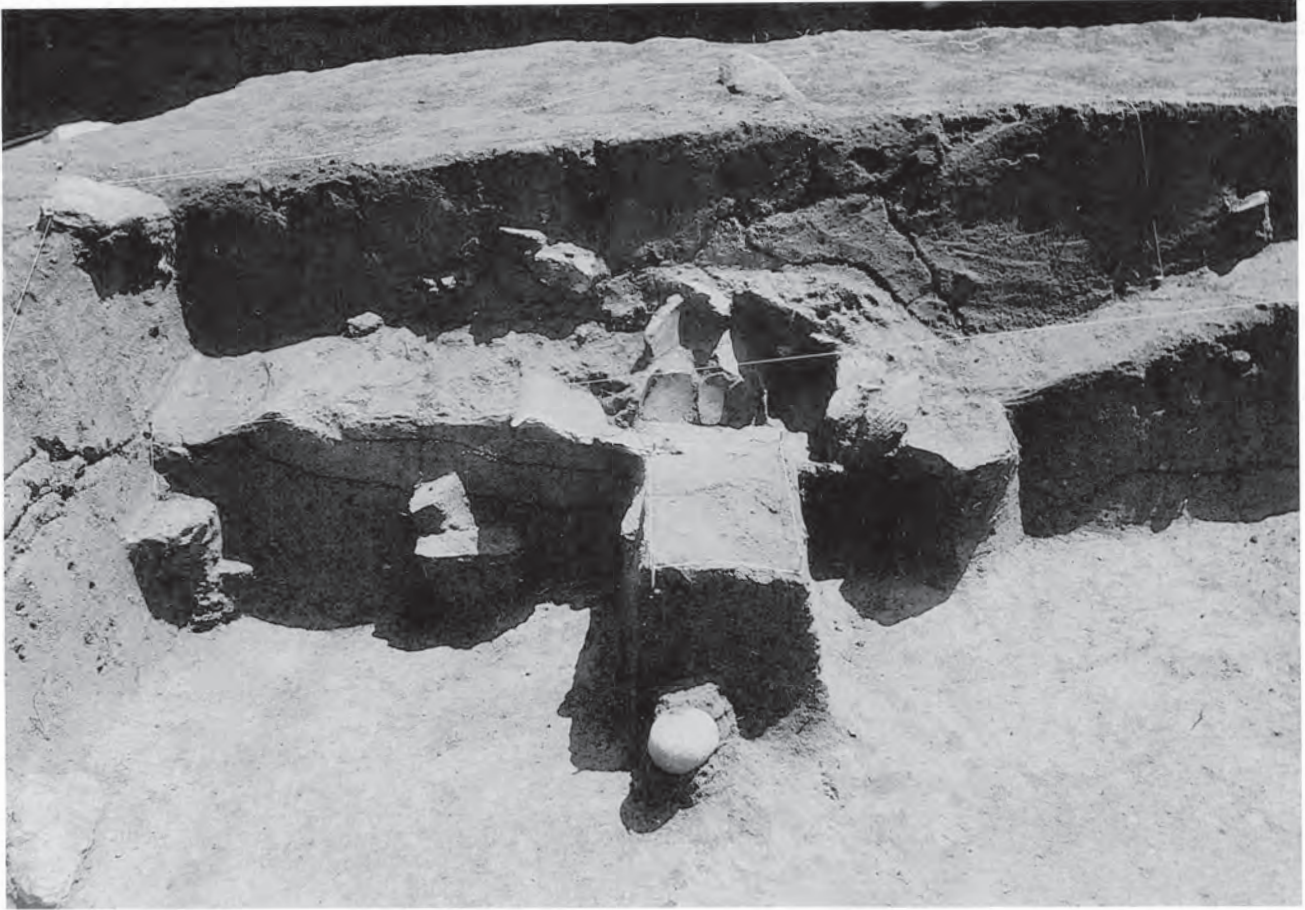


第24号竖穴住居跡・炉B構築状況



第25号竖穴住居跡

第10図版



第25号竖穴住居跡堆積状況



第26号竖穴住居跡

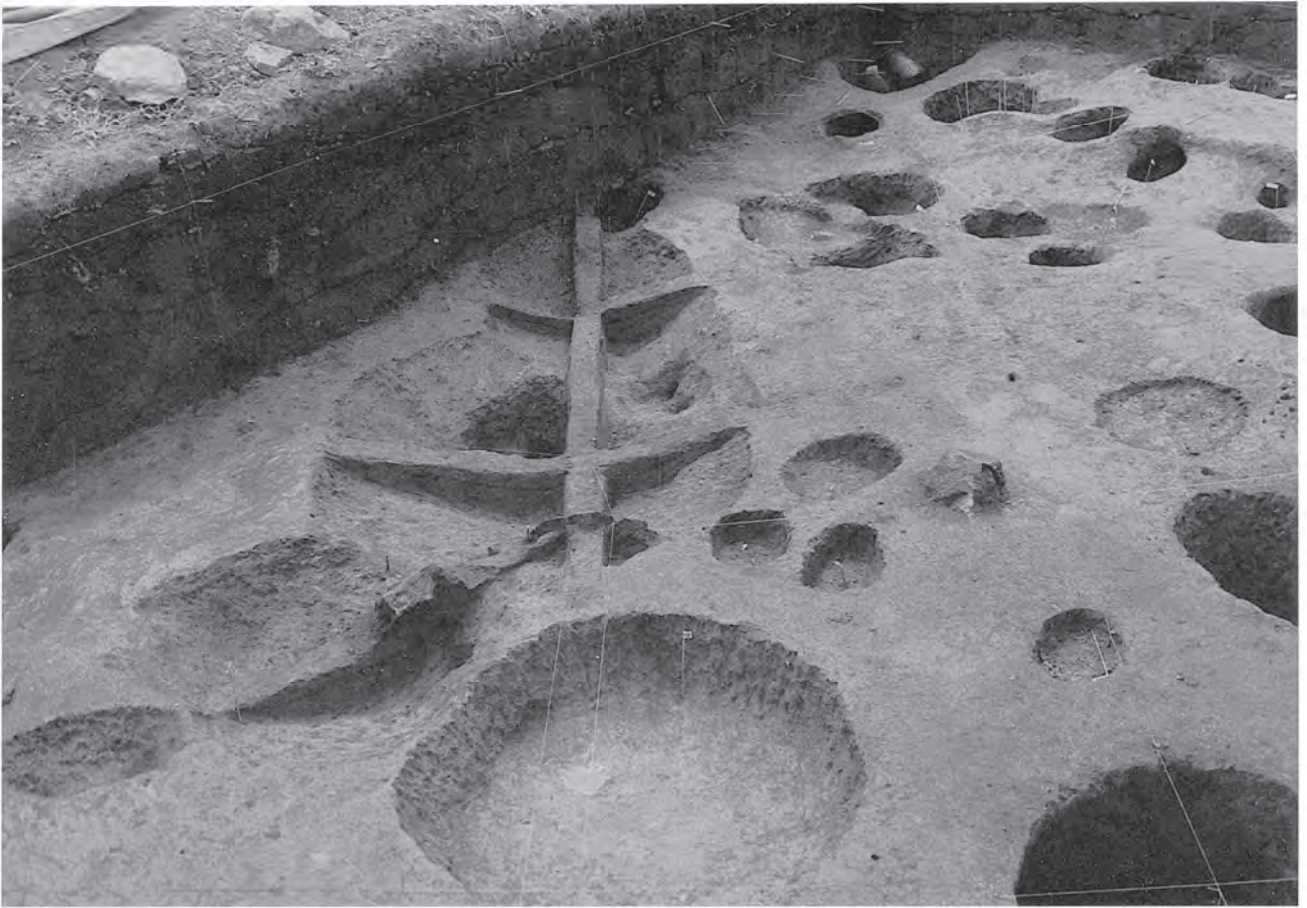


第26号竖穴住居跡埋土堆積状況



第26号竖穴住居跡遺物出土状況

第12図版



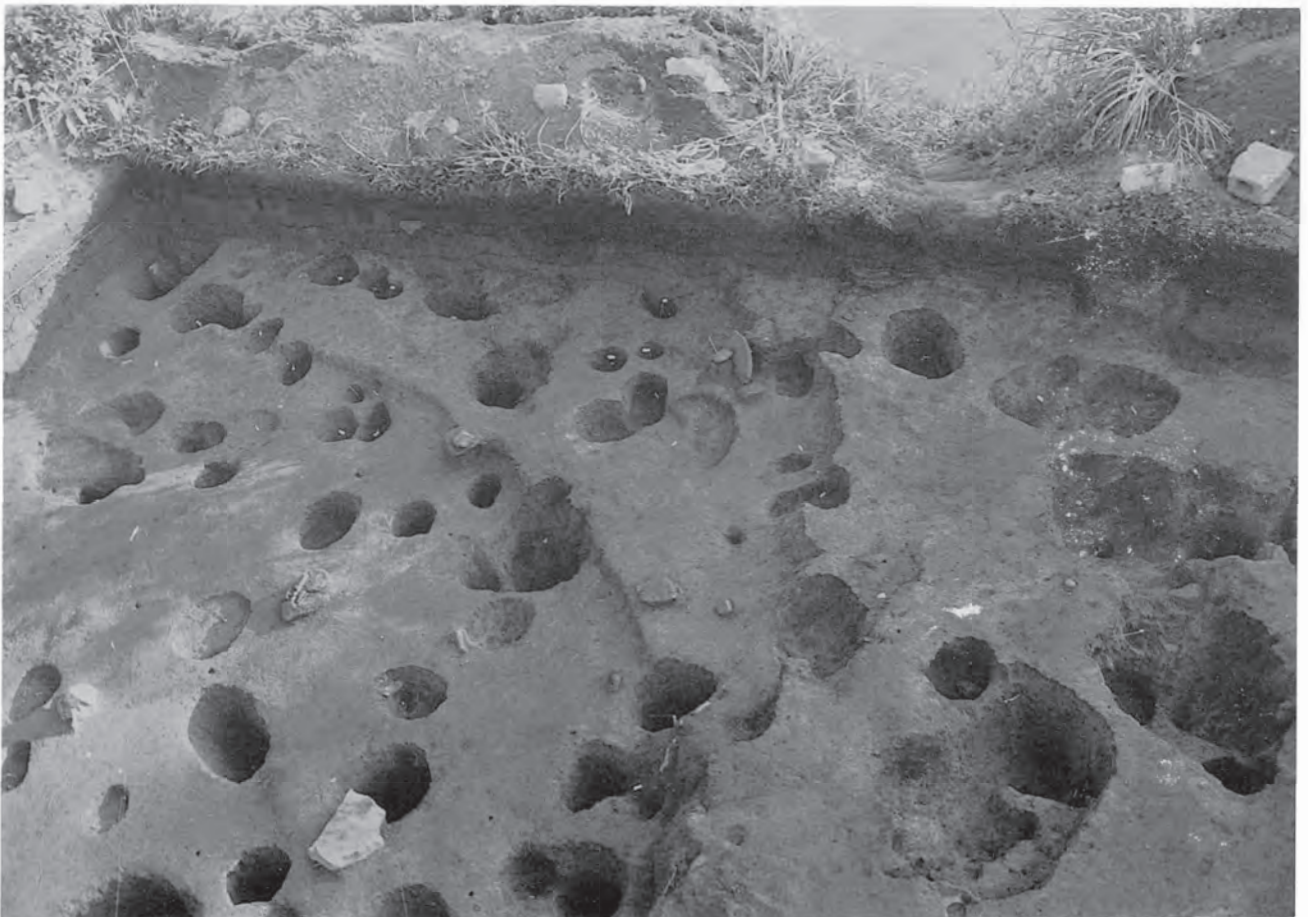
第26号住居跡・炉構築状況



炉使用状況



第27号竖穴住居跡



第28号竖穴住居跡

第14図版



第28号竖穴住居跡・炉



第29号竖穴住居跡

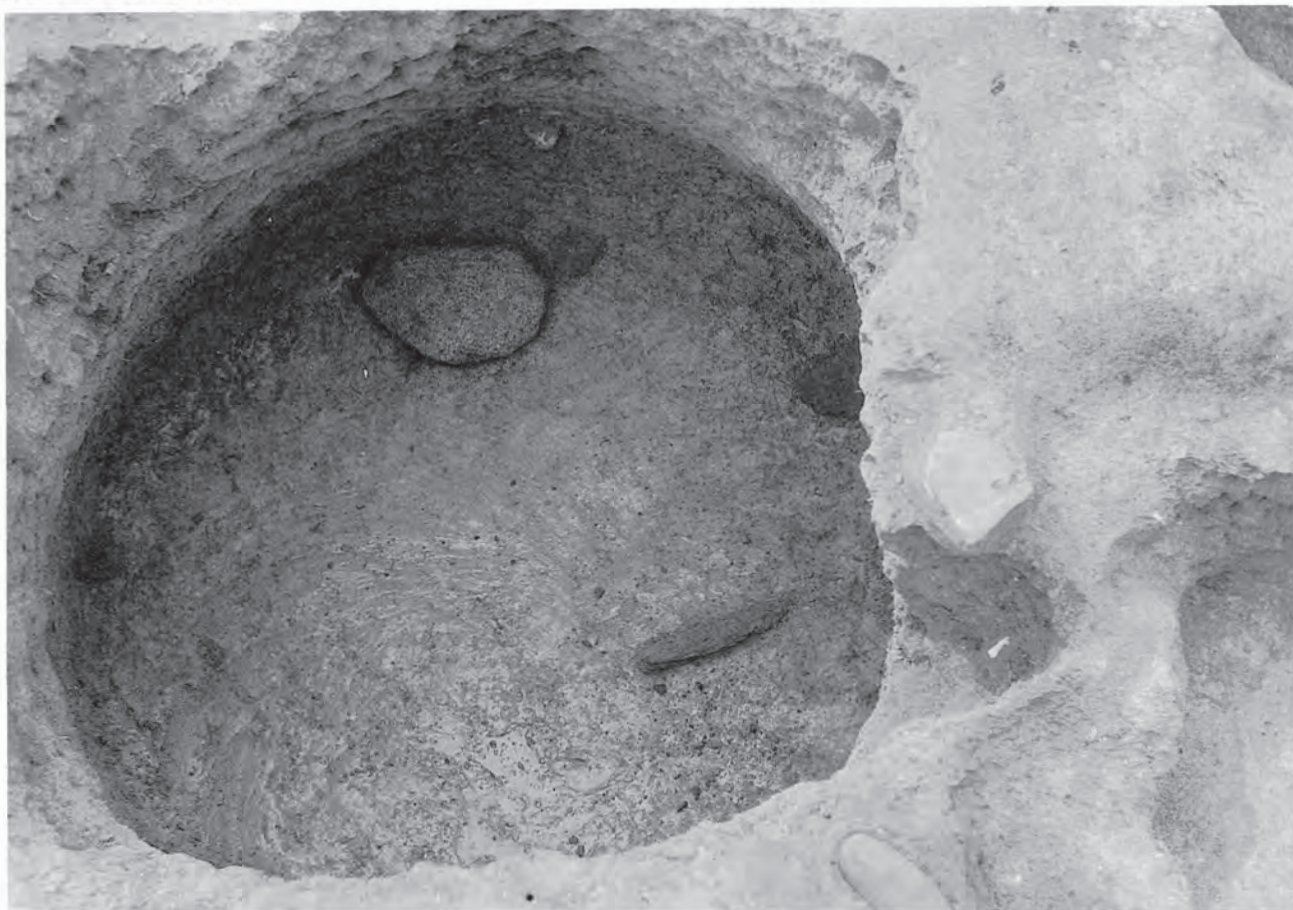


第22号竖穴住居跡埋堆積状況



第22、26、28号竖穴住居跡埋土堆積状況

第16図版



第21号土坑跡底面遺物出土状況



第51号土坑跡



立石

崎山貝塚第5次調査、地山の落込み検出状況



地山の落込み堆積状況

第18図版



N 3 E 15-1 号土坛跡埋土堆積状況



N 3 E 18-1 ~ 3 号土坛跡埋土堆積状況



IVe層ドングリブロック検出状況



同 上

第20図版



柱穴群埋土堆積状況



北斜面調査区検出状況



北斜面 N 4 層掘り上げ状況



遺物出土状況 (Pot. I)

宮古市埋蔵文化財調査報告書26

崎山遺跡群 V

—平成2年度発掘調査概要—

1991.3

発行 岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町2番1号

印刷 株式会社文化印刷
宮古市大通2丁目5の2